27

昭和五年一月二日印刷
昭和五年一月八日發行

上製　新井石禪全集第七卷

著作權者　祥雲晩成

編纂者　山田靈林

發行者　飯野政晴
東京府北豊島郡中新井一九三四番地

印刷者　加藤保
東京市神田區三崎町三丁目一二四番地

印刷所　加藤文明社印刷所

發行所
東京市芝公園十一號地八番
大本山總持寺東京出張所內
新井石禪全集刊行會
電話芝(43)一四八六番
振替東京四五四三二番

（製本　菊池製本所）

【ら】

【り】

【る】

【れ】

【ろ】

【わ】

14

【ひ】

【ふ】

【に】

【ね】

【の】

【は】

【ち】

【つ】

【そ】

【た】

【す】

【せ】

7

【さ】

4

【か】

【き】

【う】

【え】

【お】

2

新井石禪全集　佛教講話篇第一　索引

【あ】

【い】

何の幸ぞ、受け難き人身を受けたるのみならず、斯かる聖明の御世に生れ、而も釋迦牟尼如來の御敎へに遇ひ奉り、此の身ながらに佛の御心を戴きて菩薩の位中に列し、此の世ながらに永劫不退の功德に浴することの嬉しさよ。

此の世を苦患の世と憂ふること勿れ、信心の中には何時も安樂の淨土がある。此の世を果敢なき世と思ふ勿れ、信仰の力は能く未來永劫の功德を成就することが出來る。まゝならぬ世とな思ひそ、佛の御敎を戴きぬる身は世の有ゆる束縛より解脫して、常に佛樣や菩薩方の御許に自由の樂しみが出來る。浮世の務めは賴みなき業とな思ひそ、如何なる業にても報恩慈悲の誠を以て之に當れば皆な無量無邊の善根を長養するものである。『をしなべて御法の花のさきしより佛の身とはみなりにけり』、『一たびも佛をたのむ心こそ誠の法にかなふ道なれ』佛弟子たる者は常に此の大因緣を喜びて感謝の生活を營むべきであります。

を以て唯一の寶と思ひ、決して不平不滿や憎惡嫉妬の念を起さず、又、妄りに貪ぼり求むる邪欲の道に奔らず、どこまでも正義人道に基づきて報恩慈悲の行ひを營まねばならぬ。それには佛樣の御弟子として其の廣大なる御慈悲と幽遠なる教理とに歸依し奉りなば、吾々の心も自づと佛心に相應し、吾々の行ひも自づと菩薩の行ひとなる譯である。

未來の事などは案ずるに及ばぬ。未來は現在の影法師である。現在に於て佛光明に照されなば、未來永劫佛樣の御懷を離れるものではない。淨土門に於て未來成佛を說かれても其の安心の基本は現在の信仰心に在るのである。徹底的に信仰ある人ならば、何事をするにも何處に居りても、皆な佛樣の御心に順ふた行なひとなる。蓮如上人も『たとひあきないをするとても佛法の御用と心得べし』といはれ居る。釋尊御在世の時、和默といへる國王が母の疾を癒さん爲め婆羅門の敎を信じて、百頭の動物と一小兒とを殺して天神を祠んらとせし時、釋尊は之を誡めて『穀食を得んと欲せば當に耕種を行ふべし、大富を得んと欲せば當に布施を行ふべし、長命を得んと欲せば當に大慈を行ふべし。智慧を得んと欲せば當に學問を行ふべし』と仰せられた。佛法は決して世間の法と矛盾するものではない。

佛法の一大事は吾々の心にある。心を佛地に遊ばしめてその本心を磨き佛性の光輝を放ち、智德双全の行持を現はすことにあるのである。信仰の偉力は愚夫・愚婦にまでも自づから本心の德性を養ひ、處世上の大安心を與へ、人間活動の根本動力を獲得せしむ。是に於てか感謝の心禁じ得ざるものがある。我等は

但だ我が國は世界に比類なき國體と此の國體の下に養なはれたる國民精神とがあつて國家全體を擧げて一家族の如くになつて居る。更に世界の最大宗教たる佛教の精華が殆ど我が國の占有に歸して居る。此の國體と佛教とが我が國の最も大なる寶であります。故に日本國民たる者は益々皇室を中心として擧國一致の大道徳を發揮し、此の大道徳を佛樣の御教に依りて精錬し、以て世界道徳の模範を示すやうに努力せねばならぬ。

元來、我か國は我國の神明の御心と佛の御教とを體得したる、平和の國、道徳の國、慈悲の國であらねばならぬ。國體を中心として國民の結合を強固にし、佛教を中心として世界的大道徳を宣揚すべき使命を有して居る。然るに現在國家の狀態を觀るに、風規も紊れ、徳行も廢れ、何れを眺めても缺點だらけである。是れ國民全體が各自に自己の責任として之を矯正し改善せねばならぬ。佛弟子たる者は卒先して國民の模範たらんことを期すべきである。それには先づ以て自己の精神を健全にして家庭の改善を圖り、漸々に向上して善美なる社會を造り出さねばならぬ。精神修養の基調は宗教的信仰である。

世の中に一番尊い物は何であらう。財産も大事であらう。榮譽も貴といには相違ない。權勢も大切ではあらう。併し眞に尊い物は道徳である。道徳がない財産は財産の爲めに却て人を苦しめる。道徳のない榮譽は浮べる雲の如きものである。道徳のない權勢は却て人の怨みの的となる。黃金に包まれて居る樣な家庭でも道徳が無かつたならば、親子相爭ひ夫婦相惡み、其の内部は火の車も同然である。故に吾々は道徳

納すな。

借りたる物は約を違へず之を返せ、受けたる恩は忘るな。出世すとも高慢すな。如何なる人をも妄りに輕侮すべからず。常に至誠心を以て神明を敬ひ、淨信心を以て佛に歸依し、皇室を尊崇し長上を敬まひ、平和と慈愛とを以て一般の人に接し、專ら陰德を積むことを心懸けらるべし。是れ皆な佛弟子の行持にして、忠孝道德も盡く此の中より發現するものであります。

感謝の生活

今や世界一家人類平等の理想が實現される時代となつた。殊に我が日本國は東洋第一の文明國として世界列國と交際せねばならぬ地位に立て居る。然るに歐米先進國は皆な夫々の長處がある。英國は今猶ほ世界の雄である。殊に英國人は紳士的の國民として世界の尊敬を受けて居る。米國は其の勢ひ英國を凌ぐ程の黃金國である。佛蘭西國は美術を以て名聲を博し、獨逸は學術を以て鳴り、伊太利も亦堂々たる文明國である。我が國は此等の强國と伍して果して如何なる特色を有して居るであらうか。政治・教育・經濟・產業・何れの點から見ても多くの遜色あることを免れぬ。而して四圍の狀勢を察するに、暫時も安心して居ることは出來ぬ狀態である。吾々國民たる者は此の際擧國一致して家力の發展に努力せねばならぬ。

ならぬ　それから又夜分寝る前にに　夕弘　神棚と御佛前に禮拜し、枕に着く時には心の中で信仰を迭ら

して南無大恩教主釋迦牟尼佛の御名號を三度又は七返づゝ念唱するが宜い。

何事を爲すにも正直と堪忍と勉强と親切との四德を離れまいぞ。時間は正しく守り、仕事は綿密なるべし、言葉使ひは成るべく柔和丁寧にして、無益な語、人の感情を害するやうな語、品位を墜すやうな語、人の心を惱ますやうな語は發すべからず、召仕に向ふても相當に禮儀ある言葉使ひこそありたけれ、約束は必ず之を守り、來客あらば努めて親切を盡し、親や妻子に餘計な心配をさせぬやうに氣を注け、子や孫に對しては精々敎養に注意して、正しき人となすべく敎へ育つることが肝要である。

公職ある者は責任を重んじて公明正直に職を奉じ、夢々不正の行爲や怠慢に流るゝ樣なことあるべからず、商業を營む者は御客を本位として信用を第一とすべし。妻にも子にも必ず相當の敬意と禮儀とを存したけれ。飮酒に耽りて家族の迷惑を顧みざるが如きは、決して文明國人の態度では無い。如何なる場合にも激怒すべからず。亂暴する者ありとも笑つて之を恕むる程の人こそ勇者なれ。

利益を求むるにも他人を苦しめる事は思ひ止まるが好い。父母祖父母に對しては無理な小言をいはれても顏色を變へて麁惡なる言を發すまじ。儉約は臺所の隅からせよ。淸潔は戸棚の中からせよ。規律は履脫石の上から正ふせよ。親や先祖の御命日は忘れまいぞ。御墓は時々に怠らず掃除すべし。神社寺院の前を通る時は頭を低く垂れて禮をなせ。御國の法律、町村の掟、組合の規約は必ず堅く之を守れ、御年貢は滯

宗教的なる修養を怠らぬやうに致さねばなりませぬ。

先づ一年三百六十五日を通じて、成るべく規律正しき日送りを爲やうと覺悟することが肝要である。起きる時間、寢る時間、食時、休息、勤務等、凡そ一定の規律の下に生活するやうに心懸ねばならぬ。朝起きたならば洗面後は神棚に向て敬禮し、次に御佛壇に向つて御本尊と御先祖に敬禮し、香を捧げ燈火を供へ、出來得るならば一部の御經、一章の御文なりとも誦讀するが宜い。

我宗の方ならば南無大恩教主釋迦牟尼佛の御名號を七返又は二十一返唱ふるが宜い。釋迦牟尼佛の御名號は萬德總持の名號といふて、此の御名號の中に一切の佛德が皆な籠て居るのである。故に、何れの時でも常に此の御名號を唱ふる様に致したい。三寶一體の尊號ともいふて、此の御名號の中に三世十方の三寶の功徳も皆な含まれて居るのである。若し家庭の事情が許すならば、下女・下男・奉公人にまで神佛敬禮の式を勤めさせて貰ひたい。況や御子達などは幼年の時から此の習慣をつけることが頗る有益である。それから御縁側に出てなり、若しくは室内に於てなり、伊勢の大廟と東京の宮城と其の土地の鎭守様と其の宗門の御本山とを遙拜して貰ひたい。

次に家族相互の挨拶、次に食膳に向ひなば、合掌して君主及び祖先の恩惠を謝し、一粒の米も農民の努力に生じ一莖の菜も天地の御惠みに出づることを念じ、同時に『上分三寶、中分四恩、下及六道、皆同供養』と唱へて有り難く御飯を戴くが宜い。御飯が濟んだならば、又もや感謝の意を捧ぐることを忘れては

第四には『衆生無量の苦惱を救濟す』是れは慈悲の行である。慈悲博愛は道德の源である。一家の上、一團體の上でも利害本位のみでは決して平和を望むことは出來ぬ、利害を超越したる慈悲中心で無ければ、眞の人間道は現はれぬ。古人の道歌にも『慢の修羅瞋の地獄を拂ひすてゝ慈悲こそもとの姿なりけり』とある。憍慢は修羅の因、瞋恚は地獄の種、慈悲心こそ本心佛性の現はれである。『あはれみを物に施す心より外に佛の姿やはある』慈悲即佛心である『物乞ひに與ふる物のなき時は言の葉のみなさけあたへよ』、『慈悲の眼に憎しと思ふ人もなし咎ある身こそ猶ほ憐れなれ』かやうな溫かき優しき心を有て能く時代を解し、正義に從がひて事に當らば、始て眞の平和を實現することも出來やうと思ふ。

第五には『常に三寶微妙の功德を讃す』即ち三寶歸依の信仰である。佛樣は最神最聖なる眞理の表現にして天地萬物をも包擁する大慈悲光明である。吾々は此の眞理に歸命し此の大慈悲に投入せば、吾々の迷へる心も正しくなり、小さな心も大きくなり、利害本位の慾念も慈悲博愛の眞情となるものであります。以上五事の心得を土臺として常々其の心を養なひなば、自づから惡しき道に遠ざかり善き業を樂しみ、內外の隔てなく慈悲の德を現はす樣になるものである。

朝夕のつとめ

人の心といふものは、色々樣々な境遇に觸るゝ毎に動かされ易いものであるから、日々夜々に間斷なく

る。『踏まれても根強く忍べ福壽草やがて花さく春を待ちけり』忍ぶ力ある者は妄りに腹を立てず、能く愛敬の德を現はし、又、衆の艱難に耐へ、能く成功の門を開くものである。忍耐力を養ふには、先づ寛大なる度量を有たねばならぬ。些細な事に腹を立てたり、根も葉もない樣な事に神經を惱ます樣ではなりませぬ。無理といふ者があつても、無禮を加ふる者があつても、却て之を氣の毒な人ぢや、何か此等の人に正しき道を履ましめたいと思ふ心を起すが宜い。又、人生行路難といひし如く、此の世の中を渉るには色々の困難や苦勞のあるは當り前の事であるから、十分の覺悟を以て困難を凌ぎ苦勞を厭はずして、銘々の進むべき道に向て進まねばならぬ。石の上にも三年といふ諺の通り、辛抱する中には必ず幸福なる運命が開かれるものであります。

第三には『勤行精進休せず息せず』是れは勉強して進むことである。戒經には『信と施と戒と聞と慧と慈悲とを修するを正精進と名く』と仰せられた。信とは正しき信仰、施とは慈惠慈善の行、戒とは紀律を守り風俗を正ふし道德を修むること、聞とは教育、慧とは知識、慈悲とは他人に幸福を與へ、又、他人の苦痛厄難を救ふこと、此等の點に於て撓まず、屈せず勉強するのが佛弟子の勤めである。人は富貴になると勉強する氣が失せ易い。又、不自由な生活をして居る者は、勉強しながらも不愉快にいや〳〵勤める樣になり易い。何れも精進の法ではない。貧富を論ぜず貴賤に拘はらず、最も愉快に氣嫌よく勉強を樂しむ人は自ら幸福を招き滿足を得るものであります。

志さし、之れと同時に自分自身を修養して道徳的活動の基礎を造る[illegible]

五事の聖訓

優婆塞戒經には佛弟子たる者が道の心を增進するには五事の心得あることを示されてある。

第一は『己身の中に於て輕想を生ぜず』是れは自己を尊重せよといふ意である。太祖大師は『人人悉く道器なり』と仰せられた。吾々の身は道德の器である。神にも佛にもなり得べき本性を有して居る。之を磨きあげさへすれば一家の寶ともなり社會の光りともなるのである。故に自尊自重して常に身體の健康を圖り精神の鍊磨に努め、以て寶の持ち腐りにならぬやうにせねばならぬ。故に高祖大師は『此の一日の身命は尊ぶべき身命なり貴ぶべき形骸なり、此の行持あらん身心自らも愛すべし自らも敬ふべし』と仰せられてある。斯かる貴重なる身を持ちながら、酒色の爲めに身體を害したり、つまらぬ喧嘩をして負傷したり、又は惡い事をして日蔭者となつたり、又は放蕩に耽り怠惰に流れて馬鹿者になつたりするが如きは、此の大切な寶を掃溜の中に棄てるも同樣である。依て佛弟子たる者は一層自重して此の身心を保護し長養せねばなりませぬ。

第二には『自身苦を受けて心厭悔せず』苦難に逢ふても妄りに嫌厭せずして能く之を忍ぶことである。卽ち忍耐である。西諺にも『忍耐は快樂の門』、『忍耐は勝利なり』等といへり。忍耐は精神の鍊磨であ

幸福を増進する樣に致さねばならぬ。更に一歩を進めて考ふれば、牛馬に至るまで、魚鳥に至るまで、齊しく恩分關係があるものと見ることが出來る『ほろ〳〵となく山鳥の聲きけば父かとぞ思ひ母かとぞ思ふ』『六の道遠近迷ふともがらは我が父ぞかし我が母ぞかし』此等は最も意味深長なる歌である。官民の關係も勞資の關係も、進んでは國際關係にしても、衆生恩といふことを思惟し信認したならば、協調の門戶も平和の曙光も立派に開けるであらうと思ふ。

四には三寶の恩、卽ち佛弟子としては佛法僧の三寶は宗教上の親樣である、永久の光りである、無盡藏の寶である。此の大恩を感得することは信仰に入つた人でなければ解らぬ。佛教の道德は權利義務を土臺とせずして報恩主義を出發點として居る。故に忠といひ孝といひ公共博愛といふも、決して報酬を絕對目的とするのではない。縱や報酬がなくとも不忠不孝、不實の人たることは出來ぬ。所謂父父たらずと雖も子以て子たらずんばあらずである。併し、それでは自分の生活に困難を來すであらう。又、自己の正當なる權利を喪失するであらうといふ懸念を抱く者があるかも知れぬが、學べば祿其の中に在り、實際忠孝博愛の精神を以て報恩の行持に努むれば、そこに安全なる生活の路が開かれ、神聖なる權能を發揮することが出來るものである。佛弟子たる者は是非とも此の心得を有ち得たいものと思ふ。

然らば忠孝博愛の德を修めるには如何なる用心を以てすべきか。忠孝を全ふする所以の道、公共博愛の

ある。一には君主の御恩、即ち大君の大恩で、此の中には、皇祖、皇宗の御恩も御國の御恩も含まれて居る。『山は裂け海はあせなん世なりとも君に二心我れあらめやも』『君の爲め世の爲めなにか惜むらんすてて甲斐ある命なりせば』『國の爲め世の爲め盡す心こそ神や佛の道にぞありける』是の如き心懸けがなければならぬ。

二には父母の恩、此の中には先祖代々の御恩も含まれて居る。明治天皇の御製に『むらぎもの心つくして報いなむおふし立てたる親の惠みに』と宣はせたまふた。古歌にも『親々に孝をするのは駿河なる富士の高嶺の此の上もなし』父母劬勞の德は海よりも深し、之を念ひ思ふて父母祖先の御恩に報いねばならぬ。

三には衆生の恩、世の中は相互扶助に依て生存し得られるもの、一家の中でも夫婦・兄弟・主從相互に扶け合ふてこそ生活の道も立つのである。社會の上にてもその如く甲乙丙丁互に扶け合ふてこそ各々獨立を全ふし得られる。況や久遠劫の古より生々世々の間に於ける親子兄弟等の因緣をたどり來りなば、各各の恩分關係の者は全世界に滿ちて居る譯である。主人は妻子の働きを待てこそ安樂なれ、資本主も勞働者の勤勞に依りてこそ事業も擧るのである。買手がなければ商法は行なはれぬ。皆な互に持つ持たれつして萬事が成り立つのである。故に相互に其の恩力を感じて他を尊敬し他を扶護し、至誠眞實を以て自他の

その佛様の御慈悲を感得して、吾々の此の身に於て佛様の如き尊い道德を修めさせて戴くのは、皆な御法の力とその御法を御傳へ下された祖師方の御蔭でありますから、吾々は朝夕怠らず、南無歸依佛、南無歸依法、南無歸依僧と唱へて、佛法僧三寶の御恩を報謝せねばなりませぬ。

そのまた佛様が吾々に御諭し下されたる御法は何かといふに、一口に申しますれば『身にも口にも意にも、決して惡い事をしてはならぬぞよ』『身にも口にも意にも常々善き事を修め勵むべきものなるぞよ』『身にも口にも意にも專ら慈悲の德を現はして、廣く衆生の利益を圖るべきものなるぞ』といふ仰せ聞けであります。扨又、此の三大誓願に對する行持の標準として十條の御教訓があります。即ち『他の生命を愛護して無益なる殺生をなすまじ』、『堅く信義を守りて他の財物を貪り侵すまじ』、『品行を正しくして不義邪淫をなすまじ』、『正直を守りて嘘僞を申すまじ』、『酒類の爲めに自他の健康を害し又は其の精神を亂るまじ』、『愛語の德を守りて妄りに他の過失を口に說くまじ』、『謙遜の德を修め、傲慢の振舞をなすまじ』、『親切を施して物惜みをなすまじ』、『勘忍を守りて腹を立つまじ』、『正しき信仰を相續して邪見を起すまじ』といふのである。誰れにでも解る平凡の御教なれど、其の內容は甚深微妙にして、國民の道德も世界の人道も、盡く此の中に含蓄して居ります。而して是れ皆な御慈悲の滿ちたる御佛の號令であります。吾々は此の號令を寢ても寤めても有り難く服膺せねばなりませぬ。此の號令を守りさへすれば、吾々の最大義務たる報恩の行持が全ふせられます。

況てや無常の風に襲はれて、一息截斷の時に至り、既往を顧み將來を思ひなば、どうして安心して眠ることが出來ませうぞ。

然るに幸にも佛樣の御法に逢ひ奉りて、此の心是れ佛なることを諦らめ、吾々の生命は永劫に涉りて不滅なることを知り、此の世に於ける苦樂昇沈は皆な因果の法則に依りて現はるゝ自業自得の結果なることを心得なば、妄りに人を咎めず世を恨みず、目前の欲望を制して永久の功德を積み、朝な夕なに我が身を顧みて佛樣の如き御德に倣ひ、佛樣の如き慈悲の心を養なひ、此の世に在りながら蓮華の泥の中より出でゝ泥に染まらざるが如く、浮世の穢れを飛び越えて、淨く正しく美しき行なひを勵む樣になります。

殊に佛樣の御慈悲は、超世無等の大誓願力によりて、一切の衆生を吾子と見そなはし、餘さず漏さず御救ひ下さるゝその御濟度の御手は常に吾々の此の身を抱きかゝへて居らせたまふのである。

日月天に輝くと雖も盲の人には見えませぬ。御信心の眼を以て眺むれば吾々はいつもかも佛樣の御救ひの懷ろに抱かれて居るのであります。『うき波のあるにまかせて嬉しけれ誓ひの船に救はれし身は』大船に乘りたる身は、波風荒き中にても何等の不安をも感じませぬ。四苦八苦の娑婆に在りながらも安心して其の道を樂しむことが出來ます。なんとありがたき因緣ではありませんか。

報恩の行持

一向にそれを自覺して居らぬ。三には天地に充ち滿ちて居る佛樣の廣大なる御慈悲の光明を知らずに居る。此の三不知の爲めに宿世の因緣を諦らむることもなく、未來の覺悟を定むる考もなく、佛德を磨き出さうといふ高遠なる理想もなく、佛樣の御慈悲に救はるゝといふ安心を得ることもないからして、やゝもすると此の一生涯を只々煩惱欲望の動くがまゝに東奔西走して、知らず〳〵少なからぬ罪過を積んで居るのである。

世の多くの人々は果して何を目的として動いて居るであらう。お金を儲けたいとか、名譽を得たいとか、美しい着物を着たいとか、甘い物を食べたいとか、奇麗な家に住いたいとか、面白く遊びたいとか、譽れを揚げて人に誇りたいとか、競爭して人に勝ちたいとか、自分の思ふ通りを通して見たいとか、大概は此等の欲望を滿足することを以て能事としてあくせくして居るのである。之れが爲めには腹を立てたり無理をいふたり、罪なき人を罵つたり、咎なき者を叱つたり、人を苦しめたり、餘計な心配をさせたり、樣々な得手勝手を演じて居る。そうして其の欲望の十分の一も滿足することが出來ず、翌日をも知れぬ露の命を有ちながら死ぬるまで煩惱を振り廻して居るといふ始末である。

中には忠孝道德の志深く慈悲善根の念厚き人ありても、其の心の底には矢張自分勝手な量見が動いて居るものである。『直からぬ心をかくす我がかげをいとはで照す月ぞはづかし』夜深け人定まりし時、熟々我が身と心とを振返つて點檢して見たならば、俯仰天地に愧ぢざる底の人は誠に少ないことゝ思はれる。

佛弟子のつとめ

信仰のよろこび

『うれしくも釋迦のみ法にあふひ草かけても外の道をふまめや』吾々は幸にして萬物の靈長たる人間の身を享けて此の世に出で、取り分け、遠き神代の御時より世界に比ひなき國體を有する大日本帝國の民と生れ、而も開國以來未だ曾て有らざる文明の御代に逢ひ奉りしことのありがたさよ、のみならず、此の世はおろか未來永劫に渉りて、安穩快樂なるべき悲智圓滿の法門を御授けたまはりし大聖釋迦牟尼如來の御敎を戴き、此の身此の儘に成佛得脫の大因緣を結ぶことを得たるは、何といふ喜ばしきことでありませう。

凡そ吾々凡夫には三不知といふて知らずに居ることが三通りある。一には過去と未來とを知らず、此の身は如何にして此の世に生れ來たりしや、又、死後は如何に成り行くものなるやを知らぬ。二には自分自身の本質を知らず、吾々は佛に變らぬ本性を具へて居り、佛となるべき性分を有して居るにも拘はらず、

なる信念を養ひて本性の誠を現はし、進んでは忠孝仁義の道を盡し、退いては恭儉博愛の德を守り、以て今上天皇陛下に忠節を盡し奉り、益々國光を中外に宣揚せんことに努むるのが、取も直さず佛敎的道德の實現であります。

先帝陛下の御希望は御製に於て『よろこびをいひかはしつゝ國々のおさまる時に逢ふぞうれしき』と仰せられた通り、世界の平和を以て第一の御滿足として居らせられたる。又『小山田の里の烟も年々に立ちそふ世こそ樂しかりけれ』といふ御製の通り、國民の安寧幸福を以て第一の御樂しみとして居らせられた。故に吾々は彌々益々勤儉力行して國家の富と國運の發展とを圖り、全世界の平和と慶福とに貢獻すべく、勤め〳〵て止まざる様にせねばなりませぬ。是れぞ眞に先帝陛下に對し奉る報恩謝德の正道にして、やがて今上陛下に對し奉る誠忠節義の行持と申すものであります。

こそ修道の魔であるから、陛下は『天を恨み人をとがむる事もあらじわが過を思ひかへして』とも『何事も思ふがまゝにならざるがかへりて人の身の爲にこそ』とも仰せられ、又『よしあしを人の上には言ひながら身を顧みる人なかりけり』とも御歎き遊ばされてあります。

而して、先帝は御身を以て此等の御敎訓の御手本となり給ふて居らせられたに依て、其の御心操の高潔なる其の御行狀の圓滿なるは、實に聖の聖たる御德を御成就あらせられて居るのであります。されば、吾々が幸に、受け難き人間の身を受けて、而も文明の御代に生を樂しみ、遇ひ難き佛法の敎に値ひ奉り、飽まで甘露微妙の法味に潤ふことを得たるも、畢竟、先帝陛下の御鴻恩に依るものと申さねばなりませぬ。

然らば、吾々は如何にして此の御洪德に酬い奉つたものでありませう。我が宗の修證義に『其の報酬は餘外の法は中るべからず、唯當に日々の行持其の報謝の正道なるべし』とある通り、尋常一樣の御祭祀ぐらゐでは、トテも眞の報恩は出來ませぬ。卽ち日々の行持といふて、吾々が日々夜々の上に、眞箇の佛敎的道德を行持し實行することに依りて、僅かに報恩謝德の實を擧ぐることが出來るのである。

佛敎的道德といふは、釋尊傳授の御戒法に依りて佛性の孝順心・慈悲心を發揮することである。換言すれば、先帝陛下の御成就遊ばされし智德と武德と仁德とを修養して、先帝陛下の大御心に副ひ奉るべき行ひを全ふするのが、取りも直さず佛敎的道德の露現であります。今一層明白に申さば、先帝の如き善美

つ代のみよの掟をたがへじと思ふぞ己が願ひなりけり』『わが心及ばぬ國のはて迄もよるひる神は守りますらむ』此等の御製は、實に吾々が大信念を涵養すべき大寶典と申し上げ奉るべきであります。

次に、先帝が天地の公道を堅持し給ひ、之を實踐躬行し給ふ御心の正しくもまた勇しく在せしことは、吾々臣民が永遠に忘るべからざる最善の洪範であります。道は須臾も離るべからず、離るべきは道に非ずとは申しながら、中々に之を實行することは難きものであるから、益々修養の必要を感ずるのである。故に御製にも『ともすれば浮き立ち易き世の人の心の塵を爭で拂はん』『やすくして爲し得がたきは世の中の人の人たる行なひにして』と仰せられ、修養を勤むることの最と六かしきことを歎かせられては『ともすればあらぬ方にと踏み迷ふ敎へがたきは人の道なり』と仰せられてある。

併し、苟も其の志にして堅固ならば必ず此の道を實行し得べきものであるから『大空に聳えて見ゆる高嶺にも登れば登る道はありけり』と御示し下され、油斷の大敵なることを御諭し遊ばされては『家とみてあかぬ事なき身なりとも人の務めを怠るなゆめ』とも『世の中の人におくれを取りぬべし進まぬ時に進まざりせば』とも『開けゆく道に出ても心せよ躓くことのある世なりけり』とも御詠じ遊ばされてあります。

然るに、人といふ者は動もすれば我儘なる自己の欲望に蔽はれて、少しでも思はしからぬことがあれば、己れの未熟を顧みず、妄りに世を恨み人を恨み、遂には一生を不平の間に葬むる様な者もある。是れ

御盛德の中心

是の如く智・仁・勇の三德に富ませ給ひ、允文允武、惟れ神惟れ聖なる御盛德にてあらせられしが、其の御盛德の中心は全く、先帝の玲瓏皎潔たる御信念にあるものと察し奉るのであります。其の御信念といふは、皇祖皇宗に對しての御信仰と天地の公道に對しての御確信との二つであらうと思ひます。

陛下が皇祖皇宗を御尊崇ましまして吾々臣民に對して敬神の範を垂れさせ給ひしことは、擧國民の常に感激して措く能はざる所である。維新以來、伊勢大廟に對せらるゝ大御心は、天照大神の現に在すが如き御持てなしであらせられた。殊に憲法發布や、日清・日露の兩役の如き國家の大事に當りては、必ず伊勢大廟及び大和畝傍の神武天皇御陵、山城月の輪の御陵等に御奉告あらせられた。

且つ我國に於て數百年來弛廢したる御式典を再び興させ給ひ、明治五年に至り、神武天皇橿原に御卽位在したる日を以て萬世無窮の紀元節と定め、一月一日の四方拜、十一月三日の天長節と共に三大節となさせられ、更に新に春秋二季の皇靈祭を御治定あり、大祭日には、未明より親しく賢所・皇靈殿・神殿に御出御ありて嚴肅なる御親祭を行はせられたるのみならず、每朝、東雲の刻限を以て、御名代をして晨朝の御拜を勤めさせらるゝこと、一日も怠らせ給ふことはあらせられぬと申すことであります。

而して、其の御信念の深くおはしますことは『目に見えぬ神の心にかよふこそ人の心の誠なりけれ』と神

は『國の爲め斃れし人を惜むにも思ふは親の心なりけり』と仰せられてあります。此の甚深なる御仁德は實に大空の際涯なきが如き御惠みであらせられます。それのみならず、

先帝は日露の役に遼陽の陷落せし時、深く將卒の忠勇なるを嘉みせられて御滿足の體にておはせしが、良ありて最と悄然たる御容姿にて『朕の悦びにひきかへて露西亞皇帝はどんなに御心配のことならむ』と仰せられ、深く敵國の君主に同情あらせられたと申すことである。されば御製にも『國のため仇なす仇はくだくともいつくしむべきことな忘れぞ』との御諭しさへ下されてある。

是の如き御慈悲があらせられたに依て・其の御仁愛の御心は禽獸蟲魚にも及びて、時折に、鯉とか、鶉とか、鰻などの獻上がありましても、御叡覽に供へ奉ると、必ず『養て置け』との仰せであつた。爲めに、御池には鯉魚充ち、御苑內には煩はしき迄に小禽が多く棲息して居るとのことであります。

明治九年、東北御巡幸の砌、日光の行在所を出でさせられて中宮祠に幸あらせられ、社務所に御駐輦遊ばされし時、村民等は生ける一頭の大鹿を獻上した、供奉の人々が直ちに御前に披露申し上げると、陛下には御感淺からず、村民どもに多くの賜はり物もありしが、軈て侍從を召され『彼の鹿ば直ちに放ちやるべし』と御仰せられたので、侍從は御仁德の深きに感淚を絞つたと申すことであります。此等の貴き御逸事は、吾々の寡聞なるも猶ほ指を屈するに遑なき程であらせられてあるが、先帝の大御心は正しく大慈大悲の佛心にておはしましたのであります。

されば、天候不穩の際などは、中央氣象臺に御使を立てさせらるゝ事、日に幾回なるを知らず、わけて米作期には、農作の狀況に大御心を注がせられ、天變地異の時は言ふに及ばず、惡疫流行の事にも御軫念遊ばされ、貧民や戰死者や癈兵等に對する慈惠救濟の費用に關しては『更に多きを厭ふなよ』との御仰せすらありしとのこと、されば、民間の經營として慈善救厄の事業等を聞し召されては、限り無く御喜び遊ばされたと申すことであります。

明治四十四年二月十一日に、時の總理大臣桂公爵を召させられて、『世には貧困にして病に罹るも醫療を受け難き者もあらむ、向後は十分なる方法を立てゝ此等の者の無き樣に致せよ』とて、御內帑の內より壹百五拾萬圓を賜はりしことは、今尙ほ國民の記憶に新たなる所であります。先帝の御仁德は、兩大戰役の折には一層明らかに現はれて『千萬の仇を恐れぬますらをも此の暑さには堪へずやありけん』とも『軍人いかなる野邊にあかすらむ蚊の聲しげくなれる此の夜を』とも『端居して月見るほども戰ひのにはのありさま思ひやりつゝ』とも御詠じ遊ばされてある。

負傷者の事を御思ひ遣り給ひては『勇み立つ心の駒を引とめていたで負ふ身や佗しかるらむ』、『いかならむ藥すゝめて國のためいたで負ひくる身をば救はむ』との御製あり、戰死者を惜み給ひては『世とともに語り傳へよ國のため命を棄てし人のいさを』をとの御製あり、出征せる軍人の親の心を酌み給ひては『子等はみな軍のにはに出ではてゝ翁やひとり山田守るらん』と仰せられ、戰死者の親の心を愍み給ひて

も有り難いとも申し上げやうもない御仁徳ではありませんか。

先帝は明鏡の如き御智徳と金剛の如き御武徳とを以て美玉の如き御仁徳を御布き下されたのであります。幾萬首に餘る御製といふも皆な此の御仁徳の御發現ならざるはない。其の内の數首を拜誦し奉りますれば、『照るにつけ曇るにつけて思ふかな我が民草の上はいかにと』又『夏の夜もねさめがちにぞ明しける世のため思ふこと多くして』、『靜かにも世は治りて歡びの盃あげん時ぞ待たるゝ』の御製の如きは、全く先帝の大御心の御寫眞とも見奉るべきであります。

猶ほ恩光の至らぬ隈もあらむかとの御思召にて『わが心いたらぬくまのなくもがな此の世を照す月の如くに』と仰せられ、野に遺賢なからしめんとの御思召にて『山の奥島のはてまで尋ねみむ世に知られざる人もありや』と御詠じ遊ばされてあります。殊に下々の人民の有様を御仁察遊ばされては、『桐火桶かきなでながら思ふかなすきまおほかる賤が伏屋を』、『窓のうちに扇とりても暑き日に照る日をうけて小草刈る見ゆ』寒暑ともに民草の事のみ思ひ廻らし給ふの御心は唯々感泣の外はありませぬ。或時は『冬深きねやのふすまを重ねても思ふは賤が夜さむなりけり』と御詠じあそばされ、或時は『賤がすむわらやのさまを見てぞ思ふ雨風あらき時はいかに』と仰せられ、猶ほ政道の全からざらんを恐れ給ふては『とこしへに民やすかれと祈るなるわが代を守れ伊勢の大神』、『白露のおきふし毎に思ふかな民の草葉のさかゆかむ世を』等の御製さへあらせられる。

とほつみおやの神の教へを』といへる數首の御製をさへ示されければ、幾十萬の軍人は、盡く先帝の大御心に感泣して、勇氣の百倍するを覺えたと申すことである。

是れ全く陛下の御稜威が、金剛王寶劍の如く普く八紘を服し、四海に震ひ、自から我が陸海軍人の骨髓に徹底し給ふて居るからてあります。先帝の御武德は殺人刀に非ずして、實に活人劍であらせられた。國家の富强も、東洋の平和も、國民の幸福も、列强の滿足も、皆な此の御武德より顯現し來つて、蓋天蓋地したものであります。

恩光玉の如き仁德

先帝の御仁德に至つては、八面玲瓏美玉の向背なきが如く、恩澤中外に普ねく、慈光上下に徹し、億兆一人として感泣し奉らざる者は無いのである。

前に述べたる通り、明治元年に五事の誓文を立てさせられたる際、億兆安撫、國威宣布の御宸翰を發せられ、其の中に『今般朝政一新の時に膺り、天下億兆一人も其の處を得ざる時は、皆、朕が罪なれば今日の事、朕自ら身骨を勞し心志を苦しめ艱難の先に立ち、古へ列祖の盡させ給ひし蹤を履み治績を勤めてこそ、始めて天職を奉じて億兆の君たる所に背かざるべし』云々と仰せ下されてある。即ち『天下の內、一人でも其の處を得ざる者があれば、其の罪は朕一人に歸するぞ』との御詔であります。實に勿體ないと

回、暑中に箱根へ御行幸あらせられたのみであつたと申すことです。

それに、如何なる大暑の折でも、暑いなどと仰せられたこともあらせられなんだと申すことである。されば御製にも『まつりごと出でゝ聞く間はかくばかり暑き日なりと思はざりしを』とか『あつしともいはれざりけりにへかへる水田に立てる賤を思へば』とか『としぐ\に思ひやれども山水を汲みて遊ばん夏なかりけり』とか『庭の面に清水の音はきこゆれど掬ぶいとまもなき今年かな』などゝいふ有り難い御詠があります。

先年、極暑の折、宮内大臣より御避暑の事を奏請したるに、陛下は『我が國民の內、暑さを山間海邊に避くる者は極めて少數ならむ、朕は寧ろ其の多數に從がはん』と仰せられて、御允しがなかつたさうであります。

又、日露戰爭酣なはなりし明治三十七年の冬は殊に寒氣強かりしに、先帝は御居間に据させられし暖爐二箇の內、一箇を減じさせ給ひ、『戰の場に寒氣を犯して敵と戰ふ將卒の艱苦を思へば、朕獨り暖を取るに忍びぬ』と仰せ遊ばされたと申すことであります。

其の冬、岡澤侍從武官長を、御慰問使として戰地に派遣せしめられましたが、武官長は到る處、前記の御話を致されて、更に『きたひたる劍の光りいちじるく世に輝かせわが軍人』『山を拔く人の力も敷島の大和心ぞ基なるべき』『石だゝみ堅きとりでも軍人身をすてゝこそうちくだきけれ』『國民は一つ心に守りけり

奏したるに、先帝には『王朝の衰微は偏へに身心の軟弱に基せるに非ずや、一朝、大事到らば兵士と共に陣頭に立て倶に困難を背むるは朕の任務である。風雨寒暑は物かは、何物にも對抗し得る平素の鍛錬こそ必要なれ』と仰せられたと申すことであります。

又、曾て下總習志野の陸軍大演習に行幸あらせられし時、折しも暴風雨で、東西兩軍の實習は一層凄慘の狀を極めたが、先帝は其の中で毅然として御野立の儘、御衣も御髪も風雨の打つに任せらるゝ御有樣であつた。供奉員等は恐懼に堪へずして『暴風雨にて候へば天幕を作りませぬ、早々御衣替をこそ願はしう候へ』と急奏せしに、先帝には泰然自若『兵士等も着替るや』と只一語を宣はせしのみにて、遂に終結の時まで、立御のまゝ一歩をも移し給はせられなんだ。後にて御衣を替へ奉りしに、御肉襦袢まで絞るばかり濡つて居られたと申すことです。先帝の御平生に於ける御精勤といひ、御儉德といひ、何れも御勇武と御仁慈との御德より現はれたる精華であらうと思ふ。

御在位四十六年の間、常に大政に御心を注がせられ、且つ御朝夕の御行狀は極めて規則的にして、御定めの時間は一刻も違はせられず、每朝六時を以て必ず賢所に御參拜、十時には大元帥の御服で御學問所に御出御あり、萬機を臠はし國務を聞し召されて、一々御裁斷あらせられ、御晝餐後は再び御出御ありて政務を御總攬、六時近くに御退出、御夕食後は各種獻納の書籍等を御覽あつて、大概十一時三十分に大殿へ籠らせ給ふたといふことである。極寒極熱の時と雖も、曾て避暑避寒等の御沙汰なく、御在位中唯一

られて御臨啓遊ばされた。其の日正午の頃、一天俄に黒雲漲ぎり、大雨車軸の如く降り、雷鳴漸く烈しく電光閃き渉り、光景物凄くもまた恐ろしく、侍臣の人々すら生きたる心地なかりし程なるに。先帝は御顔容もにこやかに打笑せ給ひて『斯ばかりの盛典を見るに雷雨など恐るべきことかは』と仰せられた。此の御有様を拝し奉りし總大將蜂須賀阿波守茂昭公は、餘りの御勇さに『あはれ此の君の御勇しさよ』と、思はず口走りて感涙を流したといふ事であります。

斯くまで御勇武の御性質なるに、かてゝ加へて、維新の大業を思召し立たせ給ひ、外、列強に當り、內、國政を整ひ、僅々四十有餘年の間に、非常なる速力を以て國家の文明を進めさせられたることなれば、其の間の御劬勞、御艱難は果して幾許りであらせられたのでありませう。殊に開國未曾有の大事件たる日淸・日露の兩大戰役に對する初中後の御辛勞に至つては、吾々の想像し奉ることの出來ぬ程の御事であらせられたに相違ない。曾て大和魂を詠じ給ひて『いかならむ事にありても撓まぬは我しきしまの大和魂』又『國といふ國のかゞみとなるばかり磨けますらを大和魂』との御詠じ遊ばされたるは、正しく先帝の御英姿の影の現はれたものと思はるゝのである。

冬の夕べ雪はげしく降りしきる時など、急に思ひ立たせられて、御騎馬にて雪路を踏み分けて御苑內なる御茶屋に成らせられ、紛々たる六花の中に立御のまゝ御苑の風景を眺めさせられたこともある。侍臣の一人が『龍體御健なるに乘ぜられて雨に打たれ雪に濡れさせ給ふをも更に厭はせ給はざるは恐れ多し』と

史官に命じて詳細に取調べしめ給ふのみならず、畫家に命じて繪卷物として御座右に備へさせられ、近世の人物では山鹿素行、水戸の義公や烈公などをも御追慕あらせられたと承はつて居ります。

先帝の御心は『あさ緑りすみ渡りたる大空のひろきを己が心ともかな』の御製の如く、世界全體をも御心の内に收めさせられて、而して、其の根底を皇祖皇宗の御遺訓の上に置かせられて『進みたる世に生れたるうなゐにも昔の事をまづ敎へなむ』と御詠じ遊ばさせられてあります。

されば、先帝の御明智は過去に鑑み將來を照し、國家的なると同時に世界的にてあらせられ、其の朗かなること恰も磨きあげたる鏡の如くにておはしましたのであります。『榊葉にかけし鏡をかゞみにて人も心を磨けとぞ思ふ』との御製は、恰も先帝の御明智を御寫し遊ばしたる御詠とも、吾々からは見奉ることが出來て、最と有り難く拜するのであります。

神威金剛の如き武德

次に、先帝陛下の御武德に富ませられ御勇氣に邁れさせ給へることは、全く金剛の能く摧かずといふこと無く、而して如何なる物も金剛を壞ること能はざるが如くにてあらせられた。

御幼年の頃より御勇武の御氣象最と氣高く、殊に馬術には深く趣味を有せられたと申すことである。御年八歲の時、各藩から雲集したる諸兵の調練を、孝明天皇が天覽遊ばされしに、先帝は御父君に從がはせ

されば御製には此の誠心を御詠じ遊ばされて『思ふ事つくろふ事もまだ知らぬ幼ごゝろのうつくしきかな』とも『目に見えぬ神に向ひて恥ぢざるは人の心の誠なりけり』とも仰せられてあります。先帝は實に此の誠心を以て皇祖皇宗の遺訓を守らせられ、總ての御經營、總ての御鴻業は、皆な此の御心を中心として行はせられたに依て。縱ひ歐米各國の文物制度に倣はせられ、且つ各國より幾多の文明を輸入遊ばさるゝとも、此の中心たる御遺訓には寸毫も動搖はないのである。否、各國文明の長を取り短を去りて、之を我國の文運を進歩せしむるの材料となし、益々千歲不易の皇謨を明らかにし給ふたのであります。『我國にしげり合ひけりとつ國の草木の苗もおほしたつれば』の御製は、世界の文明も、我國に之を採用すれば、我國に順じたる美果を收むべきことを暗に御示し下されたものではあるまいか。縱ひ男女同權といふ樣な個人主義の風潮が彼の國にあらうとも、我國は我國の特有たる家族制があり、又、夫唱へ婦和するの道が古來より定まつてあれば、妄りに此の秩序を紊す樣な事がありてはならぬといふので、『たゞしくも生ひしげらせよ教へ草をとこをみなの道をわかちて』と御諭し下し給ふてあらせられる。

猶ほ陛下は五ヶ條の御誓文の第五に『知識ヲ世界ニ求メ大ニ皇基ヲ振起スヘシ』と仰せられし通り、常に世界的知識の御啓發を御主眼と遊ばされた樣に察し奉るのである。されば、釋尊は申すに及ず、孔子・基督の如き世界的大偉人にも御敬虔の意を表せられ、別して古來我國の忠臣義士等は一層御追慕あらせられ、和氣清麿や楠公父子等をば大忠臣として日頃數へ給ふたと申すことである。是等の英雄傑士の事蹟は、

礎を鞏固にする等は、盡く此の御誓約より産み出されたる御聖智の賜であります。

殊に有り難いのは、此の御聖智が全く皇宗皇祖の御遺訓たる天地の公道より發し給ふの一事である。皇祖皇宗の御遺訓なるものは、教育勅語にも『之ヲ古今ニ通シテ謬ラズ之ヲ中外ニ施シテ悖ラズ』と仰せ下された通り、實に是れ天地の公道、不朽の大法である。先帝は徹頭徹尾此の大道に依遵し給ひて寸毫も私を加へ給ふことはあらせられぬ。故に、御製に『蘆原のみづほの國の萬代も亂れぬ道は神ぞ開きし』、『國民は一つ心に守りけりとほつみおやの神の教を』と御詠遊ばされてある。皇祖皇宗の開き給ひし大道こそ我が國の生命である。此の道を守り奉るのが國民の絶對的本務であります。而して、之を守るに當りては一點でも虚や僞があつてはならぬ。

故に、先帝は明治十五年一月四日、陸海軍人に賜はりたる御勅諭には『軍人は忠節を盡すを本分とすべし、禮義を正しくすべし、武勇を尙ぶべし、信義を重んずべし、質素を旨とすべし』との五ケ條を擧げて、細かに其の心得を御示しになり、末文に至りて『之を行はんには一の誠心こそ大切なれ、抑此の五ケ條は我軍人の精神にして一の誠心は又五ケ條の精神なり、心誠ならされば如何なる嘉言も善行も皆うはべの裝飾にて何の用にかは立つべき、心だに誠あれば何事も成るものぞかし』、云々と御教諭あらせられた。是は決して、軍人として必要なる御訓誡なるのみならず、人間道德の根本は全くこゝにあるのである。此の誠心ありてこそ正しき智慧も麗しき行も現はるゝものであります。

先帝陛下の御聰明にして能く先見の明に富せ給へることは、殆ど天成の御聖智と申し奉るの外は無い。御幼年の御時、父帝孝明天皇が御教養の爲めにとて、千字文を楷書・草書の二様に認めさせられて御與へになつた。楷書は久我建通卿、草書は綾小路有長卿の謹書に係り、二寸に三寸の骨牌札に分ち、一枚に二字宛書いてあつたが、それを殘らず御暗誦遊ばされたと申すことである。御生長の後は益々御記憶力が進せられ、儒臣をして感歎措く能はざらしめさせられたる事擧げて數へ難し、併し、此等の御事は少かに御聰明の一分に過ぎぬ。

最も絶大なる御聖智として稱へ奉るべきは、世界の大勢と將來の趨勢とを御洞鑒あらせられ、明治の初め、國論紛々として定まらず、施政の方針も亦混沌として確立せざる時に當り、陛下は能く趨勢の歸する所を達觀して國家の大方針を定めさせられ、明治元年三月十四日、南殿に御出御ありて公卿諸侯を召させられ、親ら天神地祇を敬祭して五事の誓約を遊ばされた事である。是れが皇政維新の天地を開き、國運發展の美蹟を收むる最大基礎となつたのであります。此の五事御誓約は、全く先帝の御精神であつた。御一代に於ける盛德鴻業は皆此の御精神の御發現であります。其の後、都を東京に遷し、藩を廢して縣を置き、兵制を改め、憲政を布き、教育の大本を定めて國民道德の歸趨を示し、軍備の充實を圖りて國家の基

先づ封建制を打破して海内を統一せられ、憲法を制定して立憲政治を施させられ、教育勅語を煥發して國體の精華と教育の淵源を明徴し、以て國民道德の大本を御開示下され、又、兵制を改革して國民皆兵主義を行なはせられ、世界列國との交際は益々親善を加へ、條約を改正して帝國の地位を安固にし、日清・日露の兩大戰役に於ては、古今未曾有の大捷利を得て國威を中外に宣揚せられ、我が國の文明は世界に類例なきまでに長足の進歩を遂げ、遂に今日の隆運を見るに至つたのであります。

併し、先帝の御謙德に勝れさせ給へる、我が國の隆盛になりゆくを以て皆是れ臣民の力に依るものと思召して『空蟬の世は安らかに治まりぬ朕をたすくる臣の力に』といへる御製さへあらせられますが、如何に賢臣ありて御皇謨を補佐し奉ればとて、若し先帝の御聖德にして世に超えさせ給ふものが無かつたならば、どうして我が國の如く、到底、人力の及ぶ所にあらさる程の發達を見ることが出來ませうぞ。

されば、吾々が陛下の御一代に於ける御行狀の一端、さては幾萬首の御製の中の一小部分を漏れ承はりましてさへも、先帝は實に活きたる神樣・佛樣にして、到底、凡慮の及ぶべからさる絶大の御聖德に富ませられ給ひしことを窺ひ知り奉るのであります。依て、今は陛下の御製と其の御平生の事柄の中より、僅かに其の一斑を叙べて、先帝の有り難き大御心を拜し奉り、而して、吾々臣民は永久に先帝の御威德と御鴻恩とに報答し奉りたいものと思ふのであります。

其の頃の國步の艱難は殆ど其の極に達し、內には幕府の權威漸く地に墜ちて、國論は四分五裂の狀を呈するあり、外には海外諸國の通商を迫り開港を促すあり、所謂內憂外患並び襲ひ、民心恟々、殆ど向背に迷ふといふ始末であつた。孝明天皇は一方ならず宸襟を惱めさせられ、御身を以て國難に代らんとて、夜半御庭前に座して天神地祇に御祈りを捧げさせられた程である。今日から伺つて見ると、實に淚の出る樣な勿體ない御話しでありります。先帝陛下は斯かる時代に於て御生長あらせられた。而して、孝明天皇は、樣々なる御心配が、自然、御玉體に障り給ひしものか、慶應二年十二月二十九日、卽ち太陽曆の一月卅日といふに寶壽三十六歲を以て御崩御あらせられた。是れ先帝陛下が御年十五の御時であります。

先帝は御年九歲にして皇太子に立たせられ、御名を睦仁と賜はり、慶應三年正月九日、御年十六歲にして御踐祚あそばちれました。此の時よりして、陛下の御聖德は恰も旭日の東天に昇るが如く、勤王愛國の士は益々意氣を加へ、天下の形勢は自然に陛下の御威勢に服し、此の年十月十四日、德川慶喜將軍は大政を奉還し、十二月に至り、大政御親裁の令を發し給はられました。政權、武門に歸してより七百餘年、是に至つて始めて、王政に復古し、將來國運發展の基礎を確立せられたのであります。

翌慶應四年三月十四日には、先帝親ら皇祖皇宗に對せられて、彼の有名なる五箇條の御誓文を立てさせられて千秋不磨の國是を定めさせられました。同年九月八日、年號を明治と改め、且つ江戶を東京と改稱して都を御遷しになり、それより著々諸般の制度を御改正になりました。

しては、決して御尊慮の御滿足を得奉ることは出來まいと思ふ。故に、吾々は先帝陛下の大御心を服膺し奉り、先帝陛下の御盛德と御鴻業とを永久に感謝し奉りて、其の大御心に副ひ奉るべき大義務を全うしてこそ、始めて昊天罔極の深恩に酬い奉ることを得るのであらうと思ひます。依て、恐れ多きことながら、聊か先帝陛下の御盛德の一斑に就て御話して見やうと思ひます。

抑も、先帝は孝明天皇第二の皇子に在して、嘉永五年九月廿二日、太陽曆の十一月三日に御降誕あらせられ、御幼名を祐の宮と申し上げられました。此の嘉永五年は、彼の米國の水師提督彼理が、相州浦賀灣に黑船を寄せて、德川政府に通商貿易を迫り、三百年來、鎖國の床に昇平の夢を貪つて居つた我國をして、驚天動地の大活劇を演ずべき序幕の明けまする前年でありました。所謂國家の危急存亡にも關する程の時代に於て、陛下の如き絕代の大聖が御降誕あらせられたとすれば、先帝は皇祖皇宗の威靈を代表して、我が帝國の大發展を圖るべき使命を帶びさせられて、此の世に御出現下されたのではあるまいかと思ふのであります。

當時は皇室も式微を極めさせられた御事とて、陛下御生長の頃は、萬事御不自由勝にていらせられたに相違ないが、天然に備はり給ふ聰明叡智の英資は、文德武道とも神の如くに優れさせられ、見奉る者も、聞き奉る者も、齊しく此の君こそは我國を累卵の危きに拯ひ、蒼生を文明の世に導きたまふ聖ならんと申し合ふたといふことです。

明治天皇の御聖徳

絶代の英主

我が允文允武なる先帝(明治天皇)陛下に於かせられては、明治四十五年七月より御不例の氣味にあらせられしが、十九日の夕に至り、突然高度の御發熱ありて重き御惱に罹らせられた。其の事の發表せらるゝや、國民の驚愕一方ならず、六千餘萬の赤子は申し合せた樣に、熱誠を傾けて神明に祈り、佛陀に願ひ、一日も早く御惱の怠らせ給はんことを熱禱し奉りたる甲斐も無く、御天壽既に盡きさせ給ひしものか、次第に御惱重らせられ、遂に同月三十日零時四十三分を以て、御崩御あらせられたのであります。

現陛下(大正天皇)・現皇太后(昭憲)陛下・現皇后(皇太后)陛下を始め奉り、皇族各殿下の御悲嘆は申すも畏こし、宮中・府中は言ふに及ばず、六千萬の臣民は天に哀き地に泣き、考妣を喪ひたるにも幾百倍するの哀悼に沈んだのであります。

併し、先帝陛下の至仁至慈なる大御心を推し測り奉りますれば、唯だ御哀悼の涙に咽んでのみ居りま

れば、三寶の功德を自分の身に顯現するのが眞の行持であります。此の行持の存する所に佛法の功德が現はれ、佛樣の御精神が活動するのでございます。佛樣の御精神が活動してこそ始て佛子たる本分が盡されまする。

思ふに、今日の世の中は果して能く佛樣の御精神が活動して居るといはれませうか、多少は活動も致して居りましようが、まだ〳〵こんなことでは迚も報恩行を全うしたる者とは申されぬ。故に、出家人も、在家の方々も、相一致して佛敎の大擴張に努め、以て社會幸福の基礎を堅め、人間道德の發展を促がし、佛敎の大眞理をして應用無礙ならしめて行かねばなるまいと思ひます。

諸處を化導したまふや『邊土の利益を思へば朝恩なり』というて喜ばれて居る。是れ全く法を重んじ、身を輕んじ、命を致して衆生を利するの慈悲行であります。

又、親鸞上人が法念上人の門下たるを以て、越後に流されたまひし時『抑〻又大師聖人源空若し流刑に處せられたまはずば、我又配所に赴かんや、若し我配所に赴かずんば何に依りてか邊鄙の群類を化せん、これなほ師教の恩致なり』と仰せられたさうである。君子は千里同風と謂つべきである。

又、日蓮上人は、法華經弘通の爲め相州龍の口にて斬罪に處せらるゝことゝなりし時、かう云ふことを言はれてある。『此の娑婆世界にして雉となりし時は鷹に掴まれ鼠となりし時は猫に嚙まれ、或は妻子の敵に身を捨て、所領に命を失ひし事大地微塵よりも多し、法華の御爲めには一度も失ふ事なし、されば日蓮貧道の身と生れて、父母の孝道心に足らず國恩を報ずべき力なし、今度頸を法華經に奉て其の功德を父母に回向し、其の餘をば弟子檀那等に配當すべし』法の爲めに命を捨てゝこそ出家の本分をも全うし、四の御恩にも報ゆべしといふが上人の信念です。

彌〻龍の口に着しける時、一同が聲を放て泣きたるを誡めて『不覺の殿原哉、これ程の悅をば笑へかし、何に約束をば違へらるゝぞ』と仰せられてある。法の爲めに命を捨つることを得ば、捨つるも亦喜ぶに堪へたり。此の如きの信念は鐵壁銀山よりも猶ほ堅牢なりと謂つべし。

要するに、報恩の正道たる行持といふのは、自行と利他と雙べ行はるゝで無ければなりませぬ。換言す

機を點檢したならば、依然として淺ましき凡夫根性たることを免れぬ。若し道の爲めに道を行なひ、法の爲めに法を守るといふのであつたならば、實に是れ人の聖なるものと謂ふべきである。

承陽大師は是の如き心操であらせられたから、幾百千の信徒の引留めまゐらする衣の袖も振り拂ひ、越前の山奥に分け入りて、猿鶴を友とし水雲を朋として、佛祖正傳の佛種子、即ち佛法の眞の種子を植付て、萬々世に流通すべき最尊最勝の法門を擧揚せられたのであります。

又、太祖常濟大師は、高祖大師四世の御法孫として化を能州に開かせられ、以て曹洞の宗風を宣揚し、法子・法孫・海内に充滿し、遂に今日の大宗門となつたのである。而し其の御一代の行持の如きは、高祖大師と殆ど符節を合せたるが如くであらせられ、曾て徹通禪師の輪下に在りて平常心是道の話を擧するを開き、遂に宗門の大事を徹證遊ばされた。「平常心是道」の五字こそ實に太祖の眞面目である。平常心是れ道とは取も直さず日々の行事といふことであります。兩祖大師の如きは、佛祖の恩德を報謝するに於て、善を盡し美を盡されたものと申し上げ奉るべきことゝ思ひます。

此の外、他宗の開山などの御傳を拜見しても、報恩の行持は何れも立派なものであります。淨土宗開山法念上人が淨土門を開きし爲め、南都・北嶺の反抗を被むり、建永二年、流刑に處せられける時の如き、「縱ひ我れ死刑に處せらるゝともに豈に專修のことを談ぜずして止むべけんや、若し之に依りて罪を得ば甘心して刑に死せんのみ」と仰せられた。其の信念の堅固不動なること金剛よりも勝れり。讃岐に在りて

須く修多羅を誦すべし』と仰せ下されてある。修多羅とは大乘教である。佛祖屋裡とは佛心と相應することである。即ち佛心に住して諸事の行なひもてゆく時、平生の爲る事、作す事がソックリ佛作佛行となるのである。かう無くては生命ある佛教を行持する者とはいはれませぬ。從て眞實三寶の大恩に報謝した者とは申されませぬ。

先賢の芳躅

我が高祖承陽大師は久我内大臣通親卿の御子にして、榮達の幸運に富ませらるゝ御身にてありながら、父母の深恩を報い、併せて國土國民を利濟せんとの御誓願に依り、十三歳の春の夜に潜に邸内を脱出でゝ比叡の高峯に攀ぢたまひ、遂に出家の素懐を達せられたのである。

其の御一代御化導の大光明は赫々として萬世を照したまひ、五十四年の御行持は、名を忘れ、身を忘れ、己れを忘れて、唯々佛法を行なひ、佛法を傳へ、佛法を施し、佛法を七通八達することに全心を投ぜられたのであります。故に學道用心集には『行者自身の爲めに佛法を修すと念うべからず、名利の爲めに佛法を修すべからず、(乃至)但だ佛法の爲めに佛法を修す、即ち是れ道なり』と御示し下されてある。ただ佛法を修す、是れが眞實の行持である。吾々御互は、兎角に、名譽の爲めに職務を勵み、利益の爲めに道德を修むるといふ樣な狀態である。縱ひ如何程立派な事業を起し、又は德行を現はすとも、其の動

……此の二つは畢竟一如であります。

大信心を發し、成佛といへる大理想を有する時は、世間的なる一切の行なひも皆此の大信心の上に現はれて來る筈のものです。故に進んでは人間道德の美果を收め、退ては佛法安心の功德を成ずるのが眞の行持で、この行持こそ報恩謝德の正道であります。如何程口を開き舌を動かして佛名を唱へ經典を讀むとも、その心に大信念が無つたならば、春の田に蛙が啼くが如く、夏の木影に蟬の啼くが如くにも似て、何の所詮も無きことゝなつて了ふ。よしや多少の功德ありとするも、達磨大師の所謂『人天の小果、有漏の因』たるに過ぎぬ。

されば、眞宗の蓮如上人も、『一心とは彌陀を賴めば如來の佛心と一になしたまうが故に一心といふなり』と仰せられ、日蓮上人は『世間に法華經を讀むは口ばかり詞ばかりは讀めども心に讀まず、心に讀めども身に讀まず、我れは法華經を心に讀み身に讀む者なるぞ』と仰せられた。況て我が承陽大師は身心學道といふことを說き示されて其の中に、『身學道といふは身にて學道するなり、赤肉團の學道なり、(乃至)この身體をめぐらして十惡を離れば戒を持ち三寶に歸依して捨家出家する眞實の學道なり』と仰せ下されてあります。捨家出家といはれたのは出家人に對するの御示しであるからである。

常濟大師は『夫れ修多羅を誦すること必ずしも口に誦し手に取て以て轉經とのみすべからず、仔細に佛祖の屋裡にして、徒らに聲色の中に功夫せず無明胎中に行履せず、處々に智慧發生し時々心地開明して

口に投ぜんとし、又、常啼菩薩は骨を敲いて筆とし、髓を取りて紙と爲し、大般若經を寫し以て法寶の德に報ぜんとせられたのでありませんか。

併し、是等は三寶の世に流布せざる時代に於ける先佛の芳躅である。今や佛像經卷は海內到る處に充ち滿ちて、聞かうと思へば幾程でも聞かれ、拜まうと思へば何程でも拜まれるといふ幸福な地位に居るのでございます。依て三寶の大恩に報謝し奉る所以の道も亦自づから異なる所が無ければならぬ。

或は香華燈燭を捧げて三寶を供養し奉り、或は禮拜讀經し奉り、或は稱名報恩などゝいうて御念佛を唱へて御恩を奉謝し奉るといふ樣に、皆な夫々の報恩行ありて、何れも完全なる報恩の務めには相違ないが、我宗に於きましては復格別なる御指南があります。即ち修證義第二十九節の『其の報謝の餘外の法は中るべからず唯當に日々の行持其の報謝の正道なるべし謂ゆるの道理は日日の生命を等閑にせず私に費さざらんと行持するなり』といへる御文こそ、最も有り難き御教訓であらうと思ひます。

三寶の大恩に報ゆることは、中々並大抵の事では報じ盡すといふことは出來ぬ。香華の供養も念佛誦經も大切には相違ないが、是れのみで滿足とは申されぬ。報謝の正道は全く日々の行持如何に在るのでございます。日々の行事とは平生の行ひのことです。其の行なひの力に依て佛法の功德を現はし、佛樣の御精神を活動せしめ、以て眞實の正法を護持するから行持というたので、換言すれば、道に隨ふの行といふことになる。道といふにも眞諦と俗諦との別がある。俗諦とは忠孝仁義等の世間的道で、眞諦とは轉迷開

修證義には『此の行持あらん身心自らも愛すべし自らも敬ふべし』と御示し下されてあります。而して、自らを愛し自らを敬ふのは全く自己の佛性を信ずるからである。自己の佛性を信じて愛し敬ふのは三寶の功德力の廣大圓滿なることを尊信するからであります。

人にして此の信仰なく、唯だ國家の法律や人間の權威のみを畏れて、其の身を愼しむ樣なことでは、つまり身を以て法律の奴隷と爲し權威の從僕とするものである。而して、法律の及ばざる所權威の存せざる所に於ては、自然に放縱不羈爲さざる所なきに至る。こんなことでは何して眞の道德が持たれませう。故に至誠眞實の信念こそ實に人間百行の最大基礎となるべき者であります。

報謝の正道

佛法僧三寶の恩德の廣大なること既に是の如しとせば、此の大恩を報謝するには如何なる方法に依つたものでありませう。

大方廣不思議境界經には『恩を知る者は生死に在りと雖も善根を毀らず、恩を知らざる者は善根斷滅す』ともあり、智度論には、『恩を知るは大悲の本なり善業を開くの初門なり（乃至）恩を知らざる者は畜生よりも甚し』ともあれば、報恩は人道の淵源であります。故に雪山童子は少かに『諸行は無常なり是れ生滅の法なり生滅々し已て寂滅を樂と爲す』といへる四句の偈文に酬いんが爲めに、身を跳らして鬼の

性に隨順し眞理に契合したのが眞の佛樣である。

併し、眞の佛樣になるにはどうしても確固不拔の信念を發起せねばなりませぬ。信念の力は能く吾々の心を清潔にし、亦能く吾々をして最高の理想に向つて精進せしむるの力があるものです。飽迄も佛の聖敎を信じ、三寶の功德力を尊び、寢ても覺ても佛の御照覽を仰ぎ奉るで無ければ、如何に即心即佛などと申したとて、ホンの空理空論たるに過ぎぬ。それでは哲學も同で事になつて了ふ。

『何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるる』、涙のこぼるゝ程三寶の德に感じ、佛樣の大慈悲光明を尊信し奉り、人は見て居らんでも佛樣が見てござる。人は聞て居らんでも佛樣は聞てござる、朝々佛樣を抱て起き夜々佛を抱て眠る、此の大信心に依りて精神の奧底より邪見我慢の塵を拂ひ、之と同時に至誠眞實の光りが燦然として輝き出すものである。若し佛樣の有り難きことを信ぜざる者であつたならば、どうして自己の佛性を尊重し愛護するの志が起りませう。自己を尊重せざる者は決して自己の智德を開發することの出來るものでは無い。

徹底、自己に佛性あることを信じて、自らが自らを尊び重んずる人であつたならば、他より讃歎せらるゝとも高貢我慢の念を生ぜず、他より毀りを受くるとも其の志を傷ることは無い筈である。故に、古人も『人當さに自信自守すべし、之を稱譽し之を承奉すと雖も亦之が爲めに喜びを加へず、之を毀謗し之を侮慢すと雖も亦之が爲めに沮みを加へず』というてある。

るのでございます。殊に、前にも申した通り、僧は法に依て生じ、法は佛に依て現はるゝのであるから、三寶といふと雖も實は唯だ一の佛に歸すのである。

吾々御互が佛法を信仰するの目的はといへば、つまり此の佛に成るが爲めである。佛に成るの基は我が煩惱の束縛を解脱して本心の智德を顯現するの外は無い。『ほとけとは誰が結びけん白糸の賤がをだ卷くりかへしみよ』とは天桂禪師の御歌なさうだが、如何にも面白い解釋である。是は、ほとけを『解ける』の義と見たのである。

一二寸に足らぬ針に長き糸を通して縫物をするに、その糸は針の向ふ所に順うて少しも違背せぬ。眞理は針の如く萬法は絲の如し、吾々御互の上からいへば道は針の如く我身心は絲の如くである。萬法の絲は齊しく眞理の針に順かひ、我等が自心は常に道の針に從うて、曾て相離るゝことの無い筈のものである。然るに、少しでも結ぼれが出來ると、最早、針の命令には從はぬ。針と絲とが全く不調和となつて了ふ。『一念々起名爲無明』で、一念心でも我見妄見が起りますると早くも眞理に違背して道とは全く沒交涉になる。之が一體三寶の功德を失ふ基であります。

故に、三世の諸佛と同道同性なる佛性を有し乍ら、枉げて三界六道輪廻の業に束縛せらるゝのは何故ぞと、賤のをだ卷をくりかへして見たならば、所謂『自繩自縛』に非ざるは無い。かく返照して、自ら慚ぢ、自ら恐れ、至心に佛前に懺悔して、煩惱の結ぼれを解き盡さねばなりませぬ。これを解き盡して、法

415

れ道』で、平生の擧心動念も自づから天地の公道に合し宇宙の妙用と融和する樣になります。是を菩薩とも賢聖とも申すのでございます。

萬行の基礎

次に住持三寶と云ふは、住持、即ち佛滅後より彌勒の出世まで、三寶の斷絶せぬ樣に世に住めて護持することであるから、つまり現在に相續する三寶の事です。故に泥龕・塑像とて、土や金にて佛を造り奉り筆にて佛を繪き奉りて是を御本尊として安置し奉るのが住持の佛寶である。併し、耶蘇教徒などが之を偶像教というて卑しむが如きは、全く佛法の何物たるを知らざる謬見です。木像・畫像を信仰するのは決して木片や筆や繪の具を禮拜するのでは無い。此の木佛・畫像に依りて佛菩薩の大智慧・大慈悲・大功德を感得し、遂には一心の本源に具有する即心即佛の佛德を莊嚴するのであります。

次に住持の法寶とは、今日我國に流布する所の一大藏經をいうのである。古の菩薩・賢聖や各宗開祖の垂訓教語も亦是れ稀有の法である。次に住持の僧寶とは、剃髮染衣して道を學び法を習ふ所の現在の佛弟子である。佛弟子の中には賢者もあり凡僧もありて龍蛇混雜ではあらうが、兎に角、此の佛弟子ありてこそ佛も法も相續して居るのである。畢竟、住持の三寶は現前三寶の模型であつて、此の模型に依りて三寶の大功德を感得し、遂に宇宙の大道法性の妙德たる一體三寶の大光明を身心・中外に發揮する樣にな

此の一心の中には自づと、明鏡の様な照鑒私なき智慧と、明玉の様な潤澤窮り無き慈悲とがチヤンと備はつて居るのである。唯だ煩惱といへる戯狂物があつて、吾々をして智慧も無く慈悲も無い様な悪物にして了うのであります。或人は此の煩惱のことを『ケレドモ』と名けて説明した。この『ケレドモ』なるものが智慧の光を昧まし慈悲の用を妨げるのである。忠孝仁義の道は、如何なる者も行なはざるべからざることを心得て居る。勤儉忠實の徳は、誰れ人も守らざる可らざることを承知して居る。心得て居り乍ら行ひ難い、承知して居り乍ら守り難いのは、全く『ケレドモ』の仕業である。諸君方の精神界にも、若し此の『ケレドモ』なる邪魔物が居る様であつたならば、決して油斷はなりませぬ。

此奴がドンな風に邪魔をするかといふに、心地の光明は赫々として眞理に和合せんことを求めて居る。親孝行もせにやならん、忠義も盡さにやならん、勉強もせにやならん、儉約もせにやならんとは、三歳の童子も猶ほ且つ立派に心得て居る。是れが正しく良心の命令である。處が『ケレドモ』奴が出しやばつて、親孝行はせにやならんケレドモ老人は五月蠅からなあ、忠義は大切であるケレドモそう／＼は務まらぬ、勉強は必要に相違ないケレドモ今日はまあ休まうでは無いか、儉約は大事じやケレドモ若い中は二度は無いなどと、理窟の無い處に理窟を付て良心の命令を遮ぎり、此の身心をして徒らに私欲私情の奴隷たらしむるのである。何と淺間敷ことではありませんか。

若し此の『ケレドモ』なるものを降伏して本性の功德を發揮することが出來たならば、所謂『平生心是

あり、極樂あり、地獄ありて種々無量である。然れども、其の由て來る所を究むれば皆な是れ『自心現の法』と云うて、吾々の心の影法師である。心の動用如何に依て諸の業を造り、その業力が三界六道等の影を印すのである。故に惡業の衆生には盡天地が迷界ともなり地獄ともなる。善業の衆生には遍法界が悟界ともなり極樂ともなる。『手を打てば鳥は飛び立ち魚はよる下女は茶を酌む猿澤の池』ポンポンといふ手の鳴る音にはかはり無いが、之を聞く者は、その業感力に依て喜怒哀樂を異にするのである。

されば吾々は、本來、即心即佛の境界を有し清淨離塵の法を具へて居るのであるけれども『鳴子をば己が羽風に任せつゝ心とさはぐ村雀かな』といへる歌の如く、己れの心よりして自ら苦しみを招き自ら迷界を造りて、永く無明長夜の暗路を辿りつゝあるのは、全く本然の理に背き法性の徳を昧まして居るが爲めである。故に、深く自ら從前の迷妄を慚愧して清淨なる信念を發起し、飜然として即心即佛の本源に立戻り、法性の妙德を發揮するをば和合の功德と申すのである。是れが一體の僧寶であります。

抑も一切萬法は長短・方圓・大小・廣狹・各々相同じからずして、何れも箇々別々の作用を起して居るけれども、其の箇々別々の儘が本來同一法性の德に歸し、平等眞理の下に融合されて在るのでありますから、人力を假らずして自然に和合の功德を現はして居るのである。さすれば天地萬象がソツクリ僧寶の和合體でありまする。その和合體に契當したのが修得の僧寶で、即ち修養の力に依りて宇宙の妙用を吾人の身心に發揮したのであります。然れば三寶といふのは、畢竟、吾々の一心である。

本宗正傳の戒文には、此の一體三寶を釋して『阿耨多羅三藐三菩提を稱して佛寶と爲す、清淨離塵は卽ち法寶、和合功德は是れ僧寶なり』と御示し下されてあります。阿耨多羅三藐三菩提とは無上道と譯して佛の證りたまひし大道のことです。この大道は天地法界に充滿して、佛に在りても增さず衆生に在りても減ぜざる、人々具有の本性であります。更に解り易くいうたならば、吾々の本心が卽ち大道の源にして、取も直さず佛身佛體である。故に、昔、大梅法常禪師が馬祖大師に參じて『如何なるか是れ佛』と問はれた時、大師は『卽心卽佛』吾人の一心が卽佛なるぞと答へられた。禪師は此の一語に依りて一生參學の事を了ぜられた。是れは禪門に名高い御話しであります。

此の佛心が一切萬法の上に現はれて、山は高く海は深く、柳は綠、花は紅のそのまゝがソツクリ中道一實の法則を示し、吾々の手の舞ひ足の踏む所も、そのまゝその佛德を現はして居る。是が一體の法寶であります。是を清淨離塵と釋せられた。清淨とは佛の心である。佛の心というても遠方にのみあるものと、思うてはなりませぬ。煩惱妄想の塵垢を離れさへすれば、吾々御互の心がそのまゝ佛の心であります。維摩經には『淨土を得んと欲せば當に其の心を淨うすべし其の心の淨きに隨て則佛土淨し』とありて、清淨離塵なれば山河大地も盡く佛の御淨土、人生の生滅變遷も盡く佛の神通光明と見るべき道理があるのであります。

凡そ一切の世界は、一見雜然として千態萬狀なるが如くに見ゆる。迷界あり悟界あり、淨土あり、穢土

なり」とあります。

僧は梵語で、具には僧伽耶、譯して和合衆といふ。凡夫は我見の爲めに諍亂多し、佛弟子は我見を離るゝを以て能く和合の徳を成す。故に和合衆と名く。即ち、世間の愛着を離れて釋尊の正法に歸し、佛の道を實踐して一切の衆生を化導するに依て、常に衆生の勝友となるのである。されば、吾々は此の勝友に依りて佛の正法を信解し、以て自覺々他、覺行圓滿の聖域に向つて進趣すべきものである。知識の進歩、道徳の發達、文明の精華、國運の發展といふも、つまり覺行圓滿のことである。故に此の三寶こそ正しく吾人最高の理想であります。

三寶一體

元來、佛法僧の三寶は、其の本末を究めて見れば遂に一體に歸すべきものであります。法を證られたのが佛樣で、法を學ぶのが僧である。故に、佛樣は能く法を說て、而して能く僧を度したまへり。僧は亦た法に順うて能く佛の位に入る。佛がなければ法がない。法が無ければ僧も無い。して見れば三寶は唯一である。而して其の功德の根源出處は吾人の一心を離れたものでありませぬ。殊に一體三寶の上から論じますれば、前にも申した通り、此の三寶は宇宙の大德妙用であるから、吾々御互は其の本性に於て天然自然に三寶の功德を有して居るのである。

ふに及ばず、三國傳法の祖師、各宗各派の御開山、及高僧碩徳等は皆僧寶中の優なるものであります。以上の三寶は歴史上の事實として此の世に現前したるものなれば、是を現前の三寶と稱します。修證義には三寶歸依の目的を示して『佛は大師なるが故に歸依す、法は良藥なるが故に歸依す、僧は勝友なるが故に歸依す』と仰せられてある。

佛は梵語で、具にいへば佛陀耶、此に覺者と譯し自覺覺他、覺行圓滿の謂である。又は智者とも譯す、卽ち大智力の故に、能く煩惱を斷じ、生死を超え、宇宙の本源を盡し、諸法の實相を究めて自覺を成じたまふ。又、大悲力の故に、能く衆生を愍みて迷妄を照し、苦惱を救ひ佛果圓滿の域に引導して覺他を成じたまふ。つまり自利々他並び全うして覺行を圓滿せられたのが佛である。故に、佛を以て三界の大導師と仰ぎ奉るのである。

法とは軌持の義と釋す。萬世の軌範となるを軌といひ、萬德を總持して餘す所なきを持といふ。釋尊一代の聖敎、大乘あり、小乘あり、頓敎あり、漸敎ありて千差萬別なりと雖も、何れも皆な衆生顚倒の病を療せんが爲めに施されたる良藥ならざるは無い。故に、大乘にせよ、小乘にせよ、念佛にせよ、法華にせよ、皆な釋尊の大慈悲心より流出したる轉大法輪であります。能く之を信じて、又、能く之を守る者は、直に煩惱の繫縛を離れ、永く菩提の妙樂を得んこと疑ひなし。故に、增一阿含經には『正法は諸の欲愛を除き、塵勞を除き、渇愛の心は永く起らず、欲をして無欲ならしめ、諸の煩惱の結縛と病とを離る』

殊に佛法僧の三寶を道理の上から申せば、宇宙の大徳妙用であるからして、如何なる國土も佛の光明に照されざるは無く、如何なる人も佛法の恩澤に浴せざるは無い。此の點からいへば、吾々は現在の生存上、常に此の三寶の恩力を戴いて居るのである。又、佛法僧の三寶は人間知識の根本、道徳の淵源であるからして、苟も自己の智徳を向上し國家の文運を發展せんと欲する者は、是非共此の三寶を以て最高の標準と爲し、必ずや之に向つて進んで行かねばなりませぬ。

此の點から申しますれば、三寶は實に吾々の最高理想と謂つべきものであるから、如何なる人も必ず之を信じなければならず、又、之れに歸依し奉らんければならぬ譯のものである。併し、斯樣に申したのみでは御領解の出來ぬ方もあらうからして、一通り三寶の意義を說き明かして見やうと思ひます。

三寶とは佛と法と僧との三つ、此の三つが一番大事なものであるから三つの寶と名けたのである。此の三寶にも三種の功徳といつて、現前三寶・一體三寶・住持三寶といへる三通りの別があります。先づ佛にも、經文には三世十方に無量恒沙の佛のあることを說てありますが、併し、其の代表的佛身を實現せられたのが我が大聖釋迦牟尼如來であります。その釋尊が十九歳にして出家し、三十歳の臘月八日に成道せられてより、八十歳の二月十五日夜半、御涅槃に至るまで、前後五十年の間、一切衆生の爲めに無量の法門を開示せられたのが法です。その法門を信解し修行して、佛意を相承し、佛教を保任し、而して一切衆生の勝友となつて佛法を東西に敷き、古今に傳へられたのが僧である。故に、釋尊に親近したる佛弟子は言

三寶の恩

最高の理想

私は是より、四恩の中の第四、三寶の恩に就て、一通り其の大要を御話して見様と思ひます。前の三種の恩德、卽ち國王の恩、父母の恩、衆生の恩は、主として世間的の恩分であるから、苟も人間たる者は佛敎を信ずると否とに拘はらず、必ず報答せねばなりませぬ。若し報恩の志も無く、其の務めをも顧みざるが如きことあらば、人にして人に非ず、極端に評すれば人面獸心です。

然るに此の三寶の恩といふは佛法僧三寶の御恩であるから、つまり宗敎的・出世間的の恩分であります。故に、佛敎に因緣なき人は、之に報ゆるの義務は無いものゝやうに思ふかも知れぬ。併し、佛敎が我國に傳はりてより一千三百有餘年、其の間に於て我國の文化を進め、發展を助けたるの効績は擧げて數へ難き程であります。さすれば、此の點に於ける三寶の大恩は實に偉大なるもので、苟も我國民たる者は、如何なる人でも此の御恩を蒙むらざるは無い譯です。

併し、是を實行するに當りては、物の輕重を察し事の先後を鑑みるの明を要することは勿論です。此の邊の處をも、能々心得て、此の廣大なる報恩的大行を、盡未來際に保任し圓成せられたいものであります。

たり、若くは柔弱なる精神になつたりしてはなりませぬ。

慈雲律師は十善法語に於て、不殺生戒を説き明かされた中に、かやうな意味を示されてある。即ち若し世間に在て國政を執らんに、盗賊徘徊し惡人徒黨を結んで政道の立たざる場合に、如何にすべきやといふに、經の中に、『善心を以て惡人を殺すは惡心を以て蟻子を殺すよりも其の罪輕し』とある。又『國家に害ある者を殺すは其の罪なきのみならず却て功德を成ず』とある、又、涅槃經の中に『佛の金剛不壞の身は甚深微妙なり、過去世に在て如何なる善根を爲して得たまひたるやとの問に對して、我、過去世にて國王たりし時、正法を護持し、道ある軍に立し故に、此の金剛不壞の身を得たり』と示されてある、法として是の如し、廣大の慈悲心が直に是れ賢聖の心業ぢやと仰せられてあります。此の邊の處は、能々翫味し思惟して、報恩の正行を全うする樣に致さねばなりませぬ。

之を要するに、衆生恩を報ずるといふは利生的行持の原理にして、之を行ふに慈悲を以てするは佛性本然の妙德である。而して、其の妙德が萬事・萬境に對して妙用を發するのが利生的行持であります。即ち師長に對しては敬虔の行持となり、兄弟相互の間には篤友の行持となり、夫婦間には和合となり、朋友間には信義となり、親族に對しては敬愛となり、社會に對しては同情となり、動物等に對しては慈念愛護の行持となるのである。仁義も此の中より生じ、忠節も此の間より現はる。聖賢の厚德、君子の至誠も亦皆此の中より出でざるは無いのであります。

を窺ふべきである。

延喜帝第二の皇子たりし空也上人は、北山鞍馬の奥に閑居して専ら念佛を修せられけるが、一頭の鹿ありて菴に來り馴れ親しむ。上人、之に餌を與へて『汝も亦一切衆生の一分なり、誦經鉦鈷の聲を聞て、次生には人間とも生れ、出離得脱の道を求むべし』とのたまひしに、其の後は毎日の如く上人の處に來たさうである。然るに一日、彼の鹿來らず、上人之を憂へたまひしが、一獵夫の鹿を荷うて過るあり、近づき見れば彼の鹿にてありき、上人、大に悲しみ聲を放て泣きたまひ、獵夫の爲めに今迄の事どもを物語り、懇ろに殺生の業を誡められければ、獵夫は大に感激して『某は平定盛と申す者なり、願くは今後、御門徒の一分に加へられたし』とて、鹿皮と角とを上人に獻上し、遂に師弟の緣を結ばれた。上人は皮を以て裘を作り、角を杖の頭に挾みて、生涯御用ゐ遊ばされ、且つ、其の時、定盛に『極樂ははるけきほどゝ聞きしかどつとめていたる處なりけり』といへる歌を與へられた。それより、定盛は有髪の僧と爲りて法衣を纏ひ、瓢を打て上人の和歌を吟詠し、京師の間を徘徊して念佛行を勵んだと申すことです。此等の美談は古今の史傳に澤山記載されてあります。

博愛衆に及ぼすとか、動物を愛護するとか、昆虫や草木に對しても決して虐待的動作に渉らぬとかいふことは、何れも人の天性より發する慈悲の泉であるが、是を衆生恩に報答する天分の行持とする時は、其の意味が一層高尙にして其の行持が永久的普遍的となるものである。併し、此等の說を聞て惡平等に墮ち

て、中々回復の模様がない。國王は婆羅門三百人を請じ、其の敎へに随つて、百頭の畜生と一人の小兒を得、之を殺して天を祠り、以て母の病を祈らんとし、象馬牛羊等を駆りて東門より祭壇に行かんとした。釋尊之を愍みて、東門の邊りに御出張になり、國王に諭して『善く一言を聽け、穀食を得んと欲せば當に耕種を行ふべし、大富を得んと欲せば當に布施を行ふべし、長命を得んと欲せば當に大慈を行ふべし、智慧を得んと欲せば當に學問を行ふべし』と仰せられ、更に『若し人壽百歳にして勤めて天下の神に事へ、象馬もて祭祀に用ゆるも一慈を行ふに如かず』といへる偈を説て御誡め下されたので、國王は忽ち迷信を解脱して、正法に歸依されたとあります。是れらも報恩的行持の好典型です。

我國では仁徳天皇が皇后と共に菟餓野に御遊びの折、鹿の鳴く聲を聞て頗る愛されておわせしが、一夕、一向に鹿の聲が聞えなんだので、大に寥しく思召されたが、翌日膳部に鹿の羹があつたので『何處より此の鹿を得たるや』と御問ひ遊ばされると『菟餓野より』との答へであつた。『さては朕が愛する鹿にてありしよ』とて遂に之を召し上がられなんだと申すことである。

元亨釋書に出て居る蓮照法師の如きは、慈悲深重にして、蟲類に佛縁を結ばしむる爲めにとて、夏の日に裸體となりて林や草叢の中に入り、法華經を讀み乍ら蚊や虻に身血を施された。後、全身腫れ爛るゝに至りしが、一日、假寝の折、一人の聖僧現はれて『善哉、佛子衆生を憐憫す慈悲至れり』と讃歎せられたが、夢覺めて後、不思議や身體常に復したとある。これらは極端の例であるが、復以て先賢慈心の大なる

古來より家族に對し社會に對して人道佛道の行持を行取したる、佛・菩薩・高僧・碩德・賢人・君子の嘉蹤は算ふるに遑なき程であるが、更に進んでは、動物等に對して能く報恩的行持に努められたる事例も亦少なくはない。

殷の湯王が野に出でける時、偶ま鳥を捕ふる者があつて、四面に網を張て『天より下り四方より皆な我が網に入れ』と祝して居る。王之を聞て『噫盡矣』、それでは鳥の種子が盡きるであらうと仰せられ、其の三面を去りて、改め祝して『左せんと欲せば左せよ、右せんと欲せば右せよ、命を用ゐずんば乃ち吾網に入れ』といはれた。諸侯聞て大に感じ『湯の德至れり禽獸に及ぶ』というて盡く降伏したとある。

又、趙の武孟といへる者、天性・殺生を好み、射獵を娛しみとして居つた。一日獵る處の魚鳥を其の母に送りしに、母は大に慨きて『汝は何故に好事をせずして此の放蕩を敢てするや、魚鳥と雖も爭でか生を愛せざる、是を殺して食ふ、罪太だ大なり、吾れ決して之を望まず』というて突き戻した。武孟は是より射獵を止めて學文を修め、遂に侍御史の位にまで上つたとある。此等は本より報恩的觀念より出た譯ではないが、其の行ひは矢張、佛性慈悲心の露現である。

釋尊御在世の砌、和默といへる國王があつて、專ら婆羅門敎を信じて居つた。或時、其の母が疾に罹り

愛護し憐愍する時は禽獸蟲魚も亦た冥々の間に我を保護して呉れるものである。されば他の恩に報ずるのは絶對的利他であるが、それがやがて自己の本務を果し、自己の性德を發揮するのであるから、この點から見れば、絶對的の自利と云はねばならぬ。且つ夫れ報恩というても、妄りに宋襄の仁に倣ひ子煩惱の母の如くなれといふのではない。

修證義第廿九節には『唯當に日日の行持其の報謝の正道なるべし』と明らかに示されてあるから、決して非常の行ひをせよといふのでありませぬ。日日の行持というのは佛戒に隨順したる平生底の務めである。即ち、他の生命を愛護し、他の資財を保護し、他の德行を尊重する等の戒行に他ならぬ。此の戒德を縱橫に發揮して、任運に動物・植物に迄も流通するに至らば、衆生恩に報ずるの行持は手の舞ひ足の踏む所に現はれて來る筈のものであります。

若し動物は愛するが妻子・兄弟には不實であるとか、植物や園藝には熱心であるが朋友・奴婢をば虐待するとかいふことであつたならば、顚倒の最も甚しきものであります。喩へば電燈にせよ洋燈にせよ其の光輝を放つて物を照すの德に於ては、平等無差別であるけれども、自然の法として近きより遠きに及ぼすものである。それと同じことで、自他法界、平等利益の報恩行を修むるとするも、自づと先づ近き處の妻子・兄弟・朋友・親族を愛護し、延て動物・植物に迄も推し及ぼすべきものです。而して其の本源は慈悲心でありますから、即心是佛といふは慈悲心是佛とも見るべきであります。

元來慈悲心は天地本然の德、衆生本具の性であるに依て、一たび此の本性を開發すれば、其の光明は普く天地萬物を照して漏らす所はない。これが親に對すれば孝となり、君に對すれば忠となり、子に向へば慈愛となり、夫婦の間には和合となり、朋友の間には信義となる。獨り人間や動物の上ばかりでない、一粒の米、一滴の水に對しても此の慈悲心が發動して來るものである。古人が『行水の捨て所なし虫の聲』とか『やれ打つな蠅が手をする足をする』とかいうてをるのは、大慈悲の德が虫類の上に現はれたのである。『朝顔に釣瓶とられて貰ひ水』とあるが如きは、大慈悲の用が草木の上にまで現はれたのだ。

大慈悲心は能く物を敬ひ、能く物を憐れむものであるから、此の德が内に發すれば、自然に能く己れの身をも愛し、己れの衣食住所をも愛し、決して粗末な取扱ひをせぬ樣になるものである。仇に酬ゆるに恩を以てすれば、敵をも感化して之を味方とするの力がある。況てや、己れの身を扶くる所の衣食住處の如きは、猶更粗略にすまじきものである。之を粗略にせざる者は自づと衣食住處に不自由を感ぜぬものである。正知見を以て能々思惟して見たならば、有情非情平等一如の理が事々物々の上に現はれて居るのではありませんか。

我、人を輕んずれば人も亦た我れを輕んず、我、人を苦しむれば人亦た我れを苦しむ、因果の道理は覿面です。水火を粗末にする者は必ず水火の爲めに苦しむ。金錢を亂用する者は必ず金錢の爲めに苦しむ。之に反して、金錢を大切にすれば金錢亦た助く。水火を叮重にすれば水火亦た我れを護る。禽獸蟲魚をも

は仁を利し仁者は仁に安んず」と古聖人の言はれたのは全くこゝである。義務的觀念より家族及び社會に對して道德を盡すのは、自と報酬を期するの念を生ずることを免れぬ。縱ひ然らざるも、幾分か苦しんで漸く之を行なうて行くのである。是れ卽ち智者の分際です。之に反して、報恩的觀念より家族及び社會等に對する時は、報酬を貪ぼるの念も無く、喜んで是を行なふ樣になる。是れ全く仁者・聖者の心操である。此の邊の道理は心得違ひの無い樣に能々領解して貰ひたいのであります。

卽心是佛

佛菩薩といふも畢竟、自己本來の智德が圓滿に發達せられたる御境界に過ぎぬ。之を自利的にいへば、法身・般若・解脫の三德とも申すのであるが、之を利他的方面からいへば、大慈悲心卽佛菩薩である。故に涅槃經には「大慈大悲をば名けて佛性と爲す、佛性をば名けて如來と爲す」とあり、觀無量壽經には、「佛心とは大慈悲是れなり」ともある。三世十方の諸佛、其の數恒沙なりと雖も、一大慈悲心の功德聚である。其の大功德聚の實現せられたのが大聖釋迦牟尼佛である。されば修證義にも『謂ゆる諸佛とは釋迦牟尼佛なり、釋迦牟尼佛是れ卽心是佛なり』とも御示しになつたのである。然れば吾々御互も諸佛の大慈悲心を體得すれば、此の心が卽佛である。吾々御互の心が佛の御心と相應するに非されば、眞に能く佛を拜み奉ることは出來ぬものである。

利する所以の道に違うて居るからである。彼の利己主義とかいふの類は、唯だ妄想顚倒の心を以て己れを利せんとするからであります。是れ己れを利せんと欲して、却て己れを害するの結果を招き寄せる樣なものです。如何となれば、人を苦めて己れのみ樂しまんとするは、決して永久の樂しみを得る所以の道では無い。水戸黄門光圀卿が『苦は樂の種、たのしみは苦しみの種と知るべし』と仰せられたのは、全く不合理の利己的快樂を誡められたものである。

眞實己れを利するといふは、己れの本性を盡し己れの道德を明らかにすることです。本性を盡すといふは、本性の智德を顯現することで、道德を明らかにすといふは忠孝博愛の道を全うする事である。さすれば、己れを利する時は自然に利他の功を奏し、他を利する時は自然に自利の志を遂ぐることゝなる。故に自他平等といへる宇宙の原則の上に人間道德の基礎を樹てなければ、決して本當の道を修めることは出來ませぬ。そこで修證義に於ては『愚人謂はく、利他を先とせば、自らが利省れぬべしと、然にはあらざるなり、利行は一法なり普ねく自他を利するなり』とも御示し下されたのであります。況てや、一切の衆生は皆な吾々に對して多少の恩分ありと觀ずれば、此の觀念の法に依りて、任運に公利公益を圖り、慈善救濟に努めずには居られぬ樣になるものです。

凡そ道德を實踐する人に二通りある。卽ち爲さねばならぬと思うて義務を盡す人と、爲さずには居られぬ樣になつて道德を行ふ人とである。前者は勉めて善を行ふ方で、後者は安んじて善を行ふ方です。『智者

けねばならぬ。善因縁に依りては、現在にて畜生等たりし者も未來にては人間・天上の身を受くべきものである。昨日の惡人も、至心懺悔の力に依りては今日の善人と變じ、昨日の迷者も、信心修養の功に依りては今日の聖者となる。

地に依て倒れたる者は必ず地に依て起ち、水の爲めに穢されたる者は終に水の爲めに淨められる。『雨霰雪や氷と隔つれど落れば同じ谷川の水』畢竟して迷悟同性、善惡一心である。さればとて、若し惡平等の見に墮在せば外道の黨侶たることを免れぬ。併し、其の本體に至つては法界一佛性、萬法一眞如であるから、自分だの他人だのといふ確執は起されませぬ。

此の原理を證して、始めて他を視ること猶ほ己れの如く、怨敵を見ること猶ほ赤子の如き無限絶對の大慈悲心も現はれて來るのであります。梵網戒經に『一切の地水は是れ我が先身、一切の火風は是れ我が本體』とあるのも亦、同性同體の理を御示し下されたのである。然るに凡夫の悲しさには、妄りに自他の假相に迷うて、平等の原理に昧きが故に、無暗に我利々々亡者の仲間入りをして、虚名を貪ぼり、虚利を求め、佛性常住の孝順心慈悲心を昧まして惡鬼を作り、夜叉を造り、我と我が手で三界六道輪廻の繋縛を招くのである。

元來、自他平等は宇宙の大眞理なるが故に、實に能く己れを愛する者は必ず人を愛し、實に能く人を愛する者は必ず己を愛するものである。己を利することが他を利するの德と衝突するのは、眞實己れを

神の奧底より開發したのでなければならぬ。佛の御誓願も、神通光明も、皆慈悲の妙力である。
故に、國民の道德を發達せしめんと欲せば、大慈悲の養成に努めねばなりませぬ。觀經には『佛心とは大慈悲是れなり』とあるとすれば、一般の人心の奧底に佛心の種子を植付くるに非ざれば、決して國民道德の發達を期することは出來ぬ譯のものであります。

自他平等

抑も、宇宙の本源は一實體にして、萬物の根源も亦自から同一體で無ければならぬ。縱ひ有情・非情・動物・植物と相分れて居らうとも、其の實體を究め盡したならば無二亦無三にして竟に、唯有一乘法である。故に金剛經には『是の法は平等にして高下あること無し』と仰せられ、三祖大師は信心銘に於て『眞如法界他なく自なし』とも示されたのである。

然るに、凡夫となり、聖者となり、地獄と現はれ、極樂と現はるゝは、唯だ因緣假和合の相にして、決して其の實體では無いのであります。迷悟といふも一念心の轉處に依て分れ、善惡といふも、亦一念心の動く處に於て其の趣を異にするに過ぎぬ。故に森羅萬象も齊しく地水火風の集合體にして、人畜鳥魚も同じく五蘊の和合相である。

されば世に絕對の惡人はない。惡因緣に依りては、過去にて人間たりし者も現在にては畜生等の身を受

ること、常に自ら慳貪を制して布施を行ふべきこと、常に自ら忿怒を制して安忍を守るべきこと、常に自ら邪見を誡めて、正信に住すべきこと等である。斯の如き十箇の戒律に隨順して已れを修め他を濟ひなば、世間・出世間一切の善根功德は皆此の中より生ずるものであります。

而して、其の根本は唯だ一箇の大慈悲心に歸するのである。如何となれば、若し内に大慈悲心があつたならば、どうして、他の生命を害したり、他の財物を掠めたり、他の品行を紊したり、他を欺いたり、他の健康を害したりする樣な事が出來ませうぞ、慈悲心の發する所、自から、愛語・恭謙・布施・安忍の德となるべきは自然の勢です。故に涅槃經には『諸有の善根は慈を根本と爲す』とあり、優婆塞戒經には『慈心は卽ち是れ一切安樂の因緣なり』とも『慈悲を離れては善法を得ること無し』とも示されてある。天に慈悲の德ありて能く萬物を覆ひ、地に慈悲の德ありて能く萬物を載す。君に慈悲の德ありて能く仁惠を敷き、親に慈悲の德ありて能く其の子を鞠育す。家に慈悲の德あれば夫婦兄弟相和し相扶く、國に慈悲の德あれば億兆心を一にして相倚り相賑はす、萬一にも此の德に缺くる所あらば、親子相背き、夫妻相爭ひ、兄弟相鬩ぎ、朋友相欺き、爲めに國亂れ家破るゝの不幸を招くことゝもなる。

此の慈悲は、前にもいうた通り、吾々衆生の本性に具有する天眞の妙德であるから、此の慈悲を以て一心の基本とせねばならぬ。報酬を得んが爲めに慈悲を行ふのは慈悲を以て器械視するものである。御附合に慈悲を行ふのは慈悲の德に對して雇人の取扱ひを爲すものである。それではいかぬ。慈悲は是非とも精

始めて能く眞の道徳を發揮し得べきものであります。

而して、其の道徳の大本は何物ぞといふに、一言以て之を蔽へば、大慈悲心の開發に歸せねばならぬものであらうと思ふ。梵網戒經には『佛性の慈悲心孝順心』と仰せられてあつて、慈悲も孝順も佛性本有の妙徳であります。慈悲といふも、孝順といふも、決して各別のものではない。慈は與樂の義・悲は拔苦の義と注してあるから、他に安心安樂を與へ、他の苦惱煩悶を救ふのは皆慈悲の妙用である。されば、君主に忠を盡し兩親に孝を致すも、盡く慈悲心の徳相といふことが出來るのである。

釋尊は夙に戒律を制して道徳實踐の標準を御示し下されてある。その戒律にも、大乘・小乘等の別がありて、微を盡し細を盡して重々無盡なるも、概說すれば三聚淨戒を出でぬ。三聚淨戒とは、攝律儀戒と、攝善法戒と、攝衆生戒との三箇條であります。一切の惡を制するを攝律儀と名け、諸々の善法を勸修するを攝善法と名け、普く衆生を利益するを攝衆生と名く。前の二箇條は己れを修むるの道にして、後の一箇條は他を利するの徳である。此の三徳が境に對すれば十重禁戒となつて現はれる。

卽ち、他の生命を愛護して誓て殺害を加へざること、他の財物を保護して誓て貪ぼり偸まざること、品行を高潔にして誓て非倫の振舞に涉らざること、正直清明の徳を守りて誓て虛僞の言行を敢てせざること、身心の健康を保任して酒類の爲めに身心を害し、若くは妄執の爲めに正智を昧まさゞること、愛語の行を保ちて他の名譽を重んじ誓て惡口讒謗等を爲さゞること、謙讓の徳を修めて傲慢不遜の擧動に涉らさ

の有る無しに拘はらず、素より報酬の如何をも論ぜぬ。唯だ既に享けたる恩徳、又は現在受けつゝある恩誼に酬ゆるといふのであるから、殆んど絶對的道德であります。

此の道德の發達したのが諸佛廣濟の慈悲である。故に、法華經に於ては『今此の三界は皆是れ我が有なり、其の中の衆生は皆是れ吾が子なり』とも仰せられたのである。是を吾々の上に將て來れば、一切の衆生は皆な是れ吾が父母なり、兄弟なり、同胞なり、親族なりとの觀念が起るのである。而して、此の觀念が偏法界の大慈悲心となり、その大慈悲心が、一の動物に對して迄も油然として發動し、禁ぜんと欲するも禁ずること能はざる狀態となつて來るのでございます。

道德の大本

道德の人間に必須なることとは、食物の人身に缺くべからざるよりも更に一層緊要なるものである。何故なれば、食物は二日や三日は食べずに居たとても生命を失ふ樣なことは無いが、道德は一日一時一刻でも之を離るれば忽ち人間としての資格を失なふことゝなるからである。

故に、現時の我國敎育上の大問題は、道德の涵養發達を圖ることであります。而して、道德なるものは、單に情操の修養と意志の敎育とにのみ依りて得らるゝものでは無い。要するに、道德は人間をして人間たらしむべきものであるから、着實なる智識と、優美なる情操と、穩健なる意志との三者が相調和して、

抑も、吾々御互が無始劫來よりして、幾度か生じ幾度か死する間に於て、互に親子となり、夫婦となり、兄弟となり、朋友となり、主從となりて、深く厚き因縁を結びつる衆生の數は、幾百千萬億なるやを知らず、その衆生が、因縁業力の作用に依りて、或は天上・人間に生れ、或は畜生・餓鬼・地獄に墮在し、千態萬狀の果報を享けて居るのである。

されば、現在の從僕も、或は過去世の親子、兄弟にありしやも知れず、現在の飼犬・飼猫なども、或は前生の恩人でありしやも測り難しとすれば、一切衆生は盡く吾々と恩分的關係を有するものとせねばならぬ。承陽大師が『六の道遠近迷ふ輩は我父ぞかし我母ぞかし』と御詠み遊ばされたのも、行基菩薩が『ほろ〱と啼く山鳥の聲きけば父かとぞ思ひ母かとぞ思ふ』と詠まれたのも、皆な是れ衆生恩の尊重すべき事を御示しになつたものであります。

世間の倫理道德の上では、家族に對するの義務、他人に對するの義務、社會國家及び人類に對するの義務といふ風に說てある。卽ち共同生活の意味よりして、自他の間に權利・義務を定むるのは必須の法則である。その法則を示したのが世間的倫理である。が、佛敎に於ては更に一步を進めて、義務といはずして報恩と名づく、義務といへば何等かの條件が附帶して居る。卽ち相對的道德である。

然るに報恩といふ時は、一切の衆生は吾々に對して直接、又は間接に必ず多少の恩分がある。其の恩分に報ゆるといふが佛敎の道德觀念でありますから、此の道德には交換的條件といふべきものは無い。權利

物等は疎き方である。人間同士の中でも、同一の國土に生れ、同一の權利義務を有し、同一の利害關係を有する者の如きは親緣の中の親緣です。殊更、夫婦とか、兄弟とか、師弟とか、朋友とかいふ類は特殊の親緣と申さねばならぬ。又、疎緣の中でも、牛馬犬猫等の類は疎緣の中の親緣とも謂ふべきものである。

要するに、四恩の中で國王の御恩といへる中には、自から皇祖皇宗の御鴻恩も含まれて居り、父母の恩といへる中には祖先の御恩も含まれて居るから、其の他は總て衆生恩の中に攝せらるべきものである。

此の衆生恩を大別すれば、近緣と遠緣とに區分することが出來る。近緣とは直接の關係あるもの、即ち第一には家族的關係、所謂夫婦・兄弟・親戚・主從の類、第二には社會的關係、所謂師弟・朋友・及び組合等の類、第三には國家的關係、所謂國民相互の關係、第四には世界的關係、所謂同盟國民として、若くは商工業等に對する關係等である。第五には人類以外の動物、即ち牛馬鷄犬等に對する關係であります。

遠緣とは間接の關係あるもの、此の中には吾々人間の耳目に觸るゝものと觸れざるものとがある。禽獸蟲魚等の多くは耳目に觸れるものであるが、佛敎に於て說く所の天上界・修羅界・餓鬼界・地獄界等の衆生は總ての人間の耳目には觸れませぬ。故に、是れらは遠緣の方です。併し、三世因果の關係より推究すれば、耳目に觸れるものは勿論、縱ひ肉眼の屆かぬ處に在る別世界の衆生と雖も、生々世々の間には、直接、又は間接に何等かの因緣を有するものといはるべき道理があるのでございます。

衆生の恩

廣濟の慈悲

今日は、四恩の中の第三衆生恩に就て御話しを致さうと思ふ。

衆生といふは衆縁和合して生ずるの義である。凡そ一切の生物は皆、地水火風の四大及び色受想行識の五蘊等が相和合して出生したものである。換言すれば、肉體と精神との和合體であるから、是を衆生と名づけたものであります。新譯では有情と譯してある。即ち情識を有するの義です。何れにしても、一切生物の總名であります。

故に、人間は言ふに及ばず、鳥畜類を始め凡そ三界六道に遍在する所有生物を總攝して衆生と稱したのです。此の一切衆生は皆、吾人に對して恩分の關係あるを以て、佛子たらん者は、常に此の理を觀念して、生々世々を盡して報恩謝德の行持を營なめよと御敎へ下されたのが衆生恩であります。

尤も、一切衆生の中にも自づから親緣と疎緣との別がある。御互人間同士の如きは親しき方で、他の動

られた。死するの前一日、其の子に遺書して『餓死すと雖も二君に仕ふる勿れ、愼て祖母に事へよ汝の母は不幸の人なり宜く孝を盡すべし』云々と示されたとある。

又、吉田松陰氏の如きも、刑せらるゝに臨み、泰然自若、志金鐵の如くなりしも、思うて親の事に至れば亦一滴の涙なき能はず、故に『親を思ふ心にまさる親心けふの音信何と聞くらん』と詠ぜられた。此等の美談は擧げて數へ難い程澤山あります。

凡そ高潔玉の如き行持、優秀花の如き德行、その他、壯烈鐵火の如き武勇も多くは孝心の源泉より流出して居る樣に思はれます。故に父母の恩德の甚大なることを識得し、之に報ゆるに其の道を以てするは、獨り人としての大經・大德たるのみならず、やがて戒德を圓滿し、本證妙修の淨行を成就するの最大基礎でございます。」

『汝の志は已に天魔の侵す所となる。若し其の志を改めざれば親子の緣を斷ずべし』とて、遂に家を追出された。師は是より發憤して行脚の途に上られたが、母は師を慕ふの情に堪へず、晝夜涕泣して遂に目を泣き潰されたといふことです。故に、師は後年に至り其の徒に告げて『吾れ母の賢なるに依り六十餘年出家を全うすることを得たり』といひ。母の訃音に接せられたる時の如きは『理盡詞窮 母子緣 訃音到處 涙潸然 年來數有綿蒲意空作返魂一炷烟』の偈を作りて哀悼を極められたとある。

近世の高僧葛城慈雲尊者は、母の命に依りて十三歲の時出家せられ、道場觀を受くるに至つて汗流れて淋漓、大に歎じて、『豈に料んや佛道此の如く甚深、此の如く廣大ならんとは』といひ、母に書を贈りて『今日方に出家の德を知る亦是れ悲母の鴻恩なり』と申されたとある。尊者の俗弟子にして畫界の巨擘なる池大雅も、至孝にして、母に別れし時の如きは、自ら棺槨を擔うて少しも人手に掛けなんださうである。

勤王家渡邊華山も亦至孝の人である。その初め家極めて貧なりしかば、友人の勸めに依りて畫を文晁に學んだが、良紙を求むるに由なく、日に十六文乃至廿四文を投じて美濃紙を購うた程であつた。氏は常に人に告げて『畫を賣りて以て自ら給す是れ止むを得ざればなり、一日畫を作らざれば一日の窮を增す、一身の窮は亦忍ぶべし父母妻弟の窮を奈何ん』といはれた。後、幕府の爲めに禁錮せられ、尋で國に幽せらるゝに及んでも、毫も怨むる色なく『とり積みて世を炭竈の烟たきは已が焚添ふ薪なりけり』とさへ詠ぜ

を重んじ、その菩提を弔らひ、兼て一切衆生を濟度せんが爲めに、御出家あらせたのであります。歌人として有名なる慈圓僧正も、孝心深くして『墨染の袖をぞしぼるたらちねのあらましかばと思ひつゞけて』と詠じ、日蓮宗の高僧深草の元政上人も『惜からぬ身ぞ惜まるゝたらちねの親の殘せる形見と思へば』と詠じて、常に其の身を尊重せられたさうである。

又、彼の有名なる源信僧都は九歳の時、父親の菩提の爲めにとて叡山の良源座主の門下に投じたるが、才識拔群にして、十五歳の時、勅を承けて八講師となり、稍や誇る意ありしが、母親の嚴誡に依りて大に慚愧し、横川の首楞嚴院に退きて研鑽を盡し、後、空也上人の訓を受けて念佛の法門に歸し、四十二歳の時、郷に歸りて母を省りみ、遂に母親をして大安心を獲得せしめられた。母の歿後に至り、自ら『嗚呼我をして行を砥がしむるは母なり、母をして終りをよくせしむるは我なり、これ母これ子共に善友なり蓋し宿世の契なり』といはれてある。

我宗の中興とも稱せらるゝ月舟禪師は、肥前武雄の藩士藏人種久の二男として生れ、十二歳の春二月、圓應寺華嶽和尚に就て出家せられた。母親は師を誡めて『我れ老たり未だ善根なし只汝が眞の出家兒たらんことを願ふ』といはれたさうである。其の年の十一月、偶ま父母の處に歸省し、近隣の兒童と與に遊びながら各々其の志を述べたる折、師は『我は眞の智識たらんことを望む、然れども、若し與ふるに肥前百萬石の知行を以てせば、俗に還りて多くの善知識を養成すべし』、といひけるに、母は聞て泣て之を誡め、

三世の諸佛が大慈悲を以て心と爲し、大誓願を以て力と爲し、生々世々を盡して、衆生濟度に御辛勞下さるゝのも、畢竟、孝德の妙用と申すべき道理あることを知らねばなりませぬ。

孝德の嘉蹤

大聖釋尊は成道の後、迦毘羅國に還り、父君淨飯王の爲めに說法して永久不滅の大安心を與へたまひ、その御崩御の際の如きは、自ら棺槨を御擔ひ遊ばされた。母君摩耶夫人の爲めには、特に忉利天に登りて說法敎化して大安樂を與へられた。是等は孝行の至高至大なるものです。

佛弟子目連尊者は、其の母が慳貪の業に因りて餓鬼道に墮在せしを、佛の御垂訓に從ひ七月十五日に盂蘭盆會を設け、十方の大德を請じて、淸淨の供養を營み、その功德に依りて母の苦難を救はれました。故に我國に行なはるゝ盂蘭盆會は全く目連尊者より始まりたる孝道の佛事である。されば、釋尊は盂蘭盆經に於て親く孝道の心得を示され『我をして疾く無上正眞の道を成ぜしめたるは孝の德に由る』とも仰せられ、又『父母は一生補處の菩薩と等し、故に當に承事供養すべし、故に律に其の弟子に敎へて衣鉢の資を減じて其の父母を養ふことを得せしむ』とも御示しになつてあります。

支那禪門傑出の高僧六祖大師は、孝心殊に深く、薪を賣りて母親を奉養せられたとある。我が高祖大師は八歲の時、母親の喪に遇ひたまひ、香の烟を觀じて世の無常なることを悟り、母親の今はの際の御遺囑

を祭りて、而して後仁政を敷きたまうたのである。卽ち父母祖先に對する追善供養を以て大孝そと仰せられたのである。されば今日に至りても、一月一日の御式は四方拜で、天神地祇を拜せらるゝ御儀式、其の他、一年十度の大祭祝日は、四方拜を加ふれば八度迄は御祖先に對せらるゝ御孝事の大禮であります。申すも畏れ多きことながら、我が天皇陛下の御孝心深く御わしますことは、有り難しとも貴としとも歎へ奉らん樣も無き程です。御詔勅には常に『皇祖皇宗』と仰せられ、明治天皇は『めにみえぬ神の心にかよふこそ人の心のまことなりけり』、『たらちねの親の敎へを守る子は學びの道も迷はざるらん』と仰せ遊ばされてあります。

更に佛敎の上から申せば、一切衆生は、無始劫來、幾度か生じ幾度か死して、互に親子となり、兄弟となり、朋友となり、親族となつて居るに依て、三世因果の理法に照して見れば、一切衆生は相互に血族的關係を有して居るといはれる道理があります。故に梵網戒經には、『一切の男子は是れ我が父、一切の女人は是れ我が母、我れ生々に之れに從うて生を受けざるは無し、故に六道の衆生は皆是れ我父母なり（乃至）若し父母兄弟死亡の日は應に法師を請じて菩薩戒の經律を講じ、福をもて亡者を資け、諸佛に見え人天上に生ずることを得せしむべし』と御示し下されてある。承陽大師が『六の道遠近迷ふともがらは我が父ぞかし我が母ぞかし』と詠ぜられ、行基菩薩が『ほろ／＼と啼く山鳥の聲きけば父かとぞ思ひ母かとぞ思ふ』と詠ぜられたのも此の意味であります。

亦は制止と名く、所以に孝と戒とは名異にして義同じ』というてあります。この邊の道理は能々研究し且つ深く信じて貰ひたいと思ふ。

阿含經等に七佛通誡の偈といふがある。所謂『諸惡莫作衆善奉行、自淨其意是諸佛敎』といふのであります。御戒法の骨子は正しく此の一偈に備はつて居る。卽ち『諸の惡は作す莫れ衆の善は奉行せよ、自ら其の意を淨うす是れ諸佛の敎なり』で、八萬の法門も畢竟、此の根本的精神より現はれたものである。而して其の戒德を顯現するの源は、先づ父母に孝事し、師長に隨順し、三寶に歸依し奉るを以て本とすべきである。親に孝ならざるは恩を知らざるが爲めなり。恩を知らざるは其の身を知らざるが爲めなり。其の身を知らざるものいかにして眞の戒德を現はすことを得べきや。

御戒法の功德は現在一世のみならず、未來永劫の福利を增進し、現在の父母のみに非ず、先祖代々の菩提をも莊嚴し、併せて十方法界の群生をも潤澤するの利益がある。故に此の戒德より現はれたる孝道の行なひは、父母の現在に孝養を盡すのみならず、其の歿後には佛事を營なみて厚く之を祀り、以て未來世の頓證菩提にまで回向するのであります。

元來、父母祖先を祭ることは我國の美風なのである。神武天皇が中州を平らげて帝宅を大和の橿原に營みたまへし時、『我が皇祖の靈は天より降り照して朕が躬を助け給へり、今、諸の虜ども已に平ぎて海内穩になりつれば、天神を郊祀して大孝を申べ[illegible]

るのである。

其の御戒法とは、三歸戒と、三聚淨戒と、十重禁戒とで總體で十六ケ條の御戒法である。之を大別すれば信と行との二つとなる。信とは佛法僧の三寶に歸依し奉りて三寶の功德を確信し、生々世々を期して三寶に背き奉らざるを誓ふのである。行とは佛教道德の實踐方法であるが、その大綱は止惡・作善・利生の三大部門を出でぬ。卽ち身口意三業に於ける諸々の不善を遠離するのが止惡門で、更に進んで、身口意三業に於て諸々の善根功德を實行するのが作善門である。亦復更に進んで、之を衆生利益の方面に回向するのが利生門である。

是の如く信行共に重々無盡なるも、其の根源は孝道に在るといはれる道理がある。故に梵網戒經には『爾時に釋迦牟尼佛初めて菩提樹下に坐して無上正覺を成じ已て初に菩薩の波羅提木叉を結して父母師僧三寶に孝順せしむ、孝順は至道の法なり孝を名けて戒と爲し亦は制止と名く』とあります。

波羅提木叉は譯して別解脫といふ。卽ち御戒法のことである。孝順とは、古迹記には『孝は謂く養育、順は謂く恭敬、恩を知て恩を報ずるは卽ち是れ孝道なり、恩に二種あり一には生身を滋長するの恩、卽ち父母なり、二には法身を長養するの恩、卽ち師僧等なり』といひ、又『孝は百行の本、先王の要道たり、戒は萬善の基、諸佛の本源たり、善此れより生ずるをもて孝を名けて戒と爲す、惡此れより滅するをもて

又、孝行の目的に就ていへば、親の身を安んずると親の心を樂ましむるとの二通りがある。禮記に『凡そ人の子たるの禮は、冬は溫めて夏は淸うし、昏は定まり晨には省みる』とある樣に、朝夕、親切に孝事し供養して、不自由なからしめるのが親の身を安んずるの道である。併し是れのみでは孝の全きものとは申されぬ。更に親の心を樂しましむことが肝要です。

心を樂しましむるには身を立て道を行ふことが大切である。故に孝經には『親に事ふる者、上に居て驕らず下として亂れず醜に在て爭はず、上に居て驕れば即ち亡ぶ、下として亂れば則ち刑せられ、醜に在て爭へば即ち兵せらる、此の三の者除らざれば日に三牲の養を用ゆと雖も猶ほ不孝と爲す』とあります。

要するに、孝行は天地自然の大道であるから、大道には古今の別もなく、東西の隔たりも無い。されば能く孝德を全うすれば自然に大道に相應し、常住不滅の眞理に契當することを得るものである。故に、孝行の俗諦的道德がそつくり諸佛の眞諦的修證となる。孝德の存ずる所天地の大道自づから現前し、孝道の行はるゝ國土は自づから悲智圓滿の淨土となる。是を眞俗一如の妙理というのであります。

佛戒の基礎

且つ又、我が曹洞宗の安心は、受戒入位に歸するは今更ら事新しくいふ迄も無いが、受戒入位とは梵網戒經に『衆生佛戒を受くれば即ち諸佛の位に入る』とある釋尊直指の法門である。即ち佛祖正傳の御戒法

養することを怠りなば、どうして親に滿足を與へることが出來ませうぞ。然らば、我子を愛育するは、我親に對する孝行の最も主要なものといはねばなりませぬ。

元來、孝行には直接の孝と間接の孝とがある。孝經に『孝子の親に事ふるや、居には其の敬を致し、養ふには其の樂しみを致し、病には其の憂を致し、喪には其の哀を致し、祭には其の嚴を致す、五つの者備はりて、然る後能く親に事ふといふ』とある。常に其の親を敬まひ親を養なふことを喜び樂しみ、一旦病あれば之を憂うること已れ自ら病むよりも甚しく、誠を傾けて能く看護に努め、不幸にして御死になりし時は、衷心より深く之を哀み、その靈を祭るに際しては極めて嚴肅なる祭事を行ふ、此等は直接の孝であります。禮記に『孝子の老を養ふや、其の心を樂ましめ、其の志に違はず、其の耳目を樂ましめ、其の寢處を安うし、其の飲食を以て之を忠養する』とあるが如きは、直接の孝養として最も大切なる心得である。

それから、間接の孝としては、身を立て道を行なひ名を後世に揚ぐるの類である。其の職分を盡し、其の家庭を治め、其の子孫を教養し、更に進んでは社會、國家の爲めに効績を顯はすの類は、何れも間接の孝である。殊に、國家の爲めに奉公の大義を盡し、場合に依れば一身を拋つて顧みざるが如きも、亦た孝の大なるものである。故に、其の位地と其の人格とに依りては、間接の孝行の方が、直接の孝行よりも重要と見るべき場合があります。

正知見を以て觀たならば、天地法界は丸ころがしの佛法である。梵網經には『佛性の孝順心慈悲心』と仰せられて、孝順、卽ち孝道は、佛性本具の德にして天地自然の法である。樹木に就ていへば、根より幹を生じ、幹より枝が生じ、枝より葉を出す。根幹を父母とすれば枝葉は子孫である。その葉が落ちれば根に歸して根を養ふ、これが孝順の妙用である。水に就いていへば、海水が蒸發して氣體となり、凝聚して雲となり、融解して雨となり、河となり、泉となりて終には本の大海に歸入す。これが孝順の妙用である。されば、孝行の道は天地の大德妙用であるからして、人能く孝道を全うすれば、自づから上を敬まひ、下を憐れむの心を生じ、忠節も、信義も、博愛も、奉公も、皆な之れより發せざるは無い。故に孝經には『親を愛する者は敢て人を憎まず、親を敬する者は敢て人を慢らず』と說てあります。

或人は『孝行々々というて、無暗に孝行を子弟に强ゆるのは宜しく無い、子を愛するは親自身が其の情を滿足せしむる所以である。又、その子を養育するは親の務めである。故に孝行を以て絕對の道德の如くに思うて、妄りに之を强ひてはいかぬ、それよりも、我が子弟を愛育し敎養することを奬勵する方が大切である』といはれました。成程、一應尤もの樣ではあるが、是れはつまり孝道を狹く解釋した見方であらうと思ふ。孝道を廣く解釋して見たならば、前にも述べた通り、孝行は道德の總府であるから、若し我が子の愛育敎養を怠たつたならば、果して孝行といはれませうか。

我子は親の孫である。孫を愛するの情は子を愛するの情よりも切なるものであるが、その孫を愛育し敎

肉であつて、髪の毛一本たりとも慈愛の賜ならざるは無い。誠に以て昊天罔極の慈恩と申さねばなりませぬ。

眞俗一如

佛敎に於ては常に眞俗二諦の法門といふことを談じます。眞諦とは諸法の本體、即ち常住不變の眞理を開示するの法門です。俗諦とは因緣假和合の相、即ち萬有諸法の現象を說明開示するの法門です。般若心經には『色即是空、空即是色』とあるが、その色といふが俗諦で、空といふが眞諦であります。これを世間と出世間との二門に配すれば、凡夫地を解脫して佛果位に向上するの法門が眞諦で、世間に和光して、人道を明かにし人事を盡すの法門が俗諦である。換言すれば、人としての道を盡すのが俗諦で佛としての德に進むのが眞諦である。一は倫理的行持で、一は解脫的進修である。

然れども、佛敎の根本義から見れば、眞俗元來一如であるに依て、孝道を全くするのがやがて菩提道莊嚴の大行となるのであります。故に蓮宗寶鑑には『念佛は即ち諸法の要、孝養は百行の先たり、孝心即ち是れ佛心、孝行佛行に非ずといふこと無し、道を諸佛に同じきことを得んと欲せば先づ須らく二親に孝養すべし』と說てある。孝心孝行は俗諦門の要道にして佛心佛行は眞諦門の至德であるから、是れ正しく眞俗の一如を開示したものであります。

海外へ迄も行かねばならぬから、遠く遊ばずなぞとは言うて居られぬ、故に古と今日とは孝道の觀念が相違して居る』といふたが、それは飛んだ誤解です。『遠く遊ばず』とは父母の心を安んずるといふ方の意味に重きを置かねばならぬ。或る善良なる目的の爲めに遠方に向ふ時の如きは、その目的が寧ろ父母の心を歡ばしむる一大孝行である。故に『遊ぶには必ず方あり』というてあるではありませんか。十には究竟憐愍の恩、『世の中に思ひはあれど子を戀る思ひにまさる思ひなきかな』と紀貫之が詠ぜし如く、親の其の子に對するの情は絕對の慈悲にして始終一貫して居る。『世を救ふ三世の佛の心にも似たるは親の心なりけり』である。此の外、心地觀經には別に十種の大恩を說きたまひ、孝子經には十二の大恩を御示し下されてある。

時に古今あり、地に東西ありと雖も、父母の眞情は自づから其の歸を一にして居る。されば山上憶良は『銀も黃金も玉も何かせん勝れる寶子に如めやも』と詠じ、市原の王は子の少なきを悲しみて『言とはぬ木すら妹兄ありといふを只一子にあるがくるしき』と詠ぜられた。赤染衞門は其の子大江擧周が重病に罹りし時、住吉明神に身を以て子に代らんと祈り『かはらんと祈る命は惜からで扨も別れん事ぞ悲しき』といへる歌を幣帛に書して獻じたとある。待賢門院の安藝は其の子の死を傷みて『人しれず物思ふ時もありしかどこの事ばかり悲しきは無し』というた。

吾々は是の如き父母の慈愛の懷に抱かれて生長したものであるから、吾々の全身はソックリ父母の血

を得るが如く、其の子聲を出せば之を樂しむこと音樂を聞くにも勝れり。而して、父母の一生は、多くは其の子の爲めに辛勞せざるは無い。故に、父母恩重經には十種の恩德を示されてあります。

其の十恩とは、一には懷胎守護の恩、是は懷姙中に胎兒を愛護するの恩である。歌にも『たゞならぬ身となりしより明けくれに思ひをかけし親の大恩』とある。二には臨產受苦の恩、卽ち『月みちて生れんとせしその時はこの世あの世に身をすてし恩』とある出產の時の苦しみである。三には生子忘憂の恩、無事出產すれば喜悅の餘り『生れ子の片輪ならぬときゝしよりうきを忘れて守りこそすれ』とある如く、今迄の憂をも忘れて了うことである。四には嚥苦吐甘の恩、卽ち己れは苦きを嚥みて甘き物は之を子に與ふ、所謂『ふくむ乳に先づ知られけり子を思ふ親の心の甘き惠みは』である。五には廻乾就濕の恩、『みどり子の寢屋のゐばりに身は濕れて乾ける方に寢させたる恩』である。六には乳哺養育の恩『たらちねのほそちにかけて繫かずば玉の緒ごとは音も絶なまし』で、吾々の今日あるは皆な乳哺養育の大恩です。七には洗灌不淨の恩『生るより三歲三月の穢れをも厭はで親のすゝぎましけん』である。八には爲造惡業の恩、我子の爲めに罪を造る事も數ばある『子を思ふ闇こそやがて後の世の冥きに迷ふしるべなりけれ』愛着の絆は三界火宅の苦しみを招く。

九には、遠行憶念の恩『峰つゞき花より花に遊びけり待つらん親の心知らずに』といふ樣な事も少く無い。『父母在す時は遠く遊ばず』と聖人が敎へられたのも是れが爲めである。或人は此の語を引て『今日は

ます。

罔極の慈恩

抑も、親の其の子を愛育することは天然の至情より出づるものなれば、子の其の親を敬慕することも亦自然の性情であります。然るに、生長するに隨ひて父母に對するの愛情が薄らぎ、遂には不孝の罪を犯す者あるに至る。是れ卽ち其の天性に背くもの罪これより大なるは無い。

父母の御恩の廣大なることは今更言ふ迄も無いが、父母恩重經には『哀々たる父母、我を生みて劬勞す。之の恩に報ぜんと欲するに昊天報じ難し』と仰せられ、孝子經には『親の子を生む之を懷くこと十月、身は重き病をなす、臨生るゝの日は母危く父怖れ、其の情言ひ難し、旣に生るゝの後は燥けるを推して濕りたるに臥す、精誠の至り血化して乳となる、摩で拭ひ、澡ぎ浴ひ、衣食せしめて敎詔ゆ、師友に禮貺ひし君長に奉貢す、子の顏和ぎ悅べば親も亦欣豫び、子設し慘慼めば親の心焦げ枯る、門を出づれば愛念し、入りては則ち之を存みる、心に惕々を懷きて其の不善を懼る、親の恩は此の如し何を以てか之に報いん』というてあります。

實にや母親の如きは、懷胎十月の間は行住坐臥共に安んぜず、月滿ちて生れんとする時、若し難産なれば、その苦しみは百千の刄を以て肢節を解くが如し。幸に無事出産すれば、其の喜びは貧女の如意寶珠

たる御洪範に配すれば、恭儉己れを持し、學を修め、業を習ひ、智能を啓發し、德器を成就しの五德は自己に對するの務めである。父母に孝に、兄弟に友に、夫婦相和しの三德は家族に對するの務め、朋友相信じ、博愛衆に及ぼしの二德は他人に對するの務め、公益を廣め、世務を開きの二德は社會に對するの務め、國憲を重じ、國法に遵ひ、一旦緩急あれば義勇公に奉ずるの三德は國家に對するの務めとなる。尤も、是は一應割り當てゝ見た迄で、其の實は互に相圓融して離るべからざる關係を有して居る事は勿論であります。

此等の本務を盡すのが、正しく身を立て道を行ふ所以にして、又、實に孝道の全きものとすれば、孝道は百行の本といふのみでなく、實は百行の總府であります。故に曾子は『身は父母の遺體なり、父母の遺體を行なふ敢て敬せざらんや、居處莊ならざるは孝に非ず、君に事へて忠ならざるは孝に非ず、官に涖んで敬しまざるは孝に非ず、戰陣に勇なきは孝に非ず、五の者遂らざれば災其の親に及ぶ、敢て敬せざらんや』というてある。

永覺禪師は更に一步を進めて『甚しいかな孝の義たることの大なる、身も孝に非ざれば修らず、人も孝に非ざれば治らず、天地も孝に非ざれば修らず、鬼神も孝に非ざれば通ぜず、則ち無上至眞等正覺も孝に非ざれば亦致すに由なし、是に知る世間・出世間の福田實に孝に踰ゆる者あること無し』といはれてある。して見れば、孝道は獨り人道の淵源たるのみならず、亦實に成佛得道の根本ともなるべきものであり

無いのである。故に父母恩重經には『人の生れて世に在る父母を親と爲す、父に非ざれば生れず、母に非されば育はれず』と仰せられてある。されば、父母を大切にするのは、取りも直さず自身を大切にする所以である。從つて、自身を尊重せんと欲せば、先づ以て父母を尊重し奉らねばならぬ。若し父母に奉ずる所以の道を知らざる者あらば、是れ卽ち自己を保任する所以の道をも失墜した者といはねばならぬ。『父子親あり、君臣義あり、夫婦別あり、長幼序あり、朋友信あり』是を五敎というて、所有倫理道德は皆な之より出でざるは無い。然れども、自己がありてこそ、始めて五敎の道も存するので有るとすれば、父母に對する孝行の務めこそ、實に是れ人道の淵源であります。儒敎の如きも、孝道を奬勵すること中々周到なもので、孝經には『孝は德の本なり』とも『人の行ひ孝より大なるは莫し』ともいひ、孝道の綱領を示しては『身體髮膚之を父母に禀く敢て毀傷せざるは孝の始めなり、身を立て道を行ひ名を後世に揚げて父母を顯はすは孝の終りなり』と敎へられてある。然れば、退いては自身の身體を愛護して健全なる發達と活動とを遂げしめ、進んでは自己の職分を盡し、國家及び社會に對するの効績を擧げて芳名を後代に傳へ、父母祖先の譽れをも世に顯はすに至らば、これぞ世間的孝行の最も全きものといふべきである。

凡そ吾々人類がその理想とする至善の域に進趣する行爲を道德と稱するのであるが、その道德的本務を分類すれば、所謂自己に對するの本務と、家族に對するの本務と、他人に對するの本務と、社會に對するの本務と、國家に對するの本務との五類に區分することが出來る。是を敎育の御勅語に於て御示し下され

父母の恩

人道の淵源

今日は、四恩の中の父母の恩德に就て御話しを致します。

父母の御恩の深大なることは、事新らしく説明する迄も無い程です。從つて、父母に對して能く孝行の本務を盡すは、實に人道の大原であるといふことも、古今不變の通則であります。故に、明治天皇の敎育勅語にも、初めに敎育の大本を御示し下されて、『我が臣民、克く忠に克く孝に、億兆心を一にして世々厥の美を濟せるは、此れ我が國體の精華にして、敎育の淵源亦實に此に存す』と仰せられ、次に國民道德の標準を御示し下されては『爾臣民、父母に孝に、兄弟に友に、夫婦相和し、朋友相信じ』云々と仰せられて、孝道を以て德目の第一位に置かせられてあります。

抑も吾々御互の一身は、誰れの恩力に依りて享けたものぞといふに、言ふ迄も無く父母の賜である。詩經にも『父ありて我を生み、母ありて我を鞠ふ』とあるが如く、若し父母なかりせば、我といふものも

濟度を蒙むりて、感應道交、神變不可思議の御利益にも預かるものであります。

是の如き赤心を以て自身の煩惱業障を慚ぢ畏るればこそ、至心懺悔の門も開かれ、佛祖の戒德をも圓成して、此の身此の儘、佛果位に證入すべき大因緣をも決定することが出來るのである。又、是の如き赤心を以て一切衆生に對する時は、自然に廣大なる慈悲心を開發し、生々世々を盡して利益衆生の大願を起し、且つ君國に對し奉り、若くは父母三寶に對しても、心の奥底より報恩謝德の道念を發起し、知らず知らず日々の行持を愼しみ護りて道を履み德を修め、茶を喫み飯を喫する間にも國民道德の法に則とり、御勅語の御旨意を遵守し、忠信・孝悌・恭儉・博愛の光輝を發揚する樣になるものである。かくありてこそ、始て眞俗不二の佛意にも合ひ、忠孝一致の大道にも愜ひ、今世安穩、後生善處の素懷をも遂ぐることが出來るのであります。」

た此の不孝の人を見ることを欲せず』というて、身を佛前に向けて經を誦み復た再び顧みなんだとある。流石の山陽も背に汗して出で、大に感歎して、「和尚は眞に一宗の學頭なり』といはれた。すると大含は、「先生は素より陽明學を講じて知行合一を説かるゝではないか、今既に法海和尚の説を可とせられなば、何ぞ進んで之を實行せられざるや』と申しければ、山陽は『法海公は夏日の如くにして最も畏るべし、上人は冬日の如くにして甚だ愛すべし』というて、翌日旅裝を齊へて藝州に歸へられ、母親を省りみられたと申すことです。

山陽先生は、文化十三年二月十九日に其の父春水先生の死んだ時、京都に在て莊子を講じて居られ、急ぎて國に歸つたが、遂に死目には遇はなんだ。それが爲めに、生涯、莊子を講ぜられなんだといふ程の孝子である。それでも猶ほ法海上人の叱責を受けられ、一層奮勵して遂に忠孝兩全の人となられました。

大君に對し奉るの眞情を以て父母に事ふる時は、自づから善美なる孝行となり、父母に事ふるの眞心を以て人に接する時は、自から悌となり、和となり、信義となり、博愛となる。一華開て世界馨しく、一葉落ちて天下の秋を知るの理で、一片の忠心は能く凡百の行爲をして善ならしめ美ならしむるものです。孝謙天皇の御勅には『夫れ臣たる者は淨く直く、赤心を以て君を輔佐け奉り、對ひては無禮の色なく、退て謗言なく、姦み僞り、諂ひ曲る心なくして仕奉れ』と仰せ下されてある。淨く直くして姦み僞り等なき心あらば、神に向つては眞の敬神となり、佛に向うても眞の信仰となり、自づと神の守りを享け佛の

是れ常住法身の上には生死の音沙汰なきことを喝破したのである。時に公は覺えず三拜し『若し來つて和尚に見えずんば、安んぞ向上の關捩子を超出することを得んや、今より世々針芥を失なはず』というて感謝せられたとある。今でも廣巖寺には『靈光院殿大圓義龍大居士』と稱して楠公を祀つて居る。

公の室は滋子といひ、正行公を養育したる賢夫人であるが、公、戰死の後は剃髪して尼と爲り、王山蒲圃大禪尼と稱し、甘南備の鄕に菴を結び、專ら佛行を修め、正平十九年に目出度く大往生を遂げられた。今は湊川神社の隣りに甘南備神社として、永久に祭祀せらるゝことゝなつて居ります。

其の外、大石良雄の良雪長老に參じて禪學を修めたるが如き、西鄕隆盛の無三和尚の鉗鎚を受けたるが如き、忠臣義士にして奉佛に篤かりし美蹟は、實に枚擧するに遑なき程である。

賴山陽は勤王無比の碩儒であるが、曾て京都に在りて日本外史を著はし、楠氏の記を書きたる時、其の知友なる眞宗の僧侶雲華院大含の紹介にて、大谷派の學頭にして名聲一時に重かりし易行院法海に見え、著はす所の楠氏の記を示した。時に法海は山陽に向つて『近頃、藝州の儒者賴久太郎といへる者が、京都に在ること既に三年、常に酒を飮むで文を作り、曾て國元なる母親を省みず、而して忠臣楠氏の傳を著はして居ると聞けり、御身は果して其の人にてありしよな、凡そ忠臣は必ず孝子の門に出づると承はる、然るに、三年の間も待ちこがれて居る母親を省みざるが如き不孝者の手に依りて、千古の忠臣楠公の傳が書かれるといふは洵に情け無きことぢや、楠公にして知るあらば、必ず屑ぎよしとはせられまじ、老衲も亦

されば、古へより、國民の模範となり佛教信者の標準ともなる程の人は、皆な報恩的行持の實踐者であります。和氣清麿や、平重盛や、楠公父子や、藤原藤房、菊池武時、新田義貞等の大忠臣は、何れも佛教の大信者であることは皆人の知る所である。

弘安四年、元の忽必烈が、舟師十餘萬人を遣して太宰府を侵せし時、之を鏖にして國威を宣揚したる絕代の豪傑北條時宗公は、鎌倉圓覺寺祖元禪師の提撕を受けたる大信者である。時宗が軍裝して禪師に見え、『大事到來せり』と云ひし時、禪師は『如何が向前せん』との一拶を與へた。すると、公は身を躍らして大喝した。禪師は證明して、『眞の獅子兒、能く獅子吼す、驀直に進前して回顧する勿れ』といはれたとある。

楠公が嘗て妙心寺開山無相國師に參じて『至善を以て兵と爲せ』との教へを受けてから、一層佛教を信仰せられた事は有名な話であるが、建武三年、湊川に於て戰死するの前日、兵庫の廣嚴寺（今の楠寺）に到り、明極楚俊禪師に參見して『生死交謝の時如何』と問はれた。是れ生死の一大事を決擇せんが爲めの進問である。時に禪師は、『兩頭俱に截斷して一劍天に倚て寒し』と答へられた。即ち生死即涅槃の妙理を垂訓せられたものである。公は更に『落處作麼生』と問はれたるに、禪師は威を震つて大喝せられた。

分の氣儘勝手に振舞ふことである。自分勝手に振舞ふといふは、御勅語の御聖旨をも奉戴せず、佛祖の御指導にも順がひ奉らざることであります。若しも是の如くであつたならば、縱ひ君國の爲めには身を棄て命を抛つても顧みないといふ程の犧牲的精神を有したからとても、未だ以て忠良の人とは許されぬ。故に、內は以て自己の智德を圓滿にし、外は以て國家の安寧康福を圖りてこそ、眞實報恩の者といふべきである。

して見れば、此の報恩の二字こそ人間道德の大本にして、又、其の大目的・大理想であります。故に大智度論には『恩を知るは大悲の本、善業を開くの初門、人に愛敬せられ、名譽遠く聞え、死して天に生ずべし、恩を知らざる者は畜生よりも甚だし』と御示し下されてある。元來、我が佛敎の大目的は成佛得道に在るは勿論であるが、成佛の本は自己の智德を開發するに在り、智德開發の本は一心を淸淨ならしむるに在る。彼の七佛通誡の偈に『諸の惡は作す莫れ、衆の善は奉行せよ、自ら其の意を淨くす、是れ諸佛の敎なり』とあるは、實に是れ佛敎の大目的であります。

而して、佛德を具へ佛道を成じて後は、仕事は何であるかといふに、唯大慈悲心を運用して法界の衆生を濟度するの外は無いのである。その大慈悲心の淵源となるべきものは、矢張、報恩謝德である。蒲生君平の歌にも『君の爲め國の爲めとし思はずば雪や螢を何かあつめん』とあるが如く、學問の目的も亦報恩に外ならぬのである。

教育の御勅語は國民道德の原則を御示し下されたのであるが、其の標準としては『爾臣民、父母に孝に、兄弟に友に、夫婦相和し、朋友相信じ、恭儉己れを持し、博愛衆に及ぼし、學を修め業を習ひ、以て智能を啓發し、德器を成就し、進みて公益を廣め世務を啓き、常に國憲を重じ國法に隨ひ』とある。これまでが平時の心得である。次に『一旦緩急あれば義勇公に報じ、以て天壤無窮の皇運を扶翼すべし』とあるのが、非常の場合に於ける覺悟を御示し下されたのであります。此の御勅語を奉戴して能く聖旨に副ひ奉るに非されば、忠良の臣民とは申されぬ譯である。

然れば父母に不孝なる者は忠に非ず、兄弟に友ならざる者は忠に非ず、夫婦の和合を缺き、朋友の信義を失なうも皆亦た忠に非ず、己れを持すること恭儉ならず、他を待つに博愛の德を以てせざるが如きも亦復不忠の人たるを免れぬ。さすれば、克く己れの德を全うし、己れの道を成じてこそ、始めて忠良の臣民たることを得るのである。換言すれば、自利と利他と兼ね備はり、自覺と覺他と双び全うしてこそ、始めて我大君の御洪恩に報い奉ることを得るのであります。

修證義の第二十九節には、報恩謝德の正道を御示し下されて『其の報謝は餘外の法は中るべからず、唯當さに日々の行持其の報謝の正道なるべし、謂ゆるの道理は日々の生命を等閑にせず、私しに費やさゞらんと行持するなり』とあるは、實に千古不磨の御教訓である。日々の生命を等閑にするとは、人生の目的を忘れ、臣民の義務を怠たり、此の一生を醉生夢死の間に葬むつて了ふことです。私に費やすとは、自

の御聖諭に基きて孝悌・和信の道を守り、恭儉・博愛の徳を保ち、能く國憲・國法を遵守して、個人としても、國家の一員としても、毫も慚づる所の無い完全無缺の徳の備はつたのが、正しく陛下に對して忠良の臣民といはれるのである。一旦緩急ありて義勇公に奉ずる場合は、親を棄てゝも報効の大義を盡さねばならぬが、此等は非常の事變に處する特種の行持です。平時に於ける忠の道は、唯だ眞の人となり、獨立の人となりて、人の人たる本分を全うし、國民の國民たる義務を盡してこそ、始めて陛下の良民とも稱せらるゝのである。

佛教に於ける道徳の原則は、報恩的行持に在ることはいふ迄も無い。吾々の一身は、決して自分一個の力に依て生れたものでも無ければ成長したものでも無い。皆な是れ國家の大恩、父母の恩徳等に賴りて、一身の生長獨立を得たのである。されば其の恩に報い其の徳に酬ゆるは、全く天然自然の道理に出たるものにして、決して人爲を以て彼此と按排取捨すべきものではありませぬ。此の身が旣に父母の大恩に依りて生れ、御國の恩力に依りて生存を全うすることを得たるものとすれば、此の身に具へたる本性の智徳を發揮し、萬物の靈長たる妙用を顯現するこそ、最も大切なる報恩の第一義である。さすれば、國王・父母に奉事し、衆生に親順し、三寶を供養し奉るばかりが報恩ではない。自身を尊重し、自身の性德性能を開發し、增進し、以て自己存在の意義を明らかにし、自己存在の功徳を圓滿するのも亦た、最も緊要なる報恩の行持といはねばなりませぬ。

『只今、天子より某に對し、清盛暴逆を恣にすれば速に討伐すべしとの詔あり、父子は私の關係、君臣は公の義なるを以て、君の命を奉ぜずんばあるべからず、されど、尚ほ天子に詫びて御赦を願ふべければ、心配したまふな」と申し送りければ、さすがの清盛も大に恐れて、事遂に止むに至つたとある。重盛公の如きは、忠を以て道德の大本とせられのたであるが、之れが爲めに、父清盛をして逆罪を敢てするに至らさらしめたるは、父に背くが如くにして、實は大孝を全うせられたのであります。

又、彼の元祿の壯擧を企てたる四十七士の、其の父母及び妻子に對しては、淚を揮つて冷酷なる態度を示し、遂に身を以て忠義の犧牲に供したるが如きは、矢張、不孝に似たる大孝を竭したものといふべきである。

兩親は家の父母にして、天皇陛下は御國の父母でゐらせられる。天皇陛下は御國の神樣にして兩親は家の神樣である。故に、本居宣長の歌にも大君の事を詠じ奉りては『物はみな變りゆけどもあきつ神わが大君の御代はとこしへ』といひ、兩親の事を詠じては『父母はわが家の神わが神と心つくしていつけ人の子』というて居る。

道德の大本

且つ夫れ忠義の道といへばとて、多くの場合は孝行の道と少しも衝突するものでは無い。即ち教育勅語

といふも、皆な君父に對する眞情を本とするのであるから、道理の上からいへば、支那と雖も忠孝一致の敎へが無いではない。

彼の支那の孔安國が『能く親に孝なれば則ち必ず能く君に忠なり、故に忠臣を求むる必ず孝子の門に於てす』といひ、朱子が『臣の君に事ふるや猶ほ子の父に事ふるが如し、東西南北唯だ命これ從ふ、此れ古今不易の理なり』といひ、又、紳喩は『家を保つの心を以て國を保てば卽ち盡忠』というてある。併し、是等は子にして臣を兼ねたる者に對するの敎訓たるに過ぎぬ。然るに我國は、上は王公侯伯より下は匹夫匹婦・幼童孩兒に至るまで、盡く國民にして、且つ盡く國臣である。海內を擧げて臣ならざるの民なく、民ならざるの臣も無いのであります。

彼の平重盛公などは、忠孝兩至の模範的人物の一人です。其の父清盛が、後鳥羽法皇、平家を滅さんとの御企てありと聞て大に怒り、一族郎黨を呼び集め、將に宮殿に押寄せて法皇を幽閉し奉らんとせし時、公は直ちに清盛の邸に赴き、父の前に進みてサメ〴〵と淚を流し、『我等平家の一門、皆な高位高官に拜せられ身に不相應ぬ榮華を享くるは、盡く天恩に出でざるは無い。然るに、今之を打忘れて、無道の振舞に及ばんとせらるゝとは、抑も何たる御所行なるや』とて、死を決して諫爭せられ、父の猶ほ盡忠の誠心なきを見て、『忠ならんと欲すれば孝ならず、孝ならんと欲すれば忠ならず、重盛の進退茲に谷まる』とて痛く嘆かれ、それより急ぎて我邸に立歸り、俄かに軍兵を集めて、頓て人を以て清盛に告げしめて

是の如き神聖なる國家の下に生れ、至仁至慈なる陛下の御聖德に浴し奉ることを得たる吾々臣民は、己れを忘れ身を棄てゝも、飽までも陛下無極の天恩に報い奉らねばなりませぬ。而して、御國に對する忠節がやがて父母に對する孝行となり、忠孝相合して人間百般の道德を産み出すのであります。

彼の支那などに於ては、臣と民とを全然區別して、君に事ふるを臣といひ、君の治を受くるを民といふ。故に、百官群吏を臣と稱して責むるに忠節を以てし、農工商賈を民と稱し租賦を擔ふを以て務とす。然るに我國は臣民一體である。民族の本は一種にして、前にも述べたる通り、或は皇子・皇孫の御裔に出で、或は祖宗の功業を輔けたる群臣より出でゝ居る。中には秦漢の裔もあり、三韓の族もあり、殊に日清戰役以後、今日に至りては臺灣人も、支那人も、朝鮮人もあるけれど、我が國體は此等の民族をも包容し同化して、所謂『率土の濱王臣に非ざるは無し』といふに至らしむべき餘地は十分にあるのである。

されば我國は、臣民一體・忠孝不二にして、家の源は國、國の分體は即ち家である。孝の最も大なるものが忠にして、忠の分身が即ち孝である。故に、國家の爲めには父母にも離れ、家をも忘れねばならぬ場合もあれど、至誠國家に報効する時は、父母を離れ家を忘るゝのが却て孝道を完うすることゝなりて、獨り現在の父母のみならず、祖先の靈までが之に對して大なる滿足を得るのである。尤も、忠といひ孝

のである。

又、同年十二月十一日の紀元節には、桂總理大臣を御前に召され、無告の窮民にして、病に罹るも治療を受くるに由なく、醫藥を用ゆるに道なき者の爲めに、施藥救療の道を弘めよとて御手元金一百五十萬圓を賜はりしことは、國民一般の齊しく感泣して措かざる所であります。

明治四十三年八月、東洋禍亂の淵源たる朝鮮國が我帝國の版圖に歸し、千古の一大懸案も和氣靄然たる間に解決せられ、東洋平和の基礎の美事に確保せられたるが如きも、全く明治天皇の御仁德の致す所にして、所謂『水を掬すれば月手に在り、花を弄すれば香衣に滿つ』とでも申し上げ奉るべきであります。

また、大正天皇に於せられても、その御仁德と御勇武とは、皇太子殿下の御位にあらせらるゝ頃より、拜承する所でありますが、特に今回の御大喪に當りては、全國の刑囚に對し、特赦減刑を行はせられ、更に內帑金百萬圓を各地方に頒與せられて孤獨を惠ませ給ひました。實に明治・大正のわれ〳〵は、世界の國民中で最も幸福なる臣民と深く歡ばねばなりませぬ。

華嚴經に『國に君主あれば一切安きを獲、是故に人王は一生衆生安樂の本なり、在家・出家・精進・道檢・皆な正國に住持することを得たり、若し王の力なくんば功行成らず法も滅して餘りなけん、況や能く利濟せんや』とあるも、特に明治天皇並に大正天皇の御聖德を稱揚し奉りたる佛語ではあるまいかと思はるゝ程であります。

見えぬ神にむかひて耻ぢざるは人の心の誠なりけり』とも御詠じ遊ばされ、國民教育の普及を思召しては『天の下にぎほふ世こそ樂しけれ山の奥まで道の開けて』とも、『むらぎもの心の種の教へ草生ひしげらせよ大和島根に』とも仰せられ、之を導くに聖賢の教へを以てしたまふの大御心よりは『開けゆく時にいよいよ仰がれぬひじりの道の高き教へは』とも、『言の葉のまことの道を月花のもてあそびとは思はざらなん』とも仰せられ、人心指導の忽せならざることを思召ては『われとわが心折り〱顧りみよ知らず〱も迷ふことあり』とも、『易くしてなし得がたきは世の中の人の人たる行ひにして』とも仰せ下されてある。

日露戰爭の時の如きは、戰爭の最中にも深く平和を御望み遊ばさるゝの餘り、『四方の海みな同胞と思ふ世になど仇波のたち騷ぐらん』と歎かせられ、且つ『夢さめてまづこそ思へいくさ人むかひし方のたよりいかにと』と御詠じ遊ばされては、出征兵士の事を御心にかけさせられ、『子等はみな軍の庭にいではてゝ翁や獨り山田守るらん』と御詠じ遊ばされては、兵士の父母等の事を不便に思召され、戰後國民の心得を御諭し下されては『弓矢もて神のおさめし國人はことなき世にも心ゆるすな』と仰せられてあります。實に有り難いとも忝けないとも、申し上ぐべき言の葉も無き程の、廣大なる御恩德ではありませんか。

殊に、最近の事實に就て見ても、明治四十四年一月には、彼の幸德傳次郎以下二十六名の大逆事件の裁判が決定せられ、二名を除くの外は盡く死刑の宣告を受けたるに、明治天皇は特旨を以て、其の內の十二名に對し罪一等を減ずるの恩典を賜はりしことは、聖恩の深大なる大逆無道の者をもあはれませたまふた

誓文を御發表遊ばされて、國家の大方針を定めさせられた。即ち

一　廣く會議を興し万機公論に決すべし

一　上下心を一にして盛に經綸を行ふべし

一　官武一途庶民に至る迄各々其の志を遂げ人心をして倦まざらしめん事を要す

一　舊來の陋習を破り天地の公道に基くべし

一　智識を世界に求め大に皇基を振起すべし

といふのである。此の御誓文が開國進取の基を啓き、國運發展の礎を爲したのであります。爾來、束の間とても、民心を諧らげ國力を養なひ、敎化を張り國威を擴むる事に就て、大御心を注がせられざるは無い。

殊に、明治二十三年十月三十日には、敎育勅語を發せられて敎育の大方針と道德の標準とを御示し下され、尋で帝國議會を開設して憲政の美果を收め、日淸・日露の兩役を經るに及んで、國光は旭日昇天の勢を以て世界の隅々に迄も輝き渉り、忽ち世界一等國の班に列し、東洋唯一の文明國となつたのである。而して、其の御仁德の極りなき事は、九重の雲間より漏れ承はる御製を拜し奉りても、骨髓に徹して最と有り難く感ずるのであります。

御信念は殊に奥深くましまして『とこしへに民やすかれと祈るなる我世を守れ伊勢の大神』とも『目に

で、國民全體の父母の心を總合して生成撫育したまふのが陛下の御心であります。夫れ故、我國の道德は忠孝の二道を以て其の根本となし、國民道德の全部は皆な忠孝二道の源泉より流れ出る支流である。されば、敎育御勅語には明らかに『我臣民克く忠に克く孝に、億兆心を一にして世々厥の美を濟せるは、此れ我が國體の精華にして、敎育の淵源亦實に此に存す』と御示し下されてあります。

國體の精華とは、精は純一無雜にして混交物の無いこと、卽ち、我國體は極めて單純にして、極めて神聖であつて、千古に通じて一點の疑義も無ければ動搖も無いことであり、又、華は光彩外に顯はるの謂で、ハナヤカなること、卽ち忠孝の大道を指すのである。朝日に匂ふ山櫻花にも勝る美風美俗は、皆な其の源を忠孝より發せざるは無い。故に、國民敎育の大本も亦、全く此の美風美俗を長養發達せしむるの外はありませぬ。是れ實に國運發展の基礎であります。

至尊の仁德

殊に我が至尊大正天皇陛下の御仁德に至りては、全く皇祖皇宗の御仁德を御一身に鍾めさせられ、明治天皇の御聖慮を御繼紹遊ばされ、普く國民一般に對して遺憾なく之を御發揮遊ばさせらるゝのであります。

抑も、明治天皇は御卽位の始に於て早くも王政復古の偉業を成ぜられ、明治元年三月十四日に五箇條の御

守文有德の君を宗と爲すと申せば、天照大神より神武天皇までが皇祖で、綏靖天皇より後を皇宗と申し上ぐるのであります。

是の如く我國は、國家の全體を擧げて皇祖の御經營遊ばされたものであるから、吾々臣民は、皇祖皇宗の御仁德の中に生れ、御仁德の中に育ち、而して御仁德の中に生存して居るのである。一般諸國は、人民ありて而して後に君主があるのであるが、我國のみは、君主があつて而して後に人民があつたのである。

日本紀等を拜見するに、保食神の體より牛馬五穀及び繭が生れた時、天熊人が之を取て天照大神に奉つた。其の時、大神は大く喜びたまひて『是の物は顯見き蒼生の食ひて活くべきものなり』と宣ひ・粟・稗・麥・豆を陸田種子とし、稻を水田種子とし、天の邑君を定めて其の稻種を天狹田長田に植ゑさせられ、又、口の裡に繭を含みて糸を抽きたまひしより養蠶の道が始まつたとある。箇樣に、國も家も、食物も衣服も、皆皇祖皇宗の賜ならざるは無いに依りて、他の國々の、人ありて家あり、家ありて國あり、國ありて君ありといふに反して、我國は、君ありて國あり、國ありて家あり、家ありて人ありといふ狀態である。

故に、國に盡す所以の道を以て家に盡すのが孝道で、家に盡す所以の道を以て國に盡すのが忠義である。父母は是れ家の君、天皇陛下は是れ國の父母である。陛下の御心の一部分を實行するのが父母の心

吾臣民の祖先をも御產み下されたとある。つまり國家の基礎を御開き遊ばされたのである。その兩柱の御子として高天原の主とならせられたのが天祖天照大神である。大神より彥波瀲武鸕鷀草葺不合尊までの五代を地神五代と稱して、何れも帝業の基を開きたまへし君であります。

天照大神は曾て天安河原に八百萬神を集めて我國の主となりたまふべき神を御子なる忍穗耳命と定めさせられ、そのまた御子なる彥火瓊々杵尊を、日向の高千穗の峯に天降らせて此の國を統治したまはれた。其の時、大神は瓊々杵尊に勅して『豐葦原の千五百秋の瑞穗の國は、吾が子孫王たるべき地なり、寶祚の隆えんこと天地と與に窮りなし』と仰せられ、乃ち八尺瓊曲玉と八咫鏡と叢雲劒とを賜うて天位の御璽となし、特に神鏡を取上げて『此の鏡は專ら我が御璽として、我が御前を拜くが如く拜ぎまつれ』と仰せられしは、正しく孝敬の道を敎へたまふたのである。此の時、皇孫に從ひ參らせしは天兒屋命・太玉命・天鈿女命・石凝姥命・玉祖命で、是を五件緒神と申すのである。此の五柱の神が中臣とか忌部とかいふ古の役人の家柄の祖先である。

それより鸕鷀草葺不合尊まで三代の間は高千穗の宮に在して德を積み仁を重ねたまふ。不合尊の御子神武天皇に至りて御東征の擧あり、遂に群賊を平らげて、大和國橿原の宮に御卽位遊ばされました。されば神武天皇は人皇の太祖にあらせられるから『始馭天下之天皇』とも『始治國皇祖』とも稱へ奉るのであります。我が天皇陛下に於かせられては常に皇祖皇宗と仰せられてある。創業有功の君を祖と爲し、

國王の恩

國體の精華

今日は、佛教道德の大本たる所の四種の大恩の一たる國王の恩、卽ち天皇陛下の御洪恩の御事を叙べ奉りて、吾々臣民の務むべる報謝の正道を說明して見樣と思ひます。尤も、心地觀經の中には『世間の恩に四種あり、一には父母の恩、二には衆生の恩、三には國王の恩、四には三寶の恩、是の如きの四恩は一切衆生平等に荷負す』とありて、父母の恩を第一位に擧げて置かれたるも、是を我が國民道德の上に持て來ますれば、天皇陛下の御恩、卽ち御國の御恩を以て第一位に置くべきは當然であるから、拙衲は故らに四恩の順序を改めて御話しするのであります。

抑も我國は國家の成立に於て、既に世界列國に比類なき唯一無二の歷史を有して居る。而して此の歷史が天地と共に窮り無き國體の基礎をなして居るのであります。神代の大昔なる天神七代の御事は杳として詳かに知るべからず、七代目に當らせらるゝ伊弉諾命・伊弉美命の兩柱の御神に至りて、皇祖及び吾

所より生ずる悪現象であります。

明教大師は孝論の中に、佛の道たる人の親を視ること猶ほ己れの親のごとし、物の生を衞ること猶ほ己れの生のごとし、故に其の善を爲すときは昆蟲悉く懷き、孝を爲すときは鬼神皆勸む、其の孝を資て世に處すれば世と與に和平にして忿爭なし其の善を資て世に出づれば世と與に大慈にして其の世を勸む」と示してある。實に孝順は治國・平天下の樞機であります。夫れ故、古歌にも『世の中に親の孝ある人はたゞ何につけてもたのもしきかな』とあり、白隱禪師の粉引歌にも『親の御恩は海より深い、恩を知らねば犬猫ぢや、孝行する程子孫も繁昌、おやは浮世の福田じや』とある。

されば世間と出世間とを問はず、能々釋尊が『孝順は至道の法なり』と仰せられた聖順を心に鏤め、生々世々を盡して孝順の道を行ふ樣にして貰ひたい。是ぞ眞實、國家文明の基礎を確立すべき最大根源でございます。

孝順は人倫の大本

要するに、孝順は人倫の大本、佛法の肝要であります。親に孝行なる者は必ず君に忠順なるものである、忠孝雙び全ければ萬善自から現はれ、萬德自から備るものである。敎育の御勅語は國民道德の標準であるから、學校の生徒計りで無く、國民一般が朝夕に捧讀して之を服膺せねばならぬことゝ思ふが、其の御勅語の要領は、忠義・孝順・友愛・和順・信義・恭儉・博愛・學習の八の德目となる。而して此の八種の綱領もつまり、孝順の德の發展されたものであります。申すも恐れ多き事ながら、

我が天皇陛下に於かせられては、孝道を貴とみたまふこと殊に深くまし〳〵、既に御製の中にも『たらちねのみをやの御世は白雲のよそぢのよそになりにけるかな』と、先帝の御事を御慕ひ遊ばされ、又『たらちねの親の敎へる守る子は學びの道も迷はざるらん』とて、孝順は學問の基なることを御示し下されてあります。

然るに、人智の進むにつれ、世の開くるに從て、一面には種々の缺陷を生じ易く、子として親を侮どり、妻として夫を輕んじ、兄弟牆に鬩ぎ、朋信友を失ふ等の事が段々殖えて來る樣に思はるゝ。自殺を企つる者、人を殺す者、盜む者、詐欺する者が日々夜々に社會に現はれて、虛妄は巧になる、驕奢は長ずる、信仰は薄くなる、人情は弱くなる、[illegible]

「親を思ふ心にまさる親心けふの音信なにときくらん」の一首を詠まれた。千古の偉人も親の爲めには血涙を洒ぐ、是れ人情の微妙なる所です。

佛教の上に錄されたる因緣はまだ澤山ある。釋尊は御父淨飯大王の御崩御の時、躬身ら寶冠を擔はれました其の時、四天王が天降つて代つて之を擔はれしゆゑ、釋尊は手爐を執て香を燒きつゝ御先導遊ばされたことが、增一阿含經に出て居る。

唐の道紀と云へる高僧は、常に自ら母を背に負うて孝養を盡され、他人が之れに代らんとすれば『吾が母なり君が母に非ず、其の形骸累は卽ち吾が事なり』と云うて辭られたとある。

大報恩經には、須闍太子が亂を避けて他國に遁るゝ時、食物が盡きた爲めに、潛に己れが肉を割いて父母を養うたと云ふ話がある。又、六祖大師は薪を採りて母を養はれた。名高い御話である。

我か高祖承陽大師は、三歲にして父公久我內大臣源道親卿に別れ、八歲にして母公の喪に遇はせられし時、香の烟を觀じて無常の理を悟り、兩親の菩提を弔はんとの御志が動機と爲て、出家得道遊ばされたのであります。永平寺の三代徹通義介禪師は、門前に養母堂を構へて母親を安樂に養はれた。其の他、三國傳燈の祖師、日本各宗の御開山は、御一方として孝順の志深く在さぬは無い。何れも皆孝順の龜鑑であらせられます。是の如く、古今東西共に孝行に關する有り難い因緣は澤山あつて、百萬分の一だも述ぶることは出來ませぬ。

る色なく、父が之を覺りて大に恚り、繼母を去らんとせし時、却て涙を流して母の家に在らんことを願うたと云ふ美談もあります。

孝行實話（その四）

西洋は比較的孝行談が少ないとか申すことである。彼の國の風習として、親子の關係か東洋とは趣を異にして居る、東洋は一家の中心を親子の間に置くが、彼の國は夫婦の間に置て居る。それでも親子の情は別物であるから、往々孝順の美談が書物にも載て居る樣ぢや。

佛蘭西のルウヰズと云ふ女は、二十歳の頃、父が病の爲めに盲人となつた。彼は父の心を慰むるを畢生の務となして、暫くも其の傍を離れず、見る物聞く物を手に取る樣に父に聞かせ、父をして更に退屈の念を起さしめざるを、唯一の樂として居つた。友達が遊びに誘ひ來りても、父の滿足する樣子を見るを、如何なる遊戯よりも樂なりとて、いつも辭つたと云ふことです。

又、紐育の貧民の娘某は、自分の前齒を十五圓で齒醫者に賣りて父を養うたと申す話もあり。

水戸黄門光圀公は、自身の誕生日には、母親出産の苦勞を思うて、必ず衣服を改めて正坐して精進をせられたさうである。

維新創業の先達吉田松陰先生は、[illegible]

なりとす、父母全うして之を生む子則ち全うして之を歸す、孝と謂つべし、其體を虧かず、其身を辱しめず、全と謂つべし、君子頃歩の間も敢て孝を忘れず』と云うて數月の間、憂ふる色があつたとある。

漢の黃香は、親に事ふるに下婢を置かずして、皆自ら之を勤め、夏は親の枕や床を扇いで凉からしめ、冬は身を以て席を溫めたとある。

武王は、文王の病し時、衣冠を脫がずして養ひ、文王一度飯を食すれば己れ亦一度食し、文王が再飯すれば己れ亦再飯せられた。

漢の文帝も其の母の病まれた時。目瞬がず、衣冠を解かず、湯藥は皆自ら甞めて而して後進められたとある。

三國時代に一方の大將たりし顧悌は、他鄕に在りて、父の手紙に接すれば、衣服を着替へ容を正して推戴きて後に讀み、父病ありと聞けば聲を擧げて泣たとある。

漢の緹縈と云ふ女は、其の父淳于公が大倉の令と爲り、寃罪の爲めに長安の獄に繫がれける時、自ら長安に上り書を呈して寃を訴へ、且つ身を以て父に代らんと請ひましたので、帝王其の孝に感じて、父を免されたとある。

又、彼の有名なる閔子騫は、繼母の爲めに虐待せられ、嚴寒の時も綿入を與へられざりしが、更に恨む

の罪を宥して贈位の御沙汰ありければ、妙沖は故郷に還りて父を葬むり、生涯追孝を營んだとあります。

又、上野國吾妻郡草津村の農、湯本彥三郎の養女たみと云へるは、二十二歲の時、養父に死別れ、淚の乾く間もあらざるに、夫は怪我の爲めに步行も叶はぬ不具と爲り、養母も亦病に罹りて盲人と爲り、かてゝ加へて類燒の難にさへ遇ひたるも、たゞみは晝夜の別なく單身家業を勵み、二人の病人と一人の女兒とを養ひ、四十八年の久しき、一日も怠ることなかりしかば、明治七年、內務省より賞典を賜はりました。

孝行實話（その三）

赤穗義士の內なる堀部彌兵衞金丸の娘幸女は、堀部安兵衞武庸を夫と定めたるも、未だ婚禮に及ばずして主家沒落の不幸に遭ひ、尋で父及び夫は復讎の志を果たし、俱に泉下の客となりければ、幸女は諸國の靈場を巡拜し、後に泉岳寺に墓畔の庵を結び、出家して妙海と稱し、先侯及び義士の冥福を祈りける。

又、主家の絕えたるを悲しみ、幕府に再興を願ふこと二十五回に及びましたが、遂に容られざりしかば、止むなく墓前に常燈明を獻じ、九十一歲まで常行回向して、操節を全うしたは、其の精神、其の孝貞、實に感ずべきの至りであります。

支那に於ても、孟宗が雪中に筍を掘り、王祥が氷に臥して魚を得たるを始として、孝順の事例は枚擧に遑あらぬ。

且つ慈善の志深く、能く窮民を救ひければ、人々其の徳に感ぜざるはなし、享保年間、國内大飢饉の際稲苗迄も一般に枯らしたに、獨り正輔の田地だけは不思議に其の害を被むらなんだ。されど正輔は一粒も其の稲を使用せず、盡く國中の種稲に施したさうである。後、領主の耳に入り、一町一反の田を賜はり永く租税等を免ぜられ、歿後には特に命じて『孝子正輔之墓』と云ふ碑を建てしめ、領主が碑の前を通行せらるゝ時は、輿を下りて禮を設けられたと云ふことである。是れ乃ち曾子の所謂『孝天に至るときは風雨時に順ひ、孝地に至るときは、萬物化盛し、孝人に至るときに衆福來り臻る』の理であらうと思ひます。

孝行實話（その二）

又、越後國新潟に五十嵐俊明と云ふ名高い畫師がありました。天性孝心深く、母親病氣の時などは、左の指を刺し、血を以て觀音經を寫すこと七部、爲めに母の病癒ゆとある。寶暦の凶歳には、傳來の書畫や器物を賣拂て救助に充てたと云ふ程の慈善家でありました。兩親の居間には、朝夕御拜をすること存命の時の如く、且つ勿體ないとて生涯其の居間には坐らなんだとあります。

又、仁明帝の時、橘逸勢が罪を得て伊豆の國に流されし時、其の女が父に別るに忍びず、官人の叱責をも厭はず、晝は隱れ夜は歩みて、父の跡を追ひ行きけるに、悲しや、父は遠江國板築驛にて病死したれば、彼の女は遂に尼と爲りて妙沖と號し、墓の側に庵を結び懇ろに菩提を弔ひけり、後、官より逸勢

ひ出せば、楽しいと思召さぬ。是れ御孝心の切なるものであります。」

孝行實話（その一）

又、平清盛と云へば、名を聞てさへゾッとする樣な亂暴な人間だが、其の子の重盛公は忠孝兩全の賢人であつたゆゑ、公の事蹟を見れば、覺えず襟を正しうせざるを得ぬ。公一人の孝順は恰も花の如く、能く平家一門の醜を藏す程の力があります。

又、扶桑孝子傳に依るに、肥前加津佐村安永安次と云ふ人は、父に代て村名主の役を勤めけるが、父母共七十の歳を踰えるや、別に一戸を設けて樂隱居をさせ、自分は汗水を流して働て居た。父は氣の毒に思ひ、吾老たりと雖も身力猶ほ強し、汝が耕作の手傳をせんと云ひたるも、堅く之を斷わりて老を養なはしめ、且つ一度も貧苦を親に告げたること無く、冬になると、夜中に一返宛は必ず御機嫌を伺ひ、夏は木の下蔭に暑を避けしめ、出入共に親に心配は懸けぬ樣に注意した。事、遂に領主に聞え白銀若干を賜つたと云ふことです。

又筑前國宗像郡武丸村の正輔は、父が年老て中氣となり起居も自由ならざりしかば、何處へ行くにも父を負運ひ、且つ父の好む物は何なりとも買ひ求めて情を慰めけり、殊に非常の勉强家であつたが、親の頭の上を踏むに忍びぬとて、屋根に上る丈はせなんだとある。親の歿後は、墓所に詣ること一日も怠らず

自から恩、禽獸に及び、愛、群類を攝すと云ふ大慈悲・大行願とも爲るのである。

此の邊の處は、篤く信じ深く觀ずる人で無ければ領解みかねるであらうが、此處迄孝順の德が進んで來ねば、圓滿なる佛心佛行とは申されぬ。是れ乃ち孝道の最も大なるものであります。

畏し神武天皇の御孝心

是より古今の因緣に就て最も有り難く感ぜらるゝ事例を少々演ぶることゝ致さう。

神武天皇が中國の賊を討ちたまひし時、朕は日の神の後胤なれば、日に向て戰ふは宜しからずと仰せられ、天日を背にして賊を平らげられ、御世の始に、先づ靈畤を設けて皇祖大神を祭りたまうたとある。爾來、代々の天皇は皆御祖先を祭りたまふを以て治世の第一と爲したまへり、今日も尚ほ古の如く、一月の元日に行はせらるゝ四方拜の御式を始として、御國の大祭祝日の大半は、御祖先の御祭祀である。是れ皆孝順の至道を行はせらるゝのである。

應神天皇の御妃兄媛は御孝心深く在しけるが、或日、天皇が難波大隅の宮に在して、高臺に登りて四方の景色を眺めさせられける時、御妃は西方を望んで落涙したまひける、天皇怪み問ひたまふに、予が父母は西の方に在るを以て、戀しさの餘りと御答へ申上られた。天皇其の孝情を愛でさせられ、直に父母の許に歸省の勅許を賜はりしと申すことである。金殿玉樓に侍して山水の風景を眺めながらも、父母の事を思

に向つて菩提を弔らひ、又、自分の生々世々を盡して報恩行を營むことであります。是は宗教的大信念がなければ出來ませぬ。

盂蘭盆經に據るに、釋尊の高弟目蓮尊者の母親は、一生邪見なりしを以て死後餓鬼道に生れた。尊者悲み歎くも之を救ふに由なし、釋尊の敎を被むりて、始て、七月十五日自恣の日に於て、母の爲めに盂蘭盆會を設けられた。盂蘭盆とは極重の苦を救ふの義である。母は遂に此の功德に依て餓鬼の苦患を解脫せられたとある。時に釋尊は諸の弟子に對して、汝等は向後每年七月十五日には、父母乃至七世の父母の爲めに盂蘭盆會を修し、以て父母の慈恩に報ぜよと仰せられました。是が盆の由來である。

此の外、佛敎に於て修行する七日〱の追善、忌日・命日の佛事等も、皆父母永遠の冥福に回向するのであります。更に進んでは、父母の父母、又、其の父母の父母と云ふ樣に、先祖代々に遡りて追孝を勵むが佛の敎である。加之、一段廣き意味を以てする時は、一切の衆生は皆我等と親族的關係を有するものと念じて、法界平等に利益せんことを期するのである。承陽大師の御歌に『六の道遠近迷ふ輩は我父ぞかし我母ぞかし』とあるが如く、三界六道の衆生は盡く我が同胞兄弟、我が父母骨肉と云はれる道理がある。曠劫多生の間、幾度か生れ幾度か死する間に於て、互に君臣となり、親子となり、夫婦となり、兄弟となり、朋友となりし因緣あればこそ、現世に於て目にも觸れ、耳にも觸るゝのです。されば、耳に聞ゆる小鳥の聲、目に見ゆる昆蟲の姿、何れか因緣なかるべき。斯かる觀念を以て孝順の道を行ふ時は、

にや親に先立て死するは、親への不孝、自分の不幸である。故に禮記には『父母在す時は敢て其の身を有せず敢て其の財を私せず』とある。有すとは自分の思ふ儘にすることです。又、『父母在すときは友に許すに死を以てせず』ともある。天命なれば是非もないが、自分の不注意、又は勝手の處置を以て命を縮むる樣な事は最も恐るべき罪惡と申すものである。

又、花山天皇樣は『思ふこと今はなきかな撫子の花咲ばかり成ぬと思へば』と詠ぜられてあるが、親は我子の成人と立身とを何よりも喜び樂むが故に、身を立て名を揚げて父母の德を顯はすは至極の孝であります。又、親の死後は暫くも親の事を忘れぬが子たる者の心得である。源道濟も『歸りては先づたらちねを見し物を今日は誰にか逢んとすらん』と歎き、藤原能淸も『たらちねのあらばあるべき齡ぞと思ふにつけて猶ぞ戀しき』と詠みて、歿き親を慕うて居るではありませんか。然るに、世には親の命日さへも忘れて居る者さへありと聞く、實に悲しき極みと申さねばなりませぬ。

未來永遠の孝

未來永遠の孝とは我が佛敎に於て敎ふる所の孝行である。卽ち親の現在を安樂ならしむることや、追善供養を營むことは言ふに及ばず、生き易り、死に易り、未來際を盡して孝順行を爲すことである。楠公兄弟が湊川戰死の砌、七度人間に生れて、以て國賊を鏖し國恩に報ぜんと誓はれた樣に、兩親の生々世々

345

りて以て父母を危くするは五の不孝なり』とある。之を要するに、現世の孝を全うせんには、親を大切にすると同時に自身を愼み護り、親の生前は言ふに及ばず其の死後迄も親の志に報いんことを努めねばなりませぬ。

先賢の孝道

貝原益軒の語にも『凡そ君子の學問は智・仁・勇の三德を本とし、父子・君臣・夫婦・長幼・朋友の五倫を道とすべし、就中、忠孝を重んずべし、君父の恩を忘るべからず』又『凡先祖父母に孝なるの道は、奉養祭禮に限らず、聖學を習ひ仁義の道を行ひ、其の家業を勤て其の名を揚げ父母先祖の名をあらはすを以て孝行の道とすべし』とある。神道家の大國隆正も『孝は人間一生の道、兩親存生の內は勿論のこと、たとひ我身年たけ兩親に後れたりとも、此の身は其の遺體なれば此の身心の持樣正しからざれば即ち、遺體を傷ふの道理なれば、父母の神靈もいかでか安心滿足あるべき、しかれば則不孝の道なり』と云うてあります。

且つ子たる者は外出をしても親に心配させぬ心懸が肝要である。大江千里が『秋の日は山の端近し暮れぬ間に母に見えなんあゆめわが駒』と詠みしは親の膝下に歸るを急ぐ孝子の至情です。小式部の內侍が母に先つて死ぬるを悲みて『いかにせん行くべき方もおもほへず親に先立つ道を知らねば』と詠んだが、實

弔法事などは、全く精神上の不孝者と申さねばなりませぬ。

現在一世の孝

次に現在一世の孝とは世間普通の孝行です、即ち親の生涯を安樂ならしめ、且つ古語に『大孝は身を終るまで父母を慕ふ』とある樣に自分の命のあらん限りに、親の歿後と雖も、能く其の志を繼いで、益々家名を揚げ、又、追善供養を營みて親の菩提を弔ふの類であります。孝經には『孝子の親に事ること、居るときは其の敬を致め、養ふときは其の樂みを致め、病めるときは其の憂を致め、喪には其の哀を致め、祭には其の嚴お致む、五者備はりて然して後能く親に事つる』と、云うてある。一世の孝を說き盡して殆ど餘蘊なき敎である。平居して事なき時は至心に親を大切にし、飮食・衣服等の養は親の快樂・安悅を旨とし、若し病ある時は憂ひ悲しみて、一刻も早く癒えしめんことを圖り、不幸にして歿なられなば中心より哀み歎き、忌日・命日の祭には齋戒して其の禮を嚴にす、是れ孝順の始終である。此の外、位に驕る事と、法を亂る事と、人と爭ふ事との三を誡めてあります。

又、孟子には五通りの不孝を擧げて『其の四支を惰りて父母の養を顧みざるは一の不孝なり、博奕し酒を飮むことを好んで父母の養を顧みざるは二の不孝なり、貨財を好み妻子に私して父母の養を顧みざるは三の不孝なり、耳目の欲を縱まゝにして以て父母の戮を爲すは四の不孝なり。勇を好み鬪ひ狠

しき顔をして、ブツ〳〵言うて居る人を見ることがある。實に見惡うて堪らんです。多少無理を言うたにもせよ、不平らしい顔もせず、忌な返事もせず、飽迄柔順なるべきは孝子のたしなみであります。

精神的の孝

次に精神上の孝と云ふは、精神的に心の底から親を大切にし、親を敬ひ尊んで、何事も誠を以て親に盡し、獨り親の身體に不自由なからしむるのみならず、更に親の精神にも滿足と歡喜とを與ふることであります。本居宣長が『父母は我が家の神我が神と心つくしていつけ人の子』と詠し如く、兩親こそは生た此の世の神樣である。故に『親なくばいかで、此の身の生れ出む親に背ける人は人かは』一口の言、朝夕の禮迄も皆な眞心より出づる樣にせねば眞の孝とは申されぬ。

親の有難いことは誰でも知ては居れど『病は小癒に加はり孝は妻子に衰ふ』とあるが如く、私情私欲の爲めには親に對する愛敬の心が薄らぎ易いものである。孔子が子游の孝を問ふに答へて『今の孝は是れ能く養ふを謂ふ、犬馬に至るまで皆な能く養ふあり、敬せずんば何を以て別たん』と示した通り、親を滿足に養うた計りでは本當の孝順にはならぬ。況てや親の病を看護するとか、親の死を葬ふとか、親の祭りをするとか云ふ場合は、一層精神的に出づる樣にせねばならぬ。親を邪魔にして別莊の方へ送り込み、自分は家で勝手な事をして居る樣な人は、何で孝順などゝ云はれませう。況て世間を飾る虛涙、義理一片の

が親に報ゆる所以の道であります。然れば容を自堕落に持たり、國家に不忠を働いたり、職務を等閑にしたり、信義を缺いたり、奉公の勤を怠つたりするは、皆此の身を汚し、親の顔に泥を塗る様なもので、不孝の責は決して免るることは出來ませぬ。

色難

又、孔子は門人子夏の孝を問ふに答へて『色難し』と教へられてある。常に機嫌の好い顔色をして、苟にも忌な顔を見せぬが子たる者の愼みだが、是は中々難きことぞと注意せられたのであります。故に禮記には『孝子の深愛ある者は必ず和氣あり、和氣ある者は必ず愉色ある、愉色ある者は必ず婉容あり』とありて、深く親を愛する者は、自然に柔和の氣風がある。從てイツも愉ばしげなる顔色と婉なる容儀とが具はるものであります。餘りに嚴らしく、窮屈らしくして、他人行儀に渉るは親の心を安んずる所以で無い。古歌に『限りなく嬉しきものは親と子の笑たる顔を見つるなりけり』とあるも我等の心得の一である。

又『父召す時は諾すること無く唯して起つ』と云ふ教もある。諾も唯も應答の詞であるが、諾よりも唯の方が恭を存して居る。親に呼ばれた時はハイと柔しく輕く答へて、直ぐ其の傍に行けよと云ふことです。是も身體の上の孝行であります。世には親から何にか言付られでもすると、碌々挨拶もせず、不平ら

らざるは孝に非ず、戦陣勇なきは孝に非ず、五者遂らざれば災其の親に及び、敢て敬せざらんや』と言うてある。

浅草の孝行酒屋

江戸時代に、浅草に孝行酒屋と云ふ綽號を取つた酒屋があつた。其の主人は捨子であつたが、成長の後勉强して立派な酒店を開く様になつたのである。或時、母親が非人の如き姿で手寄て來たのを、引取は引取つたものゝ、我を棄てた親だと云ふので、少しも親らしい取扱をせず、まるで下女同様に使うて居るので、實母虐待と云ふ評判が立つたです。それが町奉行の耳に迄入つたので、捨ても置かれず、奉行は彼を呼出して見ると、頗る正直なる人體で、親を虐待する様な悪人とも見えぬ。そこで一應訊問に及ぶと、彼の答へに、私は親から恩を受けては居らぬ。從つて孝行する義務はござらぬと云ふのであつた。そこで、奉行は、然らば誰の御蔭で今日の身代になりしぞと問はれますると、それは私の腕で仕上げたのでありますと答へました。其の時、奉行は、然らば其の腕は誰の御蔭で出來たるやと尋ねられしに、彼はハツタと行き詰り、暫時考へて見て、始て親の御恩と云ふことに心付き、幾回か御詫を申して我家に歸り、それからは孝行酒屋と言はれる様な孝行者になつたと云ふことである。

さすれば、我等御互に一層父母の遺體たる貴とき此の身を疎略にせず、益々此の身の美德を磨き顯はす

に省み、出れば必ず告し、反れば必ず面す、游ぶ所必ず常あり習ふ所必ず業あり』とあるが、冬は温かにして上げ、夏は涼しくして上げ、夜は安樂に臥ませ、朝は怠らず御機嫌を伺ひ外へ出るには必ず行く處を告げ、歸つたならば直ぐ面を見せる樣にし、游ぶ事も、稽古する事も、親に心配を懸けぬ注意が肝要です。萬一親が病氣の場合は、眞心を捧げて、成るべく自分で看護の勞を執るが宜い。不幸にして御歿れになつた場合は、哀悼の情を盡して送葬、追善を營なむべきである。

次には自分の身體を愼しみ護ることも重大なる孝順である。孝經の中に『身體髮膚之を父母に受く、敢て毀傷せざるは孝の始なり、身を立て道を行なひ、名を後世に揚げて以て父母を顯はすは、孝の終なり』とありて、此の身體は父母の遺體であるから此の身を大切にして毀ひ傷らぬ樣にするが孝行の始である。コヽを深草の元政上人は『惜しからぬ身ぞ惜まる〻足乳根の親の殘せる形見と思へば』と讀み、宗良親王は『我ながら我ぞなつかし亡人の別て殘せる形見と思へば』と讀まれてある。されば髮一本でも疎略にしては濟まぬ。衞生に注意して身體を强壯にし、自ら好んで危きに近らざる、皆な是れ報恩の行持である。曾子が病危篤に迫まりし時、門弟子を召して『予足を啓け予手を啓け』と命じ、親から戴いた此の身體を別段の怪我もせず、其の儘御還し申すことが出來ると云うて、安心せられしが如きは、無限の意味を存する話である。故に曾子は嘗て『身は父母の遺體なり、父母の遺禮を行ふこと敢て敬せざらんや。居處莊ならざるは孝に非ず、君に事へて忠ならざるは孝に非ず、官に莅んで敬まはざるは孝に非ず、朋友に信あ

ふものがあるが、それは決して眞に子供を愛し女房に親しむのでは無い。所謂一種の病的愛情であるから、其の愛情こそ却て御互の身を傷くる本となるに相違ない。

故に我等御互は束の間も親を忘るゝこと無く、ドコ〳〵迄も孝順の道を全うせんとの心懸を持たねば、人間に生れた甲斐が無いです。

孝順の實際方法

然らば孝順の仕方は何うかと云うに、是は其の人の身分と境遇とに依りて一樣には參るまいが、大體を云へば、有形の孝と無形の孝との二つに分かれる。卽ち目に見える孝行と目に見えぬ孝行とである。モット細かに申せば、身體の上の孝と精神上の孝との二、又、現在一世の孝と未來永遠の孝との二つとなります。身體の上の孝は重に目に見える方に係り、精神上の孝は重に目に見えぬ方に係る。次の一世の孝と永遠の孝とは何方にも有形・無形の二樣があらうと思ふ。

先づ身體の上の孝順を演ぶれば是にも二通りある。第一は親の身體を大切にすることです、曾子が『孝子の老を養ふや、其の心、樂ましめ其の志に違はず、其の耳目を樂ましめ其の寢處を安んじ、其の飮食を以て之を忠養す』と云ひし如く、自分の力の及ぶ限り、食物・衣服・居室・萬端を調へ、誠を盡して親を養ふ樣にせねばならぬ。曲禮には『凡そ人の子たるの禮は冬溫かにして夏凊しくし、昏べに安じて、晨

貴ときことを思ひ、親の有り難きことが解ると共に、我子の教養に心を注がねばならぬではありませんか。

是の如く、親の御恩は深大であるから、中々此の御恩は報い盡すと云ふことは出來ぬ。詩經にも『父我を生じ、母我を鞠す、哀々たる父母我を生じて苦勞す、深恩を報ぜんと欲すれば昊天極まり罔し』とありて、父母の御恩は天の廣大にして極まり罔きが如くであるから、増一阿含經には、父を以て左肩の上に着け、母を以て右肩の上に着けて千萬歲に至り、衣服飯食牀榻臥具病瘦醫藥し即ち肩上に於て屎尿を放たんも、猶ほ恩を報ずることを得ず』と仰せられてある。

鳩に三枝の禮あり

斯程の大恩を受けながら、親を親とも思はず親をして不自由・不安心に陷らしむる樣な事あらば、其の人は最早人間の分際ではない。烏にすら反哺の孝あり、鳩にすら三枝の禮ありと聞く。不幸なる人間は畜生よりも劣れる者と申さねばならぬ。孔子も『親を愛する者は敢て人を惡まず親を敬する者は敢て人を慢らず、愛敬親に事うるに盡して德敎百姓に加はる』と言はれた通り、親を大事にせぬ樣な者が他人を愛する筈が無い。親を馬鹿にする樣な者が他人を敬ふ氣支は無い。愛なく敬なければ人間の道は玆に亡びて仕舞ふ。尤も、世には親を疎末にするが子供は能く愛いがるとか、親には邪見だが女房には親切だなどと云

斯く迄に苦勞をしても、それを苦勞とも思はず、市原王が『言とはぬ木すらいもとせ有りとふを唯獨子に有るが苦し』と詠まれし如く、却て子の少なきを歎つのが親心ぢや。山上憶良は『白銀も黄金も玉もなにせむにまされる寶子にしかめやも』と詠じ、子を以て天下無比の寶と爲て居る。又、紀の貫之が『世の中に思ひあれども子を戀る思ひに増る思ひなき哉』と詠み、藤原兼輔が『人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道に惑ひぬる哉』と詠み、福住正兒が『子を思ふ親の心の内にこそ涙の落ちぬ日はなかりける』と詠みしが如きは、何れも人情の極致と云ふべきである。

元來、人間は情の動物とも謂つべきものであるが、情の中でも、親子の情愛程自然にして且つ神聖なるものはない。此の情愛は親となつて見なければ解らぬと云ふことである。諺に云ふ『子を持て知る親の恩』で、我子の爲めに心配もし苦勞もして見て、始て我親も亦たかくありしならんと想像し得られるのだ。故に藤原基長の歌には『たらちねの心の闇を知るものは子を思ふ時の涙なりけり』とある。新千載集には『人の子の親になりてぞ我が親の思ひはいとゞ思ひ知らるゝ』とあり風教百首の中にも『愛くしと子を思ふ毎に我もしか育くみまし〻親ぞ戀しき』とあり、小澤蘆庵も『子を思ふ道に惑ひて今ぞ知るちゝぶの山の深き惠を』と詠んで置かれた。されば人間たる者は、我子を愛しと思ふにつけても、益々親の御恩の

の命の如きは、助かるか死ぬるかと云ふ瀬戸際である。其の苦しい中でも、唯だ生れる子の事をのみ思ふ
て、殆ど其の身の苦惱をも打忘るゝが親心です。三には生子忘憂の恩。滿足に生れたと云ふ聲を聞けば、己れの憂さを忘れて、唯だ他愛もなく喜こぶのみである。四には哺乳養育の恩、嬰兒の食物は母親の乳である。母の精血を以て己れの手足を伸ばして貰ふのである。五には嚥苦吐甘の恩、親達が嬰兒に食物を食べさせる時は、先づ己れの口に嚥んで、苦い處は自分が吸うて、甘味の部分を其の子に與へて下さる。六には廻乾就濕の恩、抱寢をされ乍ら、始終、褥の上を汚すが嬰兒の常である。然るに親は少しも之を厭はず、却て自分は濕つた上に臥して、嬰兒を乾いた方に移して寢かして吳れる。七には洗濯不淨の恩、上流の方々は別段とするも、普通の親達は、毎日の樣に小兒の汚れた衣服から蒲團までを洗濯して、露程も厭ふ心が無い。八には爲造惡業の恩、我子の爲めには隨分惡い事をも致し、罪を造ることも少なくない。九には遠行憶念の恩。我子が大きくなつて遠方へでも出懸れば、寢ても寤ても我子の上を案じ煩うて、人知れぬ苦勞の淵に沈んで居る。十には究竟憐愍の恩。我子の爲めには生涯苦勞をして、死際迄も憐愍の情は絕えぬものである。冷泉院樣の御製に『年へぬる竹の齡を返しても子の代を永く成さむとぞ思ふ』、とあるを拜しても、親の慈愛の如何計り深きかは察せられます。以上十通りの恩は、重に母親の方に係る樣ではあるが、我子の爲めの艱難苦勞は、父親とても變りはない。

れ我が國體の精華にして教育の淵源亦實に此に存す』と仰せられ、忠孝の二道を以て教育の淵源、道德の基礎なるぞと御示し下されてある。而して、忠臣は孝子の門に出づと云ふが如く、孝行の人たらざれば忠良の臣たることを得ざるは自然の道理である。況や我國神ながらの道は忠孝は一體である。眞に孝なる人は必ず能く忠を盡す。眞に忠なる人は必ず能く孝を守る。此の二つの者は曾て相離るゝことが無いのです。

父母の十恩

親の御恩の廣大なることは、今更事新らしく申す迄も無いが、凡夫の淺ましさは、猶ほ十分に其の御恩を感ずる心が起り惡いものです。それ我等が母の胎内に托りてより今日に至る迄の、親々の艱難苦勞は中々に言辭の盡すべきにあらず、佛は父母恩重經に於て父母の十恩を示されてある。一には懷胎守護の恩、是は懷姙中、胎内の子を守護する恩です。昔より胎教とて胎内の子を教育する教がある。姙娠中の母親の精神・境遇及び身體の强弱迄が、自づと胎兒に影響するに依て、列女傳には、婦人が子を姙んでは、寢るにも側たず、坐るにも邊らず、立つにも蹕せず、邪き味は食はず、席が正しからねば坐らず、目には邪き色を視ず、耳には淫しき聲を聽かず、夜は優雅なる歌や正しき事を聞く、斯くする時は生るゝ子は自づから形容も端正にして才智も人に過ぐると說てある。二には臨產受苦の恩、彌々出產となれば、其の母親

梵網經の中に明らかに出て居る。而して、佛陀の生命とも謂ふべき御戒法も、其の根原に孝順の二字に歸するのであります。尤も、佛教に於て孝順と稱するは、單に父母に對する孝行許りではありません。君主に對する忠義も、目上の人に對する敬禮も、佛・法・僧の三寶に對する信心供養も、皆な此の中に籠つて居る。

恩を知りて恩に報ゆ

抑も佛教では、毎度御話しに及ぶ通り、四恩と云うて四通りの恩處を說き、此の恩に報ゆるを以て最大至要なる行としてある。四恩とは、心地觀經には一に父母の恩、二に國王の恩、三に衆生の恩、是は父母以外の所有家族及び社會を總括したる人類一切の恩を云ふのです。四に三寶の恩、是は宗教上の恩です。是を四恩と申します。又、正法念經には一に母の恩、二に父の恩、三に佛の恩、四に說法師の恩と說てある。釋氏要覽には一に國王の恩、二に父母の恩、三に師友の恩、四に檀越(保護者のこと)の恩と說てある。

何れにしても父母は恩處の中の大恩處である。此の御恩に報ゆるのが、取りも直さず人間の道であります。故に心地觀經には『恩を知り恩を報ずるは是れ聖道なり』とある。聖道とは佛の道と云ふことであります。殊に教育の御勅語には『我が臣民克く忠に克く孝に億兆心を一にして世々厥の美を濟せるは、此

孝順至道

人たるの道

孝順といふは、即ち親に對する孝行の道である。梵網古迹記には『孝は養育を謂ひ、順は恭敬を謂ふ』と註してある。つまり親を養育して不自由ならしめ、親を恭敬して不安心なからしむることである。古語にも『父母に事ふるもの、順より善きはなし』とある。此の孝順は實に是れ人間百行の基、萬善萬德の源とも謂つべき大切なる敎であります。故に孔子は『夫れ孝は天の經なり、地の誼なり』とも『夫れ孝は德の本なり敎のよつて生ずる所なり』ともいひ、曾子は『百行の光、孝に過ぎたるは莫し』といひ、太田元貞は『人たるの道の第一は、孝の一字に在り』と云うてある。

我が佛敎では、宋の明敎大師が『夫れ孝は三敎皆な之を尊ぶ、而して佛敎殊に尊ぶ』と云はれた通り、孝順の道を敎ふることが一層高尚にして且つ奥深い。されば、釋迦牟尼世尊は成道の最初に於て、諸の弟子に對し、第一に父母と師僧と三寶とに孝順せよと敎へられ『孝順は至道の法なり』と仰せられたことが

らとかいうて、自分の當然なすべき業をもなさぬ人の多い今日の世の中は、いかに徳義の行はれて居ぬかゞ思ひやられます。人の認めてくれたり譽めてくれたりするのをあてにせず、自ら進んで陰徳を施し道を行うてゆくならば、これ即ち含徳の修養になるのであります。

のままねかして置いて、あとで料理してくれるやう』と其の鮑を渡しました。然るに、晩になつても鮑が出ない、朝になつても鮑が出ない、晝になつても鮑が出ない。『八助鮑はどうしたか』と尋ねると『あれは寢かしてあります』といふから、臺所へ行つて見ると、庖丁の上に鮑をねかし其の上にふきんをかけてある。正直一遍の八助故、何かきゝ違へてかうしたことだらうと別に腹もたてずにそのまゝにすんだ。

どんな學者でも、智者でも、胸中一片の誠なければ人ならず、愚者と雖誠あれば聖賢の門下なり、愚直八助の如きも亦、介亭先生相應の僕といふ可きであらう。

東涯先生と天水桶

介亭先生の兄で東涯先生といふ方は、ある晩遲く歸宅する途中、便を催したので人の家の樋にした。で五六丁行き過ぎて考へたが、あの樋は天水桶であらう、あれへしては申譯がないといふので引きかへして、眞夜中にも拘らず、其の天水桶の家を叩き起し、實は伊藤東涯と申す者、只今、闇夜で天水桶に不重寶致して相すみませぬと鄭寧に詫びて、翌日になり天水桶を作り直して返したと申す話で、之も亦含徳の致す所であります。

陰德あれば陽報あり、人にかくれて便所掃除をしたり又は背を流したり、草もとつたりすることは、やがて其の人の德行を顯す基礎となるのであります。人が認めてくれぬからとか、骨折てもほめてくれぬか

だ寝て居ると思ふに、既に若先生介亭氏が玄關のすぐ側で一心に經書を讀んで居る。弟子共大に當惑して、入るに入れず歸るに歸られず、進退谷まつたが、その中の一人に頓智のよいものが在て、板塀の節穴から、『火事だ火事だ〳〵』とゞなつた。すると介亭先生、忽ち二階から物見へ上つて、四方を眺めて居る。そのひまに書生仲間はすぐ家へ入つた。介亭先生、暫時、物見で火元をさがして居つたが、一向煙もでぬので下りて來て、またもとの通りに本をよんで居る。遊び仲間の弟子共は、次ぎの夜も遊びに出かけ、翌朝歸つて見ると、若先生、例の如く、玄關脇に端然と坐して勉强せられて居るので、また火事の聲色で先生を物見へあげて、自分達は安全に歸つた。かくすることが殆ど月に三四回づゝくので、ある人が『先生が月に三四回づゝ物見へお上がりになるのは、火事をさがすのでござらうが、あれは遊び仲間の書生の策とは御存じないですか』と尋ねますと介亭先生は『それは私も知つて居る、併し父が師匠として叱かる役である、自分はその役でない。又、遊びに行きたいのは若い人にありがちであるし、火事といはれてもしほんとの火事であつたら困るから、火事だといはれゝば物見へ上がるので、時には運動になつてよい』と申された。此の話を聞いて、流石、聲色までつかつて先生をだまして遊びました書生も、其の行を改めたといふことであります。是れ介亭先生の含德の致す所であります。

かういふ性質の方であつたから、父仁齋先生の時代から僕であつた八助といふ老人を可愛がつて使つて居つた。介亭先生は鮑が大層好きであつたが、或時、知己から鮑を貰つたので八助に言ひつけて『少しこ

入浴が普通で、楳仙禪師の如きは、僅に月一回であつた。

禪師が湯に來ると、大迷惑なのは湯屋であつた。と申すのは、人より先きに入つて一番あとから出るので、隨分長い時間をつぶした。それは何うかといふに、自分の身體は勿論洗ふが、朋達の背を一人一人流さして貰つたのである。人に強ひられたのでなく、自ら進んで流して、而も、些しもそれを傲りとせられなかつた。禪師は天性聰敏怜悧といふでなく、物覺えなども人よりはかゞ〳〵しく進まぬので、どうかして一人前の僧侶になりたいといふ一心で、何事にも入念に、親切に致し、其れを人に示したり驕ぶるといふことは露程もなかつたのである。果せるかな、禪師含徳の修養は後年其の光彩を放ち、徳望道俗の推重鑽仰する所となり、往年の一寒僧は洞門の管長にまで昇られた、誠に尊い且つ趣味ある話であります。

翻て現今の世の狀態を見ますると、どうも含徳の修養が缺けて居る樣に思はれます、實に慨嘆の至りではありませぬか。

介亭先生の修養

徳川時代に京都で古學を唱へた大儒伊藤仁齋先生の子息に、介亭先生といふ至極、正直溫厚の方があつた。

仁齋先生の門下に二三の人々誘ひあうて夜遊びに出かけるものがあつた、朝早く塾に歸つて來ると、未

私が一年程隨行致したことがありますが、大本山總持寺の畔上楳仙禪師は誠に含徳家であつた。大へん苦學せられたので、學寮で勉强する頃、夜になると便所を綺麗に掃除して、知らん顔をして居られた。同寮の人達が、毎日掃除もせないが、順番の掃除日に行つて見ると、便所は誠によく掃除が居いて居る。誰も便所の臭い所を得意で掃除する人もなからうといふので、始終氣をつけて居つたが、未だ何人の業とも知れなんだ。

それはその筈で、楳仙師は夜三更、人の全く寢靜まつた頃、竊に床を離れて掃除にとりかゝるのであるから、他の人に容易に分からなかつたが、誰いふとなく、楳仙師の仕事であると知れて、全寮皆其の徳に感じたとある。

又、楳仙禪師が駒込吉祥寺の栴檀林に居られた頃にも逸話がある。此の吉祥寺の栴檀林には、私も明治十三年頃居つたのですが、隨分お粗末なもので、今日の學校とは到底比べものにはなりません。まして禪師の居られたのは維新前の事故、さぞかしひどかつたであらうと推察せられます。殊に苦學なされたので、三度の食事も思ふやうには頂けず、或時は燒芋位で過した事さへあつたといふ程であります。丁度、白山御殿に湯屋が在つて、こゝへ栴檀林の生徒は浴湯に參るのであつた。其の頃は大抵月に三四回位の

含徳の修養

含徳といふ語

老子の中に「含徳の厚き赤子に比す」と出て居ります。含徳の文字、文字は簡單であるが意味は深長である。

含徳とは、徳の奥深く潜んで表に現れぬ貌である。笑を含むといへば、別に呵々大笑するではないが、何となく、快き容貌、心中の愉快を微に漏らしたやうである。怒を含むといへば、大聲叱呼せぬなれど、何か心で憤つた事が掩ひきれぬ狀態を示して居ます。卽ち、含徳は人前をかざらず、表面を衒はぬ、虛飾にならぬ徳を云ふのである。

幼小の時、師匠からよく云はれたことであるが、少し上手に何かをすると、其れを手柄顏に話す、それがごく宜しくないといふのであるとて叱られた。詩や文を作つて、少しくよく出來たと思うて師匠の前へ出すと、手柄顏してならぬと、よく誡められたことを思ひ出すことである。

土を此の世に實現するのが永遠の願行でなければならぬ。即心是佛をして理論に了らしめず、唯心淨土をして空論たらしめぬ様にせねば、佛教の生命は活現せぬ。五帝三皇是れ何物ぞ、吾々は大に勇猛精進して、在々處々に、活佛に觸れ眞佛を拜し、行住坐臥、佛界に逍遙することを期するのが肝要である。

大梅法常禪師は馬祖に參じて『如何なるか是れ佛』と問ふた時、馬祖は『卽心卽佛』と答へられた。禪師は此の一語を聞て大悟し、それより一生涯、受用不盡であつた。洞山の守初禪師は、庫院に在りて胡麻を量りゐしに、僧ありて『如何なるか是れ佛』と問ふた、すると『麻三斤』胡麻三斤と答へられた。佛の法といふも決して外の物ではない。

故に、達磨大師の師たる般若多羅尊者が、東印度の國王の齋に赴かれた時、更に經文を讀誦せられず、只だ默々として坐つて居られた。そこで國王は『何故に看經をなされぬか』と問はれた時、尊者は『貧道入息衆緣に渉らず出息蘊界に居せず、常に如是經を轉ずること百千萬億卷』と答へられた。貧道は私しといふこと、衆緣とは浮世の事情、陰界とは五陰十八界というて、つまり自分の心と前境界との交渉關係である。要するに、私は出息入息して、日々の行持を打する上に、毫末も浮世の事情に束縛せられず、自他の關係を立して、憎愛の爲めに本心を昧却することがない。さすれば、十二時中、佛法ならざるはなく、大道ならざるはない。私は常に、是の如きの經を轉ずること、日に百千萬億卷であるとの御答である。かうなければ眞の佛法ではない。現世と未來との區別を執したり、地獄と極樂との隔てに迷ふたりする樣では駄目である。

人界は次第に進化して止まぬ。此の進化を利用して、益々文明的理想的に向上せしめんことに努むるのが佛子の本分にして、人類共通の希望である。卽ち現在の缺陷多き世の中を、改善し、發展せしめ、佛國

りて、無限の快樂を味ふを得べし。是れが憂ふること無きに至りたる大安心であります。

昔、唐の巨靈神贊禪師は、幼にして長安の大中寺に投じて出家した。後、道を訪ふこと三四年、歸り來つて其の師に侍し、孝養甚だ深し、熟々、其の師の脚跟未だ穩からざるを見て、氣の毒に思うて居た。一日、浴室に在りて、其の師の背を洗ひ居りしが、思はず知らず『好箇の佛殿、佛未だ聖ならず』嗚呼、結好な身體ぢやが、惜い哉本尊樣が御疎末ぢやと叫んだ。師は驚き顧みて『何と道ふぞ』何を言ふのだと申されたが、眼光ピカリッと輝つたと見える。師は直に『佛聖ならずと雖も猶ほ放光を解す』佛樣は御粗末ぢやが、マダ輝つて居るから賴もしいといふた。これは『今生の未だ過ぎざる間に急ぎて發願すべし』の意である。

吾々もさうである。よしや迷妄の窠窟に在りとも、佛性の光輝は一切時、一切處に顯はれて居るのである。故に、太祖常濟大師は『參學人として、生死を以て心頭にかくること莫れ、見聞を以て自ら隔つること莫れ、たとひ見聞となり聲色となるとも自の光明藏なり、眼根より光明を放ちて色相莊嚴をなし來り、耳根より光明を放ちて音聲の佛事を聞き得たり、手裡に光明を放ちて自を轉じ他を轉じ、脚下に光明を放ちて步を進め步を退くと仰せられた。獨り吾々のみならず、森羅萬象も盡く宇宙の大精神の活動、草木國土も亦佛性の妙用である。吾々が迷うて居るのは、恰も河の中に在りて渴を叫んで居る樣なものである。

ぞ尋ね入りぬる』とは惠心僧都の道詠です。心外和尚は『この頃は日に〳〵遠く尋ねける近き心の近き佛を』と詠ぜられた。淨土門の高僧行誠上人すら、『夜もすがら唱ふる三世の御佛のみ名は昔しの我が名ならずや』と歌はれたではないか。又、同上人は『おしなべてさとりの花の種ときけばうれしきものは心なりけり』と詠ぜられた。されば即心是佛は佛教全體の原則である。

眞實、即心是佛の道理を信得及したならば、世にこれ程の嬉しきことはあるまいと思ふ。我が心是れ佛ならば、我が身は釋尊・彌陀如來と同道同性である。無量の德相・無邊の智慧も皆な唯心に具足して、一微塵も缺損はない。然るに、何故に、今迄は三界六道の間に彷徨て居たであらう、是れ全く我痴・我見・我慢・我愛の致す所である。思うて玆に至れば、自然に大慚愧の心を發し、內、妄想を遠ざけ、外、惡業を脫し、大解脫・大慈悲の德は、勃然として身心內外の上に光輝を發するものである。我が宗に於ける懺悔滅罪・受戒入位・發願利生・行持報恩の四種の信條も、全く此の理に基ゐたものであるから、つまり佛性天眞の大法に則つたものであります。

さあ、是の如き大信念と修證の功德とが顯發さるれば、其の喜びは如何許りであらう。窮して黃金を得飢て食膳に向ふ。猶ほ且つ歡喜の情に堪へぬ。況や自己直に是れ無量壽佛なることを知り、自己直に是れ萬德圓滿の佛體なることを知るに於てその喜びは如何許であらう。人生一時の幻影何かあらん、浮世暫時の風雲何かあらむ、鹿を逐ふ者は山あるを忘れ、風流を樂む者行路の難を忘る、業識茫々たる此の世に在

ゝのであります。

即心是佛

第五段に『心に慮ふこと無く憂ふること無き』とあるは、無我的大信念の御示を見ることが出來る。慮ふことなしといふは、一切の妄念を離るゝことです。換言すれば、法性天眞の道に隨順することです。具體的にいへば、佛の御敎に隨うて、寸毫も我意・我見・愚痴・我が儘を加へざることであります。一休禪師が曾て住名明神に參詣して、住吉とは氣樂な名を付たものぢや、併し、こゝも亦無常の火は免れまじと思ひ、『來て見れば爰も火宅の宿ならめなに住吉と人のいふらむ』と詠じたとある。臥茶庵の老僧が之れに返歌して『來て見れば爰も火宅の宿なれど心收めてすめば住吉』といふたとある。この心の本當に收まつた處を『慮ふこと無し』と仰せられたのであります。

『憂ふること無し』とは、大信心のことである。一たび佛の敎を信じ、我れ亦本來の佛なりけりと、徹底、信じますれば、その時は、言ふに言はれぬ歡喜心に充されて、所有心配も苦勞も、忽ちに消え失せて了ふものです。眞實、佛を信じ、佛の大光明を認むる時は、天地四方、何處を見ても、佛の御姿ならざるはない。溪聲便ち是れ廣長舌、山色豈に清淨心に非ざらんや、今迄は、佛の道を遠方にのみ求めたりしが、即心是佛と承當する時は、此の身此の儘の佛樣である。『よもすがら佛の道を求むれば我が心に

世を全然離れて了うては、所謂聲聞緣覺の御仲間で、それでは決して慈悲も道德も現はれるものではない。終には全で枯木の樣になつて、死人も同然である。さればというて、欣うてもならぬ。欣ふとは執着のことです。執着は我見の本であるから、若し一點でも執着の念があらうものなら、或は一方に偏して公平を缺き、或は一事に拘泥して變通の妙を失なひ、どゝの詰りは、凡夫の妄想妄見と同じことになるものである。然らば、どうすれば此の二見を離るべきやといふに、道を求むる志が堅固でさへあれば、自づと中道を得るものです。

道を求むるの修行は、此の娑婆世界に在りてこそ出來るのである。複雜なる世の中に在りてこそ、三學六度の願行も營まれる。逆境に處し艱難を嘗めてこそ、眞に能く心志を磨き、精力を鍊ることが出來るのである。故に、菩薩は進んで此の娑婆に出でて、以て其の大行を成就するのである。又、道を求むる志が親切なれば、變化常なく遷流窮り無き假りの世の相には貪着せぬ。縱ひ愛すべき境に接するとも、更に道の大本を尋ぬるの志氣があるから、決してソコに腰を落着けぬ。喩へば水火に於けるが如く、水も火も一日も離るゝことが出來ぬ物である。さればとて、身を水に投じたり、手を火に觸れたりすることは出來ぬ樣なものです。洞山大師が『背觸倶に火なり大火聚の如し』と仰せられたのはこゝであります。執着すれば凡夫となり、遠離すれば二乘となる。執着すれば自覺の力を失なひ、遠離すれば覺他の德を失ふ。唯だ佛の大解脫能く執着を除き、佛の大慈悲能く遠離に沈まぬ。吾々の調心は全く此の間より得らる

然るに、吾々凡夫が生死の間に在りて、四苦八苦の苦惱に縛せらるゝのは、畢竟、宇宙の罪でもなければ天地の咎でもない。皆な自ら招ぐ所の罪障である。罪障一たび滅すれば隨所に活動して大用現前し、此の生死こそ快樂の源、幸福の基となるのである。此の理を明らむれば、決して生死に迷ふ氣支はない。從つて生死の假相に執着して束縛を受くる樣なこともない。これが眞正の解脱であります。

第三段に『一切衆生の爲めに哀れみ深くして上を敬ひ下を愛れみ』とあるのが慈悲行である。此の慈悲心も佛性本具の德であるから、一たび妄想を離るれば自然に上を敬うて四恩を報謝し、下を愛れみて衆生を濟度せずには居られぬ樣になるものです。慈悲といふは眞情の流露に名けたものである。人々悉く眞情あり、孝子は父母の樂みを以て樂しみとし、慈親は其の子の譽れを以て譽れとなす。忠臣貞婦の其の君夫に對するも亦是の如くで、眞情の流露したる時は自他の隔ては除れて了ふものである。此の眞情が益々開展擴張すれば、竟には佛の如く『一切の衆生は皆な是れ吾が子』といふ樣になるものであります。

第四段に『萬づを厭ふ心なく欣ふ心なく』といふは、調心の要術を示されたのであります。萬づといふのは一切の人事です。人の此の世に生るゝや、必ず父子の關係あり、君臣の關係あり、兄弟・夫婦・朋友等各種の關係がある。その關係に從つて、樣々な義務も生ずれば、樣々な事情も起つて來る。それが爲めに色々の煩惱も發すれば、苦痛も感ずるのである。此の間に立て、能く其の心を調ふるの法は、厭ふ心と欣ふ心とを離れて、能く中道を履むことが大切であります。凡ての人事を、嫌な物と思ひ詰めて、此の人

る〻や、人間僅か五十年、人生七十古來稀れなりで、思へば夢幻の浮世である。而して、其の死の來るや時と處とを撰ばず、若くして親に別れ、老て子に別れ、ト、の詰りは涙の雨に濡れねばならぬ。『花紅葉さそふ色香を惜むまに身の春秋もつひの夕風』と眞淵翁の詠ぜしも、『思ひいで〻若しも尋ぬる人あらばありとないひぞ定めなき世に』と行尊の歎かれしも、皆な是れ人生の一大事實ではありませぬか。悲しい哉、凡夫は此の大事實の中に在りながら、其の原因も解らず、其の結果も解らず、殆ど五里霧中に彷徨て居るのである。爲めに、人生の意義も、將來永遠の目的も、一切不明といふ有樣であるのです。此の不明からして、色々の不安も、苦惱も生じて來るが、能々生死を明らむれば、自づと安心も出來る譯であります。高祖大師は『唯生死卽ち涅槃と心得て生死として厭ふべきなく涅槃として欣ふべきでなし此の時始て生死を離る〻分あり』と仰せられた。これが明らめ方である。

元來、生死といふは、變化出沒の相に名けたものである。花開き葉落ち、雲去り雲來る、皆な是れ生死の相である。源水滾々として晝夜を捨てず、日月運動して須臾も停まることなし、盡く是れ生死の相を示して居る。花開くとも天地は爲めに一絲を添へず、葉落つるとも宇宙は爲めに一毫を損せぬ。不生不滅の間に於て生死の相を現はし、不增不減の間に於て開落の狀を呈す。是れ宇宙自然の活動である。三世は此の生死輪に駕して自覺々他の覺行を圓滿し、十方の菩薩は此の生死園に於て自利々他の願行を經營したまうて居るのである。

念堅固なれば、現身に於て、佛界に逍遙し彼岸に到達すべき道のあることを示されたのであります。その道といふのは『諸の惡を造らず』といふより下の御語がそれである。この御語は凡そ五段に分けて見ることが出來る。

先づ第一段が『諸の惡を造らず』といふのである。これは道德を嚴守することです。即ち身・口・意の三業に於て、諸の惡を造らぬことが道德の根底である。身にも心にも、斷じて惡いことを爲てはならぬといふ觀念が深くなければ、眞の德性は開發しませぬ。吾々の佛性、本心の光輝が一點でも現はれて來れば、必ず惡いことをしてはならぬといふ觀念が發するものです。故に高祖大師は『この無上菩提を或從知識して聞き、或從經卷して聞く、はじめは諸惡莫作ときこゆるなり、諸惡莫作ときこえざるは佛正法にあらず魔說なるべし』と仰せられてある。吾々の本心の奥底より『惡いことをするなよ』といふ響きが聞える様にならねば、本心の光りは現れて參りませぬ。如何なる惡人でも、邪見人でも、心の奥より『惡いことをするなよ』といふ響きが雷の如くに聞ゆれば、此の時、佛性の德が自然と現はれるものです。高祖は『諸惡すでにつくられずなりゆくところに修行力忽ちに現成す』と仰せられて、どうしても惡い事は出來ぬといふ様になれば、善根功德は自づから三業の上に奉行せられて來るものです。

第二段が『生死に着する心なく』といふので、これは禪門の解脫觀である。上は天地の大なるより、下は一草一木の末に至る迄、生死を免るる物は一つもない。吾々御互の如きは、一度母胎を出て、此の世に生

若し、自己一分の欲望を滿足せんが爲めに、極樂往生を欣ぶ樣なことならば、そは一種の妄想より出たる淺薄なる信念であるから、よし極樂に到り、彌陀如來の御傍に到るとも、決して淨土の淨土たる妙樂を感得することは出來ぬ。

智度論には『釋迦牟尼佛、更に清淨の世界あり阿彌陀佛國の如し、其の彌陀佛も、亦嚴淨不嚴淨世界あること釋迦佛の如し』とある、能々此の意を味うて見るが宜い。釋尊にも穢土と淨土とがあり、彌陀如來にも淨土と穢土とがある。佛の住したまふ所に穢土はないはずであるが、衆生の根機如何に依りては、淨土中に在りて淨土を見ることが出來ぬのである。法華經や維摩經には、明らかに此等の道理を、事實的に證明せられてあります。故に、吾々は、先づ自己の一心を淨らかにして、自己方寸の中に於て、清淨無垢の佛國土を建設することが肝要である。

承陽大師の聖訓

高祖大師は成佛の要道を示して、『佛と成るに最と易き道あり、諸の惡を造らず生死に着する心なく、一切衆生の爲めに哀れみ深くして、上を敬まひ下を愛れみ、萬を厭ふ心なく欣ふ心なく、心に慮ふことなく憂ふることなき、是を佛と名く、復た外に尋ぬること莫れ』と仰せられてある。これは正法眼藏、生死の卷の御親訓である。最と易き道ありとは、勉めず勵はずして成佛が出來るといふ意ではない。苟も信

されぱとて、前に言ふた通り、指方立相の教を疑ふのではない。西方に極樂淨土あり、東方に瑠璃光世界のあることは、佛教に明示する所であるから、吾々は飽く迄も之を信ずるが宜いけれども、西洋の文明が進んで居るからとて、直ちに西洋に歸化するといふが如きは、決して眞人の志とは言はれませぬ。西洋の文明が進んで居るならば、その文明の美點を移して、自分の國を莊嚴して、最高の文明國に進める樣に努力するのが大丈夫の志であります。

佛教の淨土觀も亦是の如くにて、彌陀如來や藥師如來の御淨土が、全く吾々の理想的國土であると知りなば、その御淨土に生るべき原因を究めて、善行、淨業を修むるのみならず、更に進んで、吾々は最も因緣深き此の娑婆世界をして、極樂世界や瑠璃光世界の如き淨土たらしめんことを期せねばならぬ。是れが佛性常住の大慈悲心より發すべき自然の願行です。

然るに、唯だ自己の一分の樂果を得ることを目的として、君を忘れ、親を忘れ、妻子を忘れ、衆生を忘れて、獨り此の世を捨てゝ極樂に往生せんと期するは、決して眞の佛弟子たる者の心行とは申されぬ。佛眼を以て法界を觀見すれば、草木國土も皆な一々に佛功德を現はして居るのである。『春は花夏ほとゝぎす秋は月冬雪さえてすゞしかりけり』、陋巷に在りても猶ほ無限の樂しみを得、火宅の中に居りながらも能く蓮華臺の樂しみを占むるに堪へたり、此の信念と智眼とを具へてこそ、佛の淨土に遊戲することも出來るのである。

樂と大幸福とを得るのが眞の淨土である。故に淨土に生ぜんと欲せば、先づ自己の心意を清らかにして、一點の不善なからんことを要す。維摩經には『淨土を得んと欲せば當に其の心を淨むべし、其の心淨きに隨て則ち佛土淨し』とある。是れ實に千古不磨の原則です。心を淨むるといふは、諸惡を遠離して衆善を奉行することである、彼の七佛通誡の偈には『諸惡莫作、衆善奉行、自淨其意、是諸佛敎』とあるが、自ら其の意を淨らかにするのは、惡を止め善を行ふの結果です。佛敎八萬四千の法門は、要するに皆な淨心の術である。文殊大士の偈にも『一念淨心是菩提、勝レ造ニ恒河七寶塔一、寶塔盡碎化爲レ塵、一念淨心成ニ正覺一』とありて、成佛の要道は淨心、卽ち『自淨其意』の外はない。坐禪三昧に入りて妄想の窠窟を打破するものも、佛戒を嚴持して身口意の三業の惡を制するも、佛心に歸命して自我を沒却するのも、盡く淨心の法であります。何れより入るとするも、專精にして放逸ならざることを要するの點に至ては同一である。

併し、佛の淨土なるものを、死後にのみ求むるといふことは、決して完全なる理想とは思はない。なぜなれば、淨土の根本は向ふにあるのではなく、全く自心に在るからである。彼の華嚴經に、『若し人三世一切の佛を了知せんと欲せば、應に法界の性は一切唯心造なりと觀ずべし』とあるは、佛敎眞理の根底であります。從つて、佛の淨土も亦た唯心の所造であるから、同經に『衆生心淨きが故に清淨刹を見ることを得る』といふてある。

と言ふたことが載せてある。
諦忍律師の『空華隨筆』には、此等の事例を引證して、『法界本とより融ず、故に西方の淨土も斯を去ること遠からず、若し信願徹到すれば則ち朗々として常に目前に在り』といひ、又『玆に知りぬ佛力の加祐に依り及び自信の願力に憑れば娑婆を動ぜずして而も淨土を見ん』と論ぜられた。是れは當前の說明で、佛心・佛德は是非かうなければならぬものであります。唯心の淨土、己身の彌陀といふも、皆な此の信念の所發であつて、唯心・己身といへばとて指方立相の敎へに反對せるものと思うてはならぬ。

唯心の淨土

元來、淨土といふは何んな處であるかといふに、唯だ奇麗な處に居つて、働かずに、樂をして、寢て居て暮す處だといふ樣に考へては大なる邪見である。法華論には『煩惱なき衆生の住處と名けて淨土を爲す』とありて、佛敎に染・淨といふは惡と善との異名である。濁惡不善の世界を穢土と稱し、純善無垢の國土を淨國土と稱す、無量壽經等に說きたまへし淨土の光景は、皆な功德莊嚴の相を示されたものであります。

されば、淨土に生るゝ者は、常に利他の念に富み、同情の德に豐かなる菩薩を以て友とし、常に佛陀の光明に照らされ、眞理の指導に順ひ、見聞盡く正智を開發し、觸處自から勝德を增進し、そこに大快

一體である。法身とは佛の心、報身とは佛の身、應身とは佛の作用である。三身卽一の釋尊を拜し奉るべきである。

然るに、若し諸佛の間に優劣ありと見、佛の身と心とを峻別して、强て佛を見んと欲せば、決して圓滿無礙の佛德を觀見することは出來ぬ。そは有限の心を以て、有限の佛を求むるからである。金剛經に釋尊は須菩提尊者に對して『身相を以て如來と見るべきや否や』と尋ねられしに、尊者は『否、身相を以て如來を見ることを得べからず、何を以ての故に如來所說の身相は卽ち身相に非ず』と答へられた時に、釋尊は『凡そ所有の相は皆な是れ虛妄なり、若し諸相は非相なりと見ば卽ち如來を見ん』と仰せられてあるが、實に甚深の法門であります。非相というても、無暗と一切の相貌を滅絕することではない、丈六の釋尊に對しても、直ちに遍法界の釋尊を拜し奉り、西方の彌陀如來に對しても、直ちに光明遍照十方世界の彌陀如來を拜し奉るのが非相の見佛である。

釋尊が無量壽經を說かれし時、威神力を以て、阿難及び一會の大衆をして、座を起たずして西方極樂を覩見せしめられしに、彼此相見ること掌中を見るが如しとある。又、方等陀羅尼經を說かれし時、華聚菩薩は、極樂の淨土を以て掌中に接して、普く一會の大衆に覩せしめられたとある。迦才の淨土論には、僧衍法師は終りに臨み、弟子に告げて、『彌陀及び諸の聖衆虛空に遍滿す、此より已西純ら是れ淨土なり』と言ふたとある。佛祖統記には、張亢學士が臨終に家人に告げて、『西方淨土、只だ堂屋の上に在り』

想を以て大聖の勝能を判斷するもので、實は淺ましきことといはねばならぬ。我れは眞宗なるを以て阿彌陀如來以外の佛は他人も同前と思ふたり。我れは日蓮宗なるを以て阿彌陀如來には關係がないと思ふたり、甚しきに至ては、自宗に於て奉安する佛の外は、之を見ること恰も怨敵の如くなる者もあるさうである。これらは實に言語同斷の心得違ひと申すべきであります。

法苑珠林には『西に釋迦と云ひ、此に能仁と云ふが如き、豈に一佛の能仁に非ざる有らんや、西に阿彌陀と云ひ、此に無量壽と云ふが如き、豈に一佛の長壽に非ざる有らんや、東方の善德佛、乃至、下方の廣衆德佛の如き、豈に一佛の善德に非ざる廣德に非ざる有らんや、只だ題名の同異あるべし、其の功能に據るときは力用齊等なり、但だ心に佛の名號を思ひ、目に金容を覩、敬心に殷禮すれば福を得ること無量なり』と論じてある。

淨土眞宗の御文章にも『諸佛菩薩と申ことは、それは彌陀如來の分身なれば十方諸佛のためには本師本佛なるが故に、阿彌陀一佛に歸し奉れば即ち諸佛菩薩に歸するといはれるのであるが故に、阿彌陀一佛のうちに諸佛菩薩は皆な盡くこもれるなり』とある。是も畢竟諸佛一心の見地より出たる信念である。我が宗に於て釋尊を本尊とするも『釋迦牟尼佛は法界の教主なり』との信念と見地に據るものであるから、十方三世の諸佛は釋迦一佛の中に攝せざるはないのである。佛に三身ありと說くも、その三身は即ち

智徳は前に叙べた根本智・差別智である。斷徳は斷惑の勇氣で、煩惱を斷ずるも、惡魔を降伏するのも、誓願を遂行するものも、皆斷徳の致す所である。恩徳は衆生濟度の慈悲力である。人間が人間として、智を磨き徳を修むるのも、皆其の三徳の中の一部分である。故に、吾々が此の最勝の大聖たる佛に歸依し奉るのは、自づから、佛を以て吾人最高の大理想とすることと、佛の願力にすがりて其の御濟度を仰くこととの二の目的を存して居るのであります。

釋尊と諸佛

三世の諸佛は、各其の願力に依りて淨土を構へたまふと雖も、佛心の功徳に至つては、同體一如でなければならぬ。故に、三寶歸依の御文には、彌陀とも釋迦とも呼ばずして、唯だ『南無歸依佛』と唱ふる。此の歸依佛の中には、三世十方の諸佛が、皆包含されて餘す所は無い。承陽大師が『所謂諸佛とは迦釋牟尼佛なり』と仰せられたのは、決して釋尊以外の佛の存在を否定せられたのではありませぬ。釋尊は實に三世十方の諸佛の大功徳を實現せられたる代表的典型であります。されば眞實釋尊を拜し奉るのは、取りも直さず三世十方の諸佛を拜し奉るのである。大智度論に『一佛の勝能は一切佛の勝能に等し、一切佛の勝能は一佛の勝能に等し』とあるは、正しく諸佛同體の理を詮示せられたのである。古歌に「釋迦阿彌陀地藏藥師の名はかはれど同じ心の佛なりけり」とあるのはこれぞ。

即ち大解脱の意味であります。自分の結ぼれを解くのみならず、他の結ぼれをも解くのが大慈悲であります。

菩薩本行經は具體的に說明して、『佛とは諸惡永く盡きて、諸善普く會し、復た衆の垢なく、諸の欲都て滅し、六度極まり無く皆悉く滿じ畢つて、權力便を以て時に隨つて敎化し、大神力を有し、身紫金色三十二相八十種好、六通清徹して能く無窮の劫を知り、無極の現在を視て知らざる所なし』というてある。

又、諸經論には佛に一身・二身・三身等の別あることを說てある。これは佛の境界を觀見する方面に依りて、各々其の趣を殊にするからである。普通、人間に對する觀察でも、或は其の人の信念に就て品評したり、或は其の人の素行、修養、學識、事業等に就て批評したりする樣なものである。中に就て、一身は法身である。攝論には『應化身及び如來一切功德の所依と爲るが故に法身と名く』とある。即ち佛の人格の中心に名けたものである。二身は法身と生身、又は眞身と應身とである。法身又は眞身は前の法身に同じ、生身又は應身は他受用身というて、一般の眼に映じたる御身である。三身の法身・報身・應身である。此等の事は一々說明することは略して置く。

斯の佛の御德は廣大無邊であるが、大別して三德に攝することが出來る。即ち智德と斷德とである。

の訛傳なりといひ、又、浮屠家なりといふ。浮屠は佛塔のことであるが、轉じて佛者の稱號となつたのである。又、ホトボリケといふ語の變化したものともいふ。ホトボリケは熱氣のあることです。欽明天皇の十三年に佛像・佛經が始めて我國に渡來した時、その佛像に手を觸れしに、閻浮檀金の像にて溫かであつたから、遂にホトボリケがあるといふたのが語源であると申す說もある。天桂禪師の歌なりとて『佛とは誰が結びけん白糸の賤が苧手卷くりかへしみよ』とあるが、義に於ては甚だ面白い。

如何に健全なる身體手足を有しても、若し繩にて縛られたならば、少しも自由はきかぬ。吾々は本來佛德を具有して、智慧も德性も少しも缺けては居らぬ。されど、煩惱と罪業との二つの繩に縛られて居るが爲めに、我れと我が手で、三界六道輪廻の苦みを受けて、遂に智德を昧却して居るのであります。恰も繩に縛られて自ら不自由の身となつて居る樣なものである。

又、針と絲とを以て縫物をするが如き、長き絲は短かき針に從つて、前後左右、少しも違背することなく、針の行く所、絲之に隨ふて居る。針とは天理である、人道である、之を法性ともいふのである。絲とは吾々の身心です、吾々の身心が、自から天理に從がひ、人道に順がひて、起居動靜、未だ曾て法性に違背せぬといふが、本性の妙德である。

然るに、若し少しでも其の絲に結ぼれが出來るが最後、いくら引張つても針の後について來ぬ樣になるものです。結ぼれとは妄想我執のことであります。『鳴子をば己が羽風にまかせつゝ心とさわく村雀かな』

成佛の要道

最勝の大聖

佛といふは聖人中の大聖人にして、大智を備へ大德を有し、其の智德に於て最尊無上の地位に昇せられたる御方に名けたものであります。梵語には佛陀耶、又は佛陀といひ、譯して覺者、又は智者と稱す。覺者とは、無明煩惱の迷夢を覺破して、宇宙萬象の眞理を覺悟したまふの謂である。古人は之を釋して自覺覺他、覺行圓滿の義といつた。自覺は自分の具有する所の性德を覺知することである。覺他は他の人々を敎へてその性德を覺知せしむることである。自利・利他並び備はりて、智慧・德相兩ながら圓滿なるをいふたのである。又、智者とは靈智の光の味まさず所持する人をいふのである。智とは二相である。根本智・差別智である。根本智とは宇宙の眞源を究め、自己の本性を明らむるをいひ、差別智とは萬象の本末始終を覺了し、衆生の根機を觀察するをいふ。

是を我が國にてホトケと名けたる由來につき、古來、種々の說があります。或は佛陀迦、即ち佛陀迦耶

さる東京の人が、御親類に婚禮があつて、その席へ列しました。そして、家へ歸つてから『お嫁さんが私を睨むで居た』といふた。よく後で調べて見ると、お嫁さんは睨んだのでなくて、生來不具のやぶにらみといふのであつた。若し誰れかに眞劍で睨まれた時に腹を立てずに、あの眼はやぶにらみじやと觀じたらば、瞋恚の炎も起るまい。この觀念法の中に悟りの妙味があります。東坡が清淨の法身を山に眺め、み佛の廣長舌を溪聲水韻に見たのも

　山の色溪の響きもみなながら釋迦牟尼佛の聲と姿と

で、豆腐賣りの聲も、紙屑買の聲も、有難いと觀じてゆく樂しみの眼で眺めると、天地法界悉く樂しき世界となり、悲しみの眼で見れば世は涙の世界となる。乃至、月・雪・花も走獸飛禽、山川草木みな然らざるなしであります。

吾々は、觀念を以て、この世に精神上の極樂を建設し、この人生に處したならば、大乘佛教の極致に到達した人といはねばならぬ。高祖大師も、東司上にも佛法を說いて、それに立派な佛をば認められた。乃至、算盤上にも針運ぶ上にも、六度萬行を中に備へてゐる。さればお互は、この觀念法を養つて、この娑婆世界を立派なお淨土に化し、自他ともに一佛乘に歸入することに心がけて貰ひたいものであります。

ました。この上は、われら夫婦協力して、あなたの御命をお助け申すべし』と女房を呼びよせ、共に雲山へ姫を避難させ、時の來るを待つたといふことである。この十五歲の姫が前世の因緣を觀じた信仰の鞏固さには、いかなる殘虐の利刄も向けられぬ力がある。惡人をも轉じて善人にするの大偉力を有してゐる。

菩薩修行の段階の一に、歡喜地といふのがある。これは道を見て樂しむので、いかなる境遇に處したりとも、只管に法を悅び道を歡ぶことである。この歡ぶ心がありさへすれば、自然と忍辱の心も現はれてくる。卽ち、法喜禪悅というて、法喜は心の食物、禪悅は坐禪によつて安心が得られるのである。名利を飛び越えたのが解脫で、所謂『禪悅食』であります、この禪悅食の御馳走は自分が自分で作つてお食り下さらなければならぬ。この食物だけは、皆樣が年中食べ續けて下さつても、決して食傷するやうな憂ひはありませぬ。めでたいお正月を迎へ、めでたい生活を送つてゆくのも、偏にこの觀念の力であります。永嘉大師が『惡言は功德なりと觀ずればわが善智識となる』と云はれてあるが、どんな惡口を言はれても、どんなに毒語を浴びせられても、みな自分の缺點であり弱點であつた、前生の罪業であると默認して人を怨みされば、自然に、この間に永遠の樂みを受けてゆくことになる。釋尊は提婆をば善智識とせられ、未來成佛の記莂までも與へられたといふことが、提婆達多品に出てゐる。これも正に觀念法であります。

め寄つた、逃げやうと思つても、まだ十五歳になるやならずの姫、あらくれの男が前後に擁してゐる。如何なる因果の身にやあらむと、今は流るゝ涙も涸れて出ぬ。暫しは叢中に倒れて、前後忘却の態であつたが、漸く諦めをつけて、かうなるのも決して繼母の罪でもない、供をせる男の罪でもない、わが深き宿世の罪障である。罪障なれば誰を怨まん人もなく、父の仰せといふものゝ、多分は繼母の策であらうが、「い、すなほにこの首を與へてやらう。罪業深きわが身の、現世に於てすら斯の如し、この上は佛の力にすがつて、末後の看經をなすこそよけれと、稱讃淨土經の卷物を押し廣げて、三回も讀み返した。折しも夕陽の紅に反映して眼に宿る露の珠、讀み終つて卷を收め『嘸かし待ち遠いことであつたらうが、一卷は父母現當二世を誓ひ申し、現在未來の無事長久を祈る、たとひ仇であつても、假にも母は母である。二卷はお逝なりになつた、おん母上樣の菩提を弔ひ、三卷は罪深い自分が佛に救はれるために讀誦した、あゝ待たしたことよ、さあ繼母さまお待ち兼ねであらうから、疾くわが首をはねよ、女でも死んだ後は醜くては不可ない、どうぞ死後は、この醜骸を、あの千仭の崖下に埋めて下さい、これ丈けを御身に賴む、別に遺身として遣はすべき品もないが、こゝに小袖があるから取らするぞ』と、もう西に向つて手を合せてゐる、かくて涙は止め度もなかつた、この態度を見て居た從者の松井は、驚いて、手にせる刀を投げすて泣き倒れて、『貴方は決して凡人にはおはさじ、どうしてこのみ佛の如なお方に、この刄が向けられやう、これまでの罪を御赦し候へ、また、一つには貴方のこの氣高い態度によつて、始めて佛法の貴きことも解り

す。

第五に、正直の德を守れであります。吾々お互は、種々なる艱苦にあうて艱苦の試驗を受けつゝある。されば、お互ひは、この試驗に及第せんために、自己の心を丈夫にし、正直の心を持つのである。以上の五が則ち觀念の基礎を示すものである。この五條をば、常に生活の根柢としてゆく上には、たとひ逆境に處するも、泰然として所謂勇者の生活ができる。

一休禪師は一種の風流禪で敎化された。一茶は貧乏生活をしながらも、貧に負けず發句で自分の天地を造つて、樂しむで自分の生涯を送られた。何れも風流の門から這入つたのであるが、要するに觀念法によつて力を與へられたものであります。

中將姫の信行

中將姫の信仰の力は實に立派なものである。繼母のために罪人扱ひにされ、大和の山中に擔ぎ込まれたとき、まだ漸と十五になつた姫には、思ひも寄らぬ山また山へ駕が進んでゆくのに、小さい胸の動悸を躍らしてゐた。日は正に西山に沒して、四隅から暮れかゝる夕靄、草原の眞中に駕はすゑられた。姫は不審さうに訊くと、駕丁はツカ〳〵と進み出でゝ、「誠にお氣の毒でございますが、實は貴下が品行の惡いといふので、家門の汚れ、斬り捨てよとの君命默し難くお供をいたしました。速かに御首を與へたまへ」とつ

のために、この足が石のやうになるまで、諸方を往來して御奉公した、弟子等よ、わが足を模範にせよ』と垂示されました。また、わが御開山も杓柄の水を餘す』と云はれた。一杯の水も勿體なしと、半分を川へと返された。川の水は、一杯や二杯冗費にしたつて損のある筈はないが、御開山の御思召としては、この僅かの半杓でも、天地の賜であるとせられた。そこに、今日、三百年後になつて、吾々が樂々修行し得られる福分がチヤンと備はつてゐるのである。

第三には勉强の力である。お互が逆境の爲めに、身に束縛をうけ、自暴自棄してはいけない。どこまでも逆境に打ち勝つて進まうとする勇氣を、不斷に蓄へてゆかねばならぬ。佛は『常不輕』といふことを仰せられてあるが、如何なる人も輕んじない行である。どんなものを見ても馬鹿にしない。卑しい人も惡い人も決して輕蔑しない。常不輕菩薩といふ方は汝等皆等時節來れば佛になるぞと拜み、われに石を抛げつける惡人があつても『汝等皆等作佛』を拜んだといふ。この行を全うするに於て、萬の功德が備はつてゐるのであります。自分より力の劣つてゐる下女、下男にも相當の禮を持つてゆくのである。斯して、この行が、生き變り死に變り、生々世々の永い修行になつてゆくのであります。

第四には佛の慈悲を仰ぐことである。天下の人々に棄てられた因果な身の上でも、一度佛の救ひを得ることによつて、或ひは佛の慈悲によつて、安心を得られる。これも皆さん定めし御經驗のあることであらうと思ひますが、この佛の慈悲を信ずれば前の話のお初の如うに忍むでゆける。全く堅い信仰でありま

追ひ出したのに氣が付いた。『あゝ氣の毒をした、この寒い雪の夜半を定めて里方へ泣いて歸つたことであらう、里の爺にも、これでは頭が上らぬ』、酒飲みも醒めれば矢張り眞人間で『酒はもう飲むまい』と、今更の如く良心の閃きも現はれて、憐れな妻を迎ひにと、鍵を外して出やうとすると、雪は鵞毛の如く片々と降つてゐる。軒下に黯く蹲まつてゐるものがある。『誰だい』と近寄つて見れば、紛ふかたなき妻のおはつ、『汝は鄕里へは歸らなかつたのか』、『ハイ私の家は廣い日本中この家しか外にありません』一旦妻となつて嫁づいた上はこゝがわが家であつた。尙ほ言葉を續けて『私は今晩のやうに樂しい晩はこれまでにございませんでした』と、それは寒い中にも觀念を怠らなかつた。佛樣や祖師方は幾百千劫の昔にこの御修行をなされた。今晩、自分が寒苦を受けるにつけても、實に有り難いといふ感涙に咽むだのであつた、『この寒さを忘れたのも偏に貴下の御庇でございます』と答へた。これは決して造へた言葉ではない。心のどん底から溢れ出した眞情であつた。これに感動した酒癖の惡い重藏も、以來、生れ更つたやうな眞面目な人となつたといふことであります。この堪忍は全く信仰の力から現はれたものであります。

鹽谷判官は、齒ぎしりの我慢であつた。忍辱は腹の底から忍ばねばならぬ。この力こそ、軈て花さく春を望むことになるのであります。また、この力によつて惡人感化の功德も現はれる。逆境に居ない人も、齊しく朝夕堪忍を念じて貰ひたい。堪忍は眞の福の神であります。淨土眞宗の蓮如上人が、他界せられる時に、弟子等を周圍に集めて、『俺の足を見よ』と示された。殆んど石のやうになつてゐた、『俺は佛法

謂、吾々の境遇の解決法とでもいふべきであります。孔子は天命を明らめられた。この『天命』といふのが佛教の因縁觀なのであります。決して、何んな事が起らうとも、人をも怨みず、天をも憎まず、たゞ只、管に自己の深き罪障を觀じて、無罪清淨にならうと、精神を洗ひ清める土臺とするのであります。

第二に忍辱力、卽ち忍耐とは、世の中のことは自分の思ふ儘にならぬもので、この苦を忍ぶことである。佛教で、この娑婆世界を忍土というてゐるが、堪忍の世界であります。卽ち吾々お互は、生れてくるより忍耐をしなければならぬやうに約束されてゐるのです。これを忍ぶのが軈て人生の目的そのものであります。此の忍力をば『踏まれても根づよく保て福壽草やがて花さく春にあはなん』というてある通り、苦しみつゝゆくのが軈ては目的を達し、人格の向上を計ることになる。他人のために忍ぶことは骨が折れるが、要するに、忍は自己の勤めとしなければならぬ。

石見銀山に百姓の重藏といふのがあつた。その妻はおはつといふ。亭主は酒癖惡しく、身代は酒でだん〱飲み盡して了ふといふ手に畢へぬ男、それに引き替へ、おはつは稀な貞淑な女で、夫の惡態にも惡い顏一つしたこともなく、何くれとなく溫順にかしづいてゐた。ある日のこと、例の如く、夫は醉拂つて歸つて惡癖の酒亂、遂ひ云ひがゝりにおはつを追ひ出し、自分は炬燵の中にもぐつて寢てしまつた。丁度、十二月の末、戸外には雪さへチラ〱と降つた寒い夜、一杯機嫌でグウッと寢込んだ亭主は、だん〱炬燵の火も消え、醉が醒めて、邊りを見回して『おはつ〱』と呼んだが、淡い記憶を辿つた末に、戸外へ

次は逆境に處するの觀念です。日々夜々、吾々には境遇の變化と云ふものがある。午前は順境で、午後が逆境のときもある。日の當るところは順境で、日蔭は逆境である。夏ならば風の通る所は順境で、蒸し暑い所は逆境になる。逆境の中でも、お釋尊は八苦といふものを説かれた。道了菩薩は八苦拔濟を誓願とされてゐる。八苦とは、一に生苦で、生れる時の苦しみ、生れるときは自分で解らぬが、生後の果報に苦しむ、生苦の次は老苦といふので、寄る年浪に眼は見えなくなり、耳は聞えなくなる、すべて身體の自由がとれなくなる。次に病苦は病氣の苦で、體には四百四病もあるといふが、今日の如に醫學が發達してゐると四百四病どころじやない、四萬四千病もあらう。次に死苦これは最後の苦しみである。以上四苦の外に八苦といふがある。してみると、如何なる人でも逆境を具へざるの人はない。親兄弟の間にも逆境あり、況んや孤貧無告の人などは、その苦しみを最も痛切に感ずるものである。また外から來る火難、水難といふ不測の苦みもあり、大抵人はこの苦に縛されて了はねばならぬ。されば、いかにしてこの逆境に處してゆくべきかは、考ふべき問題であります。

先づ第一に因緣觀をなすことである。凡て生活の上に現はれてくる大小の事件、之れを佛敎では總じて、「何も因緣である」といふ。例へば、災難に遇ふ、「これも因緣約束です」といふ。この因緣觀は、所

の因縁で斯うして活られるのである。今日の身分に油斷してゐると、前世の糸が次第に盡きて墜落する。

衲の本師は毎日『陰德を積め〳〵』と敎へられた。陰德は字の通り隱れた德で、人の氣のつかない善事を行ふことである。卽ち神佛の證明を願つて、自分の志を相手に、善事を樂しむことである。

本師は三十幾歲で遷化せられた。北國を修行中に、ある事故が突發して、罪のない本師が同罪の責苦を負はされた。けれど本師は少しもこれを怨みとせず、『前世の宿業じや、何とかして德を積むで罪を贖ひたいものだ』と、托鉢を三十年續け、通り懸りの雲衲を泊めて供養された。この事を、衲が小僧のとき、陰德の例として屢々話されたものであつた。師も最後には、相當名あるお寺へ直られたが、それでも舊時を忘れず、七里や十里の徒歩を續けられ、途中宿へ泊つても、胡麻鹽を携へて食べられた。實に有り難い本師であつた。

また、可笑しかつたのは、老つて眼鏡をかけてゐて、遠くを見るときに、眼鏡を額に押し上げられる癖があつた。程經て、額に戴いてるのは忘れて『眼鏡は何處か知らぬか』と尋ねられた。『頭に附着いてをります』といふと『さうか、この道心』と、ピタンと、わが手で頭を打たれた。平生は質素儉約で、御馳走になつても斯うした心持であつたから、上流の人も感心した。お互はこの善根の糸を續けることが肝要であります。この觀念あれば、善根の糸は長く續いて墮落するやうな憂はない。釋尊のお示しになつた觀念はこれである。

一は觀恩で、情を忘れるな――現に溫かい着物を着、寒暑を避け得る恩德は、みなこれ吾が祖先の賜、御國の恩、天地の惠であるとし、何んなに榮華な身分でも、この恩惠に有難いといふ觀念が起れば、日常の生活も質素になり、身分に超えた奢侈はないことになる。

箸とらば御主や親の恩を知れ我が一力でくふと思ふな

今日が安穩にしてゆけるのは、皆な親や御主人の御庇であると感ずるのである。平素この考を持つてゆけば、いかに結構な身分になつても天罰はない。小供の時から學校へ這入つて勉强して、人一通の教育を授かるまでは仲々容易ではない。

お茶の水の女學校の一女生で、入學試驗に合格して一先づ鄕里へ歸つた。母は娘の合格を非常に喜むだ。不圖、母の足を見ると、指の爪が腐つて紫色に變色してゐる。『お母さん足を何うかなさいましたか』と訊くと、母は云ふまいと思ふたが、娘の入學を祈念するため、雪の降るに寒詣りをした、その結果でこの凍傷を起したと答へた。足の腐つたのも打ち忘れて、合格した娘を喜んで迎へたのであつた。この母の慈恩に、娘は涙を流して觀恩した。今日お互の身を考へても、この譚のやうに、父母の困難を思はねばなりませせぬ。また、天皇陛下は國民のために朝夕御念あそばされる。この廣大なる御恩を忘れてはなりませぬ。

二には續善根の念を起せ――丁度、糸を緩めるに從つて凧が高い所へ揚つてゆくやうに、お互は、前世

にお盡しになる所があるのです。又、三年前に御遷化遊ばした森田悟由禪師が、外出のお俥にお乘りになるとき『歸りには何な姿になつて來るかも知れぬが賴むぞよ』と、よく仰せられました。如斯に體の續く限りは、この日本國中の人のために、一つの道具になつて用はれにおいでになつたのである。『衲は遣はれにきた、衲は一切衆生の小使じや』と屢々申されたが、八十有餘の御身で一日も休みなく、世の人のために教化なされた。こゝが禪師の有り難い所であります。また、これがために佛法も盛んになつた。かの奇人傳中の手車翁の如きは決して世のためにならぬ。禪を修めた智識にも斯ういふ誤つた人も澤山あるが、決して吾人の模範とすべき人ではない。

吾人が隱居して、世を弟子や子孫に讓つても、出來得る限り世の力となつて、不斷に働いてゆかねばなりませぬ。

恩を感ずべし善根を積むべし

人はいろ〳〵な境遇を經てゆくものである。卽ち順境のときもあり、逆境に處するときもあり、日々幸福な生活に居る人は順境の人、非常に苦しい不安の生活に居る人は逆境の人である。この順境の人として、將また逆境の人として、いかな觀念を持つてゆくべきか、以下經に說かれてある。重なる觀念に就て說明して見ませう。

は決して吾々の模範となるべきものではない。
奇人傳中、數多い中でも手車翁といふのがある。毎日、手車を造つては、小供達に愚弄ながら京の町を歩き廻つた。その身裝から生活は、悉皆乞食同様である。が、よく會つて話すと、何處かに風格の高い所がある。それだから多くの人も『手車の翁々々』というて愛し且その人格を尊むだ。翁の末後は坐脫というて、坐禪をしたなりに死なれた。その時の辭世が

小車のめぐり〳〵て今こゝにたてたる卒都婆これは俺がのじや

『俺がのじや』は翁の名物言葉である。町を歩いてゐるときに、『誰れがのじや』と人から云はれると、屹度『俺がのじや』と答へたものでした。一體世の中に『俺がのじや』は一つもない筈、衣服も、財産も、珍寶も、みな永劫に俺のものとは云はれない。されば未來永久に渉つて、昭々として輝き、自分のものになるものは、たゞ佛の信仰のみである。手車翁に限らず、奇人傳中の人は、人生に頓着しないで、人格を高めてゐることは一面に於て立派ではあるが、そのことが軈て國利の發達に資すべき効果がない以上は、何等價値のないことになる。

鶴見大本山の石川禪師へ御機嫌伺ひしました時、『近頃は大層お寒くなりましたが、何處へか御避寒なされてはいかゞ』と御勸めいたしますると、『衲には休む暇はない』とのお答へでありました。七十七の法算で、この寒中に一日も御休みなく、お勸め下さることは實に容易ならぬ事であります。こゝに佛法のため

を遂げたゞけでは實に不安心である。

然らば何が永久の安心の基礎となるか、これが佛敎信仰の根本で、火に入つて燒けず、水に入つて溺れぬ所のものである。然らばどうしてこの安心を得てゆくか、永久の幸福、永久の快樂を得る境界になるかといふに、それは觀念といふことにある。縱、利や名を得ても運命といふものゝ力には、到底、抵抗し切れるものではない。

おもふこと一つ叶へばまた二つ三つ四つ五つ六つかしの世や

朝夕のめしさへこわしやわらかし思ふまゝにはならぬ世の中

世の中は貧じや有德じや苦じや樂じや何じやかじやとて末はむちやくちや

といふ歌の意味の通りどのやうな、身分の人でも苦は免れがたい。若し、人にして、この觀念の力がなかつたならば、そは涙の生涯である。

隱遁脫俗と利養厚生

佛敎では解脫の法門といふことを申します。これを敎へる場合に、時として、宗敎は世の常識に外れたことだと速斷する人もあります。また禪學流行の結果として、佛法信仰のために變人になるのがあるが、それは佛法の本旨に違つたものと云はなければならぬ。昔の坊さんに變人の話も隨分澤山あるが、それ

にも、また、教育經濟の方面にも、希望を有してゐる人もあらう。また、名譽を得たいの財産を得たいのと、種々な目的に希望を置いてゐる。即ち、人はこの希望あるがために立派に働くことができる。例へばお寺なども、住職は隱退すると何しても身心が弱くなるものです。隱居といふことは、まあ死の支度をするやうなものです。成すべき一定の仕事がないから、間がな、隙がな『どうして今日は遊ばうかな』と、不斷に空虛ができる。この空虛を死神がいつも覗つては飛び込むでくるのである。隱居しても、詩作するとか、歌を詠ずるとかの樂があれば、常に活氣といふものを與へてゆくのである。希望を大きくいへば、人間には名利というて、名譽を獲たい、利益を得て立派になりたい。而して面白い愉快な生活をしたい、この二方面を望むで居ない人は恐らくあるまい。

が、單にこれのみが吾人の目的とすれば、それは餘りに果敢ない希望であると云はねばならぬ。斯る目的が希望の全分であるとしてゐる人が、その一生を經て回顧して見ると、果してそこには何物が殘つてゐるだらう。高祖大師も

『無常忽ちに至る時は國王大臣親暱從僕妻子珍寶たすくるなし唯獨り黃泉に趣くのみなり』

と、一旦、無常の嵐に誘はれたならば、名利も、權勢も、富貴も、凡て跡なく消えて了ふ。正月は芽出度いといつても、無常の風は吹いてゐる。先月から今月にかけては、北國では未曾有の雪で苦しみ、一朝にして三百五十人といふ大多數の人の子を殺したやうな災難が突發する。故にこの世は單に、名利の二つ

觀念の力

人生のあきらめ

觀念といふことは、世間の心理學なぞでも、よく用ふる言葉であるが、佛教の上の觀念法は、それとはチョット趣が違ふ。觀念を平易に云ふたならば『あきらめ』といふことになる。例へば、禍を轉じて福となし、苦を轉じて樂となすといふが如く、この人生にあつて、精神上無限の快樂を得ることである。

觀世音菩薩は全くこの觀念法によられて、三十三身にも現じて衆生濟度をなし下さるのであります。この衆生濟度も、觀音樣にとつては一つの御道樂である。釋尊の五十年の教化も道樂で、衆生濟度が止むに止まれぬお樂しみ、卽ち釋尊の御本懷であります。今日のお互も、觀念の力がありさへすれば、安心に現世を送ることが出來る。この安心、『あきらめ』は卽ち觀念の一面をなすものであります。

世の中の人は何人と雖も、必ず一の希望を有つてゐる。よく人は、希望に生きると云ふが、政治の方面

思はれし頃、二三の篤信家が、せめて一目なりとて拜みたしとて、ソット病室を窺ひしに、禪師は細く御目を開きて、其の顏を凝視せられ、『まだ死なずに居るに、今に死ぬだらう、其の時また、知らせるに依て安心せよ』といはれた。而して其の仰せられる時の模樣が、安然、泰然殆と形骸の外に何等かの大靈が居る樣な感じが致した。

　要するに、以上の大善知識の如きは、内に至誠眞實の德を備へ、其の心自づから宇宙の大靈に融合し、その靈機を轉じて大智・大勇・大情にして、而も大誓願力と大救濟力とを有したまふ佛に歸依せられたまふのであるから、その身その儘が直に無量壽不可思議光で、全く自力他力などの境域は泯絕して居るのである。故に、手を擧れば靄然として慈雲を起し、足を進むれば卓然として人生を超越し、順逆縱横の活機輪が轉ぜらるゝので、佛法の妙趣、安心の功德は正しく此處に現前するのである。

も與に流遠の身となつても『抑〻又、大師聖人源空若し流刑に處せられたまはずば我又配所に赴かんや、若し我れ配所に赴かずんば何に依りてか邊鄙の群類に化せん、是れ尙ほ師敎の恩致なり』といはれた。

又、日蓮上人が龍の口、御難の時、由井が濱を出でゝ御靈の前に到りて『此の娑婆世界にして雉となりし時は鷹に摑まれ、鼠となりし時は猫に喰はれ、或は妻子の敵に身を捨、所領に身を失ひし事、大地微塵よりも多し、法華敎の御爲めには一度も失ふ事なし、されば日蓮は貧道の身と生れて、父母の孝道心にたらず、國恩を報ずべき力なし、今度頸を法華經に奉りて、其の功德を父母に回向し、其の餘をば弟子檀那等に配當すべし』といはれたさうだ。龍の口にて一同が悲み泣きける時。上人は靜かに之を制し『不覺の殿原かな、是程の悅びをば笑へかし、何に約束をば違へらるゝぞ』と仰せられたとある。信念力の偉大なることは火も熱くこと能はず、水も溺らすこと能はず、實に金剛堅固不動の安心とは是れである。

又、我が恩師たる前の永平寺貫首性海慈船禪師の如きは八十二歲を以て御遷化なさるゝまで、殆ど化杖を全國に飛ばされたが、何國に御出掛けの際も『さあ返りには箱に入れてくるやら知れぬ、生死は生死にまかす、予の事は盡未來際ぢや』と仰せられ、大正四年二月四日、病革まるや、枕邊に侍せる醫師を見られつゝ『見込があるなら百までも使ふが、もう大概だめだらうよ、古家の造作見込なくば小刀細工はせぬが宜しからう』といはれ、『御加減は』と御尋ねせしに、『好くもなし惡くもなし』と答へられた。此の一語、禪師の俗弟子杉浦鏡華居士は、馬祖大師の日面佛月面佛にも勝れりとて感歎せられた。危篤の狀態と

奉ることが出來る。

先帝（明治）陛下の御一代を拜し奉りても、全く氣高き御信念の光明が、所有盛德大業の上に輝き渡つて居る。『わが心及ばぬ國のはてまでも夜ひる神は守りますらん』、『目に見えぬ神の心にかよふこそ人の心の誠なりけり』、『曇りなき人の心を千早振神はさやかに照し見るらむ』、此等の御製は、實に絕對の大信念の御現はれで、此の御信念こそ、實に我が國體の中軸である。

世に信念の力ほど大なるものはない、その動かざること山の如く、その明らかなること日月の如く、その麗はしきこと珠の如くである。我が高祖大師は八歲にして御母に別れたまひし時、深く無常の理を觀ぜられると同時に、佛陀の大光明に觸れたまひ、此の御信仰が、五十餘年の御行持を實現したのである。我が太祖大師は六歲の時、觀音大士を拜して非常に有難く感ぜられたが、その時の御信仰が、一生の大業を造り出されたのである。彼の法念上人は、八萬の法藏をも信の一念に歸入して、『三心四修と申すことの候は皆な決定して南無阿彌陀佛にて往生するぞと思ふ中にこもり候なり』と仰せられた。

その遠流の宣旨を受けられし時、道俗貴賤皆な歎き悲みしが、上人は感悅の色を現はして『源空が流遠を蒙るは邊土の化緣既に熟せり誠に喜ぶ所なり、普く萬機を敎化して念佛門に入らしめんといはれた。親鸞上人も、絕對信の一念に依りて、世間・出世間、一切の塵纓を離却して、『親鸞におきては唯だ念佛して彌陀にたすけ參らすべしと善き人の仰せを被むりて信ずる外に別の仔細なきなり』と仰せられ、法念上人

前に、亦必ず神佛を拜し、その儀が如何にも鄭寧にして謹嚴であつた。拙衲は之を見て、氏が村治上に於ける良成蹟を收められつゝあることの、偶然ならざるを感じたのである。

又、拙衲は、毎年の如く尾州知多郡半田町の佛教會に出演して居るが、いつも同町の富豪小栗三郎氏の處に宿泊する。同氏の篤信家にして方正謹直なることは感ずるに餘りがある。內佛の事は一切自ら擔當し、蠟燭の心を切ること迄も、必ず之を親らせられ、且つ獻香獻燭の事に至る迄一々禮拜を行はれる。室內の佛像又は高僧の書などの軸物を掛くる時は、必ず自ら之を懸け、且つ其の都度禮拜を缺かされぬ。外出の折、神社佛堂の前を通過する時は勿論、聊かなる路傍の小祠や小さき石地藏の前を過ぎるにも、必ず脫帽敬禮せられる。萬端が皆な此の通りである。

佛法の妙趣

試みに見よ、今上（大正）天皇陛下御一代一度の御大禮の御儀は、畏れ多くも、陛下の御崇高なる御信念が、典禮の根本を爲して居らせられる。卽ち敬神大孝の道が御儀の中心にてあらせられるではないか。本年の御勅題に於ける御製は『とし〱にわが日の本のさかゆくもいそしむ民のあはれなりけり』といふ尊とき御詠ではる。此の御詠の大御心は正しく神の御心である。又、皇后陛下の御歌は『神風の伊勢のはまをぎまねかねどしたひよるらしよもの國々』如何に御信念の深く厚くあらせらるゝかは、自づから拜察し

會する者、一人として泣かぬ者はなかつたさうだ。その後、毎月十四日は、どんな日でも、一里餘りある處に墓參にかゝさず、殊に跣足にて墓に參り、雪中でも頭を雪につけて拜すること、生前に事ふるが如くであつた。當地は雪の深き所であるから、雪途には、往來の人の擢れ違ふ時は、一人は路を避けねばならぬ。氏は鄕黨第一位の人でありながら、必ず自ら路を避けて『さあ御通り下され』といふて、未だ曾て人に避けしむることがなかつたさうです。菩提寺は外護して、能く喜捨をして吳れたが、住職に禮をいはせなんだ。特別の寄附に預かりし時など、住職が挨拶に行くと、此方から語を發せぬ中に、氏の方より『此の度は聊かでも寄附さして下されて忝けなく存じます』と、反對に禮を言はれるのが常であつたといふ。氏は、惜いかな、大正三年十月十四日に、六十二歲にて逝くなられた。先祖と同月同日にてありしも、氏の平生に照して見ると、何やら深き意味のありげに感ぜらる。氏の如き行動は、總て純潔なる深信より發したるものと申すべきである。

又、同國北蒲原郡川東村長本間百右衛門氏は、模範村長として名高き人なるが、毎年、二月か一月の雪中に、青年會を中心とせる佛敎講演會を三日位づゝ開き、佛敎に依りて青年の道德を養ふことに努め、村民の思想も優れて善良である。大正四年一月、拙衲も其の招きに依り、講習會に臨み、同氏の宅に宿して居りしが、氏は本年四十歲位であらう。晨朝には神前及び佛前に對して禮拜すること最も叮重なもので、且つ天地四方をも禮せられる樣に見受けられた。又、夜間は、午後の九時過ぎか十時過ぎ、卽ち就眠

漸く蘇生したが『死なざりしは佛恩ぢや』とて喜んで居た。又、或時、沸湯で手を爛いたが『これ程の痛み、阿鼻地獄に比ぶれば何程のことがあらう、佛恩忝けなし』とて、彌々念佛して居た。平生、自ら耕し自ら織りて他の力を借らず、半日に布一丈二尺を織り、其の巧なる技術は村内第一であつたが、『これも佛恩である』とて、喜びの中にめでたき日を送り、八十歳まで長生したさうである。信仰生活の妙趣は全くこゝに在ります。

信は道德を生む

信仰は一種の眼である。卽ち無形の物を明らかに認めることが出來る。而して、其の認めたる者は、一種の靈體であるから、我が精神の保護者ともなり、慰安者ともなることは、前に述べたる話にても解る。越後國北魚沼郡廣瀨村大字田尻の豪農酒井文吉氏は、酒井家四代の主にて、同村曹洞宗興珊寺の檀頭である。而して、稀有の篤信者であり道德家であつた。郡敎育會長をも勤め、其の他郡の公共事業には與からざるなく、遠近皆な其の德に服して居つた。其の先祖の孝順院といふが寬政十年十月十四日に死し、文吉氏の母の淸香院は明治三十七年二月十四月八十一歳で死んだ。母の葬儀を營み荼毘に付する時、氏は涙ながらに炬を持ち、棺に向つて涕泣、暫くは口もきけず、稍々あつて涙に濕りし聲にて『どうぞ、母さま、未來も亦現在の如く親子となつて下さりませ……』是の如く三度唱へて、始めて火を薪に移した。相

侍の者に向ひ、御馳走をして上げて呉れよ、誰れにも彼れにも御供養をして呉れよ、江戸中の人に供養して上げたい、あな有難や』といひ、時としては『私はもう全快は致しませぬ、永々御世話になりました、人は御信心が大切であるから、どうか御信心を賴みます、出世せしとて油斷をせず、夢々惡き心を起し給ふな、あな有難し』此の一語には無限の味ひがありて、聞く者は、男子も女子も、齊しく感涙に咽んだのである。臨終の時の如き、何等の苦痛もなく、平生の眠れるよりも安らかに、いつ息を引取りしやら知れぬ程であつた。瞑目の後も顔に喜びの色表はれ、三日の後、出棺の間際も、猶ほ容貌生けるが如くにてありし。一族は悲歎の中にも喜びの涙を流し、令孫達彌氏の如きは、今にして始めて宗教的信仰力の絶大なるを知る』と絶叫した程である。看護婦の如きは、看護の傍ら讀經三昧、全で尼僧の修行をして居る樣であつた。病室に侍する者は、何れも嬉々として、御互に喜び合ふて、殆ど病室らしい處はない程であつた。是れ皆な刀自が信仰の賜といはねばならぬ。

天明の頃、豐後速見郡總見村に妙喜といふ尼さんがあつた。一旦緣付て一子を設けたが、間もなく夫にも子にも死別れ、やがて舅姑にも先立たれたので、菩提の爲めと尼になつたのである。此の人は其の名の如く、何事につけ佛恩を喜んでのみ居たさうな。或人が『お前に人が水をかけたらどうする』と聞きしに、『暴風雨と思へば腹が立たぬ』と答へた。『石を投げ付けたら』、『屋根瓦が墜て當つたと思へば誰をか恨まうぞ』と答へた。或夜、寺に參り、暗に紛れて僧に衝當り、椽から落ちて氣絶した。人々の手當にて

信仰は内心に於ける中軸となるべきものであるから、殆ど絶對の權威を有し、信仰力が鞏固になれば、この人の性質にも良好なる變化を與へ、如何なる逆境にも苦痛にも堪へ、且つその間に非常なる滿足と歡喜とを有するものである。

東京麻布六本木なる宏虎童君の母、園子刀自（余の洗濯親）稀れなる曹洞宗の篤信者なりしが、大正四年九月十日の朝、北越に於て、突然、輕微なる惱溢血に罹り、尋で腎臓炎、尿毒病をも併發した。最初は、時々に激烈なる病苦の襲ふ所となりしに、漸次に輕減し、十月下旬、孝子孝孫の丹精を籠めたる看護を受けつゝ、安らかに歸京し、市外大森入不斗の本宅に歸臥せられた。病症が自然、腦を侵して居る爲め、全で小兒の樣になりしが、時々、平常の如く意識頗る明瞭なることがあつた。如何にせん、七十五歳の老體なれば、日を追ふて衰弱加はり、十一月十二日午後八時頃、眠るが如くに息を引取られたが、その病中及び臨終の態度が如何にも麗はしかりし爲め、親族やお友達までが深き信仰の念を起したのである。發病以來、二ケ月餘りの臥蓐なりしが、少しも腹を立てしことなく、又、愚痴らしき語もなく、朝も晩も、目が覺めさへすれば『あゝ有難や〱何とした有難いことであらう』、『あゝ私は如何なる因緣にや、斯くも幸福を得しことの嬉しさや、私の樣な仕合せ者が他にあらうか、あゝ有難や〱』、『釋迦牟尼如來樣、彌陀如來樣、觀音樣、地藏樣、十方恒河の諸佛諸菩薩樣、光りを放ち笑を含みて、我が前に在まし、我が室に在ます、あな嬉しや喜はしや』とのみいふて、掌を合せて喜び通し、見舞客が來れば、看

年、學寮の夏講に京都に在りし時、篤信の一同行が、後を慕ふて出京し、兩堂に參詣をすました其の足で、講師の寓居を訪た。講師は『何か土産を持て來られしか』との尋ねに、『老人の事、殊に遠路なれば何の用意もありませぬ』と申せしに『されば自分より土産を注文せん』、『御師匠の仰せ身に持合せしものならば何なりと』、『御身の心に持合せし罪と障りとを貰ひたし』すると彼は『罪と障りとはハヤ如來樣が御引受け、御師匠樣、如來樣に先手を越されて御注文の品はありませぬ』、『然らば改めて注文せん、日々夜夜に起る煩惱妄念それを予に呉れぬか』彼は打笑ひつゝ『是れ許りは如何な御師匠樣でも差上げられませぬ、起る煩惱は如來の御慈悲に喜ぶ手引、本願の導きを仰ぐ良緣、こればかりは――』と否みし時、講師は涙を流して『能く其處まで聞て呉れた、味ふて呉れた』といふて喜んだと申すことである。

是れは眞宗一派の敎化談ではあるが、吾々は至誠の眞心より佛陀の靈光を拜し、孝子の慈母に於けるが如く、溫かき、親しき眞情を傾けて歸依する時の精神狀態は、必ず是の如くなるべきものである。煩惱妄念を執持するのではなく、從前、煩惱妄念たりし凡夫の心が、ソックリ信仰の藥に化せられて、最早、甘露の法水となつたからである。此の信仰心の中には、絕えて我見・我慢・愚痴・我が儘らしいものはない。此の時感應の功德が現はれる。

心の滿足と歡喜

四には、信ずる人が至誠眞實にして能く信の本性を備へ、而して、信ずる所の本尊は正しく宇宙大靈の權化、天地の公道の標本で、併も大慈悲あり大神力ありて感應の偉力を有するもの、卽ち我が佛敎に於ける佛・法・僧三寶の如きは全く是れである。

故に、此の三寶の功德は、宗敎的信念を離れ、單なる人道的標準としても、毫も間然する所はないのである。三寶とは申すものゝその主體は佛樣である。佛の所證が法で、法を學び法を傳ふる者は僧であるから、佛を離れては法も僧もない。此の佛は、前に述べた通り、宇宙の大靈に融合せられたる御境界で、換言すれば宇宙の大靈が人格的に權化したのである。信の根本性が、宇宙の大靈に歸元する人心の妙德であるに依りて、信念と佛との間柄は、火と火との如く、水と水との如く、二つにして不二なる者であるから、自然に感應道交して、佛の心が我が心に入り、我が心が佛の心に入る。入我我入して遂に一體となる處に、非常なる滿足と歡喜心を生じ、そこに偉大なる力を發揮して、人生の苦悶を解脫し、身心の繫縛を遠離し、その結果は、日常の起居動靜が、自づから天地の公道に合脊する樣になるものです。

玆に一瓶の淨水ありとせんに、藥を注げば其の全體が藥水となり、毒を投ずれば其の殘らずが毒水となる。吾々の心も亦是の如く、信心發得すれば、平生の慮知分別も盡く宇宙の大德を現はすべき作用となり、邪見に住すれば、尋常の思慮觀念も皆な天地の公道に反する惡業となるものである。

眞宗の香月院深勵といふは、越後金津永臨寺に住せる有名な人であつた、寬政の頃、講師となり、晩

己本性の妙德に歸入するのである。縱令、内に至誠の德ありとも、歸依する所の對象が宇宙の大法に反し、道德の本義に悖るものならば、決して感應することは出來ぬ。此の點は能々心得ねばならぬ。」

信仰の狀態

信仰狀態を分類すれば凡そ四通りになる。

一には信ずる人は正直にして眞面目なるも、信ずる所の對象物は何等の權威も靈德もなきもの、例せば、動物を祭つたり義賊を祭つたりするの類、東京には、鼠小僧と稱する盜賊の墓に參詣する輩さへ澤山ある。尤も此等の輩は、固より眞の信仰がある譯ではないが、それでも、中には眞面目に無邪氣に參る者もないではない。兎に角、東都の眞中に、そんな物が、併も佛堂の境内にあるといふは、我が佛教の一大汚辱である。

二には、對象物は完全なるも、信ずる人が甚だ邪惡なるもの、例せば、他人を苦めんが爲めに聖天に祈るとか、己れの邪欲を遂げんが爲めに不動尊を信ずるとかいふの類である。

三には、信ずる人も信ぜらるゝ物も兩つながら、妄なるもの、例せば、不合理なる反道德なる欲望を遂げんとの目的にて、高山大澤や寒巖枯木などに信仰を捧ぐるもの、此等の連中も非常に多いのである。以上の三者は、決して眞の信仰ではない。此等の信仰は、寧ろ有害無益の信仰である。

は宇宙天地の大德大用たる知・情・意の美德が現はれるから、自づと淸明の智慧を開き、慈悲圓滿なる眞情を發し、道德的なる意志の活動を起すものである。その至誠眞實の德に歸したのが信念の本性です。故に、正しき信念は取りも直さず正しき知識、正しき道德、正しき勇氣でなければならぬ。然るに、世には信念ありながら不合理の知、不道德なる情に陷いる、卽ち迷信・妄信・狂信の類のあるのは、決して本當の信念ではない。所謂『病的信念』であつて、未だ信念の本性に觸れないのであります。

宋の司馬溫公は盛德の君子である。人あり公に問ふ『公は神に事ふるや』公曰く『事ふ』又問ふ『何の神に事ふ』、公曰く『心の神に事ふ』、又問ふ『如何にして事へるや』、公曰く『黍稷せず犧牲せず、唯だ欺かざるを以て事ふ、君子は、上、天を戴き、下、地を履み、身を其の中に容る欺かんとするも得べからず』と、是れ正しく信の性を說かれたのである。

二宮尊德翁の『夫れ誠の道は、學ばずして自ら知り、習はずして自ら覺え、書籍もなく記錄もなく師匠もなく、人々自得して忘れず、是れぞ誠の道の本體なる、渴して飮み、飢て食ひ、勞れて寢ね、覺めて起く、皆な此の類なり』といひしも、誠は宇宙の本德、人間の天性なることを言ふたのである。

扨て此の至誠の心を以て佛陀に歸依し奉り、依りて以て大安心を決定するのが、我が佛敎に敎ゆる所の眞信仰である。佛は萬德圓滿の妙體で宇宙の大德大用を具へ給ふ。故に、佛に歸依するは宇宙の大靈に歸依するのである。宇宙の大靈に歸依するは天地の公道に歸向するのである。天地の公道に歸向するは自

抑も宇宙には大知徳があるに依つて、萬法起滅の原則は秩序整然として行はれ、古往今來、一微塵の錯誤もない。その原理原則を認識する處に人間の知能が啓けて來るのである。又、宇宙には大情があるに依りて、能く萬法を生成發育すること母の其の子を育養するが如くである。天覆ひ、地載せ、火は熱し、水は潤ひ、陰陽相扶け、山澤氣通ず、人なき地、鳥なき里に至る迄、天地の惠みを蒙らざる所はない。吾々は此の大情の一分體を得て、喜怒哀樂の作用を起すのである。吾々の情が發達して、公平無私に其の能力を發揮するに至れば、終には宇宙の大情と合致するのである。又、宇宙には大意志がある。日月星辰の運行、春夏秋冬の循環、風雲の去來、水火の作用、皆な此の大意志力の現はれである。吾々も亦、此の大意志の一分體を受けて活動するので、此の活動が發達して無礙自在になれば、終には宇宙の大意志に融合するのである。

然れば、吾々は自然に宇宙の大德大用を具へて居るのであるが、それは宿世以來の罪障や現在の妄念の爲めに礙られて、德も用も完全にあらはれないのです。之を礙る惡魔は外より來るに非ずして、己れの心より生ずるので、是を自繩自縛といふ。それは貪・瞋・痴の三毒煩惱である。貪慾は非理に貪り求むる心、是は意志の病である。瞋恚は非理に怒り、恨み憎み嫉むの心、即ち情の病、愚痴は正しき理に昧くして物に惑ふ心、即ち知の病である。此の三病は一の至誠心を以て殆ど根治することが出來る。故に、至誠眞實にして、我見なく邪念なく虛僞なく妄執なき時は、自づと三毒の病を治するに依りて、本性を具ふる

信念の偉力

正信は萬德の本

世に信念ほど力の偉大なるものはあらじ、又、信念ほど迷想に陷ゐり易いものはない。正信は萬德の本で、迷信は百弊の源である。故に、吾人は極力迷信を排すると共に、極力正信を勸めねばならぬ。

元來、吾々の心には知情意の三作用がある。事物を知り分るは知、苦樂を感ずるは情、實行せんと欲するは意志である。此の三は心の働く方面より分けたまでゝ、獨立した能力ではない。併し、心には自然、此の三作用が備つて居る。此の三つの者が完全に發達して、而も合理的に調和されたのが、健全なる精神といふものである。その發達力が一層向上して、絕大無限の偉德を顯はすに至つたのが佛陀大覺の境界である。此の三大作用の源は何處にあるかといふに、本來、宇宙の大靈に備つて居るのである。吾々は宇宙の大靈の一分體であるから、自然に三大作用を有して居る。人は一個の小天地である。併し、修養訓錬の力は能く此の小天地を無限に發達せしめて、遂に宇宙の大靈と同體になることも出來るのである。

ことを、しみ〴〵と感ずることが出來る。

サアさうなれば、その嬉しさ喜ばしさは果してどんなでありませう。此の歡喜心が發しますれば、吾々が衆生利益の願行を營むのは、取りも直さず佛の御仕事を爲すのである。佛の御仕事を爲すのが、やがて佛の御恩に報ゆるのである。故に宗教的生活を、感謝的生活とも報恩的生活ともいはれます。此の生活を得る人は、常に歡喜の心に充されて居るから、朝夕に愉快に樂しく日を送ることが出來る。而して、信念の結果として其の希望は未來際を期するに依て甚だ悠遠である。之れと同時に、一期の終りに臨んでも前途に赫々たる光明を認むることが出來る。又、愉快なる人には如何なる辛苦をも凌ぐべき偉大なる勇氣を備ふるものであります。而して其の心は天地の大道に安住して居るから、自然に浮世の俗情に縛られず、常に大慈悲心を發して、起居動靜の上に拔苦與樂の作用を起すに依て、日々の行持が知らず〳〵忠義となり、孝行となり、恭儉となり、博愛となりて無盡藏であります。

以上十種の心的生活を一括して見るに、三惡業道は格別として、他の七階級を綜合して一大信念の下に攝入したのが宗教的生活である。故に此の中には奮鬪的勇氣もあれば、神聖なる榮譽、健全なる道義も備はり、而して超然凡俗を解脫して高尚なる理想に住し、同時に慈善的活動を現はし、自利々他相合して一大信念の下に歸入するのであります。故に吾々は、今後益々修養して、完全なる宗教的生活を營む樣に心懸けねばなりませぬ。

と謂ふのであります。此の至情が發しますれば、それが君主の大恩、父母の厚恩、衆生の恩分といふ他の三恩に對しても感謝せずには居られぬ様になるものです。例せば、食事の際でも『はしとらば天地御代の御惠み父母や主人の恩を味へ』で、自づと君主や父母の御恩を感ず、又『炭薪米麥豆に至るまでしづ山賤の汗と思へば』自づと衆生恩の大なることを感じ、同時に『食に飽き身の幸を悦びて飢に苦しむ人を憐れめ』で、衆生恩を感ずると同時に、衆生を濟度せんとの慈念を發する様になるのです。これが眞正なる菩提心である。

優婆塞戒經には發菩提心に五事あることを説かれた。それは一には善き友に親しみ近づくこと、二には瞋恚の心を斷ずること、三には師の教誨に隨ふこと、四には憐愍の心を生ずること、五には勤修精進すること。されど信念發起の人は、自然に此の五事を具ふるものであります。殊に今迄は前世の事も解らず、未來の事も知らず、現在は夢幻、而して此の身心は罪惡の凡夫なりと思ひし吾々こそは、常住不滅の佛性を具有する佛心佛德の器であると徹底確信したならば、その喜びは果して如何許りでありませう。瓦の變じて玉となり、礫の變じて黄金となりしよりも、百千萬倍の喜びではありませんか。それのみならず、佛の御身は目にも見えず、佛の御聲は耳にも聞えぬものなるが、信心堅固なる時はその功德に依て、佛の御姿も信仰の目にはあり〳〵と拜せられ、佛の御說法も信仰の耳には偉大なる響を感じ、『一稱南無佛皆已成佛道』、一念の信力は此の身心を擧げて佛の大光明中に投入し、行住坐臥、佛の御懷を離れぬといふ

信じ、之と同時に其の妙用は一團の慈悲光明であるといふことを信ずるが宜い。而して、次には御佛とはその大道の體現したる御境界なるを以て、佛の御心は常住不滅にして、佛の御德は慈悲攝取であるといふことを確信し、次には、吾々も亦た大道の中に生れたものであるから、吾々の身心も自づと佛心と佛德とを具有して居るといふことをも確信すべきである。次には、既に佛心佛德を具有して居りながら何故に斯くも凡夫の位置にまごついて居るかといふに、是れは全く煩惱妄念の所爲であるといふことを省悟し、且つ一たび至心に懺悔して、佛の御慈悲にすがり奉れば、御濟度を被むることは疑ひ無し、而して、佛の大誓願は常恒不斷に吾々を濟度せんと、佛の方より進んで、待ちこがれて居たまふのであるといふことを信ぜねばなりませぬ。

扨て前に述べたる如き各種の信念が綜合して、一團の大信念となりさへすれば感謝の念内に起り、報恩の情外に表はれ、無量の歡喜に滿ちて、無限の快樂が身に溢れるものであります。佛に大解脱の德あることを信じて之に歸依し奉る時は、此の信念の功德、自づから一切煩惱の纒縛を解脱するものです。佛に大慈悲の德あることを信じて之に歸依し奉る時は、此の信念の功德、自づから一切衆生に對して慈悲心を發動するものです。是が感應道交と謂ふのであります。

さあかうなると彼の西行法師が『何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるゝ』と詠ぜし如く、唯なにとなく有り難さが骨身に徹する樣で、嬉しうて〳〵ならぬものです。是は佛恩感謝の至情

は斷じて致さぬ。君主の大御心に反する業は斷じて行はぬ。卽ち己れの欲望を放擲して君主の御心に服從し奉るのである。租税を納むるも血税を拂ふのも、國法を守るも公益を廣むるのも皆なそれです。而して、此に却て自己の獨立と自己の發展とが現はれて來るのである。父母に對するの孝行も亦同樣であつて、自己尊重主義では決して孝道は盡されぬ。自己を忘るゝの時、始て眞の自己が獨露するのである。

併し、單なる利他的生活には必ずしも確實堅牢なる根據ありといふべからず、卽ち宗敎的大信念が無ければ利他の根據が堅固でないから、或は報酬を求むるの念が起つたり、若くは慈悲の行に倦怠の心が生じたり、又は非常に苦痛を感じたりすることが有り易い。玆に於てか、更に一歩を進むるの必要を感ぜずには居られませぬ。是れ則ち佛界生活であります。

佛界生活

第十に宗敎的生活とは所謂佛界生活である。固より吾々御互が一足飛びに釋尊や彌陀如來の如き萬德圓滿の佛身を生ぜられぬことは言ふ迄も無いが、もし金剛堅固の大信念が發得さるれば、自然に佛心に相應して佛光明の中に攝取せられ、佛界中の人となることが出來るものと思ふ。

此の位地に進まんには、先づ第一に、宇宙間に一貫の大道あつて、それが一切萬物の實體であるといふことを確信せねばならぬ。

はれぬ、而して此の慈悲心に人々本具せる情の作用であるから、如何なる人にも慈悲の性は備つて居る。情の中には他を可愛がる所の愛情がある。又、他の苦痛を自分の身に引較べて思ひ遣る同情といふものがある。此の同情と愛情とが慈悲心の基礎を爲して居る。されば親の其の子を愛する、夫婦・兄弟相互の愛情等は皆な天性です。又、人には自づと忍びざる心があつて、如何に殘忍無頼の者でも、惻隱の心を發して、覺えず他を救ふことあるが如きは、正しく同情心の流露です。加之、仔細に觀察して見る時は、此の天地間は一大慈悲體です。天は長へに覆ひ地は長へに載す、風あり新鮮なる空氣を送りて萬物活動の基を開き、雨あり普く濕ほして萬物生育の資を成す、日月は永く輝き、水火交々扶け、山澤氣通じ、陰陽相順ふ。是れ皆な慈悲の妙用ではありませぬか。故に、慈悲ある人は能く天地の心に通じ、慈悲なき者は自から天地の德に背くは自然の道理であります。されば萬物の靈長たる吾々御互は、常に慈悲の德を養なひて慈善の行を勵まねばならぬ。

世の中には、若し慈善をのみ事とせば自分の身が立ち行かぬなどと思ふ者があらうが、是れは大なる間違です。承陽大師も『愚人謂はくは利他を先とせば自らが利省かれぬべしと爾には非ざるなり、利行は一法なり普く自他を利するなり』と仰せられて、利他の德に依て始めて眞正なる自利が成り立つのである。試みに人道の根本たる忠孝の二德に就て見ても矢張さうです。君主に忠誠を盡さんと欲せば、自己の一身を捧げて君國の犧牲となるの覺悟がなければならぬ。如何なる欲望を抱くとも、君主の御命令に背くこと

通り、見聞覺知に觸れる所の一切萬象は、盡く諸佛の妙心、大道の實相と了することが出來る。彼の蘇東坡居士が禪理を悟得して『溪聲便是廣長舌　山色豈非清淨身』といふたのも、皆な理想的生活の妙味に觸れたのであります。

以上の二界は、如何にも氣高くして奥床しく皎潔なるものでありまするが、惜い哉、濟世利民といへる慈悲的活動が缺けて居る。卽ち佛心の消極的方面を體得しても、未だ積極的方面を閑却して居るから、若し此の地位にのみ安住して自ら足れりとせば、解脫の聖者とは謂はれませうが、弘誓の大士とは申されませぬ。

天地は一大慈悲體

そこで九には慈善的生活、卽ち菩薩乘の生活が必要になつて來るのである。慈善といへば、貧困者とか無辜の老幼を救濟することにのみ聞ゆるかも知れぬが、此處に所謂慈善といふは、濟世利民を事とすることであるから、意味が大さう廣くなります。故に慈善的といふよりも、利他的といふ方が適當であるかも知れませぬ。要するに、己れの一身を犧牲にして、他人に對し、社會及び國家に對し、他を利益すべき善行を施すことです。涅槃經には『諸有の善根は慈を根本と爲す』とあり、優婆塞戒經には『慈悲を離れて

ず一生禪せば四條五條の橋の上往來の人を深山木に見て』といふ境界に達せられます。

世の風流を好み文雅を愛する人なども、自づと此の種の妙味を感得して居る樣に思ふ。大我夢菴は悟達の人といふて居るが、その自記したものに『我むかし紙袋にて、夏は蚊をふせぎ冬は寒さを防ぎ、楮菴主人と云ひ、又は紙袋法師と云ふ、其の袋にかきける歌に、『世の中を袋一つに入れ替へて思へば輕き我身なりけり』とある。區々たる名利に役せられず、超然として天地の大道を樂む、こゝに解脫の妙趣が存して居ります。吾々も精神の修養上、一度は此の解脫の境に到達せねばなりません。

八に理想的生活、理想的といふ語は少し曖昧であるが、つまり高尙なる妙理を悟り、生死の因緣を明らめて宇宙の實相を了し、そこに安心立命して居る人のことである。彼の緣覺界の聖者は十二因緣を觀じ、生死の根本を究めて大自覺を得て居らるゝに類した境涯です。生も死も苦も樂も皆な因緣の法である。その因緣の根本は吾人の一心である。一心の本體を究むれば、法界平等にして毫末の差別もない。佛樣といふは此の眞理を大覺して眞理に合致せられた境界であるから、取も直さず佛樣とは眞理のことである。一草一木も眞理の所現ならざるはないからして、飛花落葉も佛の御光りと見るべきである。

普通謂ふ所の緣覺は、唯だ三世因緣の本末を觀じて、生死の原因たる無明の煩惱を斷ずるのであるが、我が佛敎に於ける理想的生活は更に一歩を進めて、十方世界皆な眞理の現相と體達するのである。

扨て此の觀心が圓熟すれば『鳥語蟲聲總是傳心之訣、花英草色無ㇾ非二見道之文一』と、菜根譚にもある

とは是れ人の惡む所なり、其の道を以てせざれば、之を得るも去らず、君子仁を去り焉んぞ名を成さん、君子は食を終るの間も仁に違ふこと無し』といはれたるは、聖賢の志を示されたものではあるが、吾々御互とても、道を重んじ道を貴び、道の爲めには、名譽も利益も犧牲に供して毫も惜まぬといふに至れば、是れ全く道義的生活の最高點に達したものであるから、人間の中の最も完全したる人間であつて、取りも直さず十善業道を實踐し得べき天上界の衆生と稱すべきであります。

併し、此の分際のみでは消極的・保守的・積極的・活動的でない。殊に、道義心が健全でも、物外に超然たる所が缺けて居つては、未だ凡夫地たるを免れぬ。故に、以上の六種は善惡の別、高下の差はあるけれども、齊く凡夫界であります。

七に解脫的生活、是れより上は、全く聖者の位置に昇つたのである。中に就いて、解脫的生活とは、萬境の爲めに束縛せらるゝ煩惱を解脫して、別に高尙なる天地に逍遙する底の人である。彼の聲聞界の聖者は、人我の見を離れて眞空の妙理を悟り、生死を超脫して寂滅無爲の鄕に入り、以つて無我の三昧に住するのであるから、解脫的生活は全く聲聞的である。人生は恰も夢の如し、何をか執し何にか着せん。徒らに名利の巷に走り、憎愛の波に漂ふは、繩を以つて蛇と誤るよりも愚なり。萬兩の黃金も、三寸息絕れば我が有ではなく、妻子眷屬も冥土の伴とはなり難し、無常轉變の世に處して、徒らに幻の如き相に迷ふ、實に憫れむべきの極みである。斯く觀じ來れば、世に處して世に縛られず、物に對して物に動かされ

自負の念をのみ逞しうする樣になる。即ち働かずに居ながら働き者と見せかけたり、卑き身分でありながら氣高い樣な風をしたりして、自づと虛飾虛榮の邪路に踏み込む樣になりたがるものです。

北越の豪傑河井繼之助の語に『無くてならぬ人となるか有てならぬ人となれ、沈香もたけ屁もこけ』とか『牛羊と爲て人の血肉に化せずば、豺狼と爲て人類の血肉を喰ひ盡せ』とか『身を棺槨の中に投じ地下千尺の底に埋了したる以後の心に非ずんば與に天下の經綸を語るべからず、道義道德も夫からの事だ』とかいふ激語がある。これは人生の無爲を誡めたる慷慨悲憤の言語ではあらうが、單にかういふ志であつたならば、天下に名を成すといふ目的の爲めには、毫も手段の如何を顧みぬこととなる。是れは甚だ危險なる思想と申さねばなりません。

併し、人道を守りて榮譽を重んずる時は、所謂『身を立て道を行ひ名を後世に揚げて父母を顯はす』といふ樣な立派なる道德的活動の基ともなるから、人の人たる言行は、此の人にして始めて實現せらるゝものであらうと思ふ。

凡夫と聖者

六には道義的生活、是れは名譽よりも、利益よりも、人道的義務を盡すを目的とするのである。彼の孔夫子が『富と貴きとは是れ人の欲する所なり、其の道を以てせざれば之を得るとも居らず、貧しきと賤しき

併し、人生の行路は恰も汽車の進行するが如く、如何程急速力を以て進行しても必ず履むべき鐵路があるに依て、少しでも脫線してはなりませぬ。若し履むべき鐵路を履まずして無暗に奮鬪するのみでは、畢竟、我見我慢の角突合となつて了ふ。黨派の惡弊などいふのも此の脫線的奮鬪の結果である。終には人を突飛しても、踏倒しても構はぬといふ樣な、橫暴の振舞をも敢てする樣になります。それでは折角の奮鬪も憐むべき修羅道に墮落し去ることを免れませぬ。而して單に奮鬪のみでは、一生涯を徒らに競爭の渦中に投じて、少しも安心といふことがないから、寧ろ憐むべきものであります。

五には榮譽的生活、是れは名譽を以て畢生の目的として居るものである。我が國の武士道の如きは、名譽を以て泰山北斗よりも重んじて居る。『いのちより名こそ惜しけれ武士の道にかふべき道しなければ』、『名のために棄つる命は惜からじ終にとまらぬ浮世と思へば』といふ歌の如きは、正しく武士道的精神の一面を詠じたものです。併し、眞の武士には武士の道といへる一大中心があるから、唯だ名を擧げ譽れを求むるといふのみではない。卽ち忠義の名譽を重んずるのであつて、不忠不義にして得る所の名譽は最も恥辱として居るのである。故に、名譽を貴ぶといふ心の底には、高尚優美なる一大信念が蟠つて居ることを忘れてはならぬ。

之に反して、唯だ自分だけ好い兒にならう、好い顏をしよう、好い位置に昇らうと思ひ、それだけが目的であつたならば、その目的を達する爲めに、他人の名譽を嫉んだり、他人の光榮を惡んだりして、高慢

二に貪婪的生活とは利己的欲張根性一方の人です。義理を忘れ人情を忘れて、唯々自己一身の利益をのみ目的として居るのであるから、欲の爲めには親をも欺き、友をも欺き、甚しきに至りては詐僞もやり、竊盗强盗をも爲すのである。法律上の犯罪者の大部分は、何れも貪婪的生活の結果であります。法華經には『諸苦所因貪欲爲本』とありて、煩惱の中にて一番惡い活動力を有する惡戯物は貪婪です。是れ正しく現世に於ける餓鬼道です。

三に醉狂的生活といふは、唯だ肉體の欲、即ち五官に觸るゝ一時的快樂にのみ耽る人をいふのです。飲みたい喰ひたい、面白い物を見たい面白い聲を聞きたい、寢たい休みたい、此の外には何等の目的も無い。誰れやらの歌に、『面影の變らば變れ年も寄れ無病息災死なばごつくり』只是れ丈が願望で、理想もなければ、信念もないのであるから、全で無我夢中の世渡りです。財産家の道樂息子や無敎育な勞働者などには此の種の人が多いものです。かういふ連中は此の世からなる畜生道です。

四には奮闘的生活、是れは生存競爭の激烈なる現今に處しては最も必要なる生活法です。政治にせよ、實業にせよ、敎育にせよ、宗教にせよ、總ての物が皆な競爭的態度に依て進歩向上するのであります。優勝劣敗は天地間の通則です。禽獸蟲魚より草木瓦礫に至る迄、優勝劣敗の通則に支配せられぬ物は一つもない。世の進歩につれて、益々競爭が激烈になるは當然の結果であります。況や何事も世界を相手の今日では、常に奮闘的態度を以て一日片時も油斷なく、他に拔ん出て優勝の位地を占むる樣にせねばならぬ。

三善道	人間界	榮譽的生活
	天上界	道義的生活
聖位	聲聞界	解脫的生活
	緣覺界	理想的生活
	菩薩界	慈善的生活
	佛界	宗教的生活

本より佛界は最勝圓滿の覺位であり、また菩薩界にも大權の聖者といふて、觀世音菩薩や文殊菩薩の如き御方もあり、其の他地上の菩薩や等覺の菩薩もあるが、今は利他的行持を專らとする君子を、且らく菩薩に配し、二利双運の人を佛界に配して見た迄であります。先づ凡夫の最下の方から略說して見れば、

一に怨嗟的生活とは煩惱と愚痴とに囚はれた人である。よしや相當の位地と資產とを有する人でも、諦めの惡い處から一種の愚痴に縛られて、誰れに向ても泣き言を吐かずには居られぬ樣になる。此の種の人は、大部分は自ら求めて苦痛を招くのであるから、どんな結構な果報を得ても決して滿足は致されぬ。『思ふこと一つ叶へばまた二つ三つ四つ五つと六かしの世や』で、分に安んじて足ることを知り、觀念の力を養ふことが無ければ一生涯苦み通しに苦まねばならぬ。其の結果が腦病を發したり神經衰弱症に陷たりするのであります。是は正しく此の世からなる地獄です。

成程、心に愁なく身も安穩であれば、不味物を食し粗服を被て居ても、言ふに言はれぬ佳趣のあるもの、之に反して、身寧からず心に憂があれば、錦を織て衣となし玉を炊て食となすも、決して煩悶苦痛は免かれぬものである。

故に苦を除き樂を得んと欲せば、先づ以て精神生活を豊富にすることが必要である。況や精神的生活が健全であれば、是れよりして合理的なる物質的生活力をも産み出すものであります。その精神的生活の最も完全に發達したのが宗教的生活である。娑婆即寂光淨土の樂みは宗教的生活に依つて得らるるものであります。

精神的生活の狀態

凡そ、人間界に於ける精神的生活の狀態を、佛教の所謂十界に配當して十種の階級に分けて見ることが出來ます。それを表示すれば下の如くになる。

凡位	三惡道	地獄界	怨嗟的生活
		餓鬼界	貪婪的生活
		畜生界	醉狂的生活
		修羅界	奮闘的生活

時に、一面には心を治め德を養ひて精神的生活の向上を期せねばなりませぬ。

菜根譚に『黄金至寶非レ爲レ寶廉節不貪吾所レ寶白玉奇珍不二是珍一知足無求自有レ珍』とあるは、精神的生活の狀態を消極的に述べたものです。卽ち黄金は世の至寶なるも、眞の寶とはいはれぬ。清廉潔白にして能く節義を守り、他に向つて非分の貪欲を起さゞるが、道德の基本であるから、それこそ眞の寶である。白き玉は天下の奇珍であるが、未だ以つて眞の寶とは稱せられぬ。足る事を知り分に安んじて他に求むるなきこそ、修養の土臺であるから、此の中に自づと眞の寶があるといふ意味です。

抑も、吾々人間は、肉體と精神と相合して始て人格を成して居るのであるから、何れを重んじ何れを輕んずるといふ事は出來ぬ。併し、人間の人間たる價値を判ずるには、必ず精神を以て本とせねばならぬ。況や佛教に於て三界は唯心の所造と示されてある通り、三界の諸法、苦樂趣きを殊にし淨穢相を分つも、其の源は精神如何に依るのであるから、吾々は先づ以て精神的生活の基礎を確立し、而して益々その向上發展を圖らねばなりませぬ。故に古來、聖賢の道を學ぶ者は主として精神の修養に努めたものである。

彼の菜根譚に『心無二妄念一身無二妄動一口無二妄言一君子所二以存一レ誠内不レ欺レ己外不レ欺レ人上不レ欺レ天君子所二以愼一レ獨』といひ『佛祖無レ奇但作二陰功一莫レ作レ孽神仙有レ法只生二歡喜一不レ生レ愁』といふの類も、皆な精神的修養の妙旨を示したるものです。『淸閑無事、坐臥隨レ心雖二淡飯粗衣一自然有二一段佳趣一紛擾不レ寧憂患纏レ身雖二錦袍玉食一只覺二得萬斛愁苦一』とあるは精神的生活の趣味を說いたものです。

宗教的生活

二様の生活

凡そ人間の生活には二様の狀態がある。一は有形の生活で、一は無形の生活である。卽ち物質的生活と精神的生活である。財產の多少、位置の高下等は有形に屬し、道德の有無、快樂の厚薄等は無形に屬して居る。

世には物質的生活の上では、萬人に優れたりと稱せられて居りながら、精神的生活の上では最も悲慘を極めて居る者も多い。如何に高位高官の地步を占め、金殿玉樓に住み、綾羅錦繡を纏ひ、山海の珍味に飽くとも、家庭の圓滿を缺くとか、一身に不道德の行爲があるとかすれば、それが爲めに、精神上にはどれ程の苦痛を感ずるかも知れませぬ。之に反して彼の顏囘の如く、一簞の食一瓢の飮、陋巷に在りながら、王侯貴人も及ばざる程の樂みを得て居るものもある。故に、物質的生活と精神的生活とが相反する樣な事實が澤山にあります。されば、我々の此の世に處するや、一面には勤儉力行して物質的生活の充實を謀ると同

測量することは出來ぬ。故に此等の小知・小見を打忘れて、前述の如き心得を以て信仰の門に入らねばなりませぬ。而して信仰一たび生ずれば、小智・小見を誘引して大智慧・大智見に向上せしむるものであります。要するに釋尊御開示の五事の心得は、吾人は暫時も忘るべからさる大切なる敎へであるから尋常に此の心得を守りて増々自他の幸福を増進したきものであります。

一生涯を通じて獻身的に信仰を相續せられた。此の信仰よりして前の如き歌が詠み出されたのであるから、こゝに一般の妙趣を感ぜられるのであります。

信仰を堅實に養ふには必ず左の心得がなければならぬ。一には人生の無常を觀じ、光陰の過ぎ易く人命の賴み少なきことを忘るべからず。二には因果の道理歷然として私なきことを信じて吾人の一擧一動も永久に滅すべからざる種子たるべきを忘るべからず。三には吾人の智識能力には限りありて決して現在の狀態にて滿足すべくもあらず。故に未來際を盡して其の發達を期せざるべからず。四には吾人の心念は貪瞋痴慢の爲めに汚濁せらるゝこと多くして甚だ慚愧すべきものなるを自覺すべし。五には佛の境界は大道德の凝聚體にして・廣大の願力と無限の慈悲とを有したまふことを深く信ずべし。六に佛は吾人永遠の大導師にして又吾人最高理想の表現なることを知識すべし。七は信仰は吾人安心の基本にして又道德的生活の地盤なることを知識すべし。大略以上の心得あれば自づと精神の奥底から有難いといふ感じが起り、その感じが精神に絶大なる慰安と滿足とを與へ、浮世の中に在りながら天界にも優れたる樂しみを得るものです。『何事のおわしますかは知らねどもかたじけなさに淚こぼるゝ』とは正しく信仰の表白である。此の信仰は自づと不可思議の靈力を現はして、廣大なる靈驗を蒙ることは疑ふべからざる事實である。

然るに、人智の進むに從つて、動もすれば信仰が冷却し易い樣な傾きのあるのは、知識の爲に本心の微妙を昧まされるからである。五年や十年、小知・小見を以て覺え込んだ考を以て、不可思議の佛智・佛德を

或日、知合の馬子が疎末なる大津繪の彌陀如來の一軸を持ち來りて、是れは翁に遣るから持佛にせよ」といふて與へければ、消炭にて一首の賛し『隘けれど宿を借すぞよ阿彌陀どの後生賴むと思召なよ』と書かれた。是れは禪の安心を示したもので、佛に對しては寧ろ孝順の上乘なるものである。御宿はするが御心配はかけぬといふのぢや。

後に京都の富豪角倉某の請に應じて同家に宿されし時、主人は坐禪の用心を問ふた。其の時、和尚は唯だ『醬油は土用の中に造つてよし味噌は寒の中につきてよし』とのみ言はれた。主人は大に此の語に感じて益々歸依したさうである。是れは雲門禪師に『如何なるか是れ塵々三昧』と問ひし時『鉢裏飯桶裏水』と答へられしと一揆である。

其の家に朝から晩まで念佛を唱へ通しに唱へて居る者があつた。唯だ口上の念佛のみで一向に信念の修練が無かつたからして、和尚は『念佛を強て唱すもいらぬもの若し極樂を通り過ては』といふ歌を書て與へられた。和尚は斯く出格の禪機ありしが、一面信仰心の深き事は凡流の及ぶ所ではなかつたのである。

和尚が二十歳餘りの時に、江戸に來り下谷の某寺に掛錫せし時、其の寺の垣が多く古塔婆を並べ繞したのであつた。和尚は勿體なき事に思ひ、日々のやうに、自分の受けたる施物を以て板を購ひ求め、古塔婆と取かへ、古塔婆は懇に誦經して隅田川に流した、住持は之を見て大に慚愧心を起し、殘れる古塔婆を悉皆川に流し、跡を悉く高塀に造つたと申すことである。和尚は是の如く三寶に歸命し三寶物を尊重し、

像であつたさうだ。了翁禪師、大雄山を開かれてより、毎朝、一里に近い極樂寺に往き本堂に入りて參拜される、極樂寺の住持は不思議に思ひ、其の故を御尋ねせしに、禪師は答へらるゝ樣、此の御寺の開山堂に安置せる百丈禪師の像は我が本師通幻禪師の御容顔生き寫しで、此の御像を拜すると面たり本師に參見するが如き心地せらる。依て朝參の意味で毎朝參拜するのであると仰せられた。住持は此の麗しき御心に感じて遂に其の像を禪師に呈せられたので、禪師は之を本師の尊像として日夕奉事遊ばされました。其の誠心の深くして厚きは得も言はれぬ有り難味を感ずるのである。一面には宇宙を呑吐する程の大力量を具へ、一面には赤子が父母を慕ふが如き優しき情がある。是れでこそ佛の大解脱と大慈悲とを體得したる境界と謂ふべきであります。

有名なる乞食桃水は筑後の人で、肥前島原の禪林寺に住職した方であるが、非人の敎化を志し、自ら乞食の仲間に入りて非人生活をして居られた。晩年、大津の町に小屋を結び、馬の沓を造つて之を賣て居られしを、肥後天福寺の開山となられし雲歩禪師が、細川侯の歸崇を受け江戸表に參る途中、肩輿にて大津を過ぎ、圖ず桃水和尙を見付け、落淚して挨拶に及ばれし時、和尙は禪師の手を執りて、老の身の再會は叶ふまじ隨分身體を大事にめされよ、又、主持も同前の身なれば勤め方大事ぞや、大名の歸依を受くればとて大名に醉はれなよ』といひ、袖を拂つて立去られたとある。大名に醉ふなとは權勢に迷ふなとの誡めです。

ば祈らずとても神や守らん』、誠の心には裏表もなく人我の別もない。誠と誠と相接する時は人も我も一體になつて了ふ。

塙撿校が或年、八月の十五夜に客を招きて月見の宴を開いた時、めづらしき名月であつたので來賓は終宵觀賞したが、撿校は盲目の悲しさ之を觀ることが出來ぬ。流石に其の身の不幸を感じて『花ならばさぐりても見ん今日の月』とやつた。すると臺所で襷がけにて働き居りし撿校の妻が、覺えず同情の涙を流して『十五夜は座頭の妻の泣夜かな』と詠じたので、來賓一同も覺えず袖をぬらしたとある。此等は皆誠心の回互であつて、盲目の夫も目明の妻も一體である。是を精神感應の妙理といふのである。吾々が此の誠心を以て大智慧・大慈悲の佛に歸命し奉る時は、小なる自己が大なる佛と感應して、佛の絶大なる智慧・慈悲の靈德が吾々の全身に漲つて來るのである。つまり信仰の力に依つて吾々の身心が靈化し去るのである。是に於て惡魔も近づくこと能はず、天神地祇が常に擁護して離れたまはぬぞ。こで信仰ある人には不思議なる天祐も加はるのである。信仰の力は山川草木をも靈化する。是れ山川草木の中に備つて居る天眞の靈氣と感應するからである。世に信仰ほど麗はしく神聖なるものはない。

迂衲の現住地なる大雄山最乘寺は了菴禪師開創の道場であるが、御開山堂の上壇には八祖を奉安してある。卽ち高祖と太祖と開山の師たる通幻禪師と開山以後五代の祖師とである。その中、通幻禪師の尊像は等身以上に大きなものぢやが、傳ふる所に依れば、元同村苅野なる臨濟宗極樂寺に安置せる百丈禪師の御

せよ』、『賣手の心にならず買手の心になれ』、『商品は賣らずとも親切を賣れ』といふ關係がある。氏の大成功は全く此の慈愛主義に依たからであらうと思ふ。若し此の慈愛が欲情の爲めに昧まされたり、若くは片偏頗なる愛情に陷つたりすると、親子相爭ひ兄弟相鬩ぎ、夫婦相背き、朋友相惡むといふ樣な恐ろしい現象を呈するに至るものである。

眞に慈愛ある者の目から見れば、天地間に他人といふ者は一箇もない。行基菩薩が『ほろ〳〵と鳴く山鳥の聲きけば父かとぞ思ひ母かとぞ思ふ』と詠ぜられし歌の通り、今こそは山鳥なれど過去の過去際を尋ぬれば、或は親子の關係があつたかも知れぬ。目に觸れる物、耳に觸れる物、皆な多少の夙縁が纒はつて居ることを觀ずれば、一切の境界、一として關係を有せざるはない。此の觀念に住して慈愛の誠を注ぐに依て、一切の男子は皆是れ父、一切の女人は皆是れ母、魚鳥昆虫の末に至るまで盡く因縁なきにあらず。故に一切の衆生を包容して一箇も餘さず救ひ助けんとの大慈悲大願行を生ずるものである。此の心こそ實に佛心なり菩薩種なりであります。

信仰

第五は信仰である。佛法僧三寶の功德を讚美して自ら喜び樂むのは信仰の響きであります。信はマコトと訓じ、一點邪曲の念を挾まず、玲瓏玉の如き眞實至誠の心がマコトである。『心だに誠の道に叶ひな

じ、又、扇面に『乞食長者一茶』と書して『紅葉のちりしく山にまろねして我も錦を身に纏ふ哉』と詠じた。芭蕉やらの句に『秋の暮られしやけふも腹立てず』とある。一休和尚が住吉に遊びし時『來て見ればこゝも火宅の宿ならめ何すみよしと人のいふらむ』と詠みしに對し、臥茶庵の老僧が返歌を造りて『來て見ればこゝも火宅の世なれど心おさめてすめば住吉』と詠んだとある。悲むも喜ぶも心の持ち方一つである。然るに凡夫は動もすると、己れの事ならば善くても猶ほ不足の念を起し、人の善事を見ては却て嫉妬の情を起すといふ風であるから、いつでも煩悶苦惱は免れぬ。故に吾々は『うれしい』といふ情を養ふて、此の情を以て他の善を資け己れの精神を麗しくせねばならぬ。

それから他人に對しては常に『可愛さうな』氣の毒なといふ同情心を起すことが肝要です。此の同情が完全に養はるれば、愚人を見ては益々其の愚を憐み、困窮する人を見ては之を救はずには居られぬようになるものである。以上の三情は皆な慈愛の源である。此の慈愛の情が長上に對しては孝順の德を現はし、苦惱に囚はれし衆生に向ふては慈悲の作用を起すのであります。大隈侯の所謂『人の爲めに善をなせ』とは畢竟、慈愛の活動です。中には人の爲め〳〵といふては自分の身が立つまいと案ずる者もあるが、是れは目前の利を謀りて永久の德を忘れた考へである。

米國のワナメーカー氏は同國屈指の富豪で、而して一代に成功した人なさうだ。其の店則を見ると全然、慈愛主義である。即ち店則として『店の繁昌よりお客の便利を圖れ』、『店の利益よりも信用を大切に

しい」と滿足するの情、三は『可愛さうな』と哀憐するの情です。佛教には菩薩三時の涙といふことがある。涙とは慈愛の情のことです。卽ち大君や佛や父母師長等に對して敬愛の念を生ずることと、他の善德を見ては歡喜の情を發することゝ、一切衆生に向つては哀憐の想ひを起すことゝである。

大君の鴻恩、父母祖先の大恩、佛陀神明の恩德、社會同胞の恩惠等に對して、有り難いといふ情を發することが深ければ、自然に忠孝の行ひ、信義の德、淨心供養の務めもせずには居られぬ樣になるものです。又、人の善を見ては歡び、人の幸運を見ては喜び、自己の境界を顧みては悅び、或は正法を聞て之を喜び、或は神佛を拜んで之を喜び、常に分に安んじ足ることを知り、其の職を樂み其の業を娯み、朝から晩まで喜び通しに喜ぶが宜い。

先づ第一には天地の間、無數の生物ある中に人身を受けたることの嬉さよ、又、同じ人類の中でも大日本帝國の臣民として生れ來りしは何といふ仕合せの果報であらう。殊に佛の正法に逢ひ奉りて生々世々の大安心を決定することの喜ばしさよ、百歲の日月は夢幻の如くなりと雖も、一日一時でも無漏の善根を修しなば其の功德は永遠の寶では無いか、此の世の中は、貪婪厭く無きの心を以て觀れば不足だらけであらうが、能く諦めて精神生活の妙趣を感ずれば、實に嬉しさに堪へぬものです。同じ仕事をしても、愉快に働く時は疲れをも忘れるが、愚圖々々小言を言ひながら働く時は苦痛を增すものです。

一茶は『花をめで月に悲しむは雲上の人のことにして』と題して『おらが世やそこらの草も餠になる』と詠

に生るものぢや』といはれた。其の時、細川幽齋公が家康公に對して『御高說實に感じ入りました、併し正直は根幹でありますれば拙者試みに枝を付くるでござらう、其の枝は三本ある、上の枝はあさおき、中の枝はかせぎ、下の枝はかないむつまじき、是れにて美事なる金の生る木が出來まする』と申されたので、家康公も深く喜ばれたといふことである。是れ則ち正精進の相を說いたものである。若し此の勤勉を厭ふて、樂に暮さう、寢て果報を待たうと思うたならば、此の身體は全く無用の長物となつて了ひます。

慈愛

第四は慈愛である。慈愛とは他人に對して親切を盡すの情であります。此の情こそ一切道德の根源です。此の情を長養すれば佛の大慈悲ともなる。慈悲は佛心の光明である。

凡そ生きとし生ける者を衆生とも有情ともいふ。有情とは情識を有するから名づけたのである。殊に人類は情が最も能く發達して、殆ど生活の中樞となつて居ります。吾々は全く情に依つて生きて居る。此の情を導くものが智で、此の情を活動さす者が意志です。情が無ければ智も意志もありませぬ。然るに情には色々の作用があつて龍蛇混雜であるから、善く之を護るに修養を以てせねばならぬ。

情作用の中に於て最も大切なものが三つある。一は『ありがたい』といふ恩に感ずるの情、二は『うれ

るにも拘はらず、非常に冷遇して、故らに薄き蒲團を與へた。爲めに終夜眠ることも來出なんだが、氏は増々志氣を勵まして、寒燈の下に、『若き時遊びに心あるならば後の難儀と思ひ知るべし』といふ歌を讀まれた。

文化元年、甲府に至りて某家の裏土藏を借り受け、始て商業の地を定めたるが、其の時、軒場の風鈴を見て『かせがずにぶら〳〵してはなりませぬ一文錢も賴む身なれば』と詠ぜられた。以上の二話は後世子孫の忘るべからざる活教訓であるから、同家にては此の圖を描きて遺訓に代へて居る。

氏は斯くして資産を造つたが、天保七年の大飢饉には多年の儲蓄を散じて窮民を救助する等、常に慈善に其の力を盡したのである。三十五歳の時始て妻を娶り家屋をも新築したが、其の新築に先だちて京都東山兩親の墓碑を建てられ、毎年同地に至る毎に必ず參拜し、墓前に跪きて一家の情況を告るを生前に於けるが如くであつた。或書に、氏は『一寸の絲五寸の繩』といへるを家憲の大本とせられしと記してあつた。萬延元年に病歿したが、其の遺志は現代に至りて益々麗しく實現されて居るは洵に目出度き極みです。

グラッドストーンは『予は常に一小册子を懷中する事を忘れず、是れ余は不慮に來る一分の空時間をも逸せざらんが爲めなり』といはれた。古歌にも『夜も猶業をつとめよ世の中は寢てまたぬこそ果報ありけれ』とある。徳川家康公が或時近臣に向つて『御身達は金の生る木を知れりや、金はしやうじきといふ木

とは翁の詠歌である。

東京日本橋區伊勢町に塚本家の經營に係る立流な呉服店がある。主人は江州商人で、滋賀縣神崎郡塚本區内に本宅があつて、東京及び京都等に盛んなる店が開かれて居る。現代主人源三郎氏は熱心なる佛教信者で人格高く志操正く、東京の店にては明治四十四年頃より、毎月法話會を開て店員の修養を奬勵せられ、大内居士や南條博士等の諸名士が出演せられて居る。迂衲も此の程法話を勸めた。店員一同の眞面目なる態度を見て一層主人公の心行を奥床しく感じた。

塚本家の繁昌を來たせしは今より四代前にて、有名なる塚本定右衞門氏である。氏は法號を定悦と稱し、寛政元年、神崎郡川並村に生る。其の父の教悦は布洗ひを業とし細き烟を立てて居られた。氏は其の三男であつたが、幼年の頃より人夫となつたりして隨分苦辛を嘗めたことであつた。十一歳の時父を喪ひ、十九歳の時始て行商に志し、僅に五兩の金を資本として小町紅を仕入れ、奥羽、關東を遍歴した。或書に依るに、氏は行商中、峠や急坂を過て村落に入る時は却て喜ばれたさうだ。なぜ喜ぶかといふに路の困難なる峠などが途中にあると、自然、他の商人の入込むことが少ない。是れ自分の商賣に便宜を與へて呉れるものぢやといふて喜んだのである。

或時、奥州街道なる野州蘆野驛の旅館に宿つた。明治十四年頃迄は貸座敷を兼業にせる宿屋が澤山あつた。蘆野の旅亭にも娼妓が居たが、氏は浮れた心なきまゝ遊興の勸めに應ぜなんだ爲め、晩秋の寒き時な

御經の中には正精進と邪精進とを示されてある。精進とはクワシクス丶ムと訓じ、純一無雜に勤修勉強することである。道に順ふて勤むるを正精進といひ、法に背いて進むを邪精進といふ。故に、吾々は常に精力を勵まして勉強するに當り、先づ正邪を揀別して正しき道に向て進まねばならぬ。又、勉強するには必ず愉快に勤めねばならぬ。いや／＼ながら勤むる樣では、決して成功を見ることは出來ぬ。

古の佛祖の精進力の如きは實に恐れ入つたものである。釋尊が苦行せられし時は、鵲が御頭に巣を造り、蛛が眉毛に網を張り、膝下には蘆葦が青々と生ひ出したとあり、承陽大師は坐禪といへる題にて此の事を詠じたまひて『頂に鵲の巣やつくるらむ眉にかゝれるさゝかにの絲』と仰せられた。承陽大師も支那の天童山に上り、如淨禪師の會下に在りて御修行の折は、三年の間、少しも横になつて御休臥なさることはなかつた。支那の靜琳禪師は坐禪辨道の時、睡魔を除かんが爲め萬仭懸崖に横出せる老樹の上に結跏してござつた。慈明禪師は汾陽の會下に在りし時、晝夜睡らずして坐禪し、睡りを催す折は錐を以て股を刺して奮勵せられた。何事も覺悟と勇氣とに依りて難事をも敢てすることが出來るものだ。『爲せば成る爲さねば成らぬ成る事の成らぬは己が爲さぬなりけり』である。

二宮尊德翁は『各々其の身に於て朝夕飮食の奉養を輕くして身體を勞働すべし、必ず奢りて酒食の美を好み怠りて身を安逸にすべからず、奢らず怠らず斯の如くすれば第一に德を養ひ、次に身を養ひ、次に財產を養ふべし、之れ三の益なり』といはれた。『天つ日の惠みつみおく無盡藏鍬で掘り出せ鎌でかりとれ』

る。吾々が此の世に在る。常に種々の境遇に接せねばならぬ。順境もあらうが逆境も必ずある。樂しき時もあらうが苦き時も必ずある。順境を貪り樂味に着するよりして貪欲を增長し、逆境を惡み苦痛を厭ふ所より瞋恨を發し、遂には煩悶中の人となるか、さもなくんば放蕩懶惰の者となり易い。然れども、前途に高遠なる理想があつて其の志氣が堅實であれば、逆境に處しては益々奮勵し、順境に接しては彌々氣節を琢磨するものです。

明治天皇の御製には『思ふこと思ふがまゝにならざるがかへりて人の身の爲めにこそ』といふ御教訓がある。艱難は最善の敎師なり、梅は寒苦を經て淸香を發す、人は困難に處して始て其の志しを錬ることを得るのである。若し安樂なる果報を受けたらん者は、自ら求めて艱難を學ぶが宜い。然らざれば幸が却て不幸となることもあるものである。『世路の風霜は吾人心を錬るの境、世情の冷煖は吾人性を忍ぶの地、世事の顚倒は吾人行ひを修むるの資』とは菜根譚の語である。何でも人間は艱難を樂む程の覺悟を有せねばならぬ。是の如く能く忍耐力を養ふことを得ば、諸善功德は悉く此の中より生れ出づるものである。

勤勉

第三は勤勉である。忍耐は內的精力で勤勉は外的精力である。天は萬物を人に與へずして働きに與ふ。勤むる龜は怠る兎に勝つ。勤勉は實に幸福の母、成功の資源である。

近徑です。

釋尊は、過去世に於て忍辱仙人となりて堪忍を行はれし時、歌梨王の爲めに手足を截斷せられたれど更に腹は立たれなんだ。又、佛弟子富樓那尊者が西の方輸盧那國に遊化せんとて此の事を釋尊に申し上げし時、『彼地の人は凶惡にして罵詈や侮辱を行ふが其の時は何とする』『罵詈を蒙むるも猶ほ打たれざるを喜びます』、『打たれたらば何とする』『殺されざるを喜びます』、『若しも殺されなば如何』、『死の緣は無量なり、幸にして今殺されたるは、彼の國人が我れに解脫の道を與へられしものと觀じて喜びます』、其の時、釋尊は『善哉富樓那、行け、汝能く忍辱を學べり、能く輸盧那の中に住止することを得ん』と仰せられて、西行を御許し遊ばされました。此等の因緣を觀じて慈悲心を養ふ時は、心も廣く氣も柔しくなりて、格別の力を費さずして能く忍辱の德を成ずるものである。

雜寶藏經には忍の五德を示されてある。一には『恨なし』、二には『呵なし』、即ち惡口の過を離る、三には『衆の人に愛せらる』、四には『好名聞あり』、即ち柔和の德は必ず人望を得べし、五には『善道に生ず』、此の世に怨恨憎嫉の念なければ未來亦勝れたる果報を受くべきは當然である。熊澤蕃山先生も『人は咎むとも咎めじ人は怒るとも怒らじ怒りと欲とを捨てゝこそ常に心は樂しめ』とありて忍耐を勸められて居る。

次には風雨・寒暑・飢渴・其の他所有艱難を忍びて忿怒憂愁の念を起さゞる、是を法忍と稱するのであ

的・宗教的の修養が大切です。其の修養の第一として先づ忍耐力を養なはねばならぬ。

凡そ此の世の中は一面から觀れば全く苦痛の世界である。艱難身に逼り迫害身を襲ひ、天には不測の風雲あり、海には不慮の風波あり、時に寒熱あり、事に顚倒あり、萬事萬境交々此の身を取り圍みて、吾々は或る意味に於て、常に四苦八苦の重圍の中に居る樣なものである。故に吾々は種々の苦痛を忍ぶのが本然の務めであるといふ覺悟を持たねばなりませぬ。吾々は樂をすることの出來るもの、安逸は得らるゝものと思ふて居たならば、遂には些々たる苦痛の爲めにも非常なる煩悶を起し、遂に苦痛に縛せられて、悲慘なる生涯を送る樣になるものです。

此の苦痛に打勝つの道は忍耐の力である。忍耐の第一は妄りに腹を立てぬ樣にするが宜い、如何なる人にも忿怒の情はあるが、此の情を適宜に制せざれば終には愚にもつかぬ事にまで腹を立てる樣になります。『朝夕の飯さへ硬し柔かし思ふまゝにはならぬ世の中』、斯く諦らめて居れば、縦や心に契はぬ事ありとも妄りに忿怒の情を發する樣な事はない。意志力が強健で、自ら自己の感情を制するの力があれば妄りに腹は立たぬが、實際に當ると中々六かしい。多くの場合、感情を制するどころか却て感情の爲めに支配され易いものです。故に堪忍の第一は自分の心を廣々と持つが宜い。心が狹いと、感情が些々なる刺撃に逢ふても勃發して、殆ど氣違の樣になりたがるものです。忿怒は分時の狂氣なりともいふて、妄りに激怒するは決して健全なる心的現象ではない。心を廣々と持つことは佛祖や聖賢の大慈悲・大仁德に歸向するのが

ば一日生を保てば兆民一日の利を得べし』と謂はれたさうです。伊藤仁齋先生の歌にも『思ひいれば此の身の外に道もなし身を守るこそ道を知るらめ』とある。

然るに近年は、年毎に自殺者の數も殖えて來る樣な現象があるさうだが、是等は國家の將來に鑑み大に憂うべきことである。釋尊は常に殺生を嚴禁せられたが、或る弟子が『人を殺すは罪ならんが自殺は罪となるまじ』と申して御尋ねせし時、釋尊は自殺も殺生と同罪ぢやと仰せられたことがある。自殺は自己の責任を沒却するもので、不孝不忠の罪は頗る重いのである。又、國民一般の健康狀態も近年は甚だ面白からぬ成績があるとやら聞て居る。此等も御互に深く警戒して、益々健康を進め長壽を保ち、以て此の貴重なる身體を有益に活動せしめねばならぬ。

忍耐

常濟大師は曾て『人々悉く道器なり、日々是れ好日なり』と御示し下されたが、實に吾々の身は道の器です。此の身體を借りてこそ世間の道も佛法の道も實現せらるゝのである。古人が『善を行ふに凶日なく惡を作すに良辰なし』と申せし如く、道を行なひ德を修むること程目出度はない。此の道器を道器として用ゐて往けば日々是れ好日である。吾々は動もすると道器たるべき身を以て、惡を行ふの機械となし、爭を招くの道具となし、他人を苦しむる器となすから困るのである。それを道器たらしむるには、道德

である。

併し攝生の方法として單に營養物の供給や空氣や運動の力のみを的にしては十分の效果は擧られぬ。大隈侯爵は人壽百二十五歳説を主張せられて居るが、曾て長壽を保つの秘訣として五箇條を擧げて示されたさうだ。即ち一に『怒るな』、二に『愚痴を言ふな』、三に『過去を忘れよ』、四に『將來に望みを置け』、五に『人の爲めに善を爲せ』といふのである。蘭醫杉田玄白翁も養生七則を制して『昨日の非を恨悔すべからず、明日是れ慮念すべし、飲と食とは度を過ごすべからず、正物に非ずんば苟も食はず、無事の時は藥を服むべからず、壯堅なるを頼みて房を過すべからず、動作を勤めて安を好むべからず』といふてある。されば精神と物質との兩方面から營養を採らねばならぬ。阿含經に佛は『無病は第一の利、知足は第一の富、善友は第一の親、涅槃は第一の樂』とも仰せられた。西諺にも『身に健康を所持せざる人は何物をも所持せざる人なり』とある通り、一身の健康を害し生命を夭折する時は、菩提の源泉を涸らし、功德の福田を失ふものである。

併し唯だ無意味に長壽を欲し健康に誇るべきではない。釋尊が『輕想を生ぜず』と仰せられしは、菩提の種子、萬物の靈長たる人身を尊重して、此の生涯を聖く淸く麗しく送り、而して未來に至りても盡くることなき勝功德を得よとの御示しであります。濟門の盤珪禪師は元祿年間に遷化せられし高德であるが、晩年には一層衞生に注意し、三度の飯も衡にかけて食せられた。常に人に語りて、『生きて益ある者なら

と云ふのであるから、換言すれば自重である。二には『自身苦を受けて心厭悔せず』是れは衆の苦痛を堪へて厭ひ恨むの念を起すなといふのであるから、換言すれば忍耐である。三には『勤行精進休せず息まず』是れは道を行ひ善を勤めて休息するなといふのであるから、換言すれば勤勉である。四には『衆生無量の苦惱を救濟す』是れは一切衆生の苦惱を救ふといふのであるから、換言すれば慈愛である。五には『常に三寶微妙の功德を讃す』是れは佛法僧の功德を讃歎して中心より敬崇せよといふのであるから、換言すれば信仰である。釋尊は先づ以て自重と忍耐と勤勉と慈愛と信仰との五事を擧げて修養の標的を御敎へ下されたのである。

先づ第一に自重といふことが最も肝要です。身體髮膚は之を父母に稟く敢て毀傷せざるは孝の始めである。若し此の身を輕んじて自暴自棄するが如きことあらば、不孝不忠の甚しきものである。人道を全ふするも智德を增進するも、皆な此の身體あるが爲めです。故に承陽大師は、肉身を惜むに非ず法身を惜むなりと仰せられた。業を勵み産を興して父母祖先の德に酬ゆるにも、分を守り職を盡して御國の大恩に報い奉るも、都て此の身力に依らざるはない。されば濫りに飲食を恣にして健康を害するのも、益も無きに危險に近づきて身を傷なふのも、放逸に耽りて空しく一身の能力を消費するのも、非行を敢てして此の身の譽れを損ずるのも、皆な此の身體を疎末にするのである。故に『養生の人は食物と飮物とを擇らび、勉强の者は朝寢と晝寢を戒む』とも『健康は金銀財寶に勝る、健康に比較すべき富貴なし』とも言ふ

修養の五大聖訓

自重

優婆塞戒經といふ御經がある。優婆塞は梵語、譯して近事男といふ。近事とは佛弟子となりて佛に親近奉事するの謂である。故に近事男とは男子の信者といふことです。故に、在家信者を對機として道德上の規律を御示し下された御經であるから、佛教信者の精神を修養するには、取分けて適切なる御教訓が充ちて居ります。心ある方々には是非拜讀して戴きたいと思ふ。

その經文の中に菩提の種子を長養するに五事の心得あることを示されてある。菩提の種子とは佛の種である。佛の種とは道德性である。道德の本性は誰人にも具はつて居るが、唯だ物慾の爲めに蔽はれたり、若しくば修養力の足らざる所より、その德を顯はすことが出來ないのである。故に、內、物慾を制し、外、修養に努むることは、實に人類として一番大切なことであるから、是に對する心得を五箇條に分けて示されたのだ。その五箇條とは、一には「己身の中に於て[illegible]

である。

是の如き位地には、容易に達することは出來ぬが、併し、縱ひ一行でも之を修得して怠らざれば、一部分なりとも聖者の位地に觸れることが得られるものです。太田錦城は『平日は無道の者たりとも、乞食非人に一錢を與うる、此の一事は堯舜文王の心にして堯舜文王の化身なりと知るべし』といふた。まして眞實、修養に志ざし、常に道を行ふことに努力し去らば、佛菩薩一分の功德を實現することの出來ぬといふ譯もない。併し、是れはどうしても剛健なる意志力に待たねばならぬことであります。

此は、國民としては、何人も必要なることではありますが、殊に官吏・公吏の方々には一層切望する次第であります。惟ふに官吏・公吏の方々は、複雜なる社會全般に對しては明鏡の物を照すが如く、公平無私にして是非を誤らず、公衆に接するには春風の萬物を生育するが如く慈愛の精神を以てし、兇惡に對しては、危險前に逼るも、能く犧牲的精神を發揮して民人を保護し、社會をして深く信賴の念を起さしめねばなりません。これには平素專ら精神の修養に努むることが最も大切であるのであります。

中意志力を完全に發動する事が六かしいものです。我が禪門に於て痛棒熱喝、頗る辛辣なる手段を以て接得するのも、一面には慥かに大意志力を鍛練せんが爲めである。

『古來、三等の人あり』と說てある。卽ち、三種の人格である。其の一は『善を善として行ふこと能はず、惡を惡として去ること能はず』是れは知識餘りありて意志力の之に伴なはざる人である。徹底したる知識には必ず實行力の伴ふものであるが、浮ツ調子の知識は、兎角、耳より入りて口より出で、耳口三寸の間に跼蹐して居る。是を小智と名くるのである。要するに知行合一して活動を起すのが眞の大意志力である。啻に、進むのみならず、退いて己れを守るのも亦意志である。故に、忍耐も亦意志力の發動であります。

そこで、第二の人格は『力めて善を行ひ力めて惡を去る』の人である。卽ち、非常なる努力を以て、惡に遠ざかり善に進むのである。此の時に當りては、自から己れの心に打克つことも大切であるし、自ら欲望を制伏することも必要である。明治天皇の御製にも『易くしてなし得がたきは世の中の人の人たる行なひにして』と御諭しあらせたまひし如く、從晝至夜、間斷なく修養せねばならぬ。

是の如く行住坐臥、精進努力して止まざる時は、遂には任運に善に進み、自然に惡に遠かる樣になるものであります。是れ卽ち第三の人格である。是を『惡を去りて惡を忘れ善を行ふて善を忘る』といふてゐる。中庸に『誠は勉めずして中り、思はずして得、從容として道に中るは聖人なり』とあるのは、第三人

自己を脱落するといふのも枯木や石塊の様になることではない。小さな我見を振り捨てゝ、大なる道に委ぬることである。『お腹が空ても飢じう無い』とは實に此の狀態を道破した言葉です。お腹が空けば飢じいのは當り前であるが、君の御爲め、國の爲めと思へば、飢じいといふことを忘れて了ふ。吾々日本國民は、常に君國に對する忠義といふ大道に全身を捧げて居るから、事に臨んで偉大なる勇氣を發します。既に我見我執を超越して、大我に歸したのであるから、全身の勇氣が自づと道德の結晶となつて現はれる。

軍人の御勅諭に『軍人は武勇を尙ぶべし』とある。下に、『武勇には、大勇あり小勇ありて同じからず、血氣にはやり、粗暴の振舞などせんは武勇とは謂ひ難し』と戒しめられてあるが、是れは我見より出でたる勇氣であるからである。『軍人たらん者は、常に能く義理を辨へ、能く膽力を練り、思慮を殫して事を謀るべし、小敵たりとも侮らず、大敵なりとも懼れず、己れが武職を盡さむこそ誠の大勇にはあれ、されば武勇を尙ぶ者は、常々人に接するには溫和を第一とし、諸人の愛敬を得むと心懸よ、由なき勇を好みて猛威を振ひたらば、果は世人之を忌嫌ひて豺狼などの如く思ひなむ』と御諭したまふてある。

義理を辨へ思慮を殫すは智である。溫和を旨として愛敬を存するは情である。智と情とが調和せられ、其の上に勇氣を起すこそ、眞の武勇といふべきである。此の武勇の德を萬事萬端の上に應用することが出來たならば結構であるが、所謂『三歲の童子も之を知ると雖も、八十の老翁も之を行ふこと難し』で、中

にも行なはれる。故に、天地の恩をも感じ、雨露の恵みにも感じ、道具の取扱ひ、水の使ひ方を始め、一粒の米にも、一枚の紙にも、始終ありがたい、勿論ない、可愛いといふ情が注がれて、それからして、風流も趣味も現はれて來るものです。卽ち逆境に處しても恨みず、禍を受けても苦ます、世に在りながら蓮華の如く淸く麗はしき身となることも出來るものであります。

意の修養

最後に意志の修養である。言ふ迄もなく意志は實行の力である。如何に立派な智と情とを有するとも、實行の力なき時は、遠山の花を見るが如くにして、實際生活上には何の役にも立たぬことゝなる。文弱に流るゝなどといふことは、知識の一方に偏して意志力を缺くからである。

北條時宗公は蓋世の英雄であつたが、少年の時代には甚だ怯弱であつたとある。そこで公は、祖元禪師に參じて大に勇氣を養はれた。一番最初に相見せられた時、『人生の憂患は怯弱を以て最なりとす、如何にして脫すべきや』と問はれた。禪師は之に答へて『脫すること最と易し、怯弱の來處を閉づべし』卽ち臆病の出入口を防げよといふのであつた。公は大に之を惑ひ、更に『怯弱何れより來る』と問はれた。禪師は直ちに『時宗より來る、明日より時宗を放擲し來れ』と答へられた。卽ち自己脫落の要を示されたのである。

次に『勿體ない』と感ずる情、是れ亦大切である。此の身は父母恩力の所成なりと思ひなば、髪の毛一筋でも疎末にはならぬ。草も木も、米も味噌も、天地の恩力と多くの人の辛勞とに依て出來たものと感ずれば、勿體なくて、紙一枚でも疎略にはならぬもの、勿體ないと感ずる上から生じたる儉約の德こそ、全く人間の一大美德です。慳吝愛惜の念より發する儉約には、種々の弊害が附隨するものです。一粒の米でも勿體ないと感じて之を護念する時は、其の中に自づから大なる道德の光りが輝いて居る。『身體髮膚之を父母に稟く、敢て毀傷せざるは孝の始めなり』と孝經にあるのも、全く勿體ないと感ずる情に於て自然に現はるゝ孝道であります。

次に『可愛さうな』と思ふ、即ち同情の念、是れは慈悲心の基です。弱者を視ては憐れみ、迷へる者、苦しめる者を視ては哀れまずに居れぬから、自然に親切を盡して救濟に努むるやうになる。『雪の日やあれも人の子樽拾ひ』心の奥底に麗はしき同情があつて萬事に處して親切なれば、其の人の言行は自づと道德的になるものである。

以上の三種は、所謂『眞の溫情』にして吾々は何事に依らず、必ず此の三種の情を完全に發動する樣に致したきものである。唯だ、一方に偏したり、餘りに執着的になつたりすると、魔道に陷ることがある。故に、どこ迄も正を以て亨る、即ち誠の道を守ることが肝要です。

眞情の妙用は、獨り人類に對してのみ現はるゝのではなく、自然に、動物にも植物にも牆壁、瓦礫の上

舟を覆へす、水順なれば舟浮ぶ、違へば則ち沒す』と言はれました。實に情は人にとりて最も大なる力である。

人を愛するのも情であれば、人を憎むのも情である。身を殺して仁を爲すのも情であれば、道を樂しんで老を忘るゝも情である。情は能く正成を生み、重盛を生み、清正を生み、良雄を生む。之と同時に、將門を生み、清盛を生み、光秀を生み、更に石川五右衞門をも熊坂長範をも生んで居る。故に貴ぶべきもので、又、恐るべきものである。

凡そ情の發動は千差萬別であるが、中に就て三種の情を健全に修養せねばならぬ。即ち『有がたい』といふ情と、『勿體ない』といふ情と『可愛さうな』といふ情とである。大君に對し、父母祖先に對し、師長に對しては、中心より其の恩に感じて、常に有り難い〱といふ情を存せねばならぬ。權利とか義務とかいふことは、人間の行爲に對立する標準に過ぎぬ。中心より湧き出づる情は權利とか義務とかいふ範圍を超越した、絶對的のものであります。古人が『君のため世のため何か惜からんすてゝかひある命なりせば』、『子を思う道にまどひて今ぞ知るちゝぶの山の深き惠みを』などゝ詠じ、大江千里が『秋の日は山の端ちかくくれぬ間に母に見えなん、あゆめわが駒』と詠ぜしが如きは、有り難いと感ずる眞情の表はれであります。更に進んで、天地の惠みを感じ、神佛の御威徳を感じて崇敬の念を捧ぐるのも、皆此の情の作用である。

久の理想を確立し、人の人たる道を明らかにすることが大切である。

我が佛教から申せば、先づ以て生死の問題を解決して不滅の大生命あることを自覺し、因果の法則を明らめて眞理大道の上に精神を置き、世界の大勢と國家の進路とを心得て、國民道德實行の基礎を確めるが眞の大智であります。

情の修養

次には情の修養である。人は天性に苦樂を感じ憂喜を感ずるの情がある。人は情に依て活き情に依て動く、情は實に人の人たる所以の樞機であります。君臣の關係も、父子の關係も、夫妻・兄弟の間柄も、皆な此の情あるが爲めに、人としての意味が生ずるのである。然らざれば、人は全く機械と一般で、何等の價値をも有せぬことゝなる。

たゞ、情といふものは、多くは盲動的に發動するものであるから、動もすれば邪欲となり、忿怒となり、執着となり、愚痴となる。故に、之を導き且つ調うるに智慧を以てし、之を遂行するに意志の力を要するのであります。されば、正しき情は能く道德の源泉となりて人に快樂を與へ、又は信仰の核心となりて人に安心を與うるものでなければならぬ。黃龍禪師も『人は舟たり情は水たり、水能く舟を載せ亦能く

更に進んで綿密なる研究を遂げたならば、猶ほ幾多の缺點があるに相違ない。而して其の缺點は、古來よりの風習から來たのもあり、教化の不行屆から生じたのもあり、家庭の產み出したものもありて、種々樣々であるが、詰る處は、精神の不健全と智識の缺乏とに基くものである。されば、健全なる國家の發展は、必ず優良なる國民の努力に待たねばならず。優良なる國民を作ることは、精神の訓練に依らざるべからず、精神の訓練、是れ實に人々分上の重要事である。それには、先づ以て深廣なる知識を啓發することが必要です。

元來、知識、卽ち智慧には根本智と方便智との二つがある。之を通俗的に說明すれば、根本智とは、自分を知るの智慧である。卽ち、吾は是れ何物ぞ、吾は何事を爲すべきや、何を以て目的とすべきといふことを知るの智慧である。方便智とは、運用の智慧である。科學的知識の大部分は此の運用の智である。併し、根本的智慧が不明であると、如何に運用の智慧が長じて居ても、動もすれば之を亂用するの虞れがある。

而して、眞正なる智慧は實行の力を有するのでなければならぬ。忠孝仁義の道を知つたのみでは役に立たぬ。宗教や哲學の蘊奧を究めたからとて、それのみでは矢張り役に立たぬ。行誡上人が生意氣な女の歌人を警めて『歌を詠む女房などはもたぬもの亭主を尻に敷島の道』と詠ぜられしが如く、如何に文學の才に富みしとて、人道を守らぬ樣では、徒らに他の寶を算へると一般である。明治天皇の御製には『正しく

んと欲す」といひ、又「一心に臍子裏に在るを要す」といふてある。要するに精神を訓練して妄動せしむるなといふ教訓です。心此に在らざれば、見れども見えず、聞けども聞えず、食へども其の味ひを知らずで、精神が浮々して、常に外界に轉ぜられる樣では、決して其の微妙なる力を發揮することは出來ぬ。

西洋の某學者は、我が國の青年に於ける缺點十條を擧げて、一には厭世思想を起し易い。二には正直の德を重んぜぬ。三には困難に打克つ念力に乏しい。四には島國根性を脱せぬ。即ち些細な事に目をつける、人の揚足取をしたり、人にけちを付けて見たがるやうな癖がある。五には不品行である。即ち男女の交際等が純潔で無い。六には批評を好む。即ち人を惡さまに批評したがる。七には猜疑心が強い。即ち家庭内の風波も、嫁姑の衝突も、多くは猜疑心が其の根を作る樣である。八には貧困なること。是れも經濟的觀念の空疎より發するものである。九には身體の弱きこと是れも衞生觀念の缺陷より來れるものである。十には大理想が無い。即ち人生の目的とか、國民の覺悟とかいふ點に於て十分訓練されて居らぬからであると云ふてゐる。

以上列擧する所のものは、必ずしも我が國民の上にのみ存する缺點とは言はれまいが、兎に角、我が國民、中に就て將來國家の中堅となるべき現代青年の上にも、かういう缺點が絕無とは言はれませぬ。否な、多くの青年には斯る缺點を多少なりとも有して居ることは否定せられぬから、岡目八目の批評は亦、大に參考となるべき點があります。

精神修養の三方面

智の修養

凡そ吾々の行動は、其の源を一心より發す。一心は實に是れ主人公である。若し主人公が其の號令を誤まる時は、一切の行動は、盡く邪路に走り去るものである。之に反して、主人公が公明正大なれば、身口意の三業は自づから其の正しきを得るものであります。

支那の瑞巖禪師は、一日、方丈に在て高聲に『主人公』と喚で、自らハイ〳〵と應諾し、乃ち云く『惺々著、他時異日人の瞞を受くる莫れ』と、又『諾々』ハイ〳〵と返事せられたとある。『惺々著』と云ふは氣をつけよ、他日人の爲めに瞞ぜらるゝな、油斷をすると人に馬鹿にされるぞといふ意である。是れ正しく一段の御說法である。吾々も始終、自己の主人公を喚出して、晝も夜も不斷に警戒を施すことが肝要です。ウツカリすると、此の主人公が何時の間にか五欲六塵の巷を飛び廻つて、御留守になつて困る。

都に在りて藩に同士を招集して密議を凝らせし折、公に一同に對して、今日の場合、吾々は忍耐が大切である如何なる際にも小憤を愼むべきぞ』と警告せしに、眞木和泉が傍に在つて、突然、拳を以て西郷を撲つた、公はサッと顔色を變へ、『なにをするッ』眞木は冷やかに『西郷さん痛かつたか』、公はムツクと立上り刀に手を掛けて『何故予を撲つた』、眞木はカラ〳〵と打笑ひ『西郷さん、今、貴殿は何と言ふた、小憤を愼めと言はれしに非ずや』、公は釋然として苦笑し『いや僕の失敗々々』と言ふたそうです。

明智の人でも、自分の身に差迫つた難問題にでも出逢うと、其の智慧も昧み勝ちになることがある。慈悲深き人でも、我が心に反する者、又、我が志を妨ぐる者などに出逢うと、其の慈愛の情も冷却し、若くは凝固して、別人の如くになることがある。されば王陽明の言ひし如く『事上の磨錬』といふことが大切である。即ち、此の世の中に在りて、多くの人に接し、種々の事に當り、色々の經驗を積み、其の時、其の處、其の場合に於て益々大勇・大智・大慈悲を涵養し、振作することであります。

斯く常に心を佛地に置きて、此の活時代に順應して、其の職分を盡し、其の業務を勵み、國民全般が皆其の觀念を以て勇猛精進したならば、それが教育の上にも、政治の上にも、事業の上にも、其の他一切萬事の上に、潑溂たる精神が活躍して、精神生活の向上と與に、物質文明の光輝をも完全に放つことにならうと思ふ。

せしむるのである。大梅法常禪師は馬祖大師に參じて『如何なるか是れ佛』と問はれた時、大師は『即心即佛』その心が直ぐ佛なるぞと答へられた。けれども、是れは獨り禪門の所談ではなく、三部經の一なる觀無量壽經には『是心作佛、是心是佛』と說かれてある。尤も、吾々は直ちに、釋尊の如き、彌陀佛の如き大德を實現することは不可能であらうが、志だに堅固ならば、佛の一分の德を現はすことが出來る。即ち、圓滿佛にはなれずとも小佛にはなれる。中佛ぐらゐまではなれやう、併し、是れは實に金剛の如き信念がなければなりませぬ。宗教生活は、學問の力や、金力や、威力の及ぶ所ではない。唯體驗に依つてのみ得られるのである。人眞似や聞き覺えぐらゐでは駄目です。

昔、普魯西國のフリードリッヒ大王は名君の聞えありしが、軍隊を檢閱する每に、いつも兵士に向うて三箇條の問を出した。一に年はいくつか、二に服役以來何年か三に俸給も用品の給與も十分かの三問であつた、處が佛國生れの新兵が、不日檢閱があるが獨逸語が分らぬ といふので、王の問に對する答を棒諳記で友達から敎えて貰つた。王が問はれたら、覺へた儘を順に答うればいゝと敎へられた。彌 其の日になると、王はいつ、もとは順序を違へて問はれた、一に『服役以來何年か』『二十一年』王は驚いて『年はいくつか』『三箇月』王益々驚いて『汝の言ふことは更に分らぬ、朕と汝とどちらか氣が狂つては居らぬか』『兩方とも』とやつたといふ。聞き覺えはこんなものです。

大士とも譯して居る。覺有情とは衆生を濟度するの意で、大士とは利他的行動に精進する大人といふ意であります。

以上の三乘を智仁勇の三德に配すれば、尤も、凡庸生活の三德よりは高尚にして、且つ完全なるものである。聲聞乘は勇の大なるもの、緣覺乘は智の明かなるもの、菩薩乘は仁の至れるものであります。此の三大德を具備して、最高圓滿の域に達せられたのが佛乘であるから、佛の事を自覺々他、覺行圓滿と稱して居る。故に、佛界は大覺生活とも申すべきであります。

即心即佛

地獄も餓鬼も畜生も、修羅・人間・天上も皆な吾々の心一つの產物です。解脫も智慧も慈悲も皆な吾々の本心に具へて居る德の現はれです。『極樂も地獄も己が身にありて心こそなれ鬼や佛に』。『千なりや蔓一筋の心より』華嚴經には心を畫師に比して『心は巧なる畫師の如し能く諸の世間を畫く』と說てある。されば、吾々は、最高至上なる大覺生活にてまします佛の境界を理想として、修養の歩を進め、以て精神生活の向上に努めたいものであります。

達磨大師は直指人心、見性成佛の法を傳へられた。卽ち、吾々の本心、本性を見出して、直ちに成佛

られたのが佛で、此の道を御敎へ下されたのが佛敎である。故に、佛に歸依し佛敎に隨順する時は、名利などには囚はれぬ、心頭を滅却すれば火も自ら凉し、如何なる境遇に處するとも、常に天地の道を樂み、天眞の情を養ひ、孟子の所謂『富貴も淫すること能はず、威武も屈すること能はず、貧賤も移すこと能はざる』大丈夫の意氣を具うることが出來る。是の如きは正しく現身の聲聞である。聲聞乘の證果は羅漢である。羅漢は此に殺賊と譯す。既ち煩惱の賊を殺し盡すの義であります。

次は、智慧的生活、佛敎に所謂智慧とは、先づ己れを知ることである。己とは何ぞや、己れは何れより生れ來りしや、死して何れの處にか去るや、人事百般の現象は貧富苦樂、千態萬狀であるが、何に因て斯く差別するやといふことを徹證するのである。吾々も亦、能く自己是れ何物ぞと明らめ、生死の理を悟り、因果の法則を覺了すれば、始て永遠の目的も確立し、次第に修養して一歩々々佛の聖位に向つて進むことが出來る。是れ卽ち現身の緣覺であります。吾々の本心は生死の疆を飛越えて常住不滅、其の體は佛と同性である。生死去來は宇宙の妙用變化の狀態たるに過ぎぬ。其の間に生息して、苦惱を感じ、繋縛を受くるは皆な自業自得の致す所である。故に、緣覺の位に進みたる者は、進んで永遠の覺路を開き、退いては自己の煩惱罪惡を截斷するのであります。

次には慈悲的生活、解脫力を以て自己を鍛錬し、智慧の光りを以て、自己及び自己の進むべき方針を確立し、此の力と光りとを以つて、社會の爲め、國家の爲め、世界人類の爲め、及び一切衆生の爲めに、無

德を兼ね備へたのが眞の人間と謂ふべきである。併し、宗教の見地よりすれば、未だ徹底的安心を得て居らないから、矢張、凡夫たるの境域を脱することは出來ぬに依つて、凡庸の生活と稱するのであります。

宗教生活

宗教生活とは、佛教に所謂「三乘生活」であります。

第一は解脱的生活、解脱といふは、内外の束縛より離脱して精神上自由の妙境に立つのである。吾々には内外二種の束縛がある。内の束縛とは心の迷ひです。凡夫の心には貪欲といふ利己的欲望と、瞋恚といふ怒り腹立つ心と、愚痴といふ物に迷うて執着する性質とを有つて居る。是を三毒と稱します。惡い事をするのも、罪を造るのも、煩悶懊惱するのも、皆な此の三毒の所爲である。次に、外の束縛とは、生活の脅威とか、境遇の壓迫とか、周圍の事情とかいふもので、如何なる人も此等の爲めに惱まされて居るのである。然るに、宗教的修養に依つて、此の束縛を脱して精神上何物にも囚はれざる自由の樂天地を開くのである。

その解脱を得る所以の法は、心を最高理想境に置くのである。人は虚名に迷ひ、虚利に惑ひて本然の道を失うことが多い。名譽は德の賞で、利益は生活の糧である。人間の理想は萬世不易、古今一貫の大道を行うに在り、佛教でいへば、未來永遠に向上發達すべき無上正覺の道を辿るのである。此の道を體得せ

主義もなく、眞摯なる德操もなく、唯だ人に勝ちさへすれば宜いといふて、手段をも撰ばず、秩序をも顧みない樣では、非常なる弊害を生ずることゝなります。政黨にせよ、社會・團體にせよ、若くは箇人の業務にせよ、如何に奮鬪するとも、その奮鬪は道德的・理想的でなければならぬ。

維新の豪傑と謂はれし越後長岡の藩士河井繼之助の語に『無くてならぬ人となるか、有つてならぬ人となれ、牛羊と爲りて人の血肉に化せず、人は豺狼と爲つて人類の血肉を啖ひ盡せ』云々とあるが、是は、あの當時、時勢を慨したる悲憤の迸りであらうが、今日では、是れではならぬ。若し、只だ勝敗のみを主眼としたならば、正しく此の世の修羅道であります。

次は義務的生活、國民として國憲・國法を重んじ、箇人としても能く其の義務を盡す、是は正しく人間道であります。

次は道德的生活、獨り與へられたる義務を盡すのみならず、能く一身の操行を守り、積極的に道德的活動を起すのである。『爲さねばならぬ』と思うて盡すのは義務生活であつて、『爲さずには居られぬ』と云ふ心情から道德的行爲を起すのが道德生活である。此の道德生活こそ此の世からなる天上界であります。天上界といふは、人間道の一般向上したるものです。佛教では五戒を持つ者は人間の身を受け、十善を持つ者は天上界に生ると說いてある。五戒の進步したものが十善道德であります。

以上の三善道を智仁勇の三德に配すれば、修羅は勇の德、人間は智の德、天上は仁の德に當る。此の三

次は醉狂的生活で、遠大なる理想もなく、人生の本務を實行せんとするの目的もなく、唯だ自己の本能を滿足さすべく、醉人の如く狂者の如く、我儘氣儘に飛廻るのである。虚榮熱に浮かされたり、酒色の巷に彷徨いたり、甚しきは、身投げ・情死といふ樣な事までも演ずる、自己の情欲に囚はれて、父母の嘆きをも、妻子の難儀をも顧みるの目が無くなる。此等は正しく此の世の畜生であります。

吾々は、斷じて此の三惡道に墮落せぬやう、常に自ら警戒して、精神生活の向上を期し、且つ社會全體の生活向上を期すべく努力したいものであります。

凡庸生活

次に、凡庸生活は所謂『三善道』である。凡庸とは稱するもの丶尊い生活であります。

第一は奮鬪的生活、何事にも生存競爭の行なはる丶世に在りては、常に奮鬪的態度を以て、萬難を排し千辛を凌ぎ、自己の目的に向つて勇猛精進することは最も大切であります。『爲せば成り爲さねば成らぬ成るもの丶成らぬは己が爲さぬなりけり』殊に、今日は國内に於ては國民生活の問題が焦眉の急に迫り、國外に對しては一刻も油斷の出來ぬ狀態にあるのである。此の時に當り、吾々國民は益々剛健なる精神を發揮して、國家の興隆と、民族の安榮と、社會の福祉とを圖るべく奮鬪努力せねばならぬ。

只玆に注意すべきは、其の奮鬪が常に健全なる理想の上に立たねばならぬといふことである。確實なる

地獄とか餓鬼とかいふても、惡人が死後に生を托すべき世界とのみ思ふてはなりませぬ。私は未來あることを信じ、未來の世界は、現在の行爲に依て、苦樂の果報を異にすることをも信じて居りますが、その未來の世界なるものは、畢竟、現在の延長、又は結果に過ぎないから、精神的に觀察すれば、十界倶に現在の吾人の心中に在るのである。獨り心中に在るばかりか、事實の上に十界の小天地を造りつゝあるのであります。

其の中、迷狂の世界を擧ぐれば、第一が怨嗟的生活です。常に不平を懷き、不滿を訴へ、人を呪ひ、世を呪ひ、或は恨み、或は悲しみ、癇癪は募る、愚痴は起る、夜間寢て居ても熟睡が出來ず、眠つても夢に呻吟され、周圍の人にも不快の念を起さしめ、親子爭ひ、夫婦喧嘩、終には殺傷事件までも惹起す、此等は正しく此の世の地獄です。『恐ろしき地獄の鬼を尋ぬれば邪見の人の胸にこそ住め』、『火の車造る大工は無けれども己が造りて己が乘り行く』とあるも、世の中に少なからぬ事實であります。

次ぎは貪婪的生活、利己一點張りの强欲者流、義理も人情も顧みず、法律も約束も出來得る限りは胡魔化し、道德などは舌の先きにだけチョイ〳〵顏を出すといふ程度、その結果として、不正を行ひ暴利を貪り、詐欺もやれば强迫もやる、甚しきは竊盜ともなり、强盜ともなり、放火、人殺し、あらゆる非道をやる。社會の表面に表はれる不正行爲や犯罪事件は、十の九までは貪欲の惡戯である。『慾深き人の心と降る雪は積るにつけて道を忘るゝ』此等は正しく此の世の餓鬼道であります。

場爭議が勃發し、男女の風紀が紊れ、正直質素の德が崩れ、社會を擧げて黑暗地獄の醜状を呈するに至ります。如何にも情なく感ぜられるではありませんか。

斯く物質と精神とは相離れぬものであるが、修養上に於ては、先づ以て、根本たる精神を訓練することが大切であるから、今は精神生活の上に就て、善惡・邪正を揀別して見たいと思ふ。されど、此の精神生活は物質を離れたものではないから、精神生活の向上は、やがて物質生活の進歩を促がす所以であります。

迷狂の生活

佛教には十界一心といふことを説きます。吾々の心は只一つであるが、此の心の働き如何に依りて十通りの世界に分れて現はれます。その十界とは地獄・餓鬼・畜生・修羅・人間・天上・聲聞・緣覺・菩薩・佛であります。

その中、地獄と餓鬼と畜生とは三惡道と稱して最も惡い世界で、此の世界に在る者の生活が迷狂生活です。修羅と人間と天上とは三善道と稱して善い世界ではあるが、まだ凡夫世界を脱することは出來ぬから、是を凡庸の生活と名けます。聲聞と緣覺と菩薩との三世界は、所謂『宗教生活』とも稱すべきもので、此の宗教生活の最高圓滿の域に達したのが佛界であります。

精神生活の向上

物質と精神との關係

人は肉體と精神との融合體である。肉體と精神とは相離るべからざる關係を有して居る。故に健全なる肉體には健全なる精神が宿ると同時に、剛健なる精神は剛健なる肉體を保全すべきものであります。一般物質と精神との關係も亦同様であります。能く人が『現代は物質文明は發達したが、精神文明が進歩せぬ』といはれるが、これは一應の見方であつて、畢竟は物質と精神とは常に相一致するものである。されば、精神文明が低劣だとすれば物質文明も矢張不完全であらねばならぬ。

之を農工商業の上から見ても、精神が柔弱なれば農業・工業も完全を見る譯には行かぬ。農業も怠慢になり易く、建築上にも手ぬかりが出來、製作品も粗製濫造に流れ、物質文明なるものが穴だらけ傷だらけとなつて了ひます。更に他の方面に就て見ても、政治の上には國利民福を謀るべき眞劍味が薄らぎ、教育の上には本當の人間を作るべき要素を缺き、宗教の上には[illegible]

224

一、家内不和合。

此の五品は假りにも喰ひ合はすべからず、家を修むるの大害物である、猶ほ恐るべし、ありていにするが安樂傳授にて、隱すにまさる苦しみはなし。

あるのである。平時に安心があるからである。之れは死なゝい生命を信じて居るから其の安心が出來るので、夫れであるから、釋迦如來は、我々が世の中に處する上に於ては、此の人間の道德と云ふものを守り、さうして、未來永劫死なゝいと云ふ所の精神上の壽命を堅く捉らまへて、そこに不生不滅の心の本體と云ふものを極め、同時に立派な安心と云ふものを定めて行くように敎へられたのである。

一、家業出精
一、知　足
一、儉　約
一、堪　忍
一、身養生

以上の五條を、いつにても、正直を離さず加へて、片時も忘れず服用あらば、身も家も安全にて、子孫安樂なるべく、而して禁物は、

一、不　實
一、剛　慾
一、酒　色
一、朝　寢

人の博士がお出でになつた。午前七時頃に眼を開いてお醫者の顏をソツト見てお在でになつたが、漸く口を開いて、

モウ古家の造作をしても可くないから、役に立たぬ小細工などは止めるが宜からう、手を引いて吳れえ、モウ止せ〳〵

と、斯う仰つて、而して、其の日は一日時々眼を開いてお話がありました。耳は繃帶がしてあつたから聞えぬ爲めに、字を書いて寢んでござる眼の所へ差し付けた。すると夫れを見てはお話になる。『お腹が痛みますか』、『痛くないでもない』僅た之れだけのお話。『御氣分は如何でありますか』。『良くもなし惡くもなし』夫れだけです。夫れがお遷化になる三日程の間で、後の一日は昏睡狀態であつた。『中々死ねないものぢや』と仰しやつて、五日の日に池田謙三氏の奥さんがお出でになり、切めてお顏だけなりとも拜みたいと言つて、枕許へお出でになると、

お前方、心配であつたかね、俺が死に損つたか、醫者が殺し損なつたか、まだ愚圖々々して居る、追つて死ぬ時分が來れば死ぬるから、マア心配しないで歸るが宜い

と、宛で他人の事のやうに言つてお在でになつた。病氣に罹れば身體の苦しい事は誰れも同じ事である。けれども、精神の力が打勝つて居つたからして、其の斷末魔に臨んで居つても、一種の堅く信ずる所から、さう云ふ立派な、側に居るものが思はず知らず何んとなく感奮激勵措く能はぬと云ふやうなお言葉が

縱ひ、名譽を以つて誘はれても、利益を以つて誘はれても、自己を守る可き道を守つて、決して名利の爲めに囚はれとならぬ、名利の爲めに迷はぬと云ふ大安心の出來て居る人は、今、斷末魔と云ふ際に當つても、死なゝいと云ふ生命を認めて居りますから、泰然自若、將來に向つて大なる希望を以つて、立派な終りを告げることが出來る。夫れで私は常に信者の方々に向つても、

我々は、遲いか早いか、一度は臨終際になつて本當に佛教を信じて居るかどうか試めす時が來る、本當に信じて居る人は奇麗な死方をして、俺はモウ行つて來るから皆さん頼むぞよ、決して俺が亡くなつても、見にくい泣き方をしてくれるな。家內和合して、俺の志を繼いで立派に子孫の繁昌を計つて與れ、俺は一寸行つて來るぞ、

斯う云ふような考へにならなければならぬと云ふことを言つて居る。」

終極の目的

前永平寺貫首森田悟由禪師は、立派な御臨終をなさつた。卽ち先年の二月四日の晚、俄かに病氣が重くなつて、其の晚は一晚中、夢中でお在でになつて、五日の朝になつて氣がついた。私ども枕元に在つて、『如何であります、大分御衰弱を遊ばしたやうでありますが』と、伺うと。『昨夜は酷い目に逢つたぞよ』と仰つしやつた。其のうちに金杉英五郎（と云ふ耳鼻科の）先生・入澤達吉先生・高木兼寬先生・此の三

至つて大きな音であつた。今日でも大砲の音などは滅多に聞かれない。況して昔のことであるから和尚驚くであらうと思つたが平氣である。側に居つたお給仕人などは、吃驚して轉倒つて了つた。光圀卿は、威しが利かぬから、些つとも張り合がない。

『和尚、こんな音をさせて折角の清遊を妨げるやうであるが、併し、今は泰平の時節と言ひながら、治に居て亂を忘れず、矢張り陣中生活をして居るのぢや、鐵砲は武士の要具、和尚惡く思召すなよ』。『ハテ何う致しまして、ハ、、ハ、、』と云つて酒を飲んで居る。和尚何の位度胸が良いか分らぬ、度胸の底なしだと光圀卿窃に驚いて居られると、心越和尚、靜かに盃を飲み乾して『失禮ながら御返盃を』、『ヤア辱ない』、『私がお酌を致しませう』と、心越和尚自ら銚子を取つて酌をせられた。八九分目注いで、光圀卿が手許へ引かうとせられると、和尚は、今の敵打だとばかり、大喝一聲『カアツ』と放たれた。けれども、鐵砲よりは優しかつたに違ひない。併し、突然、大きな聲でやられたから光圀卿、忽ち顏色サーと變つて、手をブルツと震はせた。爲めに盃の酒がチヨイと溢れた。『和尚何をなさるか』、『イヤこれは禪門の常でござる』と『武門の常』の敵打に『禪門の常』を持ち出した。遂に光圀卿は心越和尚に歸依をして、弟子源光圀と言つて、弟子の禮を取つた。水戸に祇園寺と云ふ一字を建立して心越和尚を開山とせられたが、之れが心越派の開祖である。此の人は、書も出來、畫も出來た。實に萬藝に達した方でした。只今では『東皐全集』と云ふ二冊の本が出來て居る。

一寸と行つて來る

水戸光圀卿の歸依僧であつた、東皐心越と云ふ人は支那の人で、長崎へ來てゐられたのを、水戸光圀卿が態々江戸の屋敷へ招待して、自分の師匠にしやうと云ふ考へを起された。併し、下手な者を師匠にしても何もならぬと、先づ其の人物に就て二つの試驗をした。

其の一つの方法は、水戸のお屋敷の中に於て一等の美人と言はれて、縹緻も好く愛敬も好く、極く品格のある美人を二人選拔して夫れを心越和尚のお側へ事へさせた。お湯に入つても隨いて行けば、お便をするにも離れない。水戸光圀卿の考へでは、夫れで和尚が迷惑がるか、耻かしがるか、或は心を迷はせるやうなことがあるまいかと、斯う云ふつもりであつたが、心越和尚は別に、迷惑がりも仕なければ、又、其れが爲めに心を動かすと云ふ樣な事もない。此方のする通りにして、別に戯談を言ふでもなければ、叱るでもなく、お世辭も無ければ無愛想でもなく、常時の雲水坊さんを扱うと同じ態度で、些とも違ひはない。夫れを數日の間試驗をして。更に今度はモウ一つの試驗をした。或る日の事、『今日はあなたと一日ゆつくりお話を致しましよう』と云つて、チツと酒を飲みながらお話をして居られた。先づ心越和尚に盃を進めて、予が酌をして進ぜると、光圀卿、滿々と溢れる程に注いだ、和尚が其の盃を手許へ引かうとせられたる途端に、直ぐ傍で以て大砲をドーンと揚げた。嚇さうと云ふのであるから、空鐵砲であるが、

臨終に閻魔様の掛物を懸けたから驚くの外はない。ヤツ之れは閻魔様の掛物ぢやないか、懸け換へんければならぬ、と、言つて騒いで居ると、行誡上人は意識明瞭でありましたから、モウ御臨終の前日であつたけれども、チヤンと閻魔様が認められたものと見えて、笑ひながら、

懸け換へるには及ばぬ、夫れで結構ぢや、紙と筆をもて、

と、言つて死ぬ前日に筆を執つてお書きになつた。

閻浮提大日本國　　行誡　八十三

右老病臨終ノ趣ニ付點検申候處御本願相應ノ人ト斷定候ニ付御都合次第御來迎ノ御用意可然候此段宜シク執奏可有之候也

閻魔王府

西方世界

二十五菩薩　御廳

之れだけの文字を書いて、左も嬉しさうにお笑ひなされ、心靜かにお念佛を唱へて、目出度往生を爲されたと云ふことがある。お互は平生、瑣々たることに妄りに腹を立て、僅かの事に煩惱狂亂したり、少しの事に自分の精神を動搖させると云ふことは有り勝ちで、凡夫の常であるが、生死と云ふ一大事の場合に臨んでも泰然自若として動かぬと云ふ安心が出來たなれば、平生何樣な事があつても驚くことはない。

つて、
夫れである、余も其の通りぢや、然らば吾々兄弟一つになつて、幾度でも生れ變つて來て此の國賊を亡ぼさう

と、云つて、兄弟相刺違へて、お果てになつた。して見ると矢ッ張り、楠正成公も、死なゝい命を捉まへて居られたに違ひない。

生死と云ふこと程、吾々人間の身に取つて一大事はない。世の中に何が大事と云つても、之れ程大きな仕事はない。此の生死と云ふもの程大變な變化はない。無いものがつツと出來、有るものがつツと無くなる、これ程の大變化はない。斯う云ふ生死の大變化に臨んでも、ピクともしないと云ふ大安心があつたならば、此の變化常なき世の中に居つても、毫末も自己の精神を動さないと云ふ、大磐石の力を具へる事が出來る。

淨土宗の行誡上人と云ふ方は、大變高德な方であつて、知恩院で八十四歳で御遷化になつた。其の臨終の間際に至つて、淨土宗の事であるから、來迎佛と云つて如來樣のお迎ひの掛物を懸けねばならぬことになつた。そこでお側の循誘と云ふ人が、急いで方丈から來迎佛のお掛物を取つて來て、枕元の床の間に懸けたところが、阿彌陀如來と思ひの外、閻魔樣のお掛物である。隨分酷い粗忽があつたもので、一同の者は驚いた。兎に角、淨土宗の大知識、淨土宗の管長であり、殊に日本隨一の高僧と言はれるお方の御

ふものを說いて聞かせられたと云ふ話があるが、全く佛敎の信仰は玆にある。

不拔の信念

乃木大將が、明治天皇のお供をして、切腹をしてお果てなされたのも、其の乃木大將には、矢張り死なない生命を持つて居ると云ふ一種の信仰があつたからである。乃木大將の辭世を見るに、

うつし世を神さりまし〻大君のみあとしたひて我はゆくなり

と、此の『我はゆくなり』と云うのは、我は之れから出掛けるぞよと云ふことで、一生涯、天皇陛下のお側に仕へ參らせんと誓ひを立て〻おつたのに、明治天皇陛下は已にお崩れになつて天へお昇り遊ばしたから、自分も之れからお跡を慕うて天までお供をして、お側離れず仕へませうと云ふのであるから、乃木大將は確かに死な〻い命と云ふものを捉まへて居られたに相違ない。

湊川に於て戰死された楠正成公も、激戰數十合武運拙くして、愈々切腹と云ふ場合になつて、弟正季を顧みて『さて我々不幸にして玆に死なんければならぬことになつたが、來世はお前は如何するつもりだ』と言はれると『されば、私は間もなく人間に生れ代つて來て忠義の道を盡す考へ、夫れで尙ほ其の考へを全うする事が出來なければ、七度此の世に生れ代つて國賊を亡さんとの考へであります』と答へられた。七度人間に生れ來て國賊を亡し、國家の大恩に報いんとの覺悟である。正成公はニツコリお笑にな

尙ほ結構、尙と願はれませうか』。『幾らでもお前の望み通り』。『然うですな、三百まで生きれば宜い、三百まで生きれば、三百一つで死んでも宜い、三百まで願はれませうか』。『マアお前は慾のない人ぢや、三百の壽命と言つても、龜の壽命の三十分の一、鶴の壽命の三分の一、萬物の靈長たる人間が、鶴や龜よりも短かいと云ふのは情けないことぢや、左樣にボツ〳〵と切り込むよりも、寧そ死なない御祈禱をしては何うぢや』。『エ、ツ、死なない御祈禱が願はれませうか』

其の時良寛上人は、

『有るとも、大聖釋迦牟尼如來は世に御出現になつて、四十九年の御說法、三百餘座の御化導も、一切衆生の死なない爲めの佛敎をお說きなされたのである』

と大變味ひのあるお言葉である。死なない御祈禱とは何んであるか、吾々の體は因緣假和合の姿、夫れが五十年で死ぬ、百年で死ぬと云ふのは、

ひきよせて結べば柴の庵となり解くればもとの野原なりけり

材木を集めて一軒の家を造り、材木を壞して以前の野原にするが如く、唯だ色々の材料を結び合せて、暫らく此の體と云ふものが出來て居るのである。で體が無くなつて了つたからと云ふて、我が本心と云ふべき本體に至つては決して生き死にはない、其の生死を離れた所の心に、本體と云ふものを極めしむると云ふのが佛樣の御敎化であるから、と良寛上人は其の老人に向つて、大乘佛敎の涅槃淸淨の理と云

方の年迄生きたいと言はれてみると、私は何だか人壽の行きつまり迄行つたやうに思はれます。何うも今死んでは少し都合が悪い事がございますから、何うぞ、もう少し長命が仕たい、そこで貴方は生佛と云ふ評判があるから、今日態々尋ねてお願ひに參つた次第ですが、如何でございましやうか、私の爲めに長命をする御祈禱をして下さるまいか』と頼んだ。

『成程、夫れも宜からう、併し唯だ長命と云ふても見當の付かぬことであるから、長命の御祈禱をするに就ては、何歳まで生きたいと云つて佛樣にお願ひ申したら宜いでせう』、『左樣ですな、さて何歳まで……其處迄考へが付かなんだ、唯だ漠然長命がしたいと云ふ考へで參りましたから、幾歳までと仰しやると一寸挨拶に困ります、ハテ幾歳としたら宜しうござりましせうか、九十と云つても、最う直きのことですから、寧そ百までとお願ひが致したうござりますが、如何でござりましやう』。『成程百歳までか、お前はマア慾のない事を言はしやる、百歳までと云へば、百一歳になつたら死んで了ふが宜いか』。『イエ死んで宜い譯ぢやありませんが、マア百歳位といつて置けば……』。『然う掛引を言はないで本當の所を言つて見なさい』。『倘と言つても宜いでせうか』。『ア、お前の望み通り、幾らでも掛引のない所を言ふがよい』。『然うでござりますか、夫れぢやア如何でござりませう、百五十歳まで願はれませうか』。『百五十歳お前はマア慾の少ない人だ、百五十歳まで生きれば澤山か』。『澤山と云ふ譯ぢやないけれども、マア可なり澤山』。『可なり澤山では可笑しいぢやないか、倘と百五十以上の掛引ない所を言ふが宜い』。『夫りやア

『和尚さん、些とお掃除を致しましようか』と云ふと、

イヤ〱掃除には及ばぬ、「焚くだけは風が持て來る落葉かな」俺が不勉强だから、風が薪を持つて來て呉れる

と云つて掃除をさせない。庵の周圍は草だらけ落葉だらけである。そこで或る金持の人が行つて、和尚が何と言つても聞かずに、スッカリ草刈をして、綺麗に庭を掃除して、之れで上人が喜ばれるであらうと思うと、一寸とも喜ばない。何を云ふかと思うと、『ヤレ〱、今晩は蟲の音を聞かうと思つて居つたに…』と云ふ。こんな横着になつても始末に行かぬ。或る人が行つて世間話をして中々に歸らぬ。其れで、上人は之れを追ひ歸してやらうと思つて、早速筆を執つて、こんな歌が出來た、と云つて示された。見ると、『我が家に人の來るこそ煩けれ』、之れはお上人ひどい、い事をお書きなされたなと云ふと『とは言ふものゝお前ではなし』とお書きになつたと云ふ。少しもお世辭がない。

其の良寛上人の所へ、玉島の町に居つた、八十以上の老人が尋ねて來て、上人にお目通りをして、『私は今日特別なお願ひがあつて參りました』、『どんな願ひか』、『實は私は今年八十歳になりまして、サア澤山な子供や孫が集まつて來て、近頃八十歳の祝ひと云ふものを致しました。而して、大勢の者が互に杯の遣り取りをして、目出度〱で飲んだ上、交る代る私へ杯を持つて來て、どうか私もお祖父さんの長命に肖りたい、私も肖りたいと言つて、何うか私も貴方の年まで生きたいと言ひますけれども、貴

生死と云ふものはない。

釋尊が御涅槃の時に、佛樣を圍繞して居つた一同の者が歎いた。すると釋尊は、我が滅後諸々の弟子相傳へて、自利々人の法を行ずれば、如來の法身は常に在して滅せざるなり一同歎くな、一同が佛の精神を能く呑込んで行く時には、佛は決して死なないぞよ、佛の死なゝい精神のあると云ふことを、能く心得て行かなければならぬぞよ、と斯樣に言つて、釋尊はお涅槃になつた。

不死の祈禱

越後の國に七十年以前迄生きて居られた良寛と云ふ上人、是れは有名なお方である。當今では大變良寛ばやりで、書が巧みで草書が上手な人で、龜田鵬齋先生は態々訪ねて行つて草書の書き方、書道の口傳を聽かれたと云ふくらゐ書が出來、和歌が出來、俳諧も出來た人である。出雲崎の立派な家に生れた人であるけれども、自分は一軒の主となることを嫌つて、玉島の圓通寺と云ふお寺で髮を剃り、生涯無宿者で、越後の國上ノ山の半腹に庵を結んで其處に居られた。而して其處を五合庵と云ふ。人間は米が一日に五合さへあれば死ぬきづかいないから、夫れ以上は要らぬと云ふ暢氣な人で、子供などが遊びに來ると、子供と一緒に手鞠など突いて樂んで居つたと云ふ、誠に境界の面白い人であつた。秋になつて木の葉が澤山落ちて來ると、心易い人が來て、

ても、天地の上に於ては少しも増減がない。生せず滅せず、増しもせず減りもせぬ。生れた、死んだ、綺麗になつた、汚なくなつた、と云つても、増しもせなければ、減りもせぬ。

例へば、水と云ふものは非常な綺麗なものである。ところが濁り水になると極く汚ない。夫れで以つて洗濯する事も出來ない。綺麗なれば、着物を良くしたり體を良くする所の力を持つて居る。けれども、汚れて居る穢ないと云ふのは水の性ではない。水がどんなに穢なくなつて居ても、夫れは一時的のもので、水の本性はやはり綺麗である。だから其の中の泥をこせば、昨日迄泥水であつたものが、綺麗な水になつて、鐵瓶の中へも這入り、米の中へも這入る。唯だ水の上だけでいふと、如何にも大なる變化の樣であるが、之れを天地の上から云ふと少しも増減がない。夫れと同樣で、吾々が死んだと云ふのも、全く物が失くなつたかと云ふと、然うではない。唯だ其の形が變化したゞけである。水が蒸氣になつて天に昇り、而うして、空氣の變化に依り雨となつて降つて來る。夫れが井戸水となり、川水となり、色々な方面に活動する。夫れなら、何時迄も續いて居るかと云ふと、天氣が好ければ、太陽の熱で又水蒸氣となつて天へ昇つて行く。又降つて來る、上つたり、下つたり、下つたり上つたりする。其の中には、人の腹の中へ生れ代つて來る事もある。這入たかと思うと汗になつて飛出す。かく千變萬化の働きを爲すけれども、水其の物の本性は決してなくならぬ。決して増減はない。生れもせず、死にもせぬ。此の生れない死なないと云ふ所の、生死を飛び越えた所を諦めて行くのを吾々の心の本體に歸ると云ふ。本體の上から申すと云ふと、

と、たとへ自分の生命は此の小塚ケ原の露と消えて了はうとも、我が大日本帝國のあらん限り決して死なぬ、中々堂々たる大丈夫の志である。而して顔色を變へないで首を斬られた。夫れだからして、松陰先生は廿九歳を一期として亡くなられたけれども、其の精神と云ふものは、今日に至つても決してなくならぬ。之が道德上の命である。我々も此の道德上の生命を作つて、たとひ此の身は死んでも、死なない所の立派な、將來一般の人を救ひ、一般の人を助け、一般の人の志を引起すと云ふ程の功績を殘して行かうと云ふことは、人間として最も價値ある死に方である。佛敎の上より云ふと、これを道德上の生命と云ふ。

宗敎的生命

一歩進んで宗敎上の生命、宗敎の命である。之れは佛敎の安心の基礎で最も大事である。佛敎では、お互の生命と云ふものを何んと說くかと云ふと、死なないと信ずる。死なゝい、長命をする。經文の中には涅槃と云ふ言葉がある。涅槃と云ふのは死なゝいと云ふのである。吾々の眼で見ると死んで行く樣に見えるのは變化の相、移り變りの相、お互が生れると云ふのは、春になつて花の開くのに同じである。お互の死ぬのは、秋になつて葉が散る樣なものである。開花落葉、花が咲いたり、葉が散つたりするのは、非常な變化のやうであるけれども、天地と云ふ上から云ふと些つとも變化はない。花が開いても、葉が散つ

と云ふことがあるが、唯だ元氣を能くすると云ふ事ばかりが本當の强いのではない。眞の武士、眞の强いと云ふ者であれば、人に交るに溫和と云ふことが第一である。優しうして、愛敬を能くすることを努め、人が腹を立てゝも自分は堪へて居る。人が亂暴を働いても、自分は落付いて溫和しうして居る。人が無愛想をしても、自分は優しくして居ると云ふのが、本當の强いのである。吉田松陰先生が卽ち然うである。唯だ强い一方ではない。自分の主君に對し、親に對して優しい心があつた。

親をおもふ心にまさる親心けふのおとづれ何ときくらむ

と、自分の命は豫て無きものと斷念めて居るからして、何時、白刄が首に臨んでもピクともせぬが、唯だ忘れんとして忘れる事の出來ぬのは、國許にござる母人の御身の上である。親の事が何うも案ぜられてならぬが、併し、私が親の事を思ふよりも、親が私の事を思ふ心は尙ほ一倍深からう、親を思ふ心にまさる親心、其の慈愛深い母親が、松陰が今日打首になつたと云ふ事をお聞きなされたならば、如何ばかりかお歎きなさるであらう、夫れを思へば淚なき能はず、泣かずには居られぬと云つて詠まれたが此の和歌である。夫れで愈々首を斬られると云ふことになつた。首斬り役が背後へ控へて、三尺の秋水を拔き放つて、今、一息に首を斬らうとしたが、松陰先生は端然として首を定めて居る。顏色常の如く、更に驚く氣色もなく、靜かに料紙硯を乞ひ受けて一首の歌を詠じた。

身はたとへ武藏の野邊に朽るとも留めをかまし日本魂

と云ふと、其の門人共に向つて松陰先生は、

馬鹿な事を言ふな、お前方は死生命ありと云ふことを知らぬか、人間と云ふものは、壽命が盡きると云ふと、縱ひ自分がチツトして居つて疊の上に坐つて居つても、時節が來りや死なんければならぬ、牢屋に居るから早死をする、自分の家に居るから長命すると云ふ事は決してない、壽命が盡きれば何處に居つても死なんければならぬ、死生命あり、富貴天にあり、併し一日でも世の中に生きて居る以上は、夫れだけ人間の道を盡さんければならぬ、人間が一日存在する以上は一日の道無くんばある可からず、人の道に於ける尙ほ魚の水に於けるが如く、人の道を離るゝことの出來ぬのは魚の水を離るゝことの出來ぬのと同樣だ、私は今、孟子の文字を講釋するのではない、三寸の息の通うて居る間は此の研究は止められぬ、

と云つて、牢屋の中でも悠然として書物を讀んで居られた。餘程心の坐つて信ずる所がなければ出來るものではない、感ずべき事である。

白刃一下春風を斬る

併し、唯だ堅い一方でも可かぬ、軍人のお勅語の中にも、

軍人は武勇を貴ぶを本分とすべし

す。其の時分に自分の一族郎黨三千人を引伴れて、南朝唯一の親兵となつて、高師直の六萬の軍勢と、火水となつて戰つて、遂に壯烈なる最後を遂げられた正行公の道德の命と云ふものは、四條畷神社に祀られて、今日に至るまで、小學校の兒童の歌にまで活動をして居る。六百年前に亡くなつた正行公が、今日に至つても吾人の頭に働いて居る。日露戰役の時など、どの位之が働いたか分らぬ。短かい青島の戰爭にも働いて居る。

又、維新以前に幕府の爲めに罪せられた、長州の大人物と云はれた吉田松陰先生、大山元帥・山縣公爵などは皆松陰先生の薫陶を受けた人である。大山元帥などは薩摩の人で、長州の方ではなかつたけれども、松陰先生に師事して居られた。又、先年亡くなられた、乃木將軍なども、松陰先生の最も熱心なる崇拜者の一人であつた。東京に居られた時には、東京から二里程ある世田ヶ谷の松陰神社へ、必ず毎月一回づゝは參詣せられた。それも乘物に乘つては濟まないと云つて、急ぎの時は自分の馬に乘り、急がぬ時は徒歩で以て、二里餘の所を毎月一回づゝ參詣せられた。

其の松陰先生は、幾歳で亡くなつたかと云ふに、二十九歳にして天下の人に重ぜられて亡くなられた。二十九歳までに後世まで名を殘す人となられるといふは餘程の大人物である。其の松陰先生は牢屋の中で、今にも打首にならうと云ふのに、平然として孟子の講義をして居られた。夫れで側に居る門人が、

な人でも之れは長命が出來る、其の無形の生命は二つに分れる。

道徳的生命

第一には道徳的の生命、道徳の命である。親孝行をしたり、忠義を盡したりする、其の人の徳と云ふものが自然、永久に殘つて行く。之れが道徳の生命である。日本第一の忠臣と稱へられて生きて居るのが楠正成公である。楠正成公は、幾つの歳に亡くなられたかと云ふと、此の肉體の壽命は僅かに四十三歳である。湊川の露と消えられたのである。併しながら、御國の爲め、陛下の爲めにお盡しになつた忠義と云ふ道徳の命は、楠公と云ふ名前と共に死なないのである。今日に至るまで『嗚呼忠臣楠子之墓』として湊川に生きて居る。神戸へ行くと、湊川神社の附近は神戸第一の繁華な土地になつて居る。日本中の人が參つて手を合せて拜んで居る。して見ると、正成公は四十三歳を一期としてお逝れになつたが、正成公が國家の爲めに盡された道徳上の生命と云ふものは、數百年後の今日になつても決してなくならぬ。之れが結構な命である。又、小楠公と云はれた息子の正行公は、

歸らじとかねて思へば梓弓なきかずに入る名をぞとゞむる

と、吉野の山の如意輪堂に鏃で以て辭世の和歌を書き付けて、一族郞黨三千人を引伴れて、高師直の軍勢六萬騎と戰ひ、惡戰利あらず、四條畷に名譽の戰死を遂げられたのが二十三歳、今日ではまだ現役兵で

の佛教信者の目的は何處にあるかと云ふ事に就いて、二ケ條を擧げてある。

第一は『壽命を増長す』と仰しやつて、壽命はイノチ、コトブキ、増長とは、増はマス、長は成長の長でフヤスと云ふ意味、即ちお互の壽命を増長すといふ、長命の意味である。通俗的に云ふと長命と云ふことが佛教の目的である。

第二には『財産を増長す』諸々の財産を作る、身代を伸ばすと云ふのが佛教の目的である。妙な事が書いてある。身代を伸ばして、財産家となつて長命をする、これが佛教の目的。佛陀は宛で經濟家や衞生家の言ふやうな事を仰しやつた。長命が目的だ、金儲が目的だ、實は此の話の中には無限の妙味があるやうに感ぜられる。

全く佛のお辭は適切である。長命と云ふのは何であるかと云ふと、素より此の肉體の壽命のことに重きを置かれたのではないので、我々の肉體と云ふものは、幾ら長く生きても百歳の壽命を保つと云ふことは難い、人生僅か五十年と昔から云つて大抵決つてゐる。大隈侯爵は人生百二十五歳と仰しやるさうであるから、大分壽命の相場が伸びて來る。西洋の科學者は、人生百五十年と云つて、百五十まで生きるだけの性質を持つて居ると云ふ。併しながら、無常の世であるから、母の胎内で死する人もあれば、十代二十代で若死をするやうな人もある。賴む可からざるは人間の命である。

併し、無形の生命と云ふは此の肉體ではなく、形に現はれて居ない。我々の壽命を考へたならば、何樣

無病長生の要術

無形の生命

人が生を受けて此の世の中に産れてくると、成るだけ長命しやうと工夫する。これは人情の常である。尤も、人間界に産れるには、非常な因縁が和合して始めて生を受けるのだから無理もない。而しいくら長命しても貧乏ではやりきれない。そこで更に富貴になる工夫をする。

長命で富貴ならば、人生に之れほど幸福な事はない。而も、此の長命と富貴を得ることが佛教の目的である、と云へば、餘りに都合の好い言葉であるから、或は不思議に思ふお方もあらうが、釋尊が確に御經の中にお説きになつた。それは『優婆塞戒經』と云ふ經文がある。こは在家の者の道德をお説きになつた有り難いお經であるが、其の經の中に發菩提心、即ち佛教を信じて菩提心を發すといふことに關する語がある。菩提は道と飜譯する。分り易く云ふと佛の道である。で菩提心とは佛心、佛陀を信ずる心、隨つて、佛の敎へに隨順した志を起して行くことゝなり、詰まり佛教を固く信ずる、佛教信者となる、其

義が薄らぎつゝあることである。此の缺陷を補ふの法は、全く菩薩行の力に依らねばならぬ。一類の學者は、進化論的知識に囚はれて、總ての生物は利己的のものであつて、自己保存が其の天性である。人類も亦、必然的に利己的のものである。利他は自己保存の必要上、自然に發揮する作用にして、畢竟、利己の變形たるに過ぎぬといふ樣なことを言うて居る。凡夫の知見としては一理なきに非ずと雖も、此等は佛教どころではない。全然、一般宗教的眞理の一部分をも味ふことの出來ぬ淺見である。

達人は達觀す、天地法界は一大慈悲體である。自己を利せんと欲せば、先づ以て他を利せねばならぬ。眞正の自利と眞正の利他とは同一源であつて、決して相離るゝものではない。自利と自他とを別種の如くに見るから、色々な妄見に囚はれるのである。天地は道の姿である。道の活動之を慈悲といふ。火の熱する、水の濕ほへる、何れか慈悲の妙用に非ざる。此の慈悲ありて、心靈も其の力を現はし、快樂も亦之によりて生ず。此の天地の心を以て心とするのが菩提心である。即ち道心である。此の道心は人々に具有して居るが、妄想執着の爲めに現はれぬから、自ら迷界に沈淪することを致す。一たび妄見を離るれば、本具の道心忽然として顯現し、それが利他の行願となつて其の力用を發すのである。

田畑を開墾し、水利を疏通し、堤防を築き、溝池を穿ち、專ら天下一般の利便を圖つたので、諸國人の歸依すること活佛の如くであつた。それが爲め精舍四十九種、僧院三十四所、尼院十五所、布施屋九所、橋六所、其の他橋梁疏水等の工事を完成せしもの算うるに遑あらず、殊に日本・唐・天竺の圖を製したり、又、我國の人口を調査して、男百九十九萬四千〇八十二人、女二百五十九萬〇八百十一人、合計四百十八萬四千八百九十三人と記された。是の如く我國の文化に貢獻せられたことは實に偉大なるものである。各國に國分寺を建て、寺の在る所を府中と稱し、且つ本地垂迹の說を立てゝ、佛敎と神國思想との調和を圖つたのも行基菩薩であります。

又、孝德天皇の朝に於ける、道昭法師の如きも亦た大菩薩である。法師は入唐して法相と禪とを傳へ、歸朝の後、諸州に遊行して、義井を掘り、渡船や橋梁を設けて、交通の便を圖りたること無數、有名なる山城の宇治橋も亦、法師の架設する所である。其の他、各宗の高僧にして、國利民福の爲めに全生涯を捧げられたる御方は非常に澤山である。

又、忠臣和氣淸麿公の姉の廣虫の如きも、出家して法均尼と稱し、常に多くの孤兒を收容して、一生を慈善事業に捧げられました。今日、孤兒の救濟事業が日を追うて盛んになるが、法均尼樣は孤兒養育の開祖ともいふべきものである。

現代文明の缺陷とも見るべきものは、生存競爭の結果、益々個人主義が流行し、之と同時に醇厚なる情

太子は用明天皇第一の皇子で、日本文明の創建者であらせられる。曾て大連物部の守屋を討ち亡ぼされたが、事畢て後、敵將たる守屋追福の爲めにとて、法興寺を創立し、守屋の領地六町餘を寺領とせられた。又、仁政を敷くの第一着として、都の四方に、敬田・施藥・療病・悲田の四箇院を立て〻、慈善救濟の方法を確立せられた。殊に國家の文運を啓發し、伸張する事に就ては、實に至聖の姿を以て、全身の熱血を注がれました。先づ十七憲法を制定して、國家の方針と國民の理想と敎育の淵源とを示し玉ひ、取分け、其の第二條に於ては、明かに『篤敬三寶』というて、佛敎を以て我國の宗敎と定められ、更に智識を海外に求め、天文・地理・曆法・工藝等の道を開き、外國の制度文物を輸入して、我が國情に適する樣に巧みに應用せらる〻等、其の功績の偉大なることは、到底、人間の御仕業にてはましませぬ。且つ佛敎に對する御智識の優れさせたまへることは、殆ど生知と申し上ぐべき程である。三十五歳の御時には、天皇の命を承け、袈裟を掛けて勝鬘經を講じ、尋で法華經を岡本宮に講じ、前二經と維摩經との注釋を作られて、天下人心をして佛敎甚深の妙理を容易に解了せしめられ、又、橘寺や法隆寺等の大刹を建立せられました。太子は實に宗敎・敎育・商業・農業・工業等に於ける、我國の開祖と申し上げても宜い位である。實に大菩薩の行持であります。

次に、奈良朝の高僧行基菩薩の如きは其の名の通り全くの菩薩である。初めは專ら民間の布敎を試み、諸國を巡錫して說法敎化を致された。そうして、至る處に道路を開き、橋梁を架け、人民を勸奬して

せず』三には『作す所の善業生死の爲めにせず』是は總ての所作を自己の名利の爲めにせず、唯だ天地の公道に基くをいふのである。

また三事あり、一には『他の苦を受るを見ること己れの如くにして異なること無し』、二には『修する所の善事は悉く衆生の爲めにす』、三には『善く方便を作して彼をして苦を離れしむ』是の如くの心得を、經文の中には最も叮嚀に説示せられてあります。

故に、菩薩には四無量心と稱して四種の精神がある。一に『大慈』是は衆生に快樂幸福を與へんとの心。二に大悲、是は衆生の苦惱を拔濟せんとの心。三に『大喜』是は衆生の利益を見て喜び、又、自ら利他的行爲に大愉快を感ずるの心。四に『大捨』捨は布施である。布施を行ずるに當り毫も他の報謝を求むるの念なきをいふ。菩薩は其の一生を此の四無量心に傾注して、尚ほ其の及ばざるを恐る。古歌に『哀れまんと思ふ心は廣けれどはごくむ袖のせまくもある哉』、『門に立ち物乞ふ聲を聞くならば哀れと思へ物くれすとも』などとあるは、皆な菩薩行を詠じたものであります。

菩薩の典型

古の高僧碩德、仁人義士等にして、菩薩行の典型として見るべき人は甚だ多い。今、我が國の歴史の上から、其の事例の一端を擧げんに、先づ第一に肉身の大菩薩と稱すべきは聖德太子であります。

て、此の六行を總合し、然て更に奥深き根底に遡つて、佛性の大智徳を顯現するの妙術であります。此の事は今此で說明するの餘地がないから、別に述べることと致します。

智慧行といふは所謂『般若波羅蜜』である。即ち虚妄分別を捨てて正知見を開くことである。これには世間の智慧と出世間の智慧との二ある。世間の智慧とは世にいふ知識である。學を修め、業を習ひ、以て智能を啓發するのが、世智を得るの法です。出世間の智慧とは、迷悟の來由を了じ、生死の根源を明らめて、轉迷開悟の効果を收むる所のものである。

此の六波羅蜜は自づから、凡夫の六蔽を解脱する。六蔽とは本性の光を蔽ふ迷妄である。即ち貪欲と破戒と瞋恚と懈怠と散亂と愚痴とである。佛敎に於ける八萬の法門といふも、此の六大行の中に攝することが出來ます。此の行を全うする人を法財長者とも稱す。法財長者とは、無形の至寶なる善法の財産に富めるが故に名く。

優婆塞戒經には、法財長者は三事を具足せよと說てある。一には『人の爲めに苦を受けて心に悔を生せず』、二には『微妙無上の智慧を具足す』是れは智識で、次には道徳である。三には『善法を具する時憍慢を生ぜず』。

また三事あり、一には『諸の衆生の爲めには地獄の苦を受るも三禪の樂の如し』是れ恰も母が其の子の爲めに艱難することを樂む樣なもので、慈悲の極みである。二には『他の利を得るを見て妬の心を生

の惡を斷じ、能く衆の善を行なひ、能く一切の衆生を利益するの法である。

忍辱行といふに二あり、一に生忍、即ち慈忍の心を懷き、不可意の境に對して憤怒の情を制すること、二に法忍、即ち飢渴寒暑等の苦惱に耐うることである。又、二あり、一に他不饒益忍、即ち他人の不利益となるべきことは忍んで之を爲さず、二に安受忍、即ち他人より侮辱を受るを安んじて受け、更に瞋心を起さぬことである。要するに、能く憍慢の心、瞋恚の心を制して、常に柔和の德を守るのが忍辱である。

精進行といふのは、精はクワシクと訓じて一心不亂の義なり、即ち諸の善法に於て、專心に勤勉努力すること。身に善行を修して怠らざるを身精進といひ、心を善道に向けて倦怠なきを心精進といふ。優婆塞戒經には『已生の惡法は之を壞らんと欲するが爲めに、未生の惡法は遮つて起さゞらんが爲めに、未生の善法は速かに生ぜしめんが爲めに、已生の善法は增廣せしめんが爲めに、勤め修めて精進す、是を精進と名く』とある。『夜もなほ業を勤めよ世の中は寢てまたぬこそ果報ありけれ』、勤勉は發展の動力進歩の機關である。

禪定行といふのは斷結正觀の法である。結は煩惱の異名で、諸の煩惱妄念を斷じて、正しき眞理を觀照するのが禪定である。何事を爲るにも此の力を離れてはならぬ。故に、優婆塞戒經には『禪定即ち戒、慈悲喜捨なり、諸結を遠離して善法を修集す、是を禪定と名く』又『若し禪定を離れば尙ほ一切の世事を得る能はず、況や出世の事をや』とある。我が禪門に於ける禪は、六波羅蜜中一部の禪に非ずし

既に四弘誓願を發す、宜く此の願力に乘じて六波羅蜜を修すべきである。六とは布施・持戒・忍辱・精進・禪定・智慧の六大行、波羅蜜は梵語で、具さには波羅蜜多、譯して到彼岸といふ。卽ち凡夫の此岸より菩提正覺の彼岸に到るの法なるが故に、到彼岸といふのである。

布施行といふは無貪の心、慈悲の念を以て、己れの力を竭ち、普く衆生に施與するの行である。或は正法を施して他の迷蒙を破り、他の智能を啓き、他をして正しき智識を得せしむるを法施といふ。或は財物を施して他の貧困を救ひ、他の飢渇を助け、他をして生活の憂なく富強の德を得せしむるを財施といふ。更に無畏施といふがある。無畏は怖畏することなしであるから、解り易くいへば、安心といふに同じで、卽ち他に安心を與ふることである。詳かにいへば、他の災害厄難を救ひ、他の煩惱苦痛を救ひ、他をして、其の身心を安んじ、其の本分に安んじて、快樂幸福の門を開かしむるが無畏施である。併し、布施の根本は、同情慈愛の發現にあるから、一椀の飯、一杯の水、一器の菜、一錢の財でも、誠心誠意を以て施せば、盡く布施の功德を成就する。因果經には『若し貧窮の人あり財の布施すべきなくとも、他の施を修するを見る時隨喜の心を生せば、隨喜の福報は施と等うして異なるなし』とある此の意を推して布施の本義を領解するが宜い。

持戒行といふは、佛の戒律を嚴持して、佛威儀を學すること。戒は防非止惡の法にして、所謂『道德律』である。その道德律の原則は、前に述べたる三聚の淨戒である。卽ち身・口・意の三業に於て、能く諸々

事竟に成る」といひしに非ずや。願力堅固なれば、如何なる難事も成し得ずといふことなし。此の願力ありて、能く百難に處して動揺せぬが不動明王である。益々進歩して止まる所なき勢力が卽ち勢至菩薩である。

吾々は、但だ徒らに不動明王に日參したとて役に立たぬ。自己の一身を不動三昧の中に投げ込む所の志氣がなければならぬ。二宮尊德翁は、曾て成田の不動尊に斷食した程の篤信家であるが、常に床の傍に不動尊の御像を安置して居られた。或人が其の譯を尋ねし時に、「吾、小田原侯の命に依りて、野州物井に來りしに、人民離散し土地荒廢して殆ど拾收すべからず、其の時、予は心の底に深く功の成否に關せず一生此處を動くまじと決心した、例へ背に火の付く如きことありとも動くまいと死を以て誓うた。依て動かざれば尊しといふ此の像を懸けて、妻子にも示した譯である。予の今日あるは全く不動心の力であるから、今尙ほ常に安ずるのである」と答へられたと申すことです。

遺敎經に曰く『心を一處に制すれば事として辨ぜざる無し』、無量壽經に曰く『至心精進道を求めて止まず』、是れ皆な大願力の致す所といふべきである。此の目的と願力とを具するのが四弘誓願である。吾人も亦、速に此の四大誓願を發して肉身の菩薩たらんことを期せざるべからず。

六 波 羅 蜜

です。止惡と作善は行持の根元である。佛の戒律の如きは、防非止惡の法であるが、それがやがて善根功德の行持となるものである。

法門無量誓願學は文殊菩薩の大智慧に當る。法門といふは一切衆生をして轉迷開悟せしめ、止惡行善せしめ、離苦得樂せしむるのは皆法門である。苟も自他の智能を啓發して、其の德器を成就する所以の者は、盡く法門である。世界は活動し、人心も活動し、時に隨て變遷窮りなきを以て、之を調制し、之を啓誘し、之を開展する所の法門も亦無量無邊であります。然れども、其の原理・原則は萬古不變でなければならぬ。其の原理・原則を究むるを根本智と稱し、變遷・差別の法相を知識するを差別智と稱す。

以上の三大願を、佛祖正傳の戒法中、三聚淨戒に配すれば、大行持は攝律儀戒、即ち諸々の惡は斷じて作すまじとの戒なり。大智慧は攝善法戒、即ち一切の善法を究明して之を實修するの戒なり。大慈悲は攝衆生戒、即ち一切の衆生を攝取して餘さず漏さず濟度するなり。前の二は自覺にして、後の一は覺他である。自覺々他圓滿にて、始て萬德圓滿の佛果位に昇入するを得べし。是れが佛道無上誓願成である。

此の最終最極の目的を達せんが爲めに、自覺々他の大行を策振し、鞭撻して自彊不息なるのが、地藏の大願であります。此の大願なければ、如何に善美なる目的を立つるとも、終に空想に畢るものである。『みがきなば誰れか光りの見えざらん心の玉は石ならめやは』と小澤蘆庵の詠ぜし如く、精神一到何事か成らさらん。顏回は『舜何人ぞ、予何人ぞ、爲すある者亦是の如し』と云へり。漢の光武帝は『志ある者は

た。更に『如何なる人が眞の智者なりや』と御尋ねせしに、『若し能善く無上の大願を發すれば是を智者と名く』と仰せられ、尋で、大願の内容を示して『菩薩、菩提心を發し已て、身口意等所作の善業、願くは衆生の爲めにし、將來に果を得るも一切之を共にす』云々といはれ、自覺と覺他との二門を叮嚀に述べられて『諸々の障礙を離れて放逸あること無く、身口意一切の惡業を離れ、常に衆生の爲めに大利益を爲し、衆生を利せんが爲めに身命を貪らず、衆生を利益するも恩報を求むること莫れ』云々と細かに示されてあります。故に此の誓願を詳述すれば、無量無邊である釋尊の五百大願、彌陀如來の四十八願・觀音・普賢の十大願等も、皆な無量の願心の一部を示されたものです。併し、概括すれば四弘誓願に攝することが出來る。

此の四弘誓願は、所有諸佛諸菩薩に共通するを以て、之を通願と稱す。即ち、衆生無邊誓願度、煩惱無盡誓願斷、法門無量誓願學、佛道無上誓願成の四願である。

其の中、衆生無邊誓願度は、觀世音菩薩の大慈悲に當る。契沖阿闍梨の『生死の川に世を經る渡し守わたしはてずば棹もおさめじ』といふ願力である。

煩惱無盡誓願斷は普賢菩薩の大行持に當る。『照る月の心を水にすみぬればやがてこの身に光りをぞます』で、煩惱の濁りを除けば、菩提の月影は自づから心水に映じて、所有活動が盡く善根功德となつて彰るゝことは、承陽大師が『濁りなき心の水にすむ月は波にくだけて光りとぞなる』といふ境界に至るの

は、動もすれば徒らに盲動するのみであつて、その徳が眞の徳にならぬ。故に此の二つは車の兩輪、鳥の双翼の如きものである。幸に知行合一することを得るも、同情慈悲の念に乏き時は、世に在りて更に益する所がない。されば、衆生界無邊なるが故に、慈悲の行も亦無限でなければならぬ。その無限なる慈悲行を、常住不斷にし去ることは、全く誓願力に依るの外はない。

凡そ天地の間、智慧の力に敵する物はない。故に文殊菩薩は獅子に乘りたまへり。行持の徳は能く衆緣に應じて逆ふことなし、小兒も亦能く之れに懷く、而して其の力亦甚だ大なり、故に普賢菩薩は象王に駕したまへり。慈悲の徳は自ら泥中に入て能く清淨の法を授く、故に觀世音菩薩は多く蓮華に騎りたまへり。誓願は前の三者をして、進轉し、活動せしむるの力を有す。故に、地藏菩薩は錫杖を持したまへり。尤も六觀音・六地藏等の別ありて、其の形像も異なれども、今は多くに就て一應の說明を試みたのである。

四弘誓願

前段に述べたる智・行・慈・願の四德の中、智と行と慈悲との三は菩薩行の目的にして、願の德は菩薩行を成就するの力である。願力なき時は何事をも成し遂げることが出來ぬ。故に優婆塞戒經に、善生が、

とある、兎に角、行持の代表的菩薩であります。

觀世音は、梵語に阿縛盧枳多伊濕伐羅とも阿利耶婆婁吉帝人縛羅耶ともいふ。譯して觀世音とも觀自在ともいふ。世間差別の音聲を聞いて、思惟し觀照して圓通を證せられ、又、一切衆生の音聲を觀察して、機に應じて濟度したまふ、故に觀世音といふ。其の自觀も他觀も倶に自在無礙なるが故に觀自在ともいふ。普門品には『一切の功德を具して、慈眼をもて衆生を視たまひ、福聚の海は無量なり、其の故に頂禮したてまつるべし』とありて、慈悲の代表的菩薩であります。

地藏菩薩は、釋尊の滅後より彌勒佛の出世に至る無佛世界の衆生を化導することを、忉利天に於て釋尊より附屬せられ、それを御引受になつて、普く六道の衆生を濟度し、無佛の世に出で丶、五濁の巷に迷へる輩を、盡く引導せんとの大誓願を發せられたのである。地藏本願經には『是地藏菩薩摩訶薩は諸菩薩よりも誓願深重なり、此の菩薩は閻浮提に於て大因緣あり』と仰せられた。而して、其の濟度の方法は經に、女人泰產・身根具足・衆病疾除・壽命長延・聰明智慧・財寶盈溢・衆人愛敬・穀米成熟・神明加護・證大菩薩の十福を擧げてある通り、專ら人生の幸福と佛果の圓成とを施與せらる丶のである。要するに、大士は誓願的代表の菩薩であります。

凡そ、人間として立派に世に立たんと欲せば、第一に知識を開發して德行を修めねばならぬ。智慧ありとも德行之れに伴はざれば、決して人の人たる價値を彰はすことが出來ぬ。併し、德行ありとも智慧なき時

191

吾人の大導師であられるが、その三世諸佛の代表的主體は釋迦牟尼佛なりとするのである。又、四大菩薩とは大智文殊菩薩と大行普賢菩薩と大悲觀世音菩薩と大願地藏菩薩とである。つまり智慧と行持と慈悲と誓願とを修養の基礎とするのであります。さすれば、不動明王にせよ、勢至菩薩にせよ、虚空藏菩薩にせよ、皆な盡く此の四大菩薩の中に包容することが出來ようと思ふ。

文殊は具さには文殊師利、又は曼殊師利で、妙德又は妙吉祥と譯す。過去久遠劫の昔、寶藏如來が出世せられし時、無諍念王（彌陀如來因位の名）と稱する轉輪王があつた。その王に七寶千子ありて、第一は觀音、第二は勢至と名く、第三子が殊に聰明にして菩薩の大願行を修せり、依て寶藏如來は文殊師利と命名せられしといふことが悲華經に出で居ります。又、通贊の中には、妙吉祥を釋して『妙は卽ち其の所證を彰はし吉祥は其の利物を讃む』とある。又、御誕生の時、十種の吉祥、卽ち奇瑞を現じたから妙吉祥と稱すともある。首楞嚴經には、過去に成佛して龍種上尊王佛といふとあり、央掘摩經には、現在に成佛して歡喜藏摩尼寶積佛と云ふとあり、上生經には、未來に成佛して普現如來と號すとある。何れにしても、文殊大士は智慧の代表的菩薩であります。

普賢菩薩は、梵語には邲輸跋陀といふ、普賢は其の譯名である。これにも種々の解釋はあるが、普く德行を修めて缺くる所なきを普といひ、柔順善調、能く衆機に應ずるを賢といふ。悲華經に依ると、大士が『我が行必ず諸の菩薩に勝るべし』と誓はれし時、寶藏佛は『今より汝を普賢と名く』と仰せられた

こと能はず、二者相待て、始て佛陀大聖の地位に進むことが出來る。今、菩薩は自覺と覺他、即ち智慧と慈悲とを雙行併進するものであるから、これぞ吾人の理想的人格である。故に、菩薩を大士とも譯してある。大士は大心の人、又は大丈夫といふ程の意味で、換言すれば、完全なる人格といふことである。さすれば、吾々は此の菩薩位を以て修養上唯一の標準とせねばなりませぬ。

標準とすべき大菩薩

佛經を拜するに、佛も菩薩も其の數は恒沙の如く、四維上下に澤山ましますのである。然れども、佛の功德莊嚴に至つては、固より優劣を論ずべきものではない。菩薩と雖も觀音大士・文殊大士等の大菩薩は、皆な佛德を具有せられながら、衆生濟度の爲めに、暫く菩薩身を現じ、特と第二位に在りて、衆生の同行者となりて手引きしたまふのであるから、是を大權の聖者とも申し上ぐる。故に、此の大權の大菩薩は、菩薩以上の菩薩であるに依て、其の德は正覺の佛と齊しいのである。されば、縱ひ無數の菩薩ありと雖も、是れ亦た優劣を論ずべきではない。

併し、祢は其の中から四大菩薩を抽象して、釋迦一佛と共に、之を理想の本尊として常に信仰して居ります。承陽大師は『所謂諸佛とは釋迦牟尼佛なり』と仰せられてあるに依て、此の祖訓に據りて、釋迦牟尼佛を以て本尊の主體とするのである。故に、他の佛を除外し奉るのではない。三世の諸佛皆な盡く

衆生は我子なるに由りて、一切有命の者に對すれば不殺生戒と名くる、此に我子と云ふは、世間に親子の間は睦じきものなるに由りて、これに比べて說た言じや、實は一切衆生の心念思慮を以て自己の心とすることじや、自心と一切衆生と平等にして元來へだてないじや、一切有命の者が眼に遮らねば止む、眼にさへぎらば必ず慈悲心生ず、是を菩薩と云ふ、此の菩薩の心を戒と名づく、此の菩薩の心は一切衆生に本來具足したるものなれども、煩惱業障深厚なるに由て暫く現ぜぬのみじや、現ぜぬと云へども本來かけめはない、今日正法に遇うて一分も護戒の心生ずるは、本來佛性の明了ならんとする前標と云ふものじや』云々と說明せられた。實に親切なる敎訓であります。

さすれば、菩薩の心は衆生本來の面目である。天地に此の心あるが故に、萬物を覆載して生々化育する。地水火風の四大にも此の心あるが故に、地は水を生じ、水は火を扶け、火は風を生み、風亦火を扶け、火能く水に和し、水能く地を濕ほして、互に孝順慈悲の德を發揮して居るではないか。然れば、菩薩界といへばとて、別に吾々とかけ離れた一階級があるのではない、吾々が、汚れたる妄想執着を打破しさへすれば、此の全身心が菩薩となり、各自の脚跟下が卽ち菩薩界となるのである。此の菩薩界にも、天台宗などでは小乘・大乘等に區別して說てあるが、今はそれらの枝葉に涉らず、極大乘の上から佛敎全體を總括して、菩薩界を論ずるのである。

要するに、自覺の智なき者は覺他の作用を起すこと能はず、覺他の慈なき者は眞正なる自覺を成就する

上求菩提とは自覺です。即ち菩提は道であるから、進んで、道を求めて暫くも忘るることがない。一切の私心を放下して大道を欣求するは實に聖賢の志である。故に、孔夫子は『朝に道を聞て夕べに死すとも可なり』といひ、孟子は『飽食暖衣、逸居して敎へ無きは禽獸に近し』というてある。山高きが故に貴とからず木あるを以て貴しとす、人は萬物の靈長なりと稱するも、若し道なければ人たるの價値は認められぬ。苟も仁人君子たる者は、己れを輕んじて道を重んじ、身を忘れて道に進み、自ら正義の扶護者となり、眞理の維持者とならんことを期せねばならぬ。

下化衆生とは同情博愛心の開展です。自覺的修養が如何程增進しても、若し利他的行持を閑却しては、唯だ其の一身を潔うするのみで、社會・國家及び人類の上からは格別の效果は認められぬ。聲聞・緣覺が聖界の第三位・第四位にあるのは全く之れが爲めであります。

元來、吾々には、法爾として仁慈の德が備はつて居る。是を佛性の孝順心・慈悲心と稱す。此の仁慈の德が、君父等に對する時は孝順心となつて現はれ、他の衆生に對する時は慈悲心となつて現はる。而して此の仁慈の德は、宇宙の大精神より流出し來つたものである。天地の大道といふも、其の根本は仁慈の德をいのふである。內、仁慈の德を開展し、整理し、增進するを自覺といふ。外、仁慈の德を發揮し、運用し、擴張するを覺他といふ。

葛城慈雲尊者は十善法語に、釋尊の『一切の衆生は皆な是れ我子なり』と仰せられた御語を擧げて『一切

菩薩の願行

菩薩の名義

菩薩は佛樣に次ぐべき聖賢であるから、苟も成佛を期せんと欲する者は、必ず菩薩の位地に昇らねばならぬ。否な、我が國の如き大乘佛教の弘通する處は、眞の佛教信者は、皆な盡く菩薩でなくてはならぬのである。

先づ菩薩の名義を明さば、梵語に具さには菩提薩埵といひ、覺有情と譯してある。此の譯名には二つの意義を含んで居る。一は覺する有情の意、有情は情識ある者の總名、菩薩は佛の正法を完全に領解して眞正の自覺を得たる者なるが故に、覺する有情といふ。一は有情を覺するの意、菩薩は弘法利生を以て大目的とするが故に、畢生、否な盡未來際の事業は、一切衆生の迷夢を覺醒して、離苦得樂の彼岸に導くに在るを以て、有情を覺すといふ。併し、自覺と利他とは決して相離れるものではない。故に、眞正の菩提心は、上求菩提、下化衆生の心を發することである。

で玩具を弄つて遊んでゐましたから、私は人の止めるをも聞かないで焰の中へ飛び入つて、お前を抱いて出樣とする時、運惡くも天井から物が落ちて頭から火を浴びた、漸くお前を救ひ出すことが出來たが、然し、その時に此の禿が出來たのだから、お前も年頃になつて恥かしからうが、姿は見苦しくても一層心を美くしくするのが眞個に人の價値で、其の覺悟が大切である』

と物語つたので、初めて母の誠に慟哭し、これが原因となつて孝心を勵み、遂に二十四孝の一人に數へられる程になつたのであります。母は子を救ひ子は母に樂を與へ、共に觀音菩薩となる誠によい逸話であると思ひます。

觀音樣は全く慈悲の凝結であります。この慈悲の心を作るのがこの五觀であります。」

斯くして吾等が身・口・意の三業共に觀音の五觀に契ひ、觀音の一切衆生に對して現れる光と同樣に吾等の身から光り輝きてこそ、其の身のまゝが觀音樣の像であり活きた觀音樣になるのであります。

丁蘭の孝心

支那の二十四孝の中の一人に丁蘭といふ人があります。此の人は幼少の時に、自分の母の頭に大變な禿げがあつて、殆ど髪もない程で見苦しくてならなかつたので、丁蘭は學校や人の集りへ出ると、必ず人々がよつては自分の母の頭に禿があつて見苦しい事を罵られてなりません。

或る日、丁蘭は母に向つて、

「御母樣は何故そんな禿を作つたのですか、私は人々の前へ出る度毎に恥かしくて仕方がありません」と囁く樣に不足らしく言ひました。すると母は丁蘭に

『えゝ、お前は恥かしいか、然し、お前は何も知らないが、誠に私等親子は不幸なもので、お父樣はお前が腹にゐた頃にお亡なりになつて、お前は父上の顔を知らないのである。私は父上の責めての形見と思つて、女の手一つで大切に育てゝゐましたが、或日、私が外へ用達に行つてゐると、突然、私の家の方に火事が起つたので、若しや我が家ではないかと慌てゝ歸つてみると、驚いた、私の家は今盛んに燃えてゐる最中なので、私は狂氣の樣になつてお前の居處を探すと、頑是ない、お前は火の中

淨土である以上、生命は永久につゞくものであります。眞の生命といふものは不生不滅で限りないものであります。此の不生不滅の生命であることは因果の道理を信じ盡せば、現世のみならず、未來永遠の生命までも見盡すことが出來るのであります。

山岡鐵舟が死に臨んで『一寸行つて來ます』と言つた此の死生觀は、未來を見盡してゐたからでありまして、世間では年の暮と騷いでゐても時計の作用で元日となるが、心の中で此の永遠の生命を自覺した時は、毎日元日のお目出度さであります。實に『日々是好日』で、吉祥々々というて日々を暮せば良いのであります。永平寺の講を吉祥講といふのは此の日々好日の意味でありまして、又、總持寺のは佛慈講という吉祥に毎日を暮して行く事が佛の行持であるから、吉祥が佛慈で、佛慈が吉祥なことで、共に講の名が因果の關係をしてゐる仕末である。

然しながら、いくら永久といつても、矢張、此の肉體は滅するものであるから、出來るだけ大切にしなければなりません。實に吾等御同樣、生れた時から死ぬるまで、何程とも知れない程幾多の人々にお庇護を被つてゐるのであるから、此の恩に對して常に恩に報いる考へで、一層體を大切にして恩分的感謝の生活をして行かなければなりませぬ。此の恩分的感謝と言ふことが菩薩の自行利他の責任であり行持であります。自分の分相應な拔苦與樂の行を行ひ、觀音の廣大な慈悲心を以て、一切衆生の爲に働くのが此の活きてゐる者の務めであります。

際、功徳の徳は現れて社會の發達となり、國家の進歩となるのであつて、觀音菩薩の體は永久に續き滅することのないものであります。

活ける觀音

以上は觀音五觀の大要であります。要は吾等が日常の行ひにより活觀音になることであります。それには各自確固たる觀念がなければなりません。その確固たる觀念とは『吾れは是れ佛なり』といふ事で、常に『此の身心即ち佛である』と固い佛の心がありましたなれば、決して邪心を起さうとしても起すことが出來ないのであります。そして、世間から受ける一切の苦惱は世間に原因があるのではなくて、凡て自分の心に罪があるとして、益々信念を固めて其の曇りを取り拂ふことに努めなければならないのであります、鏡のは、、、つきり姿を映さないのは鏡に曇りがあるからで、決して姿に曇りがある譯でないと同様に、世の中の一切の事が公平に映り、眞理として映すには專心に心の曇を取り拂ひ、淸淨に澄み渡らせなければならないのであります。法然上人の歌にも

月影のいたらぬ里はなけれども　ながむる人の心にぞすむ

とある如く、心を淸淨にせば東西南北、凡て此れ淨土の樂園で、娑婆即寂光淨土であります。

世に『人生僅に五十年』など[illegible]

第五の慈觀とは『與樂』と言ふことに當るので、先きに述べた悲觀は消極的救濟であるが、この慈觀は積極的救濟である。卽ち悲觀は一切衆生社會の上の缺陷のある所を見究めて、其の苦悶や缺陷を取り除けて人を救ふのであるが、慈親は衆生、卽ち社會に、進んで樂を與へ、公共事業を興して人々と共に樂むのであります。而して、此の慈觀の行は各自が善根を積み重ねて行くことで、一人の行ひは家庭の全體に及び、社會の全體に至つて、御互に樂みを分ちて盡きることのない行ひであります。

諺に『老人と子供は土產を好む』と云ふ樣に、僅かに取るに足りないものでも土產を差し上げる心持を喜ぶものであります。私が靜岡へ巡回中、某寺に滯在した時、其の町に有名な菓子店の子供が參りました。私は何氣なく、傍らにある菓子を子供にやりますと、喜んで紙に包んで自分に喰ふ氣色もありませんから、『坊ちやんの家は御菓子店だから食べたくないの』と尋ねますと、子供は頭を振つて、

『此の菓子は御母樣の御土產に持つて歸ります、お母さんは大變御喜びになりませうから』

と言ひました。たとへ土產物が食べられないのにしても、喜んで下さるから差しあげるといふ心持は、幾何程尊い價値のあるものか知れません。

此の心持を以て善根を人々に施せば、如何なる處でも其の功德は現れ、親戚朋友をば導き、盡未來

であります。

世の中には「人の痛さは三年も我慢してやる」などと云うて、人の悲惱を見ては更に同情の念も起さず、却つて話の材料にしたり、面白半分に却つて嘲笑し、恰度、對う河岸の火事を見てゐるやうに思うてゐる者が往々あります。觀音樣は是れと全く反對で、一切衆生のその體は同情であると心得て、些少の苦惱に對しても、親が子供を勞る樣に憐みを深くし、無事に旅立ちした子の行末までも思ひやり心配すると同樣である。觀音樣と一切衆生の關係は、恰度、其の間に無線電信でも通じてある樣な親さであります。

この悲觀を一切衆生が身に行ひ心に念じてゐれば、社會事業は直ちに救濟事業となつて現はれるのであります。世間で風邪が流行する時は直ちに自分の身を救ふ如くに衞生に注意し、公衆衞生になる樣に一切の行ひを致し、社會の敎育の缺點を見ては、直ちに其の缺點を補ふに足る事業をするのが觀音の悲觀であります。從つて此の世を救ひたいと言ふ一大誓願より出た事業には決して無理がないから、自然に成功の基礎が出來るので、政治家や實業家などは、一時も此の悲觀から離れてはならないのであります。

修證義の中にも、布施・愛語・利行・同事の四つの行ひがありまして、一切衆生に對して憐み同情の念を起せば、自然に自己の力を施し、社會公共事業となつて、然も其の一切衆生を救うと云う事が自然と自分を救うといふことになり、他人と自分との區別がなくなつて菩薩の行願となるといふ御敎がある通り、吾等は觀音の悲觀の立場を離れることは出來ないのであります。

械を使つて目や耳の力を助けて知るので、全く目や耳の力の及ばない處は知ることが出來ないのでありま す。

然るに、佛の廣大な智慧は、十萬億土の世界までも遙かに見たり、吾等の過去や未來の遠き迄も見貫くことが出來るのであります。世間には往々可愛い兒を亡くして、其の子供の行く先きを尋ねたい爲めに、信仰の道に入る人があるが如くに、吾等は常に因緣因果の道理を信仰して、佛の廣大な智慧を得る事が出來るのであります。

此の因緣因果の道理を諦めた時には、如何なる難解のことでも容易に解けることゝなり、常に神佛と一緖にゐると同じであります。たとへ自分が世界の人から用ひられず、世間の人の批難の的となつても、其の行ひが佛の道に契ひ、決して恥づる所がないと云ふ自信があつたならば、不斷に神佛の後見があるから從容として迫らず、爲すことは必ず成功をするのであります。斯くして佛の廣大なる智慧は輝き渡り、自然、吾等の道德の標準が立てられるのであります。

悲觀

第四の悲觀とは拔苦與樂といふ中の『拔苦』の御德に當るのであります。一切衆生が、種々と自分の心から作る妄想の爲めに、四苦八苦してゐるのを見て憐愍の心を起し、苦患を救うてやらうと云ふ觀法なの

同じ人身をうけても、心が清淨であればその心の及ぶ處みな清淨となり、その功德を受けないものはない。大聖釋尊の御舍利は、たとへ齒でも骨でも凡ての人に與へるのであるが、惡人のものは衣類でさへ人が遠ざける樣になるのであります。

今日、日本の文明も尙ほ未だ十分といふのではない。種々の苦しみや多くの缺點があります。然し、其の苦しみや缺點は世間の罪でなく、各自の心に罪があると自覺し、却つて其の缺點を發心の動機として信仰を確實にせば、自然と草木國土悉皆成佛となることになり、心の清淨は直ちに社會國家の上の清淨となることが出來る。

廣大智慧觀

第三の廣大智慧觀といふのは、一言に智慧と言ひまするが智慧にも種々あつて、こゝに申しまするのは廣大な智慧であります。即ち凡夫の智慧は極めて小さい、自分の身のまわりより外に知ることが出來ない智慧なのであります。これに反して、佛の智慧は十方三世皆な悉く知る事の出來る廣大な智慧であります。

同じ學問の中でも、科學は吾等の眼の見える處より外は知ることの出來ないものであります。尤も、其の中に天文などといふ學問があつて、月の世界や太陽の世界といつた天體を知り究める學問で、種々な器

上人を訪ねました。處が、性空上人は、この日早朝から門人に『今日は京から鬼が來る樣子であるから、門の戸を確と閉めておけ』といひつけました。上東門院の一行は、金銀七寶に牛車を飾り立て、行列も美しく目を眩ますばかりであつた。軈て一同その門前に來て案內を乞ひました。然しながら、上人は室中にあつて讀書しながら、案內の聲を聞いても、豫て諜し合せてあるから更らに門を開けるやうな風がない。そこで一行も、折角遙々京から山を登つて、上人の說法を聞くのを樂しみにして來たものを、此のまゝ空しく歸るのは殘念だと、各自その爲打を喞ちましたが、その中に御伴の一人なる和泉式部は

暗きより暗き道にぞ入りぬべき　はるかに照らせ山のはの月

と詠じました。恰度、上人は法華經の

『暗きより暗きに入つて三寶の名を聞かず』

といふ一節をよんで居られた時、計らずも此の歌の聲を聞かれたので、不思議な事と思ひ、早速、門衆に命じて門を開けさせ、一同を請じ入れることゝなつた。式部は喜びのあまり車をひいて來た牛を見ると、牛は長い涎を出して眠むさうにしてゐるので、また

草も木も佛となると聞くからに　心あるみのたのもしきかな

と歌つて、何氣なく涎を出してゐる牛を見てさへも、草木國土悉皆成佛の敎をきくことの出來る身の幸福なことを感じたのであります。

樣にすれば、自然に佛となり、佛の光は輝き出で、聖人高僧と同樣な偉人となる事が出來るのでありま
す。

清淨觀

第二の清淨觀とは、私共の心を清淨にすると云ふのであります。昭憲皇太后の御歌にも

白たえの衣の塵は拂へども　うきは心の曇りなりけり

と、ある樣に心の曇りこそ誠に積り易く、また、拂ひ難きものであります。

さてこの清淨觀と云ふことは、今日の言葉で云へば精神文明とでもいふので、悟りの上からは娑婆卽寂光淨土と言ひ、草木國土悉皆成佛と言ふのも同じことであります。そこで、此の世の苦みであるとか樂みであるとか、また、泣いたり笑つたりするのは、決して世の中に罪があつたり原因があつたりするのではなくて、たゞみな吾等衆生の心一つであります。

でありますから、常に心を清淨にして、自心を觀音の心にしておけば、たとひ眞個に苦惱な事でも、反つてこれが奮發と勇氣とを起し、惡を變じて善となし、苦を轉じて樂にするの妙用が出來るのであります。

昔、女流文學者として有名な泉式部が、或る時、上東門院の御伴をして、播州の書寫山に居られた性空

そこで、吾等衆生が因縁に依つて地獄の衆生を造り、天上の衆生を作り、乃至、餓鬼・畜生の衆生となつて行くが、その本體に於ては毫も變ることなく、滅することなく、不生不滅のものであると諦め、觀念することがこの眞觀といふのであります。

昔大梅の法常禪師は、馬祖道一禪師に『如何なるか是佛』と問はれた時、馬祖道一禪師は『即心是佛』とお答になつた。即ち佛とはこの心そのまゝが佛の光明であると御教示になつたのであります。そこで法常禪師は、この即心是佛を唯一の理想として、また、行ひの標準であるとして修行をせられ、遂に禪宗の祖師とお成り遊ばされたのであります。又、中江藤樹先生は、十一歳の時に大學を讀み、『天子より庶人に至るまで一に是れ身を修むるを以て本とす』といふ一節に至つて思ひ當る處あり、これが動機で、道德を修めて聖人となり後世の師表となられたのであります。

今から二百年前、吾が曹洞宗に天桂禪師といふ偉い方がありました。禪師は七歳の時、行き馴れた寺に參詣して、不圖、床の間に懸つてあつた達磨大師の畫像を見て、その異樣な服裝や姿態に驚き、これを和尚樣に質されました。和尚樣は『禪宗を、印度から支那へ初めて傳へたお方で、心の寶を研ぐことをする人である』と叮嚀に達磨大師東土渡來の眼目を敎へますと、天桂禪師は『私もその達磨樣になりたい』というて、早速、御兩親に乞ひ、出家をなされ、遂に曹洞宗に誇るべき傑僧となられたのであります。翻つて吾等も性來圓滿な佛性を持つてゐるのでありますから、これを自覺して、その本然の德を味ませない

ゐるのであります。

常濟大師は斯の如く非凡な方であつたとは言へ、私共も常に觀音菩薩を念じ修行を怠らなかつたならば、必らず活きた觀音樣になることが出來るのであります。その活きた觀音樣になるには、常に私共が觀音經にある。

眞觀・淸淨觀・廣大智慧觀・悲觀・慈觀

の五觀法を身にも心にも行ひ、常に願ひ、常に瞻仰して熱心に修行をして行くことであります。

眞　觀

第一の眞觀といふのは、眞實とか、物の本體とかいうて永久に變らない物をさすのである。蠟燭の火は時々刻々動き變つて行く樣でありますが、火の熱には決して變ありません。動かない燒火箸の火でも熱さは同じであります。斯くの如く動く火と、動かない火といろいろあるのは所謂火の形であつて、火の本性には何の變りもない熱さであります。

又、私共が子供から大人になり、中年から老年になつてゆく、種々な形に變つてまゐりますが、私共の本體は何時になつても變りなく、死んでも決して變るものではありません。是を眞如實相とか不生不滅の法とか言うてゐるのであります。

ゐられますが、私にはそれが不思議でならないのです』

と母君に御尋ねになりました。母君は

『私も精細ことは充分解りませぬが、觀音樣と言ふ方は既でに佛樣になる身分になりながら、菩薩の位にゐて此の世に住む一切衆生の苦をぬき樂を與へて下さる御慈悲深い御方なさうです、さうして、怨親平等といつて、敵も味方も公平に可愛がつて、恰度親が子供を可愛がる樣に、又、永久に可愛がつて下さる御方です。』

と御話になりますと、大師樣は再び母上に

『私も觀音樣になる事が出來ないでせうか』

と尋ねられました。この奇問に母上は明瞭と

『無論、修行をすればなることができます』

と御答へになつたさうです。

それ以來、常濟大師の御性格は殆ど別人の樣になり、遊戲まで溫和く、通常の者と變つて優れた處があり、遂にその翌々年、御年八歲の時、越前の國永平寺で御出家遊ばされ、御修行を積みお悟りになつて後、加賀能登一圓を御布教せられ、時の帝後醍醐天皇の御歸依を受け能登に總持寺を建て、正中二年八月十五日、御年五十八歲で示寂遊ばされ曹洞宗の太祖となり給ひ、今日吾等法孫はその高い御人格を仰いで

觀音の五觀

常濟大師の信仰

觀音の五觀といふは、皆樣が日頃お讀みになつてゐる觀音經の中にあることで、觀音菩薩が一切衆生を濟度なさる五通りの觀法なのであります。隨つて私共が日常にこの五觀を心に念じ身に行つてゐますれば、自然とこの身この儘が活きた觀音菩薩となる事が出來るのであります。

常濟大師が御誕生になる以前、大師の御母君といふのは非常に熱心な觀音樣歸依者であつて、毎日觀音の尊像の前で觀音經を三十三回お讀みになつたとの事、尚ほ三百三十三回の御禮拜をせられたさうであります。其の功德遂に空しからず、文永五年十月八日に大師は御誕生遊ばされたので、謂はゞ大師の誕生は觀音菩薩の御申兒、御化身であります。

常濟大師は恰度六歳の時、偶々觀音尊前に至つて、何氣なく御像を熟視し、子供ながら母君に「一體觀音樣と云ふ方は如何な方なのですか、私が御前に行つてみる度毎に溫和な顏をして私を見て

故に、百丈禪師、普請して地を鋤く次で、一僧あり鋤頭を擧起せるが、忽ち太鼓の聲を聞くと其の鋤をポンと抛下して大笑して歸り去つた。禪師は之を見て『俊なる哉、此は是れ觀音入理の門』と言はれた。圓通の眼を以て見る時は、觸處々々に觀音大士に相見することが出來る。承陽大師は特に、正法眼藏中に觀音の一卷を撰せられてある。甚深微妙の宗旨、子細に參究するが宜い。永嘉大師は證道歌に於て『一法を見ざれば即ち如來、方に名けて觀自在と爲すことを得』といはれた。是れは圓通の法門を示されたものであるが、承陽大師は『如來と觀音と即現此身なりと雖も佗身には非ざる證明なり』と仰せられた。大智禪師は『箇々面前觀自在、人々一座補陀山』と吟じ、古偈には『柳染觀音微妙相、松吹說法度生聲』ともある。此等を單に特殊の見知とのみ思ふまい、實に是れ大信心の所證である。遍法界の觀音を拜してこそ、眞の歸依も現はれ、眞の感應にも預かるのである。太祖以後の諸祖中には『觀音寶冠に彌陀を戴く』といふことが話題となつて、幾多の商量がある。是れも因果不二、師資一體の妙理を表示したものである。

要するに觀世音菩薩に歸依し奉る時は、徹底無我の心境に入りて、絕對の大慈悲光に投ずべきである。その時、通身に感激の情が溢れ、自づから凡情を脫し惑業を滅するの功德を感ずるものである。此の功德を念じて世に處する時は、家庭の務めの上にも、社會の交りの上にも、柔和忍辱の力が現はれ、孝順慈悲の德が生じ、一擧一動、盡く念彼觀音力の光明を發揮することを得べし。

であるから、擧手投足も皆な濟度の方便となりて、衆生を利益するのである。吾々凡夫は、智者でありながらも、情に迷ひ物に惑ふことあり、仁者でありながらも、偏頗に陷ゐり愛憎に驅るゝ事あり、故に、其の智明らかならず其の仁全たからぬのである。

又、麻谷禪師が臨濟禪師に對して『大悲千手眼那箇か是れ正眼』と問うた。萬法は一心に歸し、萬用も一徳より現はる。觀世音菩薩、無量無邊の神通妙用、其の中心は何物ぞと問うたのである。すると、臨濟は之に應じて、同じく『大悲千手眼那箇か是れ正眼』速かに道へ速かに道へと反問した。千眼と一眼とを相並べて、本だの末だの、正だの邪だのというて居る樣では、決して眞箇の觀世音は拜まれぬ。盡十方世界、只是れ觀音大悲の一大光明と徹見せねばならぬ。すると、麻谷は、臨濟を禪床より曳き下して、自分は、ちやんと臨濟の坐して居た床の上に坐り込んだ。其の時、臨濟はおとなしく起立して『不審』御機嫌好うというた、麻谷は『擬議』というてもぢ〳〵して居た。すると、今度は臨濟が麻谷を床より曳き下して、自分が其の床に上りて坐られた。時に麻谷はズツと其處を出て去つたとある。面白い狂言をやつた樣にも見えるが、併し、こゝに妙味がある。指月和尚は此の公案を評して『相曳下して坐する時、兩り共に手眼を喪す固に喪せり手眼灼灼』というてある。卽ち、觀音とは一大法性身なり、宇宙萬象、何れか法性身に非ざる、草木叢林も皆な大智慧光を發し、大慈悲光を放つ、此の間に主もなく賓もなく、彼もなし此もなし、手眼といふ跡をも留めぬ、跡を留めざる時、法界盡空、皆な觀音の手眼灼々たり。

を示したものとも見るべきである、楞嚴經には、耳根圓通の法門を説きたまへり、此等の經説は甚深微妙であつて、觀世音菩薩は佛教全體の功徳莊嚴を具へられたものである。故に、觀世音菩薩を信仰供養するのは、やがて釋迦牟尼佛及び三世十方の諸佛を信仰供養し奉るものなることを知らねばならぬ。

公案に現はれた觀世音菩薩

禪門祖師の公案に現はれたる觀世音も澤山あるが、其の中の一二を擧ぐれば、雲巖禪師が道吾禪師に向つて、大悲菩薩許多の手眼を用ゐて什麼をか作す』と問はれた。是れは千手觀音を指したのであらう。千手觀音、委しくは千手千眼といふから、手も眼も千づゝある。何の必要があつて、そんなに多くの手眼を用ゐるのであらう。是れは菩薩の手眼を借り來りて、吾々日常の行持、即ち禪の生活を試問したのである。道吾曰く『人の夜間に背手にして枕子を模するが如し』人が夜間睡眠中、背ろ手をして、はづした枕を模る樣なもので、全く無意識である。觀世音の境界は大無我であらせらるゝ、衆生の機縁に應じて、濟度の手を下すこと、恰も月が影を百川に浮べるが如くであるから、取捨憎愛の念もなく、喜怒哀樂の情もなく、全く無心の妙用であるに依て、千手千眼というても、畢竟、一手一眼である。此の時、雲巖は『遍身是れ手眼』と斷じ、道吾は更に『通身是れ手眼』と釋した。即ち、此の全身心が手なり眼なりといふのである。手とは慈悲の妙用、眼とは智慧の光明、全身が智慧であるから事に臨んで誤たず、全身が慈悲

は、數量は定められぬ。衆生無邊なるが故に應現も亦無邊でなければならぬ。

更に觀世音菩薩の自覺に就ていへば、觀とは智慧である。菩薩は大智慧を以て妙理を觀照し、衆生を觀察したまふものである。普門品には、眞觀・淸淨觀・廣大智慧觀・悲觀及慈觀と說いてある。眞觀は諸法の根源、宇宙の眞理を覺知したまふこと、淸淨觀は、眞如法性の妙用として顯現せる諸法の眞相を觀照したまふこと、東坡居士が『溪聲便ち是れ廣長舌、山色豈に淸淨身に非ざらん』といひしも、淸淨觀の發露である。廣大智慧觀は中道實相の觀智である。悲觀は衆生の苦惱を拔濟せんとの觀念、慈觀は衆生を安樂ならしめ、人生をして益々向上發展せしめんとの觀察力である。是れ菩薩が因地に於て十大願を發したまひし其の願力より、此の五觀が產み出されたのである。されば、吾々も此の五觀に倣うて、自行化他の智力を養成することが大切であらうと思ふ。

菩薩の化身には、一葉の觀音とて蓮華一葉に乘じたまふ御姿あり、又、白衣の觀音もあれば、子育の觀音もあり、魚籃を携へたまふ馬郞婦の觀音もありて、無量無數であるが、盡く是れ大慈大悲の化現ならざるはない。

菩薩の天冠の中に戴かるゝ化佛を、或は彌陀佛といひ、或は釋迦如來といひ、或は菩薩が過去に於て、既に成佛して正法明如來と稱せられし其の佛であるとも說いてある。要するに、此の頂上の化佛に

應現したまふのである。その應現自在なるを以て觀自在菩薩とも申すのである。

抑も吾々衆生は常に種々の苦惱に襲はれて居る。普門品には長行中に七難を擧げてある。七難とは、一には火難、二に水難、三に羅刹難、又は風難、四に刀杖の難、是れは刀杖の責苦に遇うて生命危殆に陷いるの類、五に鬼難、是れは魔障の難である。六に枷鎖の難、是れは杻械枷鎖に縛らるゝの類、七に怨賊の難である。同經の偈頌の中には、更に金剛山の難・毒藥の難・惡獸の難・毒蛇の難・雲雷の難・怨敵の難・擧げて十三難を說てあるが、畢竟、前の七難を推し擴めて示されたものである。此等の難も、之を觀解に約すというて、內觀の上から解釋すれば、吾々の精神上の缺陷やら、苦痛やら、及び外界より襲ひ來る各種の壓迫や災厄等を表示したものであるから、觀世音菩薩の御利益は、精神教化の上にも、境遇迫の上にも、現世にも、未來にも及ぶのである。

之と同時に進んで幸福を求め、安樂を希ふ上にも、大滿足を御與へ下さるのである。所化の領土も、世界よりいへば三界六道あり、衆生界よりいへば貴賤・苦樂・利鈍・智愚各々同じからず、故に菩薩は智慧方便の力を以て千變萬化に姿を現じ、普く十方の世界を攝取したまふ。普門品には三十三身を說かれてある。又、六觀音というて千手觀音・聖觀音・馬頭觀音・十一面觀音・準胝觀音・如意輪觀音あり、六觀音の御姿は、六道敎化の意義が現はれて居る。故に古人の頌に『千手地獄、聖餓鬼、馬頭畜生、十一阿（阿修羅）準胝人道、如意天』とあり、之に不空羂索觀音を加へて七觀音とも稱す。されど、其の實

古寺の山門頭にいざなひたまひける夢を見られた。太祖は奇異の想ひをなしたまひけるが、後、化導の爲め櫛比の地に赴きたまふ途中、羯皷林といふ處にて、圖らずも、定賢律師が靈夢に感じ太祖を永光寺に迎へんとて出掛たるに邂逅し、互に夢の告を語り合ひ、太祖は快く其の請に應じて諸嶽寺に入山せられ、諸嶽山總持寺と改稱し、遂に今の大本山を開創せられたのである。

觀世音菩薩の妙徳と願行

觀世音菩薩は佛の大慈悲心の權化である。大悲心陀羅尼經には、過去無量劫の以前に、正法明如來といふ御佛があらせられた。その御佛が大慈大悲の願力をもて、觀世音といふ菩薩の身を現じて、永遠に衆生を濟度したまふとある。

觀世音の御名號は、法華經普門品に『若し無量百千萬億の衆生ありて諸々の苦惱を受けんに、是の觀世音菩薩を聞て一心に名を稱せば、觀世音菩薩、卽時に其の音聲を觀じて皆な解脱することを得ん』とある。卽ち、觀世音の名を稱する時は、其の聲を聞き其の衆生の所願を觀じて、直ちに濟度の手を垂れたまふが故に、觀世音と名けたのである。けれども、其の實は、衆生が一念に救ひを願ふ心を生ずれば、其の因緣をたどりて應現せらるゝのであるから、古來、此の菩薩を觀世音とも、觀世意とも、觀世身とも稱

又、太祖が六歳の時、母に隨うて觀音大士に參詣せられし折、熟々大士の尊容を凝視せられしが、突然母に向つて、此の菩薩は抑も何處に住したまひ、且つ如何なる業をなして衆人の尊敬を受けたまふや、又、菩薩も亦人なりや將た人にてはましまさずやと尋ねられた。母は小兒に似氣なき尋ねを受け、驚きながらも、觀世音菩薩は弘誓の深きこと海の如く、永劫不退に衆生の慈母となりて、拔苦與樂の功德を惠みたまふに依り、貴賤上下おしなべて其の御慈悲に縋るのである。菩薩とても元は凡夫にてましませり、發心修行の力に依りて、斯くは尊き御德を備へさせたまふものぞと諭された。太祖は深く之に感ぜられ、それより出家求法の志を起されけるとぞ。

太祖が五十一歳の時、御母は八十七歳にして御逝なされ、法名を懷觀大姉と申された。太祖は、御母の生涯念持せられし觀世音菩薩の尊像を得て、御母に奉侍するの思ひをなして、常に之を供養したまひ、後に永光寺を開創せられ、御母の菩提の爲めに、山内の蓮華峰と稱する勝地に堂宇を建立して、圓通院と號し、右の尊像を安置せられて、御弟子默譜祖忍尼に命じて常恒に供養せしめたまうた。

元亨元年四月十八日の夜、能州櫛比の庄の諸嶽寺といへる眞言律院の住持定賢律師の夢に、同寺の本尊觀世音菩薩、姿を枕頭に現はしたまひ、今、釋尊五十四代の大善知識、本州酒井の永光寺に在りて、法輪を轉じて正傳の宗風を振ふ、汝、速に此の寺を彼の聖者に讓りて、永く佛法興隆の道場たらしめよと御告げなされた。太祖も亦、その夜、菩薩が蓮華の蕾を持ちて、我れ一所の寺趾を擧げて師に與へんとて、

ふ。相州大雄山最乘寺鎭守道了薩埵の如きも、其の奥の院は十一面觀世音である。

想ふに、觀世音は大慈悲心の示現であるから、釋尊の廣大圓滿なる慈悲濟度の大精神が、觀世音として無刹不現身の神通力を示し、在々處々に大利益を御與へ下さるものと信じ奉るべきである。此の意味に於て、明治天皇の御盛德と御鴻業とは、盡く是れ至仁至慈の發露であらせたまふに依りて、正しく觀世音の御垂迹と拜し奉ることが出來るのである。

觀世音菩薩と總持寺

總持開山太祖大師は、觀世音菩薩とは特別の御因緣があるのみならず、總持寺の御開創が菩薩の靈告に依りたるもので、誠に不思議の感應である。

太祖大師の御兩親は、年已に三十歲を越ゆるも一人の御子だになかりしかば、深く之を憂ひたまひ、此の上は佛の御慈悲に縋るの外はあらじと思ひ、專ら村のほとりなる多禰の觀音に祈請を凝された。感應虛しからず、或夜、靈夢を感じて妊娠を覺えしかば、益々信心を勵み、此の上は何とぞ此の身を擁護して聖子を生ましめたまへと祈り、每日、禮拜を行ずること三百三十三遍、普門品を讀誦すること三十三卷、一日も怠りたまはず、かくて、月滿ちて安らかに玉の如き男子を產ませられ、其の御子こそ我が太祖大師であらせられた。

支那禪門の祖師達磨大師は觀世音の化身とも申して居る。誌公が梁の武帝に對して『此は是れ觀音大士佛心印を傳ふ』と言はれた。

又、我が國の高祖、永平寺開山承陽大師は、支那から御歸朝の時、海上にて暴風雨の難に遇ひ殆ど危險に迫りし折、大師は一心に觀世音を念じたまひしに、忽ちにして菩薩は一葉の蓮葩に駕して船頭に出現したまふと感じたまふ、時に風雨徐に收り、波濤漸く平ぎて、無事、河尻に御安着遊ばされた。大師は深く其の慈濟を感謝せられ、自ら菩薩の尊像を刻して、河尻の寺院に安置せられた。それが今の南溟山觀音寺であると申すことである。永平寺の山號を吉祥山と名けたまひしも、華嚴經に據られたものではあるが、觀世音を吉祥安樂人と稱するに依り、その德號をも含まれたものと思はれる。

又、高祖大師の法嗣了然法明禪師は、出羽に赴き羽黑神社に詣でんとせし時、途中一異人に導かれしが、その異人こそ觀音大士の權化であつたので、其の地に在りし觀音堂を擴めて禪刹となしたのが今の羽前玉川の玉泉寺である。

又、太祖大師の御師匠徹通禪師は、御入宋の時、如意輪觀音と虛空藏との尊像を刻して、心願成就の守護を祈られた。其の他、我が宗の祖師にして觀世音に因緣を有せざる御方は恐くは一人もあるまいと思

三十三所を御巡拜遊ばされた。今の西國禮場は全く法皇の御記念道場である。爾來、宮中に於ては、觀音に對する御信仰最も盛んであつた。畏くも昭憲皇太后は、明治天皇御冥福の御爲めとて、沼津御用邸に於て、普門品を御書寫あらせたまひしと漏れ承はる。

臣民中にも、彼の菅公の如きは觀音を信仰せられ、筑紫の謫居中にも『病追衰老到、憂逐謫居來、此賊逃無路、觀音念一回』の詩もある。大楠公は、念持佛として深く歸仰し、左の臂には、普門品を書寫して、それを守りとして懸けて居られた。小楠公の吉野如意輪堂に於ける因縁の如きは、誰れも知つて居ることである。

凡そ文武朝野を問はず、一番多いのは觀音の信者である。東京に於ける淺草金龍山、京都に於ける淸水音羽山、名古屋に於ける大須の觀音等は都市繁華の中心となつて居る。北海道の端より九州の端に至るまで、觀音菩薩のましまさぬ處はない。又、佛教各宗を通じて、觀音菩薩を安置せざるはない。淨土眞宗にては安置せざるも、阿彌陀如來の御脇立として、常に經文の上では歸仰せられて居る。

觀世音菩薩は、實に濁海の慈航、迷衢の慧燈にして、現在に至りては、其の利益に依りて智德を增進し、福聚を莊嚴し、未來に至りては、其の慈濟に依りて覺路を圓通し、菩提を成滿することを信樂せざるべからず。

觀世音菩薩

觀世音菩薩深緣の佛土

欽明天皇の朝に我が國に傳來したる佛敎は、聖德太子に依りて國民敎化の基礎として普く海內に弘通せられた。太子は觀世音菩薩の垂迹とも申してある。よしや菩薩の權化ならずとするも、菩薩の大慈悲心と智慧方便力とを體得せられたる大聖者にてましまさるものと思ふ。西國三十三處の靈場中にも、京都の六角堂、攝州の中山寺、江州の長命寺及び觀音寺は太子の御建立で、その御本尊は太子の御自作と申し傳へてある。

又、太子は法華經の註釋を御撰述になつたから、普門品をも御解釋遊ばされた。推古天皇の五年四月に、百濟の王子阿佐が來朝して太子に見えし時に、作禮して『敬禮大悲觀音菩薩、妙敎流通東方日本』云云と唱へたとある。

其の後、人皇六十五代にまします花山法皇は、熊野三所へ御行幸の時、那智の觀音に御參拜、尋で西國

自分で作製して教育の眞心を彰はし、爾來益々隆盛に赴き、生徒の勉學も亦大に見るべきもののあるを以て、刀自は生徒に先つて登校し、生徒に遲れて退出し、修身科は自分一人にて擔任し、生徒を遇すること全く我が愛子、愛孫に對するが如く、生徒をして教場以外には校長とか先生とかいふ稱呼を用ゐしめず、常に『お婆さん』と呼ばしめ、七十八歳の今日、晝夜、教育三昧に住して居られる。自ら『八十の手習ひ』と稱して學問に親しみたまふ、洵に有り難き行持にして大乘的生活の好典型といふべきである。

尙ほ大乘的生活の人は、空間的に於ては獨り人類のみならず、宇宙間所有生物を包容して餘す所がならんことを期するのである。時間的に於ては、現在一世のみならず、盡未來際を期するのである。佛教は法界一如を說き佛性常住を談ず、故に空間・時間を超越したる大願心を發し大修行を爲すのである。此の大願力は信仰より起り、此の大修行も亦信仰より出づ。それが理想の確立となり、德性の涵養となり、慈愛の行持となり、是に於てか最も豐富にして善美なる精神生活を營むことが出來る。その精神生活の活動が、自然、健全なる物質生活の向上を促すこととなるのであります。吾々箇人にして是の如き地位に進みますれば。國家・社會の上にも精神と物質との文明が漸々に發達して、內、國力を充實せしめ、外、世界人類の幸福に貢獻することが出來る。我が帝國は必ず斯くなければならぬ地位に立て居るに於て、吾々國民は徹頭徹尾大乘的生活の完成を心懸けねばなりませぬ。箇人の生活も家庭の生活も社會・國家の生活も、落着く所は歸一でなければなりませぬ。

人類に對しても現はれて來る。

人間世界の常として、個人々々の上にも種々の苦惱災厄があり、社會としても樣々の缺陷がある。殊に我が國の如きは、最近に至り非常なる發展を遂げ、世界五大强國の一に列するに至りたるも、內外の狀勢は益々多事多難にして寸毫の油斷を許さず、加之、國民の體力に於ても富力に於ても敎育に於ても公德に於ても多くの缺點を有して居る。此の缺點を補うて益々國家の文明を向上せしむるには、利己主義ではいかぬ。國民全體が慈悲博愛の念に住して大乘的生活をする樣でなければならぬ。慈愛の念に富める者は、利他の行業を勵みて辛苦をすればする程快樂を感ずることが多いものである。

余の知己にして篤信家なる滋賀縣神崎郡石塚區內塚本源三郎氏の母堂さく子刀自は本年七十八歲である。曾て喜壽の祝ひをなさんとて、色々と其の方法を講究し居りしに、刀自は、喜壽の祝ひをして下さるならば紀念として女子敎育の機關を設けたしとの希望であつた。源三郎氏等孝子順孫は大に之を贊し、一昨大正七年、遂に其の鄉土に於て淡海女子實務學校といふを設立して開校式を擧げられた。刀自の喜びは一方ならず、自ら校長となりて敎育の大綱を提げ、且つ其の校歌も、一、『明らけき御代にあふみの姬小路、ときはかきはに茂りつゝ、千代に八千代にいや榮に、榮えゆくこそうれしけれ』、二、『なよ竹の心すなほに生ひたてる、そのふし〳〵にこもるてふ、操も高き千ひろかけ、さしそふ末こそ樂しけれ』三、『霜にたへ雪をしのぎて春待ちし、若木の梅の色も香も、世々に秀でゝ匂ふなる、敎の庭こそうれしけれ』と

恩を忘るゝ者は佛に近き奉ることが出來ぬ。即ち佛教中の人たることが出來ないのである。徹底、恩に感ずることが深ければ、どうしても忠孝道德を修めずには居られぬものである。此の報恩觀念を基礎として、至誠の德を養なひ、日々夜々、間斷なく道德を實踐躬行せんと努めて行きますれば、德性は次第次第に增進して、終には全身心が道德體となるであらうと思ふ。爲さねばならぬといふは義務觀念であるが、爲さずには居られぬといふが報恩觀念であります。

慈愛の行持

次に慈愛の情を完全に發揮することが大切です。理想の確立も德性の涵養も、若し慈愛の德が起らなんだならば、矢張、自利一偏の事となつて、大乘的生活を大成することは出來ませぬ。慈愛といふは慈悲・博愛の德です。父母が其の子を愛育するが如く、その子を親愛して之を鞠育することに全力を傾注し、殆ど己れあることを忘るゝに至るものです。而して此の慈愛は決して下に向つてのみ起るのではありませぬ。上に對しても、我が大君の御心の御滿足あらせらるゝ樣に致したい、我が父母の御喜びなさる樣に致したい、我が師長及び先輩の御安心なさるゝ樣に致したいと思ひ、我れを忘れて之に盡すのが慈愛心の向上であります。下に對しては、弱を扶け乏を賑はし、苦を拔き難を救ひ、場合に依りては其の身を忘れて憐民救護の力を盡すのである。此の慈愛の德は、[illegible]

懸命に働いて、錦をもみ出す覺悟から、平生の箴として此の通りに致して居ります」と申したさうである。吾々も尋常に是の如き覺悟を有ちたいものであります。

松本順先生は明治年間に於て醫界の泰斗であるが、書生時代には頗る貧乏で非常な苦學をしたさうである。或日、空腹を告げたが食を求むるの資が無い。餘儀なく古足袋一足を見附出して質屋に驅けつけたが、番頭は金を貸して與れぬ。先生困つて居ると主人は氣の毒に思ひ、漸く天保錢一枚だけを貸して與れた。それでも先生は大に喜び、それで燒芋を買ひ辛うじて一時の飢を凌いだことがある。後に斯界の大家となるに及び、彼の主人が病の爲めに診察を乞うたが、主人はツク／＼と先生の顏を眺めて、先生は昔日の古足袋先生ではありませぬか」と問うたので、先生は往時を回想して厚く恩を謝し、治療に心を盡して舊恩を報ぜられたさうである。

我が國民道德の大本たる忠も孝も皆な報恩の行持である。恩に感ずる心ありてこそ始て誠の德を發するものである。故に報恩の觀念なきものは成佛の資格なき者と謂はねばならぬ。增一阿含經には『若し衆生反復する事を知らば此の人敬ふべし、小恩猶忘れず、況や大恩をや、設ひ我に離るゝこと百千由旬なるも尙ほ我に近けるに異ならず、我れ常に之を欲譽す、若し反復する事を知らざれば、大恩尙ほ思はず、況や小恩をや、彼れ我に近くとも我れ彼に近かず、正使ひ僧衣を被て我に近くとも此の人猶ほ遠ざかるが如し』と說てある。誠に有り難き御敎訓ならずや。

ならぬ。次には道徳上の感情を養うて利他心を向上せしむることが肝要である。之れと同時に、尋常に實踐躬行して道徳的意志力を增進せしむることが大切である。

佛教に於ては『孝順は至道の法なり』と示し『恩を知り德に報ゆるは是れ聖道なり』と教へて居る。恩分を分ちて四と爲す。即ち君主の御恩、父母の御恩、次に衆生恩というて一切衆生相互に恩惠を受けて居る。是れにも親疎の別があり、主從・夫婦・兄弟・朋友・親族等は親で、他の一般人は疎である。一般人の中でも、同業者とか同鄕同縣人等は親で、他は疎である。日本國民は親で、外國人は疎、外國人とても關係の深き者は親で、關係の淺き者は疎である。禽獸蟲魚に至るまで夫々恩分的因緣を有して居ります。次に三寶の恩、即ち佛の御恩とである。吾々は決して孤立して世に處することは出來ぬ。此の世に生るゝ時の如き、赤體にして寸絲を掛けず空手にして一粒を握らず、然も能く生長し能く發達し能く存在し能く活動する所以のものは、盡く四恩の賜といはねばならぬ。故に吾々は常々此の御恩の廣大なるを感じて、之を報謝せんことを心懸けねばならぬ。忠も孝も信も義も、皆な此の報恩の觀念より現はれ來るものです。

昔、江戸尾張町に七助といふ車力渡世をして居る者があつた。卑賤の生れではあるが平生の心掛至つて宜しく、常に紅絞りに紅葉を染め出した襦袢を纏うて居りました。或人がどういふ譯かと尋ねたるに、彼は『私は、皆樣の御蔭で無事に暮して居るのは、思へば有り難いことでありますから、車力渡世をして一生

を督勵して、智識信念の増進を圖り、且つ村内に一人も貧乏人のない樣に致したい、是れが私の希望であると申された。

承陽大師は世に世事に忙しき爲め坐禪等の修行に困難なりといふ者あるを戒めて、『たゞ是れ志のありなしによるべし、身の在家出家にはかゝはらじ、又深く事の殊劣をわきまうる人自づから信ずることあり、況や世務は佛法をさゆと思へる者は、唯だ世中に佛法なしとのみ知りて佛中に世法なきことを未だ知らざるなり』と仰せられ、宋の馮相公は政務に暇なかりし身なれども常に禪道に志し、『公事之餘喜坐禪少曾將脇到牀眠然雖現出宰官相長老之名四海傳』といふ詩を作られたことを御示し下されました。故に吾々は常に一心を佛陀の方向に歸し、業務の如何に拘はらず、佛心に相應し佛徳に模倣せんと志さすが宜い。さすれば隨時隨所に佛の御姿を見、佛の御聲を聞くことが出來る。『峰の色溪の響もみなながら我が釋迦牟尼の聲と姿と』との祖詠は全く此の意を示されたものであります。

徳性の涵養

次に徳性の涵養、是れは暫時も忽にしてはならぬ。我が國民の道徳は忠孝信義を以て其の中心とすべきである。而して其の大本は誠である。佛教に示す所では、報恩の觀念こそ徳性涵養の資源であります。之れが涵養の方法としては、第一に道徳上の判斷を誤らぬ樣、倫理上の智識を備へて良心を明かにせねば

155

永く善行善徳を大成せんと期すべきであります。是の如き理想を確立すれば、自づとその人の品性も人格も氣高くなるものです。坐禪は實に身心健康の要術であつて、老若男女、誰れにでも實行し得ることが出來る。寺がなくても師家がなくても、之を行ふに差支はない。

新潟縣古志郡竹澤村といふのは長岡市より通ずる三國街道なる縣道より一里半も離れて、可なり高い山の上に在る村で、戸數三百戸餘り人氣質朴にして信仰も甚だ深い。その村の星野駒次郎氏の父仙次郎氏は、禪學に志を傾け、宗演禪師にも參じた人である。常に禪を修して自ら樂しみ、且つ毎年十二月の臘八には、一日より八日まで家族及び親戚等の有志を集めて自宅に於て攝心會を修行する、之れが此の家の年中行事となつて居る。同氏の數代前より同家の主人たる者は、法華經を千部讀誦して千部塔を建つるを家法と爲す。同氏は明治三十三年三月十日、客と與に碁を圍みながら突然病を發し、自ら端然として坐禪じ、泊然として終焉を告げた。時に年六十八。その嗣駒三郎氏は既に法華五百部を誦了した。當主仙之丞氏は信州上田の蠶業學校教諭として教鞭を執ること二十五年、人格高き人であるが、最も禪學に趣味を有じ、遠からず歸國の上は、家庭攝心會を繼續して益々之を盛んにしたいというて居られた。同村長星野一也氏を始め、村民一同が信仰頗る篤く如何にも心持好き仁里である。予は本年八月八日、同村の請に應じ駒三郎氏方に二泊し、同家に於て晝夜法話を勸めたり、法螺貝を吹て時間を報ずると、諸方より續々參詣して殆ど滿場の盛況を呈した。仙之丞氏は父が弱くなりしゆゑ近々職を辭して歸村し、自分の一生に村民

本的の智眼を開かねばならぬ。根本的智慧の眼といふには自づから三通りの觀智が備はらねばならぬ。

初めには平等觀です。卽ち吾々御互は元來佛と平等の本性を有して、少しも缺くる所はない。但だ妄想執着の雲に蔽はれて此の本性が昧まされて居るのである。『雲はれて後の光りと思ふなよ本より空に有明の月』で、煩惱業障の雲さへ晴るれば卽心卽佛であるといふことを確認せねばなりませぬ。

次には生命觀です。吾々の生命は五十年や七十年で盡きるものと思ふのは、此の肉身の影をのみ認めて居るからである。萬物の變化するのは宇宙の大活動である。吾々は生といひ死といふは全く變化活動の形である。花開くとも天地は爲めに一微塵を增すに非ず、葉落つるとも宇宙は爲めに一絲毫も減ずるに非ず、開花落葉その儘が不生不滅である。假りの相からこそ生死の樣はあれ、實相に至ては不生不滅である。されば、吾々の眞の生命は決して生滅に依て左右せらるゝものではない。人々盡く無量壽であることを知らねばならぬ。

然らば衆生界の有樣を觀るに貧富・貴賤・苦樂・昇沈の別あるは如何なる譯であるかといふに、是れは皆な自分で作つた業に依て種々の果報を感じたのである。故に次には因果觀に入て原因結果の少しも昧ますべからざるを知らねばなりませぬ。此の三觀法に依て、吾々は速かに本心の德を顯はし、永久に善を積み功を累ね、而して終には十方の如來と等しき佛果位の功德體を成ぜんことを理想とすべきである。

此の理想實現の法としては、坐禪に依て一心の德相を現はし、戒法に基いて確固たる修養を積み、以て

わしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるゝ』といふが如き他力的信仰の意味とも見ることが出來る『よもすがら佛の道を求むれば我が心にぞ尋ね入りぬる』といふが如き、自力的信仰の自覺とも見るべきである。承陽大師は佛道を學得するには『法我れを轉ず』と『我れ法を轉ず』との兩節を心得よと仰せられた。法我れを轉ずとは此の全身を佛なり法なりに打任せて佛の御思召し、法の御指圖に歸命することで卽ち他力である。我れ法を轉ずるは已れ自ら佛の道を辿り法の力を現はすことで卽ち自力である。此の二大力が融合した處に健全なる信仰心が成り立つので、是を感應道交といふのである。

要するに、佛陀の御慈悲と御德とを景仰すること赤子の慈母に於けるが如く、寢ても寤ても有り難さがその身に沁み渡りて暫時も相離るゝことないと同時に、佛陀の御教へを守りて常に一切の惡を斷じ一切の善を修め、併せて一切の衆生を度脫せんことを期し、從晝至夜、佛心を磨勵し、佛德を實現せんことに努力し、此の信仰心を以て一身の樞軸となし、一切の行動が總て此の大信心より發動し來る樣にならねば、本當の信心とは申されませぬ。故に華嚴經には『信は道元功德の母たり一切諸の善法を增長す』とあります。

理想の確立

此の信仰心を基礎として第一に理想を確立することが大切である。大乘的理想の確立とは、先づ以て根

大乘的生活─┬─德性の涵養──金剛堅固の信仰心
　　　　　└─慈愛の行持─

となります。

先づ信仰の上からいへば、自づから二樣にして見ることが出來る。一は自力的信仰で、一は他力的信仰である。元來、信仰の健全なるものは、悲智圓滿なる絕對的大人格、卽ち佛陀の實在を認めて、之を崇敬し之に歸依して、煩惱妄想に穢れたる自我を沒却するものである。卽ち自己の全身心を捧げて佛陀大悲の德海に投入するのであるから、此の意味に於て自力などゝいふものは消融して了はねばなりません。されど一面から見れば、佛陀の慈光に攝取せられたる自己を尊重し、益々此の自己を訓練して佛陀の大德に倣ひ奉らんことを祈請せねばならぬものである。例せば我が日本の軍人が忠節三昧に住して其の全身を大君と御國とに捧げ奉り、義は山嶽よりも重く死は鴻毛よりも輕しと覺悟する時は、全く自我を泯じて居る。併し之と同時に、益々意氣を鼓して自己の本分を守り、行住坐臥の間に於て、御勅諭を奉戴して暫くも忘るゝこと無く、飽迄も報效の大義を貫徹せんと期するのが、眞に是れ軍人精神の獨立で、自己の眞面目を發揮する所以のものである。

信仰も亦た是の如くであるから、絕對的他力は絕對的自力と相一致するものであります。「なにごとのお

物質を莊嚴し擴大する所以の根源であるからであります。

金剛の信心

佛敎には自から大乘と小乘との二大分類がある。大乘と小乘との相異點には種々複雜なる判別法もあるが、其の中の重もなるものを擧ぐれば、小乘は惑障の解脱を目的と爲し、大乘は智德の圓滿を以て目的と爲す。又、小乘は自利主義で大乘は利他主義である。小乘は生死の苦惱と人生の纏縛とを恐れ、灰身滅智というて、生死の根元たる肉體と精神との運動を停止し、以て自己一分の解脱を目的とするのである。大乘は本性に具有する智慧德相を開發增進して佛果位に到達せんことを期し、未來際を盡して一切の衆生を濟度し利益するを目的とするのである。

併し小乘も大乘も皆な釋尊直示の法門であるとすれば、小乘というても決して誤れる敎ではない。小乘は極り大乘に進ましむる途中方便の敎へである。小乘の位地に腰を落着けるから惡いのです。小乘に於て眞解脱を得、進んで大乘の聖位に昇れば、小乘はやがて大乘の基礎となるべきものであります。然らば大乘的生活といふは、智德の向上を基礎とする活動的生活であると同時に、平等博愛を根底とする利他的生活であります。尤も佛敎の生命は信仰に在るのであるから、大乘・小乘を通じて、凡て金剛堅固の信仰の上に基礎を置くことは申す迄もありませぬ。之を標示すれば、

に智徳の莊嚴界に住すと雖も、種々の因縁に依りて衣食に乏しく財寶に窮し、汗を絞つて勞働するも猶ほ且つ生活に苦しむといふ者の類である。

三は物質的にも精神的にも貧弱なるもの、即ち家極めて貧乏にして常に生活に追はれるのみならず、知識もなく德行もなく信仰安心の道をも知らず、汗膏を流しつゝ悲慘なる生活を營むの類である。

四は物質的にも精神的にも富裕なるもの、即ち人格も氣高く智識德行も備はり、家庭も善く整ひ加ふるに德望を以てし、而して位地もあり財力も豊かなるの類であります。

尤も此の四種の中でも夫々高低全缺の差のあることは言ふ迄もないが、第四の如きは萬人齊く望む所の理想的生活であらう。されど斯かる圓滿なる生活は總ての人が之を占取することは到底、出來るものではない。然らば前三種の中にてどれが一番善いかといふに、先づ以て指を第二番目の生活に屈せねばならぬ。此の生活は物質に乏しいとは言ふものゝ、精神力を有する結果、必ずや終には物質上の生活力をも獲得するものである。精神的生活に貧弱なるは墮落の基であるが、精神的生活に富裕なるは必ず向上すべき潛勢力を有するものである。彼の祖先の恩惠や一時の僥倖に依りて物質上の大利を得るとも、精神の之に伴なふものなきが如きは、所謂『浮べる雲』にも似たるものにて、全く暫時の幻影である。

故に二種の生活の中では、必ず精神を以て基礎とせねばならぬ。此の精神生活の最高標準、之を大乘的生活といふのである。而して此の生活は決して物質と背馳するものではありませぬ。そは精神の向上は

ます。

併し多くの場合物質的文明とは知識の產物たる物質上の設備に名けたので、精神的文明とは精神の內、慈悲博愛の情と忠孝信義等の道德的意志力とを指したものであります。故に、仔細に觀察すれば、物質と精神とは主伴の關係を有して居るに依て、今日の文明は知識の點から見てこそ發達もして居れ、情意の方面から眺むれば、物質的設備も決して完全とは申されぬ。此の意味に於て、吾々は精神と物質との二者を融合して其の發達を圖らなければなりませぬ。之を個人生活の上から申しても、物質と精神とは前同樣劃然と引き離して見ることは出來ぬ。併し一應判り易く二者を別々にして見る時は、物質的生活とは位地と財產と權力と眷屬等に就て高下を判じ、精神的生活とは信仰・道德・和樂・志望等に就て長短を斷ずるのである。

斯樣に一應分けて見ますると、一般の生活狀態が自づから四通りに大別することが出來ます。

一は物質的には富貴にして精神的には貧弱なるもの、即ち地位もあり財產もあり堂々たる邸宅を構へ多數の眷屬を有し、出でゝは自動車にて風を切り、入ては山海の珍味に飽くの身にてありながら、親子夫婦等の間圓滿ならず、常に不平と不滿とに蔽はれ、胸中斷えず貪慾瞋恚の魔手に捕はれて、暫時も安心を得ること能はざるの類である。

二は精神的には豐饒なるも物質的には窮乏せるもの、即ち信仰もあり道德も備はり、家內和合して相共

大乘的生活

物質的生活と精神的生活

生活の狀態は千態萬狀であるが、大別すれば物質的生活と精神的生活との二つとなる。物質的生活とは形に現はれたる生活で、貴賤貧富種々樣々である。精神的生活とは精神の上から見た生活で、之れも亦貴賤貧富種々樣々である。併し精神と物質とは決して各別の物ではない。能く人々が、現代は、物質的文明は非常に發達せしが、精神的文明が甚だ不完全であると申すけれども、最も嚴格に討究し去る時は精神的文明に伴ふ物質的文明であるから二者相離るべからざる關係を有して居るものである。若し精神的文明が幼稚であるとすれば、物質的文明も決して十分の發達は遂げて居らぬ譯である。今且らく精神現象を知・情・意の三者に分けて見れば知識と慈悲と德行との三科となる。此の三科は何れも精神の能力であるが、中に就て知識の如きは、物質文明の根本基礎である。今日吾々の肉眼に映ずる物質文明なるものは、全く發達せる知識の產物である。されば物質的に文明が進んだとすれば精神的にも文明が進んで居るのであり

かり非を防ぐの力と、攝善法戒の善を行ひ德を修むる力とが相加はらねばならぬ。攝律儀戒に依りて高潔なる品性と正直の美德とが養はれ、攝善法戒に依りて高尙なる理想と健全なる勇氣とが養はれる。此の高潔なる品性があつてこそ始て圓滿なる慈悲が現はれます。又、此の正直の美德があつてこそ始て利他の行爲が實現されます。高尙なる理想がなければ偏狹なる愛情に陷り易い、健全なる勇氣がなければ利他の行務が繼續されぬものであります。又、利他行は必ず其の基礎を信仰に置かねばならぬ。

北國の信者が社寺に寄附した場合とか他人に物を施した場合に、往々、此の度は御陰樣で御寄附をさせて戴いたとか、施しさせて戴いたといふ事をいはれる、この『させて戴いた』といふ言葉の中には自づと感謝の意が含まれて居る樣に思はれます。此の言葉の中に自己といふ觀念があると斷ずるのは恐らくは正當なる見方ではない。縱ひ『させて戴いた』から自己に益する所があると思ふ點があるとしても、此の自己の中には利といふ觀念があるとは斷ぜられぬ。卽ち自己以上の自己であると言はねばならぬ。是を眞情の露現とでもいふべきものであらうかと思ひます。此の眞情の露現こそ正しく佛の大慈悲心の發動でありますから、これを佛心の靈機とも申すのであります。吾々は、從晝至夜に精神を勵まして佛心の靈機を撥轉し、以て無上菩提を莊嚴することに努めたいものであります。

や知る世の爲めにとて身を思ふ身の爲めにして世をば祈らず』と宣ひ、後醍醐天皇は『身にかへて思ふとだにも知らせばや民の心のおさめ難きを』と宣ひしが如き、如何に有り難き御仁德ではありませんか。又、仁孝天皇の『雨に思ひ風に心をくだくかな、民の手わざのたゞ安かれと』の御製、孝明天皇の『すまし得ぬ水に我が身は沈むとも濁しはせじな四方の民ぐさ』の御製等を拜し奉りては、餘りの勿體なさに唯々感泣し奉るの外はありませぬ。殊に明治天皇の御恩德や御製に至りては今更こゝに述べ奉る迄もないことです。

要するに大聖は利他を以て自己の絶對目的として居らせらるゝに依て、利他より生じたる快樂こそ眞に永遠無窮の快樂です。釋尊の娑婆往來八千返、阿彌陀如來の五刧思惟、觀音大士の大悲心を以て衆生に代て苦みを受けたまふことや、地藏菩薩の大願力を以て無佛の世界に導師となりたまふこと抔は、實に勿體ないとも有り難いとも申し上げ樣もないことだが、佛菩薩の御手元から申せば其の御艱難、御苦勞が寧ろ最上最高の御樂しみであらせられ樣と思ひます。如何となれば、此の大慈悲は一切の善法を增進し、諸惡莫作衆善奉行の大目的を達すべき唯一の基礎であるからであります。故に優婆塞戒經には『慈心は卽ち是れ一切安樂の因緣なり』とも『慈悲を離れては善法を得ること無し』とも仰せられ、涅槃經には『諸有の善根は慈を根本と爲す』とも御示し下されてある。

併し唯親切一方であると、事に依ると親切が却て讐になることもあります。故に必ずや攝律儀戒の惡に遠

ば、親鳥の驚き歎かんこと如何計りなるやを思ひやつた爲めである。故に氏は後年に至りて『我を敎へ導きて、思ひやりある人たらしめ、思慮ある人たらしめしは全く姉達の感化に依る』というて居る。小鳥の巢に對しても一種の同情を以てせしは全く利他的情操である。ダーキンは此の利他的情操を失墜せざりし爲めに思ひやりある人、思慮ある人となつて其の自行をも圓滿ならしめたのであります。

仁德天皇は御卽位の後、高津の宮を造營し給へしが、猶ほ民の負擔を慮かりて其の作事甚だ質素を極め給ひ、更に民の貧苦を憂へて三年の課役を除き給はれた、やがて宮殿は大破に及びたるも毫も御心を煩はさず、ひたすら農桑の道を勸め給はれたから五穀も穰り年も豐かになつた。天皇、一日、高臺に上り、民家の炊煙盛に起るを眺めさせられ『朕は既に富めり』と仰せられた。皇后は之を怪みて『今や宮室は風雨に吹き暴され御殿籠りさへ安からぬを如何で富めりとは宣ふぞ』と問はせ給ひければ、天皇は『君は民を以て本となす、民の富めるは卽ち朕が富めるに非ずや』と仰せ遊ばされた。なんと廣大無邊なる佛心の顯現ではありませんか。仁德天皇は正しく人民の富を以て御自身の富と爲し、人民の快樂を以て御自身の快樂となし給うたのである。故に其の富は天下に洽ねく、其の快樂は永久に窮り無いのであります。

歷代の天皇方の御仁德に關する御製などを拜し奉りますれば、實に是れ乾坤無上の大經典を拜讀するが如き感じがする。後鳥羽天皇は『夜を寒み閨のふすまのさゆるにもわらやの風を思ひこそやれ』と仰せれ、後嵯峨天皇は『[illegible]』と仰せられ、伏見天皇は『神

ぬ。

優婆塞戒經には淨戒の四法といふことが說いてある。一には慈心、卽ち衆生に快樂を與うること、二には悲心、卽ち衆生の苦痛を拔濟すること、三には無貪心、此の慳貪を離るゝ心が布施の源泉です、四には未だ恩處あらざるには先づ恩を以て加ふ、是は彼れに親切なくも先づ我れより親切を加うること、此の四法ありてこそ、八面玲瓏の戒德を發揮することが出來るのである。而して此の戒德こそ眞に天地の大仁、諸佛の大慈悲たる甚妙不可思議の佛化に一致するのであります。

佛心の靈機

修證義に『愚人謂くは利他を先とせば自らが利省れぬべしと然には非ざるなり』と仰せられてある通り、愚なる人は、衆生を利益することをのみ主眼としたならば、自分は永久に苦惱を解脫することが出來まいと思うであらうが、これが抑もの謬りである。眞個の自利は、利他に依て其の目的が達せらるゝものです。若し利他の觀念が無かつたならば、そは卻て自己を滅却するものである。

動物進化論の創唱者として有名なるダーキンは、幼年の頃より動物の研究に志し、諸鳥の卵を集むることに熱心なりしが、其の姉は彼れが殘忍酷薄の性に陥らんかを恐れて、一の巢より取る卵の數は必ず一を越ゆべからずと嚴重に諭したとある。是れは、縱し學問の爲めとはいへ、一の巢より多くの卵を取ら

いよ盡せ千萬の民の心を一つにはして』と仰せ下されてあるのは、全く此の意味を御述べ遊ばされたものかと察し奉るのであります。

扨て此の道理を推して考へれば、眇たる一介の小民でも、眞に能く大君の爲め、御國の爲め、社會の爲めといふ大願力があれば、大日本帝國の全部は盡く願力の範圍內に攝まつて居る譯である。更に進んで、世界人類の爲めにといふ志があれば、全世界が其の願力の有に歸するの道理あることを知らねばなりませぬ。況や、明治天皇の如きは、其の御仁慈の德が既に四維八紘を覆ひ給うて居らせられたに依て、御崩御の報が一たび傳はるや、萬國悉く弔意を表し、一人として哀悼し奉らざるはないのでありました。吾々も亦た謹で此の大御心に倣ひ奉りて、博愛仁慈の德を養ふことに努めたいものである。我が皇祖皇宗の如きも、其の御仁慈の廣大なることは、日月の萬物を照し、天地の萬物を覆載するが如くあらせられるのである。

彼の住吉明神の御託宣と稱する御語に『我に神體なし慈悲を以て神體とす、我に神力なし正直を以て神力とす、我に神通なし智慧を以て神通とす、我に奇特なし無事を以て奇特とす、我に方便なし柔和を以て方便とす』とある。此の御託宣の出來に就ての評論は兎も角もとして、其の旨意に至つては慥に神の御德を表明したものと見るべきである。德川家康公は『慈悲の目に惡しと思ふ人ぞなき罪ある身こそ猶ほあはれなり』といふ歌を常に座右の銘にせられたと申すが、[illegible]

づる人ありとも、慈悲心なき時は人物としての價値は認められぬ。ただ調法の機械たるに過ぎぬ。萬一、彼れにして利己的慾望が强ければ、その調法な機械が却て天下人に迷惑を掛ける様な厄介物となる場合も往々あります。縱ひ位高く家富める人でも、慈悲の行願を缺く時は、丸裸にして見れば矢張半文錢の値打も無い。故に人間の人間たる値打は、廣大圓滿なる慈悲心を有して、萬事萬境の上に於て其の行願を發揮する所に在るのであります。換言すれば、攝衆生戒の上に在るのである。

釋尊は法華經に於て『今此の三界は皆是れ我が有なり其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり』と仰せられてある。洵に有り難き御語であるが、吾々も亦此の御語に倣うて衆生利益の大誓願を發しますれば、よしや下格劣智の者たりとも、釋尊の御心に變りなき願力を具ることが出來やうと思ひます。九尺二間の裏店住居、取るにも足らざる身なりとも、日常生活の全部を擧げて、我が大君の御爲め、國家の御爲め、社會の爲めにせんとの大願心があつたならば、其の願力は其の人の一擧一動をして最も價値ある、且つ最も道德的なる行爲たらしむべき力を有して居るものです。

我が帝國の鞏固を致す所以は、決して少數なる政治家や富豪の力のみではない。六千萬の同胞が各々至誠に國家を愛し、大君に忠誠を盡し奉るその眞心が、打して一團となつて始て能く國家の富强も見られるのであります。此の一團の大勢力の中には、九尺二間の裏店に住む者も、山村僻地に在る者も皆な籠つて居る。此等の小民も慥かに大勢力を造るべき一個の要素であります。明治天皇の御製に『國のためいよ

言ふ迄もなく、其の御仁徳の廣大なることは六合を包括し三際を光照し給ふものであります。御製にも『照につけ曇るにつけても思ふかな我が民草の上はいかにと』と仰せられて、一日半時も民草の上を御思召し給はざることはあらせられなんだ。又、國政をみそなはし給ふに當りては、夏の熱さをも御忘れ遊ばさるゝ程にて『まつりごと出でゝ聞く間はかくばかりあつき日としも思はざりしを』との御製もある。明治天皇は其の御製に『あさ緑すみ渡りたる大空の寛きを己が心ともかな』と仰せられし通り、其の大御心の寛弘なることは大空の涯際なきが如くであらせられた。而して、世界人類の全體をも御覆ひ遊ばさる程の御慈悲心は『わが心いたらぬ隈のなくもがな、此の世を照す月のごとくに』と御製遊ばされた通りで、その御心は全く佛陀大覺尊の御心と同體にわたらせられたから、尋常の御事蹟を承はりましても實に涙の出る程有り難い。此の御慈悲心が國民の腸の底にまで沁み渡つて居るから、日清・日露の兩役に於ける我が陸海軍人の働き振りは、全く一種不可思議の靈動であつたのであります。而して此の陸海軍人の大活動も全く明治天皇の甚妙不可思議の佛化より出でたるものと言はねばなりませぬ。また、此の御慈悲心を體得して吾々の精神と行爲の上に實現せねばならぬから、御製にも『おのが身を顧りみずして人のため盡すや人のつとめなるらむ』と仰せられて、吾々臣民に慈悲の行ひの修養を御諭し下されたのであります。

抑も、人間としての價値は、此の慈悲の行願如何に依て現はれて來るのである。縱ひ學識才能世に秀

へたり、宿泊所を給したりするの類です。

今日の時代に於ては利行の種類も、自づから複雜になつて來て居ることは言ふ迄もなく、教育の御勅語に『進んで公益を廣め世務を開き』と仰せられしは、全く利行を御奬勵下されたのであります。故に消極的事業としては養育院、孤兒院、施療院等を起して鰥寡孤獨を救濟し、或は出獄人を保護するの事業、貧民に慰問袋を配つたり、無料宿泊所を設けたりするの類、積極的經營としては、社會の幸福を增進し、民業の發達を促がし、或は社會教育の普及を圖り、人智開發の機關を設くるの類であるが、此等は各々其の分限に應じて出來得る限り勤め勵むべきである。

以上の三法、卽ち布施でも愛語でも利行でも之を實行するに當りては、其の時代と其の人と其の處とに依りて夫々方法を擇びて效力あらしめねばならぬ。その方法手段が第四の同事であります。要するに四攝法は何れも衆生濟度の大慈悲心を運用する上の方法である。明治天皇の御製に『己が身を顧りみずして人の爲め盡すや人の勤めなるらん』と仰せ下されたのが、四攝法の精神であります。

御盛德と佛心

先帝(明治天皇)の如きは、申すも畏れ多きことながら、其の御盛德の偉大なる古今東西に比類を求むること難き、活きた神樣、全く肉身の佛菩薩であらせられた。其の御智德と御勇氣との邁れさせ給へることは

す。若し同情の念と慈愛の心とがあれば、どうして、虚妄を言うて欺いたり、惡言を放つて人の名譽を傷けたり、兩舌綺語を弄して人の心を惑したりすることが出來ませう。必ずや其の言ふ所が、親切で、正直で、柔和で、鄭重になるものです。されば愛語の徳は自づから兩舌・惡口・妄言・綺語の四の過失に遠ざかる功能があります。

第三に利行といふは一切衆生を利益するの行爲である。布施を行ふにも、言語を發するにも、總て衆生を利益することを目的とせねばならぬ。諸徳福田經に說く所の七法の廣施とか八福田とかいふものは皆な利行の一端を示されたものです。

七法の廣施とは、一には佛圖僧房堂閣を興立し、二には園花浴池樹木清冷、三には常に醫藥を施して衆病を療治す、四には堅牢の船を作りて人民を濟度す、五には橋梁を安設して羸弱を過度す、六には道を正しく井を作り渴乏には飲を得せしむ、七には圊廁を作りて便利の處を施す、これが七法であります。社會の未だ開けざる時には、共同の圊を作るのも、行道樹を植ゑるのも、道路を開くのも、井戸を堀るのも、皆な是れ大なる公利公益である。

又、八福田とは一には廣路の義井、即ち共同用の井戸を堀ること、二には橋梁を建造す、三には險隘を治め平らぐ、即ち道路を開通すること、四には父母に孝養す、五には三寶を恭敬す、六には病人に給事す、即ち施藥又は看病をすること、七には貧窮を救濟す、八には無遮會を設く、即ち廣く一般に食物を與

は道德的敎訓を施すの類、出世間法施とは成佛得道の法門及び未來永久の最勝功德を授くるの類であります。

次に無畏施とは無畏は畏れなしであるから、つまり安心といふ意味である。吾々は、煩惱の爲めに始終身心を繋縛せられて、自ら苦痛を招きつゝあるのである。又、宿世の罪障あるが爲めに、種々の事情が纏綿したり樣々の境遇が逼迫したりして、容易に安心を得ることが出來ぬ。些細の事からいへば、知識に乏しいのも、病に罹るのも、事理に昧いのも、前途の方針に迷ふのも、皆な一種の畏れである。此等の畏れなからしむる樣に化導し、救濟し、提撕し、保護して行くのが、無畏施であります。

親が其の小供を愛育するにも、乳を哺ましたり、衣服を被せたり、食物器具を與へたりするのは財施、言語や禮儀を敎へたり、物の道理を示したりするのは法施、結局小供の發達と將來の幸福とを得せしめんと努めるのは無畏施である。吾々御互は畢竟、父母の布施力に依て今日の身となつたのであります。故に吾々御互は、父母に對しても常に布施を以て其の御恩に報い、又、子孫や社會國家に對しても宜しく布施行を營むことに努力せねばなりませぬ。

第二に愛語といふは十重禁戒の第六不說過戒の條下で委しく御話しに及ぶであらうが、要するに口業を以て衆生を利益するのであります。修證義に『愛語といふは衆生を見るに先づ慈愛の心を發し顧愛の言語を施すなり』とありて、他人に對して厚き同情の念と慈愛の心とを以て言語を發するのが愛語でありま

佛の眞弟子たる菩薩は、本性の慈悲心を實現する爲め、先づ第一に大誓願を發せらるゝ。その大誓願とは、所謂『自未得度先度他』で、自分は縱ひ成佛せずとも一切の衆生を濟度して成佛せしめんと誓ふのである。而して此の大誓願を實行するには四攝法と稱する四種の標準に從ふのであります。修證義には此の四攝法をば『四枚の般若』と仰せられてある。卽ち布施と愛語と利行と同事との四行です。

第一の布施といふはシキホドコスと訓んで、自分の力を頒ちて他に之を施し與うることである。委しい事は十重禁戒の中の第八不慳法財戒の處で說明することとして、玆では唯だ大要だけを御話し致します。布施を分つて財施と法施と無畏施との三施と爲す。

財施とは物質的布施である。華嚴經疏に飮食施と珍寶施と身命施との三を擧げてあるが何れも財施に屬する。飮食施は飮物や食物などを施すこと、珍寶施は金錢や田畑山林や衣食調度等を施すこと、身命施とは自己の身體や生命を施すこと、故に他人の爲めに勞力を費すことや國家の爲めに身命を抛つことは言ふに及ばず、僅かなる手傳ひ事なども皆な身命施の一分です。

次に法施とは他の精神を資益すべき法門を授くることや他の智德を開發すべく教育を施すこと抔をいふのである。般若經には世間法施と出世間法施との二つを示してある。世間法施は智識や技藝を授けたり又

尚ほ孟子は例を擧げて『今、人が孺子の將に井戸に落入らんとするのを見れば、其の小兒が何等の關係もなき者にもせよ、必ずや怵惕惻隱というて心の中に氣の毒で堪らぬ樣な感じが起り、自然に之を救ひ上げるものである。而して此の感じが天性より發するのであるから、交りを小兒の父母に結ばんが爲めでもなく、譽を鄕黨朋友に要めんが爲めでもなく、又、小兒の啼聲が惡さに助くる譯でもない、全く心の底から、あゝ可愛相ぢやと思ふ感情が發して吾れ知らず助くるのである。此の惻隱の心こそ仁の端である』と說いてあります。

是を佛敎の上から申せば、本心に具有せる佛性の慈悲心の微動である。此の慈悲心は獨り人間の上ばかりではなく、禽獸に至る迄も自づと之を有して居る。高祖大師も『見ずや小蟲畜類も其の子を養育するに身心艱難、經營苦辛して畢竟長養するも父母に於て終に益なし、然れども猶ほ子を念ふの念小物すら猶ほ然り、自から諸佛の衆生を念ふに似たり』と仰せられた通り、雀や燕や犬や猫でも自然に其の子を愛育するの情愛を有て居る。彼等は生長の後にはどうしてくれやうかといふ考はない。全く報酬を期せずして天然に慈悲心を實現して居るのである。是を本能性と稱するも、其の此の如き本能性を發するのが佛性の慈悲心を具有する證據であります。況や萬物の靈長たる吾々人間に於てをやです。此の本性を修養し助長して圓滿なる佛德を現はすのが佛敎信者の目的であります。故に古歌にも『あはれみを人に施す心より外に佛の姿やはある』、『佛とは何を岩間のこけむしろ、慈悲より外に敷くものぞなき』ともいうてある。

恩澤といはねばなりませぬ。して見ますれば全宇宙は正しく一大佛心である。此の佛心に合體したのが眞の佛菩薩であります。故に吾々御互は、知識を啓發し勇氣を振起して、一切衆生を利益せんとの大願行を營まねば、決して佛菩薩の功德を成就する事は出來ませぬ。

是の如く慈悲恩愛の德は宇宙自然の德性でありますから、吾々も亦前に述べた通り、其の天性に於て慈悲、卽ち愛の妙用を有して居る。稚兒の間は母に向つて愛を注いで居る。尤も自己發展の必要上母を慕ひ母を愛するので、其の實は利己的作用であるなどといふ論者があるかも知れぬが、人情の發動は單に自己保存の爲めに母を慕ふとのみとはいはれませぬ。其の間に言ふに言はれぬ恩愛の眞情が動いて居ることを見出すことを忘れてはなりませぬ。稍や長ずるに及んで、玩弄物を愛するのも土いぢりや水いぢりをするのも、皆な何物かを對象として天性の愛を發起するのである。

それから進んで、兄弟相愛し朋友相愛すといふ樣に愛の德は無限に發達し、遂には忠とか孝とか云ふ道德的意義が備はりて玆に人道の秩序が成り立ち、佛教に所謂慈悲の德が現はれるのである。故に昔話を一つ聞ても、善人にして不幸に陷る者があれば自然に同情心を發し、惡人にして幸運なる者があれば自然に之を憤慨する。而して此の情愛は惡人にもあれば野蠻人にもある。苟も人類として此の情愛を有せざる者はない。孟子の所謂『人皆な人に忍びざるの心あり』というたのは此の天性の情愛を指したのである。

生を濟度せんが爲めであります。故に佛陀大悲の御誓願より申せば、智德と福德とは大法にして慈悲でそ

眞の目的にてあらせられるのである。

抑も宇宙の大精神とはどんなものであるかといふに、之を人格に擬して推し究めて見れば、全く一大佛心と見ることが出來るのである。宇宙その物の實體は、元來、生滅を離れ、凡聖を超えたる絶對平等の本體には相違ないが、その間に一定不動の法則が行はれて居つて、何れの處に行ても何れの時に至りても寸毫の異動はないものです。是を眞如隨緣とも因果相續とも申すのであります。故に人間の知識なるものは、天地の法則を覺知して是を人事上に應用するに過ぎぬ。さすれば、天地自然の知的作用が正しく人間知識の源泉といはねばなりませぬ。

次に宇宙の全體が一大意志の權化とも申すべきである。春風一たび起れば萬木盡く芽を出し蕾を吐く、『春なれや名も無き山も朝霞』此の春王の命令は何物の力と雖も拒絶することは出來ませぬ。秋風忽ち生ずれば、叢林紅葉の色を呈し、梧桐一葉落て天下の秋を知る、此の秋帝の號令は如何なる山村水郭に迄も勵行されて居るではないか。此の如く天地萬象は常に宇宙の大意志の下に四時の循環を爲して居るのであります。

それから宇宙間の萬物は互に相扶け相補うて生々發育して居る。山澤氣を通じ陰陽交和し、日月星辰の大なるより山川草木の小なるものに至るまで、齊く共同生活の狀態を爲して居る。是れ皆な宇宙の大

佛心の實現

佛陀の大慈

佛の御心とは何ぞやと云へば、畢竟ずるに大慈大悲であります。故に『觀無量壽經』には『佛心とは大慈悲是れなり、無緣の慈を以て諸々の衆生を攝す』とある。尤も佛には三德というて智德と斷德と恩德との三つの德があります。是れは詳い事は何時かも御話し致した筈であるが、智德といふは宇宙の本源を究め、自己の本性を明め、兼て萬象の起滅衆生の根性をも覺知する所の大智慧であります。又、斷德は決斷の勇氣で、所謂意志の大活動である。此の意志の大活動に依りて諸々の妄念を降伏し、所有艱苦にも耐え、兼ては自己の大理想に向つて勇猛精進するのであります。第三の恩德といふは一切の衆生を餘さず漏さず救ひ渡さんとの大慈悲行であります。此の中、上の二德は自行であつて此の自行力が無ければ利他の妙用も現はれて來ぬは當然である。

かく三德ありと雖も最終の目的は利他の一門に歸するのです。智を磨し勇を勵むのも歸する所は一切衆

事は必要である。このむせるとか臭いとか云ふのは、自分が、學問なら學問に囚はれるので、學問の爲にむせかへつて煩悶を起すの類である。宗教にむせて、宗教に煩悶するの類である。是等は學問・宗教に徹底せぬものである。

眞に佛教に徹底したものには、そこには煩悶はない、苦惱はない。この境に至らんには、前にあげたる釋尊御示しの、樸直・優雅・淳厚・堅志・同情・師訓・智識・信念の八德を修養具足せねばならん。もし八德具足したならば、そこに乃ち今世安穩、後世善處といふ佛教の目的に達することが出來る譯であります。

洪川對へて曰く『試に喫却せよ、見ん』

香煎といふのは、麥こがしともいうて、初夏、日長の時分に、よく喫べるものである。今、尾州の洪川と音が通じて居るので、雲水が『麥香煎か米香煎か』とかけ言で問うたのは、今日の語にすれば向上か向下か、『洪川汝の證悟如何』といふのである。之に對して、洪川の對へが面白い、『試みに喫べて見たら、分かるだらう』といふのである。

一口に飲みたる水の味を問ふ人あらばいかに答へむ

香煎の味はどうか、洪川の證悟をどうかと尋ねるより自分で十分修養を積まねばならぬ、氣をつけよ、と誡めたのである。道も佛も一體である。向うに佛がある、佛は西方淨土にある、自分以外にあると外ばかり捜して居ても求むることは出來ぬ。もしそれ、自己心中を捜り得たらば、そこに佛を見、そこに淨土を求めることができよう。

私は古代禪學、即ち達磨以後百年間の禪風は實に結構純粹なものであつたと思ふ。宋以下になると水の交つた禪で、禪の氣が純粹でなくなつたやうに見える。

處で、洪川の答で一本參つた雲水は、返す語もなくて居つたから、洪川が『むせたか〱』と言はれた。吾人は佛教を研究すると佛教にむせる。學問をすると學問にむせる。道德を論じて道德にむせる。む

領主が問はれた意味は、薩摩では、士族武家の出でなければ此の寺の住持となれぬ風であるのに、元來、お前は土百姓の出でありながら、かくなつたはどういふわけかと詰つたのである。流石に無三尙和の答へは、實に立派なもので『泥中の蓮華』蓮は高原の陸地に生ぜず、卑濕の汚泥に生ず、汚ない泥の中から出ても、その花の清淨美妙なるは例へやうもない。自分は賤しい百姓に生れたけれ共、數十年の勤苦難行によつて、花の如くに學德を備へ、今日、領主歸依の禪刹に入るに至つた、別に不思議な事はない、と言ふ意であつて、大德の一言天晴なものである。

『桃李不レ言、下自成レ蹊』で、花が見事に咲けば、自分が廣告せんでも人が眺めに來てくれる。

　守るとも動かずながら小山田のいたづらならぬ案山子なるかな

こちらで十分に備へてあるならば、いつどんな事に遇ふとも、事に躓づく心配はない。人が陷れんとしても、反對に相手を說服して、益々こちらの力あり德あることを示すに至るものである。

麥香煎か米香煎か

尾州名古屋の萬松寺は同じく禪宗で、尾張侯の菩提寺、曾て洪川といふ大德が居られた。ある時、一人の雲水來りて言ふには、

『久しく洪川（香煎）ときく、麥香煎か米香煎か』

にお目にかゝり『彼の福泉寺新住職無三なるものは、實は百姓の倅久四郞と申す者、かゝる下賤の者が、君公御先祖累代を祀つた大寺に入は甚だ心得ませぬ』と申し上げた。島津侯は大量の方『併し、無三は當國一の名僧、學問といひ、德行といひ、他に比べ者がない程の人物、今、晋山するといふのに、素性を洗ひ棚卸しするのも氣の毒なれば、先づ止めにせられよ』と優しく仰せになつたが、南林寺、之では芝居が仕組めないので一生懸命『然らば、晋山の時に當り、君公にも御臨場の事なれば、何とぞ彼れ無三の度胸を御試めしに相成りたい。その方法は、普通の問答でなく、君公御自身大音聲にて「いかなるか之れ佛」、「いかなるか之れ佛法」といふやうな、皮肉の大問題を御出し下されまするやう』といふので、領主もそれなら宜しいと御承知なされた。

かゝる謀ありとは夢にも知らぬ無三和尚、愈々晋山の當日となりました故、役僧を指揮して本堂、書院すつかり準備し、例を以て領主島津侯も御參詣なされたから、是に晋山の大典を擧げることに致した。禪宗の例で、初めに　天皇陛下の御安泰を祈り、次に三國傳來の祖師方を供養し、それから無三は須彌壇に上つた。すると、遙あちらに御簾を隔てゝ御出でになつた殿樣が、此の時つか〱と出かけて、本堂に響き渡る大音聲で『如何なるか是れ百姓久四郞』と仰しやつた。滿堂の人々びつくりして、何事が起るのか顏色をかへて手に汗を握つた。當の主人公たる無三は、從容自若として動かない。聲も爽やかに

い名僧智識でも、他國の者ならば決して住持になれなかつたのは島津侯が命じた所で、之は武士でも、僧侶でも、自分の領内から英傑俊才を引き立てんとの考へであつたらしい。

偖、鹿兒島の城下を去ること七里程の在處に、福泉寺といふ島津侯の菩提寺が在つた。只今では至つて微々たるものではあるが、其の昔は領主の勢力で大したもの、從つて、この寺の住持もなか〳〵大したもので、この住持になるものは士族出、卽ち武家の出家したものでなくてはならぬといふことであつた。

處で領內、久志良村に久四郎といふ農家の小供があり、出家して頗ぶる聰明博識、加うるに品行端嚴で、所謂『學德兼備』の名僧として推重され、福泉寺住職となることになつた。生れは農家であるが、まあ規則だからといふので武家の小供になつて、出家したといふ。只今の戶籍上の手續を濟ませ、愈々住職の披露、之を晉山式と云ひますが、此の式を執り行ふことになりました。

この晉山式には、本堂須彌壇の上の佛像を片付けて、新任住職がその上に坐して、參堂の僧侶と問答に及ぶのである。住職が問答に負ければ須彌壇から引ずり落されるのは勿論、隨分外聞の惡るい話で、これが、禪家の大試驗場である。

然るに、同國南林寺の住持がこの由を聞きて、非常に羨んだはよいが、嫉妬を起して、土百姓の倅が領主の菩提寺に入るとは怪しからぬ。晉山式に一番恥をかゝせてやらうと、惡い了見で、早速、領主島津侯

127

て、安樂にくらし、榮燿の限りを盡してみたいからです」と、隨分、蟲のよいことを言ふものであります。是も一つの迷見妄想である。然らば、往生、又、佛教の眞意義は抑も何であらうか。

道を愛すべし

佛教の目的、往生の眞意は道の爲めに盡すといふにある。古歌に

　人の親の心はやみにあらねども子を思ふゆゑに惑ひぬるかな

親が子供を世話するのは、人前があるからとか、義理があるからとか、そんな水臭い了見で面倒がみられたものでない。心から、心の奥底から可愛いからこそ、自分の身を忘れてまで子供を庇保ふのである。子供が丈夫に育つて立派なものになれば、それが母親には極樂である。親は子供の爲めに生きて居るのである。

昔から、忠臣義士、彼等が身命を賭して、國家のため君主のため、百難千難萬難を冐して倚顧みず、あらゆる全力を振うて働くのは、國家が大切、君主が大切との誠心誠意があるに基づくからである。家を去り、妻子に別れ、一笠一杖、飄々として雲山水涯を友とし、而も機に觸れ縁に遇ひて衆生化度をする僧侶は、行住坐臥、宗教を大切、教法を大切として居るから、是に不惜身命の勇氣を以て大業を成ず

居られぬ。即ち、遂に十萬億土の西方極樂世界にのみ在すとばかり考へて、彌陀と自分とは全く縁のきれた他人行儀に思うて、更に兩者の關係をつけない人がある。それでは佛敎の門に入つて未だ堂に上らざるものと云はねばならん。吾々は所謂向上主義・進取主義を採りて、日に新たにして又日々に新たなるが如く、一日一日と修養を積み、一歩一歩、理想の覺體、本來の佛地に進み近づかなければならぬのであります。

死んでから、善い處に生れるのが後生善處には違ひないが、之は字義の上の一應の解釋にすぎない。今之を廣義に解けば、家業に精を出して子孫の爲めを計るも後生善處、主君に忠を盡し父母に孝を盡すも後生善處、社會公衆の爲に盡瘁するのも後生善處である。

往生淨土といふことは結構なことであるが、之を極端に解すると弊害が生じて來る。何となれば、自分は死んでから淨土へ生れるのだから、此の世では何でも好な勝手な事をして暮してもかまはぬ、といふ淺薄な考へを起すからである。淨土門の開山たる法然上人や、親鸞上人は、決してさういふことはお說きにならなかつた。兎角、後世になると開祖・先哲の言を曲解して、自分の都合のよき理窟をつけたがるものである。かういふ御都合主義の人に『どういふ目的で淨土へ生れたいか』と聞きますると、『極樂淨土はまあ金銀でできた御殿の中で、立派な庭があり、珍らしい鳥や美しい花があつて、腹が減つた頃には、七珍方丈どころか百味の御馳走が山の如くに出るから、是非、來世は、さういふ結構づくめの處へ生れ

く、今世安穩を得んとならば、則ちこの八箇條の精神を堅く行うて、違はない樣にすることが肝要である。

後生善處について

次に、今世安穩に對する後生善處、後生といふと死んだ後のこと、卽ち未來とすぐ思うて、地獄とか極樂とかを聯想するが、この後生を縱に眺めないで、橫に見たいと思ふ。卽ち過去と現在と未來とを、一段一段、梯子で二階三階へ昇るやうに考へないで、一筋の大道を甲地から乙地へ行くやうに、平面に橫にして見ますと、餘程事が易く思はれるのである。

譬へば、日本は維新以前に於いては、十分開化したとは云はれなかつたが、維新以來、熱心に西洋文物を輸入て、四十餘年の今日は、旣に大體に於て西洋文明諸國に追ひついて來たわけである。昔は、夜になつても行燈に蠟燭で、さつぱり燈火もとれなかつたが、今日では、ランプあり、瓦斯燈あり、電氣燈あり、イルミネーションの如きは、實に晝間にも劣らぬ位の光明を放つのである。かく便利に開けて參つたのは、我が日本が歐米先進國に學んで、よく文明の利器を應用し、卽ち物質上に於ての善處に到つたからである。

乃で佛敎に於て、後生善處を解するに、悲智圓滿の佛は甚だ尊嚴で在つて、吾々の住むやうな穢土には

誡めるのである。人間が世に立つには必らずかくせねばならぬ、かくすべきであるといふ一種の標準が大切である。この標準は卽ち師訓に求めねばならぬ。もし人、心眼暗ければ、百千の師訓も之に役立たず、心眼を開けば、溪聲山色、自然そのまゝが大師匠である。名高き蘇東坡が、

溪聲便是長廣舌　山色豈非清淨身
夜來八萬四千偈　他日如何擧似人

吾人は是の溪聲山色を師として修養せねばならぬ。

七に知識、私共は知識に乏しい。兎に角、世の中に知識は缺く可からざるものであつて、今迄だん〳〵あげて來た所の樸直・優雅・醇厚・堅志・同情・師訓といふ六つの道德の標準が在るにしても、知識に缺けて居つては物事總てにあやまりを生ずる。卽ち知識は物事を判斷し、是非曲直を分別して行くのであるから、この知識をも等閑に附する譯にはゆかない。

八に信念、信念は言ひ換へれば信仰である。信仰は宗教の生命である。以上の七德に添うる最後の德は卽この信念、信仰である。佛教に種々樣々の法門を說くけれども、之を簡單にすれば、原因結果の理を信ずるのである。既に因果の理を信じて行くからには、人の見ざる處を愼み、人の聞かざる處を誡めて、日常の行爲を誤らぬやうに心懸けねばならぬ。卽ち、一言一行も皆是れ確信の顯れとなるのである。

この八箇條を爲して初めて平和といふことができる。平和も一時的では役に立たぬ。長くつゞいてゆ

瘡は起らぬので、この同情は先天的に與へられた人間性、即ち佛性があるのである。たとへ一枚の着物でも、之を大切にするのは衣服に同情したのである。たとへ一錢一厘でも、大切にすれば是れ金錢に同情したのである。即ち自分の身を大切にし、身の周圍の物を大切にし、之れが進んで、自身と關係なき他人にも及ぼしてくるのが、美はしい佛心、大同情である。

日露戰爭の際、畏くも我が聖上（明治天皇）陛下には

四方の海みな同胞と思ふ世になどあだ波の立ちさわぐらん

の御製を遊されたることを承はりました。滿洲の野に、日本の大軍が敵露西亞軍と鎬を削りて戰ふに當り、勿體なくもこの御製をお作り遊されたるは、誠に敵軍を敵軍と見ず、溫かき同情を以て敵軍の負傷兵・捕虜等を待遇せよとの、一視同仁の御思召に出でたるものと拜察致します。この同情に就きしても、あまり極端に走りて、彼の草繫比丘のやうに、野原で草蔓にとりまかれると云ふやうでは、決して正しき同情とは云はれない。即ち、佛敎の慈悲は、今の同情に相違なきも、あまり之に屈托し過ぎて正鵠を誤つてはならぬのである。

今世安穩の八德（その四）

六に師訓、經文の師訓は意味廣く且多いが、吾々は、先人の教訓に遵ひ、前車の覆轍を履まぬやうにと

この先生の事は、お互に笑はれぬことである。志を堅くするといふことがどれ程難いかがこの一話でも分らう。

今世安穩の八德（その三）

　五に同情、是は思ひやりである。自分ばかり都合がよいからとて、他人の迷惑や難儀を顧みないのは、同情心がないからである。自分は一人で生れ一人で育つたのではない以上、自分以外のもの、換言すれば、社會・國家の爲、世界・人類の爲に出來る限り力を盡さねばならぬ。

先年、雜誌太陽に『自然界に於ける三大矛盾』といふ論説が出て居つたが、大分面白い、其の大體は、
凡そ世の中は法則で治まつて行く、然るに人間は仁義道德を云々するが、何を以てこの仁義道德をして居るか、否、人世はこの仁義道德に反したる事實、弱肉強食が行はれて居るではないか、この自然界中、生物界で最も強いのが人間で、この人間は智慧あるが故に、あらゆる生物の生命を取つて食用に供し、生殺與奪の權をとつて居るから偉らいものだといふて居る。
然るに一方には動物虐待防止會ができて、動物の虐待をとめて幾分か動物を庇ふやうになつたのである。
といふてある。盜賊にも三分の理があるので、理窟を言ひ出すと限りがない。此の同情の念あらば敢て理

に業を勵まねばならぬといふことは、何人にも分かりきつた事ではありまするが、なか／＼實行の出來惡くいことであるから、お互に誡め合はねばならぬのである。

四に堅志、佛教家の口から佛道を褒めるも可笑しいが、實際、佛教の修行上には堅志が最も肝要である。世間の事業をなすとても、やはり同樣に、志が固くなければ物事はできぬわけである。

去る漢學の先生は、學問はよく出來るが、兎角、酒が好きで、朝から晩まで飲んで居る。『あまり飲みすぎては身體に毒であるから』と、友人・知己が心配して止める、多くの門人達も、書物抱へて通ふけれども、一日とて、一時とて、講義はしてくれず、酒屋への使と熟柹臭い息だけかゞされるくらゐのもので、弟子もだん／＼減つて來たから、主な門人も、切りに『酒をやめて下さい、もし今日限り止めなければ、明日から弟子一同が退學します』と云ふたので呑氣先生も少しは醉ひが醒めて、それではと、

　黑がねの門より堅きわが禁酒、修羅・朝比奈もやぶる能はず

と漢學流の狂歌を證據に書いて弟子に渡した。偖、翌日になつて、弟子はもう『今朝から立派に禁酒して、敎授して下さるだらう』と言うて出かけてくると、先生、昨日よりは、また一きは大きな茶碗で、盛に飲んで居る。弟子方はびつくりして、『先生どうしたのです、約束が違ひます』と、右左から、よつてたかつて責めると、先生平氣で、

　我が禁酒やぶれごろもとなりにけりそれさしてくれやれついでくれ

是はウツランポツが修行の際に、山では鳥に妨げられ、河では魚に妨げられ、惡くい〳〵の念がかたまつて、魚鳥を屠るものとなつた、精神作用の致す所である。

して見れば、鳥が邪魔になるのではない、魚が妨げするのでもない、此等の外物に心を動かされて居る間は、自身の精神が未だ落着かぬからである。卽ち直心是道場、里に居らうと、山に入らうと、現在この場が卽ち道場、さとりの蓆であるといふ覺悟がなければならぬ。是が第一の樸直の價値のある所である。

今世安穩の八德（その二）

二に優雅、私は正直だから御免というて、時と場所との考へもなく、無暗に無骨な物言ひをするものがあるが、人間はどつか優にやさしいところがないと、人が相手にせぬのである。卽ち一種の趣味風格がありて、後世の模範となる。之がないと、裸體の道中のやうに、活動も何等人に感化を及ぼすことができないのである。

三に醇厚。之は物事に親切であつて、粗暴放漫でないのである、人を待遇するにも、金錢を取扱ふにしても、親切綿密にさへすれば決して間違ひはないのである。

御勅語に『忠實業に服し』とあり、又『醇厚俗を成し、華を去り、實に就き、荒怠相誡め自彊息まざるべし』と仰せられたるは、一にこの醇厚によるのである。浮いたところなく、自慢氣を離れて、眞面目

ある。

三祖大師は『能は境に由て能たり、境は能に由て境たり』と云はれた。能とは吾々の心である。吾々が善とし、悪とし、慾に迷ひ、悟となる、この能は境に由るのである。美しいものを見れば誰も美いと思ふ、汚ないものを見れば誰も汚ないと思ふ。之は皆外物に心を奪はれ、外の境涯に由りて種々な心を生ずるのである。之の反對であるのが次の句の『境は能に由て境たり』である。誠に前の句に對して面白い。向ふの善悪美醜が皆精神の上にうつる、即ち山川草木の境は皆吾心に由て生ずとなすのである。

釋尊御在世の頃、印度にウツランポツといふ仙人が在つた。兎角、浮世の喧がしいのが修行の邪魔といふので、人里離れた深山に入つて、頻に觀念修行を凝して居ると、向ふの木の枝で烏が阿呆々々と鳴いて頗るやかましい。ウツランポツ仙人は、折角、妻子に別れて、修行のため山に入れば、烏に邪魔をされる、乃で、今度は物靜かなる河の畔に來て靜坐して居ると、河の淺瀬で魚がはねまはつて、其の音がパチヤン〳〵と耳に響いて誠に困る。到頭、どこへ行つても靜坐觀念の修行ができずに、煩悶、大煩悶を起して死なれた。扨てこの仙人修行の爲に煩悶して死んだ故、死後、天上界に生れて、長い月日、安樂にして居つた。が、やがて果報が盡きて、天人に五衰の悲みあり、この仙人も下界へ落ちて飛狸といふものになつた。飛狸とは河獺のやうで、翼がついて、鳥でもあるが、又、河獺のやうに河の魚を捕へ喰ふといふ奇妙なものに生を換へたといふことである。

語が少しく抹香臭いから、局外者から見れば、意味が十分汲みとりかねるが、この八文字が佛教の目的を說きつくして、而も簡にして要を得て居るものである。

今世とは現在吾人が生活しつゝある世の中、安穩の二字は平和にして安らか、四海浪穩かにして龍の眠り細やかなるの有樣、世界の人心全く平和に歸して全く安穩であると云ふことで、是は古來聖賢の心を苦しめた所である。

釋迦如來は、この『今世安穩、後生善處』といふ語を、どういふ工合にお示しなされたか、今、佛說を引いて安穩を得べき方法をお話し致したいと思ふ。

今世安穩の八德（その一）

釋尊が安穩を得べき方法を八箇條あげてある。卽ち樸直・優雅・醇厚・堅志・同情・師訓・知識・信念である。是れから順を追うて一々說明しませう。

一に樸直と云ふのは、生地のことで、虛僞のない、飾り氣のない本性である。兎角、虛僞があると一家內でも平和でない。維摩居士は直心之れ道場と說てある。道場とは道の場所、釋尊の成道せられたブダガヤを道場と云ふ。古人はこの道場に至らんとして、險惡なる山川を跋涉し、萬里の道程を越えて、はる〴〵印度の樹下石上の聖蹟を尋ね行くに苦心したものであつたが、是は道場を客觀的に求めたもので

この不思議な心の作用を、佛教では忽然念起と説いてある。前念惡を起すは雲の月を覆ふが如し、前きの惡念が一寸起るのは雲が月を覆ひ隱すやうで、是れ地獄の相である。後念善を起すは闇夜に炬火を點すが如し、前念の惡で心は闇夜の如くになつたが、後念の善の爲に炬火を點ぼしたやうに明るくなる。とにかく、油斷のならぬ精神、苦惱に滿ちたる肉體を以て、此のまゝ佛となるとは許せない。故に淨土に往生するのであるといふ。

併し、この未來と現世とは全く別物に離してはならぬ。即ち縱に一段飛び越えてゆくものとせないで、横に見て娑婆は穢土で、極樂は淨土、この汚ないだらけの穢土から、無垢清淨なる淨土にずつと進み歩んで行くものと思ふがよい。

近來、日本は文明が進んで來ましたが、文明の進まぬ時はどうしたか。即ち維新前後から海外の文明を眞似たので、文明は淨土、非文明・未開化は穢土とも云へる。處で、從來、他國に比して文明が十分發達せなかつた我國が、四十數年後の今日は、何ぞ計らん物質文明の淨土となつたのである。之と同樣に、精神界に於ても、百般の行動を愼しみ、修養怠らざれば、やがて完全なる人格の淨土に至り得るのである。其れで、佛教の各宗各派が種々樣々な特色を持して、之を發揮して居るけれども、其の歸する所の目的は一つである。即ち釋尊は之を法華經に具體的にお示しなされてある。

佛教の目的

各宗の所説

各宗各派で佛教の目的に對する態度に樣々ある。

禪宗では即心是佛、此の心がすぐに佛となる、但し身體が佛になるといふのではない。眞言では即身成佛、即ち此の身のまゝが佛になるといふ、即ち三密相應と申して、身に印契を結び口に眞言を唱へ、心に佛大日を觀ずる時には、是れ即身成佛の行相である。眞宗や淨土宗では他力によりて現在の穢土を離れて淨土に赴くといふ、即ち不都合、不如意の世界から完全圓滿な世界に行くといふのである。

何れにしても、心といふことに重きを置いてをる。この精神は、古歌にも

心こそこゝを惑はす心なれ心にこゝろ心ゆるすな

とある通り、どんな智者・學者でも油斷すると、とんだ間違ひを生ずるものである。

115

腹を立てたことが無い。頭から水を掛けられた時などでも、笑ひ顔をして『兎角、雷が鳴り出すと雨の降るものぢや』と云うて居られたとある。此等の行などは皆一部分の菩提心であつて、家庭の圓滿快樂を增進するの本であります。

昔、或僧が攝州住吉の明神に詣でて『來て見ればこゝも火宅の中なるになに住吉と人の云ふらん』と詠んだ、此處も亦た無常の火に蔽はれたる危險なる娑婆なるに、何故住吉などといふ呑氣らしい名を附けたものかとの意です。すると其の夜、神殿の中にて『善惡と思ふ心をふり捨てゝ唯だ何にとなく住めば住吉』といふ歌の聲が聞えたとある。『何にとなく』とは唯ボンヤリ遊んで居る事ではない。天地自然の道に從うて、私の料簡を交へぬ事です。世に住吉明神の御託宣と云ふがある。其の語に『我に神體なし慈悲を以て神體とす、我に神力なし正直を以て神力とす、我に神通なし智慧を以て神通とす、我に奇特なし無事を以て奇特とす、我に方便なし柔和を以て方便とす』とあります。此の慈悲と云ひ、正直といひ、無事といひ、柔和といふ、皆是れ人間本性の德です。

各々此の本性の德を發揮する事が出來さへすれば、此の心が即神なり佛なりである。家庭内に於ける萬事萬行が、盡く神の作用、佛の振舞となる。玆に於てか、家庭がソックリ活きた佛教となりて、善根功德は自ら此の中より生じて來る樣になるのであります。

昔、大阪に饅頭娘といへる親孝行の女があつて、人形に造作つて賣られたと云ふ程の評判を取つたのです。此の娘の父親は嚴格に過ぎる方で、母親は極めて柔しい人であつた。或日、手習師匠の先生が來りて、茶を喫みながら娘に向ひ『貴女は父と母と何れが有難いと思ひます。若し御答が宜ければ、御褒美に此の饅頭を上げませう』と尋ねければ、娘は『それでは先づ饅頭を戴いてから申し上げん』と答へた。先生は笑ひ乍ら一つの饅頭を與へければ、彼は其の饅頭を二つに割つて先生の前に捧げ『先生様、此の饅頭は何らが甘いでありませう』というた。少女としては如何にも面白き挨拶です。そこで、此の事が評判になつて、遂に世人が『饅頭娘』と稱したと申すことであります。

幕末の志士たる梅田源次郎は、京師の儒者にして雲濱と號し、拔群の勤王家であつたが、國事に奔走して殆ど家財を盡し、妻子に至る迄飢寒に苦しむ妻は、朝夕の烟さへ立ち兼ねて非常なる苦境にありしも、毫も怨みず愁へず、常に夫を慰めて貞操を盡したとある。或時、米を炊ぐ焚物に窮せし際『樵り置きし軒のつま木も焚きはてゝ拾ふ木の葉のつもる間ぞ無き』と詠みしに、先生は妻の心情を思ひ遣りて涙に暮れつゝも『事足らぬ住居なれども餘りあり我を慰む君あればこそ』といふ一首を讀まれたとある。是を見ても、和合の徳を守る時は窮境に在りと雖も猶ほ餘りあるの樂しみを得ることが解る。

希臘の大賢人ソクラテスは、忍の一字を以て一生の守り本尊となした程の人です。處が、其の細君は恐ろしき癇癪持で、時とすると夫を惡口したり、又、夫に水を打掛ける事すらあつた。だが、先生は一度も

元治の頃、江戸の牛込に藥種屋治兵衞と云ふ佛敎の篤信家が居つた。此の人が『今日一日の愼しみ』と云ふ事を記して家憲として居つたが、家庭の圓滿なる事は世に比類なき程であつたと申す事です。其の語は『今日一日三つの御恩を忘れず不足を云ふまじき事、今日一日決して腹立てまじき事、今日一日僞言を言はず無理なることを爲すまじき事、今日一日人の惡しきを云はず我が善きを言ふまじき事、今日一日の存命を喜び家事を大切に努むべき事、右は今日一日の愼みにて候、一日と思へば暑さもしのぎよし、一日と思へば不足もこらへよし、一日と思へば掟もまもりよし』といふのであつたさうです。面白き愼み方である。

播州に餅屋市五郎といふ篤信の者がなつた。其の女房は打て變つた無信心、おまけに頗るの意地惡ぢやが、市五郎は一度も怒つた顏をせず、常に御客樣の樣に大事にして居る。或人が『何故に其樣に丁寧にせらるゝぞ』と尋ねければ、市五郎は涙を流して、『我妻は如何なる宿業にや、信仰も起らず婦德をも守らぬゆゑ、未來の事を思へば氣の毒さに堪へられぬ。故に、せめては此の世なりとも、樂がさせたく思うての事である』と申した。流石の女房も、此の一言を聞いて慚愧の念を生じ、遂に善人になつたとある。此等は、信仰能く慈悲と堪忍とを產み、遂に和合の德に復したものであります。

聞ても居らぬから、マアそんなに心配して何時迄も待つて居らんでも宜いではないか』と言はれた處、彼の小兒等は『否々、人は見て居らんでも神様が見て御出なさいます』と答へたので、氏は益々感歎して、英國民の道徳に堅固なる根柢の存することを悟られたとか申す事です。我國も昔はさうであつたらしい。『天道様が見て御座る』とか『御先祖が眺めて御座る』とか『佛様や神様が御照しなされる』とかいうたものです。是は決して迷信でも妄信でもない。

眞の信仰心は、水の如く淡白にして淨きものです。理窟づめや、算盤勘定で發るものではない。西行法師が伊勢の大廟に參られた折、神々しき御社の威靈に感じ『何事のおはしますかは知らねどもかたじけなさに涙こぼるゝ』と詠まれた通り、唯何となくあり難き嬉さが身にしみ渡るのが信仰です。

前の祖訓に『設ひ在家にもあれ或は天上にもあれ或は人間にもあれ苦にありと云ふとも樂にありといふとも早く自未得度先度他の心を起すべし』と仰せ下された通り、信仰の心には在家・出家の別はない。慈悲の情には上下貴賤の階級は無用である。賤が伏屋の侘住居、九尺二間の藁屋でも、此の信仰あるものは此の慈悲あり、此の慈悲ある者は此の堪忍ありて、和合の德茲に全く、家庭の幸福自から聚まるものである。

賴りとして居ては到底安心は得られぬ。そこで、廣大なる智慧と、無限の慈悲と、不思議の神通とを有したまふ御佛の力を信ずるのであります。御佛の御眼は心の奥迄も見透して御座る。御佛の御慈悲は未來迄も救うて下さる。善心を起し善行を勤むれば、縱や人は之を知らずとも、御佛が知つて居らせられる。人は之を賞せんでも、御佛は必ず賞して下さる。御佛は宇宙眞理の權化にして、天地と其の德を同うして居たまふからです。

朝々佛を抱いて起き夜々佛を抱いて眠る、御佛は何時でも我が身を離れたまふ事はない。サア斯樣に信ずる事が深ければ、心の底、常に澄みて噓や僞は露程も殘らふ筈がない。明治天皇の御製に『目に見えぬ神の心にかよふこそ人の心の誠なりけり』と仰せ下されてあるのは、實に高尚優美なる御信仰ではありませんか。

然るに、今の人は、斯る信念を養ふ事に心を用ゐる事が少いから、何事でも人ばかりを相手にし、人ばかりを賴りとするに依つて、人の目の屆かぬ處では、つひ惡い事もしたり惡い心も起して恥ぢぬ樣になりたがるものです。されば信仰は慈悲の源と誠心の土臺です。

先年、故佐々友房氏が英國の倫敦に到りし時、或る朝、早天に市中を散歩して居ると、三四名の子供がボンヤリとして或る商店の前に立つて居る。『何故其樣な處に居るか』と尋ねると『私共は只今誤つて此の店の玻璃を毀しました、御詫を致さうにも、まだ店の人が起きて來ないから、起きるのを待つて居りま

安心を與へ、子には滿足を與へ、夫婦互に相愛して『四海波平かにして龍の眠り穩かなり』とも謂つべき、平和の家庭を實現することが出來るのである。

さればとて、盲從盲動して、無暗に親の御機嫌取をしてもいかず、又、矢鱈に子供に甘過ぎてもいかぬ。親の命と雖も、非理非道と見たならば、種々の方便を運らして親の心を飜がへさせねばならぬ。如何に可愛き子供でも、時に依りては嚴格なる警誡を加へねばならぬ。是が實の慈悲である。取り分け、家庭の教育は家庭の一大責任である。若し家庭教育が宜しきを得なんだならば、獨り子孫の爲めに不幸なるのみにあらず、遂には一家の滅亡を招ぐの基ともなるものである。

正しき信仰

然らば其の慈悲の心を養ふには、どうすれば宜かといふに、正しき信仰を基礎とする事が大切である。信仰と云ふは、之を理論の上から說明すれば、頗る八釜しき解釋もせねばならぬが、要を取つて申せば、微塵ばかりも疑ふ所なく、心の底から佛の功德を信じ、佛の照鑒を仰ぎ、佛の御救を冀ふ事です。

人間の監督、人の賞罰には行き屆かぬ所がある。又、誤りも絕無とは申されませぬ。人間の目では心の奧まで見透す事が難い、人間の救は未來迄は及ばぬ、甚だ不完全と言はねばなりませぬ。不完全なものを

こゝろ安くも世を渡るなり』とある。和合の本はと云へば堪忍である。『あつめ草』と云へる書物に、堪忍を藥に喩へて堪忍丸と稱し、其の效能を斯樣に書いてある。卽ち『第一、腹あしく心あしきを治し、短氣・短慮・貧苦・難澁・家內不和合に用ひて奇妙に治す、一、酒色に醉ひ、おごり、吝、又は根氣薄く、萬づ怠り易く、何事もよく仕遂げぬ人、常に用ひて妙なり、一、家を興し身を立て、一藝一能に秀でんと思ふ人は、能く用ゐて各々皆な效あり、一、子孫長久、福壽に至らんとする人、日夜用ひて奇效ある事は神の如し』とあるさうです。又、或る書には、昔、箱根山を越す時に荷持夫や駕夫が懸聲で『堪忍たからぢや、正直家督ぢや、辛抱金ぢやぞ、短氣は損氣ぢや、覺悟は大事ぢや』と歌うたと書てある。實に家康公の言はれた通り『堪忍は無事長久の基』であります。

其の堪忍を守るの本は慈悲の心にあり、慈悲、同情の念なき時は、決して完全なる堪忍の德を積む事は出來ませぬ。慈悲、同情の心を發するを菩提心を發すといふ。故に、前に掲げたる祖訓には發菩提心を釋して『己れ未だ度らざる前きに一切衆生を度さんと發願し營むなり』とある。是は自己一身の利害得失を打捨て、以て一切衆生を濟度し利益する事である。

凡そ善行には、略して上下の二種がある。己れの爲めに道德を守るは下等の善行です。人の爲めに道德を修むるのが上等の善行です。釋尊の娑婆往來八千返も、皆な衆生濟度の御爲めである。佛樣の最上の樂みは衆生を利益するにあり、一衆生を救へば一の樂しみを增し、百の衆生を資くれば百の樂しみを增す。

飲食物に注意する事、何人にも慈悲ありて能く布施を爲す事、夫を供養する事等です。

次に兄弟の道は佛教では朋友の中に籠めて說てある。元來、友の字は、字書にも『兄弟に善きを友といふ』とありて、兄弟の事にも用ひられます。四分律には七ヶ條の御示しがある。一には作し難きを能く作す——是は事業を助くる事。二には與へ難きを能く與ふ——是は不足を補うて遣る事。三には忍び難きを能く忍ぶ——是は互に堪忍し合ふ事。四には密事相告ぐ——即ち心を打解けて隔てなき事。五には互に相覆藏す——即ちかばひあふ事。六には苦に遭うて捨てず——是は困難を救ひ合ふ事。七には貧賤を輕ぜず——失敗ありとも友情を變へざる事である。此の七法は無論朋友の上にも守るべきである。經文には更に主從間の心得、師弟間の心得等を御示し下されてあるが、今は略して置きます。

家庭道德の基礎

是の如く親子・夫婦・兄弟が各々其の道を守る時は、一家の幸福は招かずして自ら來るものである。而して此の家庭的道德を引延して、之を家庭外に應用する時は、社會の平和も國家の發達も期して待つべきである。況てや親に對する心を以て伯父伯母や舅姑に事へ、子に對する心を以て孫・曾孫を愛すれば、其の應用は實に無邊であります。

而して、道を守るの本は家内の和合を主とするにあります。故に古歌にも『家内中なかのよいのが寶船

愛情と禮節とを失はざる事。二には是に飯食せしめ時節を以て衣被を與ふべし——是は婦をして衣食に苦しましめざる事。三には當に金銀珠璣を與ふべし——是は婦をして身分相當の品位を保たしむる事。四には家中の所有は多少悉く用ひて之に付すべし——是は一家の財産器具等に於て、夫婦の隔てなく相共に之を使用し、之を監理する事。五には外に於て邪まに傳御を蓄ふことを得ず——是は夫たるものが常に品行を正しく、妻をして安心せしむる事であります。

又、婦の夫に對する心得にも五ケ條ある。一には夫外より來らば當に起つて之を迎ふべし——是は常に夫を敬ひ且つ夫の心を慰め、萬事に親切なるべき事。二には夫出でてあらざれば當に炊蒸掃除して之を待つべし——是は一家を整理して夫をして後顧の憂ひ無からしむる事。三には心を外夫に淫する事を得ず——是は身を愼み行を正うして苟にも不行跡の振舞なく、萬一夫に呵らるゝ事ありとも、柔順の德を守りて妄に爭はざる事です。四には當に夫の教戒を用ふべし所有の什物は藏匿する事を得ず——是は常に夫の命令を守り且つ道具諸式に至る迄夫に對して隔心なき事。五には夫休息せば善く藏して乃ち臥す事を得——是は夫が眠息た後、跡片付をしてそれから休息むべき事。

此の外、善生子經には婦の心得十四ケ條を示されてある。己れの勤めを全うする事、夫の仕事を手傳ふ事、應接上の要件を誤らぬ事、夫に先だつて早起する事、夫に後れて息む事、婦たるの務めを學ぶ事、夫に深切なる事、常に夫を慰むる事、言辭を柔しくする事、氣色を溫和にする事、室內の規律を整うる事、

佛敎に於ては、六方禮經・阿含經・善生子經等に於て叮嚀なる御敎訓がありまするが、その六方禮經には、親が子に對するの心得として、五ヶ條の御示しがある。一には惡を去りて善に就かしむ——是は德育に當る。二には書疏を敎ふ——是は智育に當る。三には經戒を持たしむ——是は佛經に順じて佛の戒律を守らしむるものであるから信仰の修養に當る。四には婚姻せしむ——是は一身の獨立を成さしむる事です。五には家中の所有を與給ふ——是は生計の方法を授くる事です。

又、子の親に對する心得にも五ヶ條ある。一には當に治生を念ふべし——是は生計の基礎を固め、家庭の繁榮を圖る事。二には早く起き奴婢に令して時に飯食を作せ——是は業務に勉勵し且つ家庭の紀律を正うする事。三には父母の憂を增さゞれ——是は內外の事に就て親に心配せしめざる事。四には當に父母の恩を思ふべし——是は進んで父母の大恩に酬いんことを期する事。卽ち孝經に『身體髮膚之を父母に受く敢て毀傷せざるは孝の始めなり、身を立て道を行ひ名を後世に揚げて以て父母を顯はすは孝の終りなり』とあるが如く、積極的に父母の德を報ずる事である。五には父母疾病あれば恐懼れ、醫師を求め之を治せしむべし——是は父母の肉體に孝養を盡す事であります。

次に夫の婦に對する心得にも五ヶ條の御示しがある。一には出入當に婦を敬ふべし——是は婦に對して

ては、却つて其の身を傷つくる樣なものです。況てや子たるもの妻たる者が我儘勝手の振舞を爲す樣な事があらば、一體分身の原理は根本的に破壞されて、家庭は忽ち四分五裂と爲つて了ふものである。故に佛教に於ては、懇ろに孝行の道を示したまひ、忍辱經には『善の極は孝より大なるはなく惡の極は不孝なり』と說き、大集經には『父母に事うるは卽ち是佛に事うるなり』と說き、四十二章經には『二親は最上の神なり』とも仰せられ、無量壽經には『父子兄弟夫婦家室中外の親族、當に相敬愛して相憎み嫉むことなく、有無相通じて貪惜を得ること無く、言と色と常に和して相違戾ること無かるべし』とも御示し下されてある。

殊に親の其の子を愛するの情は、全く天然の至情にして、其の深さも廣さも測り知るべからざる程です。花山天皇の御製にも『思ふこと今は無きかな撫子の花咲くばかり成ぬと思へば』とありて、御子の御成長を、唯一の御喜びとして居らせられる。山上憶良の詠みし『白銀も黃金も玉もなにせむに勝れる寶子にしかめやも』の歌、藤原兼輔の詠みし『人の親の心は暗にあらねども子を思ふ道に迷ひぬる哉』の歌の如きは、能く親の至情を詠み現はして居る。親の惠みの深き事是の如くなれば、子たる者も、源定信公の詠まれたる『子を思ふ心の道の心もて親に事へよ世の中の人』の歌の如き心を以て盡さねばならぬ。夫婦兄弟の情合も亦た人の天性であるから、何れも一身同體の念に住して、各々其の本務を盡さねばなりませぬ。

あるから、親子の關係が家庭の中心となつて居る。申すも畏こき事ながら、我が皇室も矢張、祖先崇拜を中心として居らせらる。我國で祖先を崇拜するのは、決して宗教的意義から出て居るのではありません。是は全く我國に特有の道德的觀念から來て居るのである。故に我國では、國家と家庭とが同一の理想の上に組み立てられて居るのであります。夫故、家庭に於ける一切の事が、皆親子の關係を本として割出されてくる。國としての中心は大君であつて、家としての中心は親です。されば教育勅語には『我臣民克ク忠ニ克ク孝ニ億兆心ヲ一ニシテ世々厥ノ美ヲ濟セルハ此レ我カ國體ノ精華ニシテ教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス』と御示し下されて、忠と孝との二道が我國道德の源泉であります。

併しながら、其の親子なるものゝ本はといへば夫婦である。夫婦ありて始て親子の關係が現はれ、二人以上の子があれば始めて兄弟の關係が生じて來る。さすれば家庭の三綱たる親子・夫婦・兄弟は、畢竟して一體分身とも申すべきである。既に一體分身であるとすれば、相互に和合して、親は子を惠み、子は親を敬ひ、夫は妻を愛し、妻は夫に順がひ、兄は弟を扶け弟は兄に從ひ、縱ひ其の業務同じからず其の行ひに異りありとも、道德上、共に一致の精神を以て動かねばならぬ筈のものである。大學に『人の子と爲りては孝に止まり人の父となりては慈に止まり』といひ、朱子家訓に『夫の貴しとする處は和なり、妻の貴しとする處は柔なり、弟の貴しとする處は敬なり』といひしも、皆一致の精神を分說したものである。親であるからとて濫りに親の權利を振り廻はし、夫であるからとて無暗に夫の我意を募る樣な事があつ

併し、一たび家庭が紊亂しようものなら、それこそ大變、親子相爭ひ、夫婦相悖り、兄弟相鬩ぎ、玉の臺も赤鬼・黑鬼の住家と變じ、錦の衾も修羅道の巷と化し、廣い世界も狹くなり、明るい座敷も暗くなり、訴へんにも訴うる處なく叫ばんにも叫ぶに由なく、兩の袂は涙の關、一つの胸は焔の竈、道德も知識も無茶苦茶に、精神も狂ひ身體も衰へ、人生第一の樂園たる家庭は、世界無比の奈落世界となつて了ふ。故に家庭の規律、家庭の道德は最も須むべく、最も重んずべきものである。之に就て、我が佛教では如何樣に御敎へ下されてあるか、又、佛教を家庭的に守るには、どうすれば宜いかといふことが、唯今、私が御話しようといふ目的であります。

家庭の三綱

家庭組織の要素となるものは、前にも云ふた通り親子と兄弟と夫婦とである。之れが我國の家庭の三綱です。西洋は個人主義の國柄であるから、夫婦を以て家庭の基礎として居るさうである。故に或人は『西洋の家庭は、個人の思想を發表し實行し得る爲めに出來て居る便宜主義の家庭であるから、夫婦ありて始めて家庭あり、家庭ありて夫婦あるにあらず、故に、西洋の家庭には夫婦の愛のみありて祖先崇拜より來る嚴肅なる意義は皆無である』と云はれたが、全くさうかとも思はれます。

然るに、我國の家庭は、先祖の家系を相續し、先祖の祭りを絶たぬといへる理想より成立つて居るので

す。これが家庭の根本となつて、之に祖父と孫、叔父と姪、主人と奉公人といふ樣な關係も加はつて、茲に立派なる家庭を組織して居るのである。

斯く人と人とが特殊なる因緣の下に團結したのが家庭の要素であるとすれば、社會といふも、つまり甲の家庭と乙丙丁の家庭の間に於ける關係より出來たものとも言はれる。國家といふも、無數の家庭を統一したものと言はれぬ事もない。さすれば家庭なるものは、人としての根據地、社會及び國家の最大要素であるに依て、家庭の好惡は、やがて箇人の禍福、社會の盛衰、國家の治亂にも大關係を有して居る事は自然の道理であります。故に我國が將來益々發展して、世界萬邦の模範的國家を造らんと欲せば、先づ以て家庭の改善を圖り、理想的家庭の實現を期する事が何よりも大切である。

殊に、人間一生の苦惱も快樂も、多くは家庭を以て源とならざるはない。家庭の如何に依りては、人の精神行爲の上に非常なる變化を來たすものです。善且つ美なる家庭は、自づと人に幸福と快樂とを與へ、且つ人をして德性を養なひ、勇氣を奮起せしむるの力がある。終日外に在りて、骨を疲らし頭を惱ましたる人も、一度靄然たる家庭の内に歸れば、一碗の茶にも能く一日の勞を忘れる。年が年中、家事向に心力を勞して居る妻女でも、一たび愛兒の笑ひ顏を見れば、怳惚として身は安樂國に入りたらんが如き心地せらる、夫婦の和合は手鍋下げても猶ほ天國の樂しみを覺え、兄弟の睦みは艱難を甞めるも猶ほ限りなき興味を感ず、麗しき家庭は實に現在の御淨土です。

家庭は國の要素

菩提心を發すといふは、己未だ渡らざる前に一切衆生を渡さんと發願し營むなり、設ひ在家にもあれ設ひ出家にもあれ、或は天上にもあれ或は人間にもあれ、苦に在りといふとも樂にありといふとも、早く自未得度先度佗の心を發すべし。

此の御文は、我が曹洞宗修證義にある祖訓である。

人の此の世に生るゝや、如何なるものでも孤立して行けるものではありません。既に人と云ふ字がノとヽとを合せた文字で、自づと共同生存の意義を示してある。中に就て、苦樂を同うし運命を倶にする程の親密なる人々が相集まり、一身同體の關係を以て一家を構へて居るのが卽ち家庭である。故に人として家庭の無いものはありませぬ。縱や家庭といふ程の組織のない人でも、親もあり兄弟もある以上は、何等か家庭的關係の間に立て生存して居るものです。家庭の要素は、言ふ迄もなく親子と兄弟と夫婦との三つで

孝の道を盡せば、そこに言ふに言はれぬ嬉しさを感ずるものであります。困苦に惱む者を見れば氣の毒でたまらなくなる。そこで知らず〳〵慈善的行動を起し、それがまた身に取りて非常なる樂みを感ずるのであります。此の溫情ありてこそ、人の人たる値打も生ずるのである。

今や世界の形勢は刻々に推移し、人類の思想も種々に變遷して底止する所を知らず、然れども、我が國は萬邦に卓絕したる國體を有し、君民の關係は父子よりも親しく、國民全體は眞の同胞たり。上に在る者は慈愛に富み、下に在る者も亦敬愛に富み、能所倶に守るに至誠を以てし、上下齊く行ふに至善を以てし、廣く世界の大勢に鑑みて、智を磨き德を修め、遠く國家の大本を究めて、家を齊へ產を興しなば、精神的にも物質的にも兩ながら文化の地步を進むることが出來るであらうと思ふ。

吾人の本心猶ほ明鏡の如くにして玲瓏明白なり。唯だ煩惱の邪見の塵に蔽はるゝ時は、其の光輝を失ふ樣になるのであるが、朝な夕なに心を磨くことを怠らざれば、自づと本心の靈德が現れて、心の鏡曇りなく、やがては世の鏡ともなりぬべきものであります。世界列國の競爭は、所有方面に激く行はれて居るのであるから、我が國の婦人社會も、益々努力して其の本性を發揮し、一國の興隆と一家の盛榮とに貢獻せねばなりませぬ。是れ現代婦人の覺悟として最も必要なる點であります。

年といふ辛抱に堪へなば、やがて極樂に進むことが出來る。極樂といふは正直なる安心と幸福に充ちたる果報のことである。決して死後の御話ではありませぬ。

西哲も『不幸に逢はざる者より不幸なるはなく、禍災を知らざる人より禍災なるはなし、蓋し災難災禍は其の手を以て人に示すに、老成練達に至るべき道途を以てすればなり』とある。若し餘りに安樂なる果報を得たらん人あらば、自ら求めて骨の折れる仕事をなすが宜い。然らざれば、福が却て禍の根となるものであります。

猶ほ人間に缺くべからざるは、溫情である。溫情とは親切なる情愛である。殊に婦人は一切萬事に此の溫情を存する樣にせねばならぬ。近代の思想界にては溫情主義を排斥する人もあれど、そは權利義務の軌道を無視して、總てに於て溫情一點張で解決を圖らんとすることを否認したものであらう。眞の溫情は全く人心の至寶である。此の溫情の發露が自他の幸福を增進し、社會發達を促がす上に、それが權利の保障とも、義務の制限ともなつて來るのである。また、人がその子に對しては可愛と感じ、他人に對しても思ひやり深く、善を樂み德を喜び、職を好み分に滿足するが如き、皆な溫情に依つて神聖なる意味を備へるのである。況てや神佛に對する敬慕、祖先に對する追恩等の思想は、溫情を離れて外にはないと謂うても宜いと思ふ。人間は機械ではない。當て篏められた義務を盡すのみならば機械と擇ぶ所がない。内に溫情を備ふるに依つて、君父に對すれば有り難いと感ずるの餘り、忠孝の道を盡さずには居られぬ。一たび忠

婦女訓最終の文に『石の上の三年はやがて極樂の園に遊ぶの門出なりと知るべし』とある。石の上の三年とは苦難に堪へることとです。

佛教では此の世を娑婆と稱す、娑婆は梵語、飜譯して忍土といふ。即ち堪忍世界といふ意味であります。人生なるものは決して安心すべき世界ではない。種々の災厄が踵を接して襲ひ來り、樣々なる關係、事情の爲めに拘束せらるゝのが世の常である。

進歩せる時代には、女權の擴張も自由平等の主張も當然起るべき事であるが、それと同時に、婦人としての天職と其の人々に相當する義務を全うすることを忘れてはならぬ。義務觀念を閑却して、妄りに權利の伸暢を望むが如きは、動もすれば自由の名を藉りて放縱なる振舞を敢てし、平等の名を藉りて社會の秩序を亂したりする樣な事ともなる。佛教は『一切衆生悉有佛性』の根本義の上に成立たる敎であるから、元より男女に於て分け隔てはつけぬ。男女共に等く成佛得道の美果を收めしむるのが大乘佛敎の御化導であります。されども其の職分に至りては、各々其の天性に從つて其の特能を發揮せねばならぬ。平等即差別とは此の理を述べたのであります。故に、男子も婦人も益々高尚なる志望を抱いて、自ら進んで佛菩薩たらんことを期せねばならぬ。それには、飽までも人生の苦難に堪うる覺悟が大事です。石の上の三

97

ず、菽麥をも辨へず、全くの無知・無產であつたのだ。それが父母の大恩に依て養はれ、君主の洪恩に依つて成長し、社會の恩惠、天地萬象の惠みに依て生活して居るのである。此の全身は實に恩分の結晶であります。加之、佛陀の慈恩に浴して、現在及び未來の覺悟をも定め、永遠の目的も、安心も定められ、茲に始て生れ甲斐のある身となることも出來たのであります。故に此の四種の大恩に報ゆるのが正き人間の道であります。そこで『如何なる場合にも有り難し勿體なしと念じて忠孝仁義の道を忘るな』といふことを申したいのである。此の身が既に恩力の所產であると知れば、一日一刻でも、此の世に居るのは、決して自分一己の力ではないのであるから、常々有り難い——といふ觀念を忘れてはなりません。

又『天地の深き惠みは白絲の一筋なりとあだに使ふな』一滴の水、一粒の米も悉く天の惠、人の情であるに依つて、露程も疎略にしてはならぬ。何物に對しても勿體ない事と思うて、親切に叮嚀に取扱ふが宜いのである。是れが眞の儉約といふものです。但だ物を惜むといふのでは、動もすれば吝嗇に陷りて慳貪の弊を生ず。貝原益軒も『身に奉ずる事薄きを儉約と云ひ、人に施すこと薄きを吝嗇と云ふ』と言うて置かれた。人樣の物ならば尙更大切にするといふ心懸あれば、其の心が自づと天心に合ふに依つて福德が知らず〳〵身に備はるものであります。

故に、婦人としては常に物事に對する觀念を養うて、何事にも精神の平和と向上とを圖り、又、深く報恩の心懸けを蓄へて、日々夜々、忠孝仁義の道を勵むことが肝要であります。

愛嬢小式部に先だゝれて、絶え入る程に悲しみしが、此が逆縁となりて、深く佛道に歸入したので、後には『假りに來て親に仇なる世を知れと敎へて還る子は知識なり』と詠じて、心中一點の樂みを獲得した。此等は皆な觀念の妙用であります。

忠孝道德の行ひと申せばとて、決して特殊の務めをのみ言うのではありませぬ。佛法信心の道とても、必ずしも堂内や佛前にのみ限つたものではありませぬ。婦人の務めとしても、臺所の始末、子供の養育を始め、細々しい事の多いものであるが、その日常の行爲が悉く道德ともなり信行ともなります。例せば御飯を炊くにしても、此の御飯は神樣や佛樣及び御先祖樣にも御供へするのであるから、最も淨らかに炊かうと念じ、若くは、御兩親が齒が惡いから軟かに焚いて上げやうと觀じ、夫々水加減をしたり、火許に注意を施したりする時は、水を掬む柄杓の中にも、薪を添へる竈の中にも、孝貞の道、信心の德は自づから備はるものです。『道といふ言葉に迷ふこと勿れ朝夕已が爲す業と知れ』、我が禪門に所謂平常心是道といふは是れであります。『あさゆふの心に深く心せよ心の外に道し無ければ』、平生の手の舞ひ足の踏む處に道德と信仰との光りが顯はれて來ねばならぬものです。而して、道德の源泉を養ひ信仰の偉德を發揚するには、報恩の心懸けを忘れてはならぬ。報恩の思想が、我が佛敎に於ては諸德の根本と示されて居ります。

その恩分を四に分けて四恩と稱す。卽ち父母の恩と君主の恩と衆生の恩と三寶の恩とであります。元來、吾々が此の世に生れ來るや、赤裸にして寸絲を掛けず、空手にして一粒を握らず、而も東西をも知ら

次には『機嫌好く働き、柔かに人を使へ、苦き時にも樂み、悲き時にも愉び、小事に注意深ければ、終には大德を成す』ことを知れ。人は觀念作用といふことが大切であります。卽ち心の持ち方、思ひ方です。同じ働くにしても、不平を抱いたり、ぐづ〳〵小言をいうたりして居る樣では、決して眞面目な仕事は出來ませぬ。自己の分限に安んじて、樂んで業務を執る樣にせねばならぬ。縱や人の手傳ひをするにしても、全く自分の天職なりと思うて致せば、其の功德は實に偉大なるものであります。人を使ふにしても、柔しく快く使へば、使はれる者も氣持好く働くものである。無暗に小言をいふたり、叱りつけたりして使へば、先方も面白からぬ心で働くに依り、滿足なる仕事の出來やう筈が無い。尤も、時に依つては警誡したり、呵責したりする必要があらうが、それらは能々其の場合を見ての變法であります。

世の中は無常にして變化窮り無きが故に、苦き時もあらうし悲き時もあらう。されど、觀念の養ひあれば、苦き時にも樂み、悲き時にも愉ぶことが出來る。顏回は陋巷に居して貧困に苦みし人なれど、彼の心は常に天命を樂み道を樂んで居られたとある。八坂入媛の語にも『人世の苦みを樂みとする者は限り無く樂み、世々を經るとも盡じ、樂みを樂めば苦みあるものなり』とあります。菅公は罪なくして筑紫に流され足懸け三年の間、悲き月日を忍ばれたが、常に觀世音を念じて菩提の道を愉んで居られた。泉和式部は

にも耐えて、常に平和なる天地を開く事を心懸けねばなりませぬ。『末つひに海となるべき谷川もしばし木葉の下くゞるなり』此の勘忍こそ寧ろ向上の基礎である。『踏まれても根強く忍へ福壽草、やがて花さく春も來ぬべし』勘忍は實に幸福の本であります。

又、慈愛は第一の寶です。婦人にして若し慈悲恩愛の情を缺きなば、最早、婦人としての價値はないことになります。又、正直の徳の大切なることは事新らしく言ふ迄もない。吾々凡夫は、兎角、心の油斷から煩惱といふ盜賊が襲ひ來つて、道徳といふ大事な寶を奪ひ去るものである。併し、正直、即ち誠實の道を堅く守りて心の戸締りが嚴重であれば、八萬四千の煩惱ありとも、犯すべき餘地がなくなること疑ひなし。

又、凡夫には邪見が起り易いものである。邪見といふは眞理の原則、道徳の根柢を昧ます誤まれる識見である。やがて神も佛も無いもの、未來もない、靈魂もないなど〻獨斷して、佛の敎も聖人の誡も信ぜられず、結局は神佛を無し祖先を重ぜず、三世因果の理法をも否認して憚かる所のないのが邪見である。故に邪見人は無學文盲の者よりも、學者・智者と稱せらる〻人に多い樣である。此の邪見は恰も火事の如くで、一切の善根功德を根こそぎ燒き拂つて仕舞うといふ、最も恐るべきものである。故に正しき信仰心を起すのが邪見を遠かる唯一の火の用心であります。以上、慈悲と勘忍と誠實と信心とは精神修養の最大要素であります。

れて、華美を競ふの趣がある。その容貌の美ならんよりは、所謂『見目より心』で、心の淨く正く麗しきこそ肝要なれ。昭憲皇太后の御歌にも『白妙の衣の塵は拂へども憂きは心の曇りなりけり』とありて、精神の麗はしきこそ第一の粧なれ。衣服の目的は衛生と作法とに在るを以て、服裝に依て容儀を整へ、品位を保つものであるから、暫時も之を缺くことを許さぬ。婦人は男子よりも美を好む情が強いに依つて、動もすれば身分不相應の美服を著たがる樣になります。それでは却て其の人柄を墜すものである。故に服裝は程々にして、禮容、卽ち禮儀作法を正しくする事に注意せねばならぬ。法性寺關白の奥方繼子の語にも『女は容貌の美醜を以て上下を別くべからず、言葉すくなにて愛嬌あるを以て第一とすべし』とあります。

次に『勘忍は守り袋、慈愛は第一の寶、正直は戸締り、信心は火の用心』なるを知れ。勘忍は最も大切なる守り袋である。勘忍の德を養へば、妄りに腹を立てたり、物事に惰氣を生じたりすることがなくなる。何人にも缺くべからざるは勘忍である。まゝならぬが世の常なりと諦らめなば、些々たる事にまで顏色を變へたり、聲を荒だてたりすることは出來ぬ。古人の語にも『此の世の人、客に來たと思へば世話も苦勞も無し、心に叶はぬ食物に向ひても客なれば馳走とほめて喰はねばならぬ、夏の暑さも客なればたしなまねばならぬ、冬の寒さも同じこと、孫子兄弟相客なれば猶ほ以て互に挨拶よく暮し、跡に心を殘さず御暇申すべし』とあるが、人間は一面に於て進歩向上を圖りて活動すると同時に、一面には心と爭う苦痛

ぬ。

次に『子程に親を思ひ孫程に他人にも親切なれ』光圀卿の敎訓にも『恩を忘るゝこと勿れ子程に親を思へ、子なき者は身にくらべ近き手本とすべし』とある。親が其の子を愛するは全く天性であります、『人の親の心は暗にあらねども子を思ふ道に迷ひぬるかな』親馬鹿といふことは、愛情の切なる事實をいうたものであらう。自分の親も亦、是の如くにてありしと思へば、暫しも父母の恩を忘るゝことは出來ぬ譯である。『たらちねの心の暗を知るものは子を思ふ時の涙なりけり』、『子を思ふ道にまどひて今ぞ知るちゝぶの山の深き惠みを』子を有つて知る親の恩の貴さ、命に代へても孝行をせねばなりませぬ。又、孫の可愛さは子に勝るとやら、思ふに、孫を持つ頃は、子を有ちし時よりも一層情愛が濃かになつて居るからであらう。此の情愛を擴充して、他人に向つても親切を盡しなば、實に佛菩薩の如き慈悲の德が現はれることゝ思ふ。

それから『見目よりも心、服裝より禮容こそ大切なるべし』婦人は身嗜が大切である。髮容から着物の着方、起居振舞に至るまで見惡からぬ樣にせねばならぬ。顏容を美しくせんとて、餘りに飾り過ぐるは却て品格を損するものである。さればとて、しだらなく容儀の整はざるも惡し。兎角、近代は奢侈の風に侵さ

らぬ。邪推する人は敵なきに敵を作り、交情を破り、愚痴に陥り、嫉妬心を増長し、遂には煩悶の渦中に投ずる様になるのであります。

東京の某貴婦人は、神經過敏で邪推の深き人であつたが、或時、御自分の御友達の處に婚禮ありしを聞き、御祝ひに往き新嫁に面會せしが、その新嫁が白眼つけたとやらで、大そうに腹を立て、物をも言はずに家に歸り、來る人毎に其の新嫁の惡口を言うて居つた。所が、二週間計りを經てから、能々聞いて見ると、睨んだのではなくて、さういふ目付であつたのであると、私は其の話しを聞いた時、話した方に對して『總じて人は邪推すべきものでは無い、本當に、白眼れたとしても、此方に落度があるならば大に反省せねばならぬが、然らずして、先方が勝手に睨んだのなら、あれはあゝいふ目付で居らつしやるのだと思うて居れば宜いではないか、詰らぬ事に神經を惱ます程馬鹿げた事はない』と申して笑つたことがあります。涅部穴穗部皇女の御語にも『迷ひに深き者は、善といへば心をよくし、惡しといへば心を惡くす、善惡は我にあつて人に非ず、人の言の葉をかり用ゆる事なし』とあります。

凡そ人は己れの神經作用に依りて種々に迷ひ出し易いものである。況てや、邪推とか猜疑とか僻見とかいふ不健全なる感情が手傳ひますると『木槵鬼形』とやら申して、木の株が鬼の頭に見えたり、白地の浴衣が幽靈に見えたりして、自ら繩なき繩に縛らるゝ様になる。是を妄想と申すのであります。故に、婦人

れ始終にこやかに嬉しさうにして、他人の氣をそらさないのが愛敬であります。又、多辯というて、餘りに喋り過ぐるは却て愛敬を失ひ、品格を落すものである。故に、女中庸の中にも婦言を解して、『婦言とは、言葉を愼みて物事はしたなくいふはつたなし、言舌强からず淫ならず聲高からぬぞよき、勉めて尋常に言んとするも巧言ひたる樣にて惡し、勿論、口佞しく我知りたる顏に罵るもいやし、都て言葉づかひに限らず、凡て女の言ふまじき事は如何に懇人に遇うても口より外へ出すべからず』とある。兎角、婦人には徒口に日間を潰したり、何等の必要もなきに他人を惡しざまに批評したり、馬鹿話しをしたりする癖がある。さうして、肝心な御話し、例へば大勢の中で報告をするとか、意見を陳ぶるとかいふ場合には、一語をも發し得ぬといふ風がある。是等は是非とも改良を施さねばなりませぬ。『愼みは朝夕馴るゝ言の葉の假初ごとの上にこそあれ』、『物言へば唇寒し秋の風』常に意義ある言葉、有益なる言葉、人に滿足と安心とを與ふべき言葉を使ひ、人を誹り、己れを高ぶり、時間を徒消し、品格を傷くる樣な言葉は絕對に禁止せねばなりませぬ。

又、婦人は感情に偏する處から、些細な事にも神經を强く刺擊し、それに思ひを傾けて、自ら煩悶を招く樣になり易いものでありますから、成るべく度量を寬くして、根も葉もない樣な事柄に屈托せず、從つて大概な事は善意に解釋し、妄りに邪推などして人を惡み、又は恨むといふ樣な事のない樣に愼まねばな

備るものであります。愼みと敬ひと道を守ることと此の三德は、婦人の人格を向上せしむるの要素であります。その結果は和顏愛語となつて現はれます。敎訓にも『面を和らげ言葉をやさしくして諸事穩便なれ』と申して置きました。腹を立てし顏、物を案じ過ごしたる面、きよと〳〵したる態度は、人に不快と不安の念とを起さしむるものである。面を吹けども寒からぬ楊柳の風の如く、稜角なく柔かに和らぎたる面色して、その言葉使ひも成るべく親切叮嚀にやさしく物靜かなる樣に心懸け、萬事萬端の上に穩便に落着きあることこそ宜しけれ。

昔、備前の領主池田光政公の夫人は、本多忠利の女にして賢良の聞え高かりき。每に其の女兒を敎へて『女は男と異なり、何事にも優しく從順なるを道とす、如何に身分人に越え學才あればとて、決して男を凌ぐが如き振舞あるべからず、衣服の裁縫は女の缺くべからざる職なり、高貴の家に暮せばとて此の業を疎かにすべからず、妄りに身を傲ぶりて仕事を他人に命じ、自らは徒らに遊び暮すが如きは女の役目に背く者なり、又、人の妻となりては殊に其の身を愼みて夫を敬ひ、假令、醜き夫たりとも疎略に思ふべからず、夫は外を治め女は內を治むることは定まれる道なれば、女たる者は常に儉約を守りて家を整理し、能く召使の者を憐れみ、家內を平穩に保ちて夫に心配なからしめんことを努めざるべからず』云々と諭されしに、其の女兒は母の感化によりて、何れも溫良なる婦人と成りました。

して私なきが如くならば、自から神の恵みに遊び、佛の慈光に浴することあるべからず。まゝならぬ事あらば、身に省みて益々行ひを磨き、意に叶へる事多き時は皆な是れ四の恩の賜ぞと思うて彌々感謝の誠を盡すべし。大事に逢ふとも驚かず、小事なりとも侮らず、業を勵み辛きを忍ぶの覺悟ありてこそ、心の鏡、とこしへに曇りなく、やがては世の鏡ともなりぬべし、ゆめ〳〵忘るゝこと莫れ。

同婦人會にては此の教訓を印刷し、會員、又は會員の家族にて嫁入する時は、一面の鏡に此の教訓書を添へて寄贈し、以て祝意を表し、萬一、後日に至りて離婚する場合ある時は、その鏡を會に還附するといふ條件を附して居る。所が、之を實行してから後は、離婚數が著しく減じたといふことである。

明治天皇は更に『うち向ふ度に心を磨けとや鏡は神のつくりそめけん』と御製あらせたまうた。我が佛祖の御教とても一言以て之を蔽へば、心鏡研磨の大法を示されたものである。今、婦人としては如何なる心得を以てせば、能く心を磨きて德光を彰はすことを得べきやといふ問に對し、極めて卑近に且つ通俗的に其の大旨を述べたのが、此の婦女訓であります。

和顔愛語

先づ初に『婦人は其の心優美なるべし』優美とは、しとやかに美しく良きことである。心に愼み深ければ自づと淑やかになり、禮儀を重んじ慈愛を存すれば自づと美しく、道德を守るの念厚ければ必す品格の

て、神佛にも變らざる靈德を存して居るなれども、無始以來、種々の外境に對して妄想執着を生じ、それが薰習、卽ち習慣となつて遂に凡夫地に墮在したのであります。此の妄想執着を拂ひ拭うて、本心の鏡を顯すのが眞の修養である。

古來より男子の魂は刀、女子の魂は鏡と申して居る。畏れ多くも、天照大御神は女性の御神にて渡らせたまひ、御自らは高天原を治めし、皇孫瓊々杵尊に仰せて、此の日本國を統治せしめられた。その際の御勅に『豐葦原の千五百秋の瑞穗の國は是れ吾子孫の王たるべき地なり、爾皇孫就きて治すべし寶祚の隆えまさんこと天壤と窮り無かるべし』と宣はせたまひ、三種の神器と稱せらるゝ、八咫鏡・八尺瓊勾玉・叢雲劍を賜はり、『此の鏡を見ること吾を見るが如くせよ』と宣はせられた。これより鏡を以て御神體の表徵とするに至つたのである。此の神器には無限の神意が籠つて居る。卽ち、鏡といふは曇りなく私なき、淸く正しく直ぐなる心の德である。故に我が國の婦人は、能く御神の御心を奉戴して、心の鏡を磨くことを怠らぬ樣に致さねばなりませぬ。

新潟縣中魚沼郡岩澤村西岩寺俊道師が、曾て岩澤佛敎婦人會を組織せし時、衲は『女の鏡』と題して、左の一文を書いて同婦人會の敎訓となしたことがある。卽ち

常に心を淸く直く正しくすること鏡の如くなるべし。かりにも僞はり僻み嫉み妬みの念起らば忽に曇

婦女訓

婦人は其の心優美なるべし、面を和らげ、言葉をやさしくして、諸事穏便なれ、愛敬を備へて多辯ならず、度量を寛うして邪推せざれ、子程に親を思ひ、孫程に他人にも親切なれ、見目よりも心、服装よりも禮容こそ大切なるべし、堪忍は守り袋、慈愛は第一の寶、正直は戸締り、信心は火の用心、機嫌好く働き、柔かに人を使へ、苦しき時にも樂しみ、悲しき時にも愉び、小事に注意深ければ終には大徳を成す、如何なる場合にも有り難し勿體なしと念じて忠孝仁義の道を忘るゝな、石の上の三年はやがて極樂の園に遊ぶの門出なりと知るべし。

心の鏡

明治天皇の御製に『榊葉にかけし鏡を鏡にて人も心を磨けとぞ思ふ』といふ尊い御教訓がある。實にや、御互の心は恰も鏡の如きものである。鏡の體は玲瓏明白で、一點の私をも存せざれど、外より來る塵埃が溜ると、忽ちに曇りを生じて、物を照すの用を失ひます。吾々の心も、其の本性には天地の誠を有し

『それは乃木大將閣下じや』『ヘイ……本當でござんすか』

老婆はすつかり驚いた。あの方が大將樣と知つたら、あんな勝手な事を云ひ散らすではなかつたに、今の後悔は前には立たず、急いで將軍の泊つてゐられる旅舍へ、かの老婆は伴れられて往つて、午の中の無禮を謝しつゝ、また莫大な茶代を頂いたお禮を述べると、將軍は

儂も大將といふ名で出征をして、多くの兵卒を喪つたがこれも天命ぢや、お國のためぢや、命長らへて凱旋はしたものゝ、多くの人から萬歲を浴びせられ、その勳功を賞められるのが實に辛くてならぬのじや、汝の伜を殺したのもこの乃木じやが、皆政府の命だから勘忍してお吳れよ」

と諄々と說かれた將軍の双眼には淚があつた。老婆は、これ已來殆んど乃木狂といはれる位の人となつて、その德化に感じたといふことであります。これも全く將軍が愛敬の力で、一文不知の老婆を感化した偉大な力そのものである。

和敬は人となるの要素、家を治むるの要件、國民の精神を統一して、國家繁榮の基礎を築くの鍵であります。これによつて初めて生きたお袈裟を搭ける事になる。故にお互は身も心も和敬になりきり、和敬の家庭たらしめ、和敬の國家を實現し、和敬の世界たらしむることに努力しなければならぬのであります。

が倅だけは旅順へ回されて、乃木といふ大將につかはれて死んだ、實に今ではその大將が怨めしい」

將軍が、この瞬間の感じは何うであつたらう。正に三尺の鉾先を以て胸を刺すよりも痛々しいものであつたに違ひない。尙ほ將軍は老婆に

『お婆さんや……死生命あり富貴は天にありで、末代までの名譽ぢや、諦らめたがよい、死して護國の神として靖國神社に祀られてある、名譽は永久に朽ちはしない……』

と說かれた。慈愛に溢れた將軍の胸中は何なであつたでせう。軈て辭して、この茶屋から二三町隔つた丘には戰死者の記念碑が建つてゐた、そこまで足を運ばれたといふことです。和敬の德がこゝに示現してゐるではありませんか。茶屋から將軍が出られて後、二三の客がこゝで同じやうに休むで麥湯を飲むで去つた。

老婆は一喫と午睡をし、眼を覺して火鉢の傍を見ると紙に包んだ小さいものがある。披いて見ると五圓紙幣が這入つてゐる。老婆には合點がゆかぬ。三人あつた客の誰かが忘れて往つたものかと思案に暮れてゐると、そこを通りかゝつたのが村の巡査、早速呼び込むで先刻の包を示しながら訊くと、包紙の端には鉛筆で『乃木』と書いてある。巡査は老婆から先刻の將軍の姿なぞをきいた上に

が、如何でせう』

『あゝよいとも、その麥湯で結構』『ハイ畏りました、只今……』

と茶店の老婆は無遠慮にいふてゐる。將軍はこの老婆の態度がまた面白いと、何處までも地金を現はされぬ。老婆は將軍に對つて

『あなた、年は幾つにならしやつた』『俺かい、もう七十に手が屆くなア』

『七十近いのにまだ兵隊さんかネ』『能なしだもんだから軍刀にでもつかまつてゐるのサ』

『ソラ氣の毒じやネエ、まあ麥湯でも澤山飲んでくらし、まあお上んなさい、妾は兵隊さんが大好きでネ』

『婆さんや、あそこに揭げてある寫眞は誰のだい』

『妾の伜で上等兵だよ』

『立派な兵隊だ、現今何處に居るのだい』『死んじまつたネ』

『死んだ、どうして』『戰死をしただア』

『名譽の戰死か……さうか……』『まあ聞いて下せい、この村から四人出征しただが、他の三人は無事に凱旋して、妾の伜だけ死んで了ふとは諦らめられませんワイ』

『それは國の譽じやが、何といふ處で戰死したのだ、』『他の人達は他の方面へ廻つたで運がいいのさ

日露戰爭に贏ちたる武勳を樹てられたる乃木將軍は、決して自分の功であるとは毛頭も考へられなかつた。斯る武名を輝かすに至つたのも、偏に上は一天萬乘の大君の御恩、下は戰に斃れた多くの將卒の力によつたもので、世人から賞められる程自分は面目がないと言うて居られた。祝捷會が日比谷公園で開かれ、國民歡呼の聲に迎へられながら今日の正賓たる乃木將軍夫妻は、實に他目にも立派な御身の上であつた。然し、臨場せられた將軍自らは決して晴の場面とは思うて居なかつた。式が濟で赤坂の邸へ歸られ、卓を圍むで御夫婦は默然として居られた。靜まり返つた座敷の床の間には戰死した二人の御令息の寫眞が懸られてあつた。御夫婦は暫しは愁然となられ、軈ては顏を俯せられた。英雄の眼から零れる涙は何んなに悲しい思出であらう。萬感胸を衝いて來ました。

『自分一人の力じやない、第一に息子が二人まで命を棄てゝゐるではないか、幾千萬の兵卒の骨はあの旅順の鐵壁に埋められてゐるではないか、六千萬といふ多くの國民の後援があつたからではないか、決して自分一人の力じやない、自分がどうして凱旋將軍として榮譽を擔ふことが出來やう』

と寫眞に對して泣かれたと云ふことです。こゝに將軍の慈悲の德があります。また、將軍が凱旋の時、備後尾道に二泊せられた、その時の出來事であつた。將軍は町端れを散歩せられた次でに、不圖目についた茶店に這入つて、古めかしい疊の敷かれた店頭に軍服のまゝ腰を下されて

『婆さん、お茶を一杯呉れんか』お茶はありませんが、麥湯の冷めたいものでもよろしくば、ございます

過ぎたるは尚ほ及ばざるが如しで、不可ないが、一體に婦人は優しく、恁なに無理難題を云はれても柳の如く寛容でありたいものである。『愛語は最高の裝飾なり』で、言葉の上に親切をこめることが肝要である。單に口慈というても言葉が優なるばかりでなく、正直で、意味のある、ためになる言葉で無ければならぬ。

例へば兒童を教育する上に於て、親が餘りに、口慈だというて甘い一方に育てたならば、誠に將來が危まれる。時には呶鳴つて惡い習慣は矯正してやらなければならぬ。この呶鳴る所に、眞實に親としての親切があるのです。一家庭の內にあつては、如何なる場合にも、この優しい口慈の和敬が無くてばならぬ。

第六、意慈和敬――精神に慈悲が無ければ和敬は現はれない。和敬の德は意の中に慈悲を湛へた上に示現さるべきものであります。以上六種の和敬は、釋尊がお說き遊ばされたものでありますから、お互ひは、これを以て家を治むる唯一の要件として、和敬第一の眞諦を守つてゆかれたいものであります。

內自ら謙卑するを敬と云ひ、他の善に從うを和と云ふ。

で、他人が立派な事をした場合には滿腔の誠意を表して贊成をする。而して、他と步調を同じうし、善を以て同化してゆくのであります。

第四、身慈の和敬――可愛い身に施をするといふので、若い人は老人に對して、優しい身の御馳走をしなければ、うまく家は齊うてゆきません。言葉も同じで、音聲施といふのを行じなければならぬ。人にして心に慈悲の徳を具へてゐれば、體の一進一退が直に慈悲になつて現はれる。萬々一、爭ひが起つたにしても、實に公明正大で、その爭ひが堂々たるものになります。爭ふ時には自分の主義なり主張に據つて堂々と爭覇戰を開始するがよい。而し、その腹のどん底には私心といふものなく、社會の爲め國家のためといふ一片の赤心が無ければなりません。これが身慈の和敬といふのです。

かの十一面觀世音菩薩の尊像を拜すると、そのお頭の上には澤山のお顏が載つてゐます。あれは親樣の御恩を忘れぬやうにとの報恩謝徳の徴表で、孝順を表はして居るのであります。十一面もある中には隨分いろ〳〵な御面相がありますが、その正面が眞の觀音樣の御姿であります。『雇はれて鬼になつたる祭かな』でいろ〳〵にお相を御變へになつても、矢張、救世の御慈悲には變りはないのであります。

何れから云うても人は通身に慈悲を持たねばならぬ。優しい心がありさへすれば全身が慈悲の姿となり慈悲の行ひとなるのであります。

第五、口慈の和敬――口に現はれる和敬である。いかに優しい言葉だというても、餘りに馬鹿丁寧でも、

不和にもなるのであります。

　また、同じやうな例があるが、ある平和な家庭へ、不和の家から内儀さんが『平和の秘訣は』と聞きにゆくと、『私の家庭は一同が悪人揃ひですから』というた。悪人同志とは恐しい言葉である。『悪人同志なら猶のこと爭ひの家庭とならなければならぬに』と不審を抱きつゝ歸つてきた。それから二三日經つた時、仲のよい家庭で一頭の馬を盗まれた。この不幸を見舞旁々訪ねて、日頃の和合の秘訣をきかうものと出掛ると、今しも兩親は伜の前に散々謝してゐた。『年をとれば誰も目敏いものを、それが盗まれたからには儂等の責任ぢや、儂等が悪いのぢや』と謝まると、勝手からお嫁さんが走つてきて『御兩親はもう疾くに御隱居さまで、家の仕末を怠つた妾が悪うございます』と兩親の前で謝つてゐると、裏口からこれを權助が聞きつけて、『何方も悪くはございません、たゞ肝心の馬掛りのこの權助が手落ちでございます、平に御勘辨を願ひます』と、家内中が交々に、その罪を引受けようとする、つまり悪人になり手が多いのです。隣の細君これを見て『成程悪人揃ひだなあ』と合點して歸つたといふことです。

　不和合の家には善い人ばかりが多いから圓滿でない。悪人揃ひでこそ家庭は圓滿平和であります。この例話の中にも和敬・和合の眞理があると思ひます。人は他を責めるよりも、先づ自らを責めることを忘れてはなりません。

の二つの目的を一にして統一されねばなりません。

和合の秘訣

第三、同行和敬――これは同じ仕事をすることです。御主人は外で毎日お働きになり、奧さんはお家で御仕事をなされる。斯樣に一見御主人と奧さんとは別々の異つた仕事ですが、その內容に這入つて見ると決して別々ではない。奧さんが家を守ることが、何なに外で働いてゐる御主人に萬人の力を與へることか判らぬ。卽ち、御主人の活動力の能率は正に奧さんの心掛一つにあります。故に、外見、仕事は兩者違つてゐるが、力の上には同一の方向に進んでゐるのであります。

ある所に仲のよい家庭と仲の惡い家庭とが隣合つてゐた。一日、仲の惡い家庭の妻君が『どうしてお宅は皆さまが斯うお仲がよいのでせう、お羨ましうございます、何か仲よしの秘傳とでもいふものがありませうか』と訊きに來たので、仲のよい方の妻君は早速『別に秘傳といふものもございませんが、それはただこそのつけ方が惡いのでせう』と敎へたさうです。何事にも自分の方へ『こそ』を附けるから爭ひが絕えないで、互ひに角の突合ひをしなければならぬ。『俺が働けばこそ』『御飯も妾が炊けばこそ』で『こそ』を皆自分の方へ附けるから不和の基となる。これと反對に他に『こそ』を附けたならば『親があればこそ』『あなたがあればこそ』といふから互ひに角は出ない。この『こそ』の附方一つで家庭が圓滿にもなり、

今日一日、人の悪しきを云はず我よきを云ふまじき事。
今日一日、存命を喜び家事を大事に努むべき事。
右は今日一日の愼に候

一日と思へば暑さしのぎよし。一日と思へば不足こらへよし。一日と思へば掟守りよし。

第一則に三の恩というて國王・親・師の三恩を忘れず、一飯の食、一着の衣服も皆三恩の御蔭であると心から有難く感じなば、心中何の不足をいふこともない。

事たれば足るに任せて事たらず、足らでこと足る身こそやすけれ

また、第二則の腹を立てる場合があつたら、愼は成べく延期するがよろしい。癇癪といふ奴は日延べするに限ります。この今日一日を最も愼み深くせば、主も從も互ひに和合して立派な家庭が建設されるのであります。

第二、同見和敬――これには目的が二つある。一は人としての同見和敬、二は佛弟子としての同見和敬である。その一は國家のため一家のために働くことであります。我國は一般に祖先を重んずる國である。即ち家が大切である。子供を見ても自分の子でありながら祖先の系統であると感じてゐる。即ち兒童教育の上にも祖先を思ひ國家の上を思ふのであります。二は云ふまでもなく、自利利他圓滿で自分が道を明らめ、更に進んでは、佛の如く一切衆生を濟度しようとする願で、上求菩提下化衆生の誓願であります。こ

第一、同戒和敬——戒は規律で、同一規律の下にあつて一致することで、一家にあつても、父は父としての規律があり、母は母としての規律があるといふやうに區々としてゐては、到底、治まるものではない。一家庭には、家族一同が遵守してゆかねばならぬ同一の規律が無くては、和合の徳を現はすことは出來ない。この意味からして、一國の國民思想統一も、同一規律の下に無ければ國民思想の歸趨を誤るが如きものである、

幸ひ我が國は佛教國であるによつて、何處へ參つても佛壇が設けられ、到る所にも合掌する事だけは知らぬ人はない。而して、常に上下の心を一致してゐます。和合を期せようと思つて、初めから社會だの國家だのと大きい處に眼をつけないで、先づ第一に小さい家庭を治めるといふことから手始めにしなければならぬ。

『今日一日のこと』として子孫及び知人に示して藥種屋治兵衛は旨く云うております。

今日一日、三の恩を忘れず不足を云ふまじき事。

今日一日、決して腹を立つまじき事。

今日一日、虚言を云はず無禮を爲すまじき事。

な材木があらうとも家は建てられぬ。すべての物は和合し調和する事が第一の要件であります。

明治十四五年の頃と思ひます。本郷の高臺に住んでゐた人で神原某といふのがあつた。然して佛教演說を湯島で開きましたが、その演題が極めて奇拔でした。曰く『日本國民を僧侶たらしめよ』といふのであつた。思ひ切つた題だが、さて何な事を述べるのかと聽きにゆくと、大體は『日本國民たる以上は建國以來の國民精神を繼承して、常に和合して時代の世運に遲れざらむことを期したい』といふのであつた。これも僧は和合衆といふ處から思ひ付いて、國民の和合を唱導したのでありました。

聖德太子の御制定遊ばされた十七憲法の第一條の如く

和を以て貴しとなす忤うことなきを宗とす。

で爭ひのないところに平和が來る。即ち、この平和たるや將に國民が和合を重んじて精神の統一をなすに於て實現されるのである。教育勅語に『克く忠に、克く孝に、億兆心を一にして』と仰せられ、戊申詔書に『上下心を一にする』と仰せられてあるも、この和合の意であります。されば、吾人はこの十人十種、雜多な中に處し、互に競爭をしながらも、皇室を尊び國運の隆昌を計る一事に於ては、千萬人が一致して互ひに和して行かねばならぬのであります。故に和敬は吾人一身の上に於ても、また、一家を治めてゆく上に於ても、最も樞要なる基礎と云はねばならぬ。

ると、佛は徳を標準にして階級を立てられ、四姓を渾融して同一待遇の下におかれた。故に和合衆と稱せられたのです。和合衆たる上に於ては、貴族も穢多も平等になつて互ひに親密にし、物ある者は無き人を憐み助け合ふのが道徳である。而して、同一の精神を以て目的に進まなければならぬと、人間の究局に達せしめんために、大英斷を以て、禍殃であつた種族の打破をなされたのであります。

和合の體

僧侶の搭けてゐる御袈裟は和合衆の徵表です。何を好んで綴ぎ目多くする必要もなささうですが、釋尊の時代には、色々の布片を拾ひ集めて幾度も洗ひ清め、さうして、たゞ無暗に雜然と綴り合せても見苦しいといふので、整然と幅の狹いもの長いものを取り合せて、あゝした形式になつたのです。故に、御袈裟には和合衆の意味が充分に含まれてゐる。

これと同じやうに、一家の中にも賢い者もあれば愚かな人もあり、朝寢をする人もあれば宵寢をする人もあり、酒の好きな人もあれば甘黨の人もあるといつた調子に、一家庭でも千差萬別、實に十人十色とはよくいうたものであります。この十人十色の人が一團になつてこそ、春風のやうに嬉々として和合する事が出來る。また、一軒の家を建てるにしても、梁もあれば床もあり、柱もあれば横木もあるといつた風に、悉く調和してゐて初めて家も建てられるが、若し各自が別々に離れ離れにでもなれば、如何に立派

で、和は實に國民道德の要件をなしてゐるものです。例へば日本は元、大和敷島なぞといふて、大和と名づけてゐます。この『やまと』とは『山あと』といふことで、山の多い意であつた。神武天皇が都を大和國に奠め給ふた其の大和が遂に日本全體の名に擴がつた。今こゝに『和』が國民道德の基礎的要件になるに至つたことを思ひ較べて、實に甚深の意が含まれてゐるのを思はずにはゐられません。

佛教で佛弟子たるものは凡て和合を主にしなければならぬと敎へてゐる。印度では佛弟子を僧伽といひますが、これを譯すると和合衆といふことになります。『衆』は群集といふて、二人以上三人が五人となり、百人が千萬人の大集團になつても、結局は各自その志を同じうして同一目的に進むでゆくの意味になります。由來、印度には一般人民の階級を四種に制限して四姓といふものを立てゝゐた。一、刹帝利（政治家）二、婆羅門（宗教教育者）三、毘舍（農工商者）四、首陀（特殊部落）で、各四階級の人は、決して他の階級とは交際もしない。況んや冠婚葬祭などは斷じてしない。釋尊はこの四姓の弊を打破せられた。卽ち四姓出家すれば同じく釋氏と稱すで、四大河流れゆく際は大海原であるとの例を引いて、遂に、幾久しい間互ひに反目して、人間に階級を立てることによつての大なる弊害がこゝに一新されたのである。

奈何立派な先祖を仰げる人も現在人の抱ける精神次第によつて見劣のする人ともなる。それに反して、由緒も家柄もない貧乏な人でも、その精神一つで、世の爲め國の爲めに盡せば立派な人になり得るのでも

和敬

和敬の意義

和敬の『和』はやわらぐと訓じ、敬は『けい』と讀みたい處ですが、こゝでは吳音で『キヤウ』と讀まねばなりません。由來、文字の讀方には漢音・吳音・唐音の三通ある。殊に佛敎のお經では吳音が專ら用ひられてゐる。之れといふのも、日本へ初めて佛敎が傳へられた已前から吳音が渡來してゐましたからです。畏れ多くも皇室の文書は大抵吳音をお用ひになつてゐる。例せば、大正の『正』はセイと讀まないでシヤウと云ふのは吳音、また普請の『請』も唐音、また行燈・行在所・行者といふ『行』も唐音であります。斯樣に字の讀方に漢・唐・吳の三音ありますが、佛敎で屢々用ひられてゐるのは唐音と吳音とであります。

和敬といふことは仲をよくすることの意で、和合といふことになります。春の風を和風といひ、機嫌のよい顏を和顏といひ、その他、和睦とか協和といつた樣に通じる言葉です。日本は元來『和』を好む國柄

人間の道德といふものは、種々なる方面から樣々に說明することが出來ますけれども、凡ての基礎となるべきものは情であつて、此の情に三つあります。一つは難有いといふことで、もう一つは勿體ないといふこと、第三には氣の毒といふ、此の三つの心を絶えず持つてゐたならば、神の如き、又、佛の如き慈悲の德を、そのまゝに行ふことが出來るのであります。

以上申したやうなことは精神上の寶であつて、一つには忍耐といふ衣を着、二つには信念という食物を攝り、三つには慈悲といふ住居に落着く、此の三つのものが完全に守れましたならば、精神生活の獨立は立派に保たれるのであります。それで內に此の心があつて、外に之が働くといふので、始めて眞に人生の目的は遂げられ、道德的生命は永久のものとなるのであります。

さて道德上の富は出來、精神上の財產が出來たとしたならば此の生命は五尺の身體、五十年ばかりの短い生命でも極めて意義の深い價値のあるものとなつて來るのであります。それが身分職業の違ふまゝに、各々分限に應じて、天地の大道、宇宙の眞理を實現してゆくことになるので『雲は靑天に在り水は瓶にあり』雲となつて天に昇るも水となつて地に在るも、同じ働きをあらはしてゆくことになるのであります。

ぬ』と云うて誓しめられたといふことであります。凡ての事を深切に丁寧にするといふことは肝腎であつて、此の深切丁寧といふことが缺けるといふと、次第に世間が狹く小さくなつて、遂には何處へも顏出しが出來なくなるやうになるものです。『世の中は四尺五寸となりにけり五尺のからだおきどころなし』で、到頭、松の木や鐵道の御厄介にまでならなくてはならぬやうになつて、一心を安んずることは出來ないやうになります。

乃木大將は、金盥の水を惜まれて、『俺は水の充分あるのを見る度に涙が出る』と云はれ、日露戰爭の當時、旅順に於て水に缺乏されたことを偲ばれたといふことであります。百萬の大敵をも恐れない將軍が、僅か一ぱいの水をも惜まれるといふ、斯ういふ信念から、德を積んでいつて、草木禽獸に及ぼし、無生物の器具類までも大事にするといふのであつてこそ、萬事が深切に丁寧に出來るのであります。

一茶が『やれ打つな蠅が手を摺る足を摺る』と云ひ、又、鬼貫が『行水の捨てどころ無し虫の聲』と歌ひ、千代が『朝顏につるべとられて貰ひ水』と詠んだ如き、皆慈悲憐愍の至情から涌き出したものであつて、人間同志の間柄に於ても、電燈などが皓々と照すやうに、愛憎もなく、怨親もなく、一切平等に大慈大悲の心を以て臨んだならば、萬事皆悉く深切丁寧にすることが出來るのであります。これは啻に神佛や偉人の上ばかりのことではなく、我々お互ひ常に同情心を持ち愛憐の心を以てゐたならば、凡ての事が大切にせねばならぬやうになるのであります。

で、女子の人は水と紙を餘計に用ひますから、濫費をし易い水と紙とを大切にするほどの女學生であつたならば、必す運命が開いて、幸福なる生活を送ることが出來るので、成程これはその通りでありませう。一ぱいの手桶の水を惜むのも、一枚の紙片を粗末にしないやうにするのも、それが積り積ると非常な大きいものとなつて、徳を積むと徳を損するとの差別が立つやうになります。

昔、百丈禪師といふお方は、高齡にも拘はらず、多くの雲水と共に掃除までもなされたのでありますが、或時、雲水達が相談の上で、掃除道具を隱してしまつたので、百丈禪師は、平素の通り掃除をなさらうと思うて來て見ると、道具を何處かへ片づけてしまつて無い。據なく方丈へお歸りになつてしまはれたので、雲水達は格別のお叱りもなく方丈へ歸られたのを喜んでゐると、御飯時になつて、御膳を持つてゆくと、禪師は箸もお取りにならない。『何うかなされましたか』と伺ふと、其の時、百丈禪師は、『一日爲さざれば一日食はず。』自分の爲べきことを爲ないで食事に對ふことは勿體なくて出來ない、今日は掃除をすることが出來なかつたに依つて一日何も食かぬのであると云はれたので、折角、師匠の身を思つてしたことが却て仇となり、到頭、其の日一日は食事を爲されなかつたといふことであります。此の信念は、自分の職務に深切であつてこそ初めて現はれるのであります。

二宮尊德は、食事の時に箸で香の物を挾むと、澤菴が四切ほど連がつたので、早速、臺所の者を呼んで、『お前は庖丁で切つて心で切らぬから、斯ういふ不實なことになる、何事にも深切をつくさなければなら

横濱に上村倉吉といふて、煙草の元賣捌をしてゐる人があつて、此の人が金を扱ふことは、實に丁寧なもので、一日の仕事が終れば、金を金庫へ藏ひながら、金に向つて『何卒御窮屈でも明朝まで此の中でお寢み下さい』と人に言ふやうに云つては藏ひ、又、支拂ひをする時には、『まことに御苦勞樣ですが、あなたは何處其處まで御出張を願ひます、それで一刻も早くお歸りを待つて居ります』斯んなことを云ふものですから、多勢の職工などが皆笑ひますけれども『私は決して金を品物とは見ない、人間の爲に働いてくれるから、生命のあるものと認めるのである、それ故、決してこれを濫費したり、私することは出來ないのである』と云うてゐるさうであります。可笑しいやうな話ですが、これが矢張り金に對して深切であるから、自然、濫費の無いやうに注意もすることになります。

ところが金に對して不深切、不注意でありますと、金がもう懲りて寄りつきません。大黑樣などを紹介に頼んで、來て貰はうと思つても、段々遠ざかつて顏を見せて呉れません。恰度、人間を虐待すれば、其の人が寄りつかなくなるやうなもので、無生物でもこれと同樣に、口こそ利きませんが、大切にしてくれないばかりでなく、酷いめに遇ふところなどには來ません。大黑樣を頼んでもだめです。『この槌は寶ふり出す槌でなし、なまくら者の頭打つ槌』といふ歌がある通りで、此の意味に於て、一粒の米、一滴の水にも愛情を灑ぐといふ考がなければなりません。

或る女學校の先生が、『水と紙を大切にする女學生は、運命が開く』と云はれましたが、全く其の通り

打ち勝つて、自ら守るところを守つてゆくといふ信念が確固であれば、これが即ち精神の營養物となるのであります。精神的に獨立し自活してゆくのが即ち心の食物を十分に攝取したことゝなるのであります。

精神の住家

それから第三には、心の住居はどこでありませうか。自分の住む家がないのは、無宿者でありますから、誠に不安心なものであります。然らば我々の精神の戸籍は何處に置くべきであるかと云ますれば、お釋迦樣は、慈悲を以て心の住居とせねばならぬと仰せられてあります。どれほど學問があつても技倆があつても、慈悲といふものが無かつたならば、人たるの道を全うすることは出來ないのであります。

此の慈悲といふものは、何から生ずるのであるかと云ひますと、佛教に於ては本性といふことを申します。即ち母親が我が子を可愛がるといふ心、其の子が母親を懷かしむといふ心は、人々が皆持つて生れて來た本性で、人情といふものであります。これがそのまゝに慈悲のあらはれであつて、この慈悲の尊い心が、諸々の欲のために妨げられて、其の本性を昧ますのであります。何事にも慈悲の心、可愛がるといふ心があつたならば、道具を取扱ふ上にも、深切に大切に取扱ふといふやふになり、深切に大切に扱へば永く保つのは當然の事であります。衣服にしてもその通りで、汚したり破いたりしないように、丁寧に注意をして居りさへすれば、永く着ることが出來るやうなものです。

精進するのが宗教の信仰であります。即ち佛樣は大解脫の境涯で、其の働きは無限の慈悲を惠まれるのでありますから、さういふ大なる標準に向つて進む時には、お勅語にもある通り、『父母に孝に兄弟に友に、夫婦相和し朋友相信じ』といふ理想や目的を達することが出來るのであります。これは宗教からいふても、教育からいふても、實業からいふても、皆此の解脫と信仰といふ二大標準を離れてはならないのであつて、佛に歸依するといふ上からは、人生を解脫したる天地の大眞理に向つて進み、天地と其の德を一にする無限絕對の眞理に到達するのが目的であります。即ち自分の心は正直であつて、其の正直の心を以て佛樣の如き大解脫、大眞理に向つて歸依するといふのが、此の上もなき最高の理想であります。そして此の信念ほど世に強いものはないのであります。

一例を擧げれば、愛媛縣の松山在の松崎村といふ處に、作兵衛といふ男がありましたが、村中第一等の貧乏で、まことに氣の毒な人でありました。或時、役人が見廻つてきて、平生正直者ではあるし、餘り可哀相だから惠んでやらうといふので、若干かの金を與へると、作兵衛は決してこれを受けないばかりか、『何卒人間らしいお取扱ひを願ひたい』と云つたさうである。貧乏はしてゐても獨立してゆくといふ立派な精神、一種の大和魂といふべきであります。

然るに、動もすると人の助力を乞うて、今日を送らうといふ人間の多い世の中である。困ると直に他人の厄介になるのは、獨立心のない、意氣地なしといふべきであります。何處までも不自由に堪え、不滿足に

凡て逆境に處すれば、逆境だけの進歩はあるもので、何事も消極的には一時の感情を制して、如何なる艱難にも打ち克つてゆくといふ決心を以て精進をし、又、積極的には進んで働くところの忍耐をしなければならぬのであります。然るに世間には働いて損をしたり、折角好意を以て爲たことでも、却て面白く思はれなかつたりすることがあるもので、さういふ世事の轉倒から氣に入らないことがあつたり、苦しいことがあつたりするのに打ち勝つてゆくのを、佛教では精進波羅蜜といふのであります。そこで此の精神上の衣服を着てゐさへすれば、如何なる事に出會うても決して恐れるところはないのであります。

精神の飮食

次は精神上の食物、卽ちお互ひの心に營養をつけてゆくといふことで、如何なる營養をつけて行つたならばよいのであるかといふ問題であります。如何なる英雄豪傑と雖も、腹が空いてゐては戰爭が出來ません、佐久間玄蕃といふ人は、鬼玄蕃とまで謳はれたほどの勇將でありましたけれども、數日間、山中に彷徨うて、遂に名も無き一兵卒の爲めに捕へられたといふことであります。今、我々の精神にも絕えず力をつけておく事が必要であつて、其の精神の營養物には信念といふ食物を攝ることが大切であります。

手を合はせることばかりが信念ではありません。信はまこと、萬事の本というて、卽ち虛妄の無い、正直であるといふことであります。其の正直といふ鏡、其の曇りの無い精神を以て、大なる標準に向つて

で、それから二十年間もかゝつて夫の名高い群書類從といふ大部の書籍を編纂し、到頭出來あがつたので其の群書類從の製本を前記の製本屋へ頼んだのであります。

製本屋の方では大喜びで、早速、菓子折か何かを持つて、塙保己一の家へお禮に往つて『他に何軒も同業のある中から、特に私しどもをお見立てに預つて、誠に難有う存じます』と挨拶をすると、其の時、塙保己一は『ヤアお久しぶりです、貴方は二十年前にお目にかゝつた――ではない盲目の事ですからお聲にかゝつた――時と今日と少しもお變りがない、先づ御繁昌で結構です』といふやうな言葉、製本屋の方では曾て會つたことも話をした覺もないのに、不思議の事を云ふ人であると、薄氣味惡く思つてゐると、やがて保己一は机の引出しから泥の付いた古い錢緡を取り出して『實はお忘れでもあらうが今から二十年前平河天神の華表の附近で鼻緒を切らして困つた時にこれ〳〵云々の次第で貴方のお店から貰つてきた其の時の錢緡はこれである』といふて、詳しく當時の事を話したのであります。これを聞いて製本屋の方では驚いた。成るほど、さういはれてみると、確にそんなことがあつたに相違ない、してみれば彼の時の盲目は此の大先生であつたのかと思ふと、急に恐れ入つて何とお詫をしてよいやら、唯だ只管謝罪るばかりでありました。すると保己一は『私が貴方を恨むくらゐならば、何で製本をお頼みしませう、私に今日の此の成績があるといふのも、其の原因は皆全く貴方のおかげで、却て私の方からお禮を申したいほどである』と云ふたさうであります。

口も云はれるのである。悪口を云つてくださるのは、自分に修養を促して下さるのであると思うて、一層言行も愼しんでゆくといふやうにしなければならぬのであります。或は今日現在、悪口を云はれるやうな覺えが無いとしてみても、過去世に於て何か悪口を云はれるやうな原因を作つておいたのであらうと思うて、それを力に益々修養するやうにしたいのであります。

塙保己一といふ學者は、盲であるにも拘はらず、あれだけの學問をしたのでありますから、最初から到底これは自分だけの力では及ばない、是非とも神佛の冥助を願はなければならぬと考へて、平生、常に神佛に對しては敬ひ尊ぶ心を絶やさずにゐたさうであります。それで麹町の平河天神に日參をしてゐて、或日の事、其處の華表の前で鼻緒を斷つてしまひ、非常に當惑をしてゐましたが、豫ねてから此の華表前には製本屋のあることを知つてゐたので『誠に御厄介ですが、只今鼻緒が切れて困つて居ります、どうぞ麻絲の端でも少々御無心を願ひます』と云ふと、製本屋では誰一人相手にする者もない。二度三度まで聲をかけて頼んで、漸く三度目に『此の盲目奴』と、店の中から何やら放拋つけて、それが保己一の顔に當つて地に落ちた。一時はムツとして『酷いことをする』と思つたけれども、此の場合ではあり、盲目の悲しさに泥の中を這ひ廻りながら、附近を手探りで索つてみたけれども何も見當らない。漸くのことで手に觸れたものがあるので拾ひあげてみると、それは使ひ古した錢緡であつたのです。これでもあれば急の間に

く話しかけたけれども、ソクラテースは鼻で遇つて相手にもしないでゐたので、それを口惜しく思つたのでありませう、やがてのことに奥樣は臺所から手桶に水を汲で來て、靜に書見をしてゐるソクラテースの頭の上からザブリと掛けてしまつたのであります。大抵の者ならば『何をする此の狂人め』と叱りつけるところですが、ソクラテースは默つて衣服を着換へて來て、再び悠然と書見を續けたといふことであります。此の事をソクラテースの友人が聞いて『いくら貴下が堪忍強くてもそんなことまでされて默つてゐるにも及ばないでせう』と云つた時に、ソクラテースは笑ひながら『何、ゴロ〳〵の後だから夕立が來たのに不思議はないさ』と平氣でゐたといふ話であります。

これに似たやうなことで、豐後の妙喜尼といふ人は、人に頭を叩かれても遂に怒つたことが無い。『屋根から瓦が落ちたと思へば喧嘩にもなりません』といふ。又、人から水を掛けられても決して腹を立てず、『夕立に會つたと思へば濟みます、濡れても流されないだけが幸福です』といふたやうな具合で、どんなことがあつても怒つたことが無い。或時などは火傷をして指の頭が火ぶくれになつたことがあつたので、『飛んだお怪我をなさいました』というて慰めてくれる人があると『否、私は難有くて涙がこぼれます、佛樣のおかげで指頭だけですみました』と云うたさうであります。

此くの如く、あきらめといふことは修養をする上には大切なことであつて、例へば人から惡口を云はれて自分には決して惡口を云はれる筋は無いと信じてゐても、何か自分には氣の付かない缺點があればこそ惡

「衣食足りて禮節を知る」といふ言葉がありますが、暫時も衣食が無かつたならば、我々は生命を繫いでゆくことは出來ません。然らば心の上ではどうであるかといふに、矢張り此の衣食が無かつたならば、決して精神的壽命を續けてゆくことは出來ないのであります。

これは私が平生自ら修養の標準と心得て居りますところのものであつて、先づお互ひの心を美しくするためには、忍辱の衣を着なければならぬのであります。お釋迦樣は『忍辱の衣を着よ』と仰せられて、一度此の忍辱の衣が破れたならば、顏色にも、言葉にも、行爲にも皆怒り腹立つところの荒々しい態が現はれるのであります。そこで此の怒り腹立つといふことを愼むのが肝要でありますが、此の腹を立てない、堪忍をするといふにも二通りあつて、退いて守る堪忍と、進んで働く堪忍との二つであります。堪忍といふことは、言葉を換へていへば、あきらめといふことで、此のあきらめの力が強くなれば、必ず堪忍は出來るので、從つて凡ての修養も樂になります。

例へを擧げてお話をすれば、ソクラテースといふ人は、學問も道德も優れた立派な人でありましたが、其のソクラテースの妻は、至つて醜ひ婦人であつたさうで、其の上に邪推の深い、嫉妬心の強い人でありました。一日の事ソクラテースが、何か書見をしてゐるところへ、其の奧樣が來て、耳許で頻りに喧ま

あります。此の不生不滅の大生命を認めるといふところから、眞實の信仰も涌き出すのであつて、此の境涯に達するやうにつとめるのが増長壽命であります。

財寶を増長すべし

次には増長諸財である。世間を見渡しますと動産・不動産、其の動産といふ中にも、又、不動産といふ中にも、種々様々のものがあるのでありませうけれども、一口に云へば財産であります。此の財産・財力に依て家を富まし國を豊にすることも出來るのであつて、學校も事業も凡ての事が、皆財物に本づくのであります。例へば立派な學校を建てゝ、多くの人材を造らうと思うても、金が無くては出來ません。又、相當な敎員を傭はうと思うても、金が足らなくてはそれも出來ません。或は又、何か一つの大きな事業を興さうと企てゝも、先に立つものは金でありますから、どのやうな見込みのある事業でも、財力の伴はない相談は成り立たないことになります。

そこで、自分一人の富を作るといふことも本より大切なことには相違ありませんが、社會・國家にも貢獻するといふ大きな觀念を以て勤勉努力して、財産・財力を豊富にするといふことが肝要であります。更に進んでは無形の財産、即ち精神上の財産といふものを造ることが大切であります。それで、今、此の精神上の富を作るといふに就ては、これを衣食住の三つに分けてお話をして見やうと思ひます。

元來、我が佛教は無我說を主張するものでありますから、夫の靈魂といふものは無いとして說きませんけれども、お互ひの心性といふものは、本より大小・長短・美醜等の判斷のつくものではなく、唯運用の如何に依ては、佛も魔となり魔も佛となるのであります。それで之を舒れば六合に彌り、之を卷けば、退いて密に藏るとさへいふのでありますから、此の心性は死んでも無くならないのでありますから、即ち死生を飛び超えたものといふべきであります。

畏れ多くも明治天皇の御肉身は崩御あらせられても、其の御精神が永遠に盡きたまはぬ證據としては、今上（大正）天皇御卽位大典のお勅語の中に『祖宗の神靈照鑑上に在り』と仰せられてあるのでも判るのであります。加之、年々正月元日には宮中に於かせられては、四方拜の御儀と申して、最も森嚴にして大切なる御儀式を擧げさせらるゝといふのも、肉眼を以ては到底見ることの出來ぬところの神靈に對して禮拜せさせたまふのであります。此の信仰があつてこそ、親が死んでも平生の行を絶えず監視して御座るやうに思はれて、愼しまなければならぬのである。『親を祭ること在すが如し』といふ古語もあつて。其の冥々の力の大いなることは、事新しく申すまでもないことであります。

楠正成公が『七度人間に生れて國賊を亡ぼさん』生れかはり死にかはり、七度までも人間に生れ來つて、君の爲め國の爲に忠義を盡さうと誓はれたといふのも、畢竟、此の不死の生命、即ち何時までも盡きぬ、ところの限り無き生命と、いふものと認めて、精神的壽命の永久に朽ちない、ことを確信せられたからで

ばならぬぞよとお釋迦様は仰せられたのであります。そこで、一旦因縁あつて親子となり、兄弟となり、夫婦となり、主従となつたならば、各々の本分を全うし、それ〴〵の職務を忠實に勵むといふ信念を以て萬事を行うてゆかなければならぬのであります。

永劫に滅びざる壽命

宗教、即ち佛教に於ていふ所の生命といふものは、更に一段永遠のものである。都べて物事には皆假と實といふ二つがあるもので、春の賑かなのも、秋の寂しいのも、これは皆一時の變化、假の相であります。春到つて百花繚亂と匂ふも、秋來つて滿山紅葉を彩るも、天地宇宙の大より見たならば、決して毫末も増減は無いので、即ち天地の實體の上には何の變りも無いのであります。お互ひが夜になれば寢衣に着更へて眠り、朝になれば股引を穿いて働くといふことも、精神の上に於て何等變りのあらうはずは無いのであります。此の道理から榮枯といふも盛衰といふも、乃至、生死といふも、亦た晝夜と同じ事であつて、眞箇の生命の上には何等の變化も無いのであります。

明治天皇は崩御あそばされてから既に六年を經ちましたけれども、其の御靈は儼然として猶ほ在すが如く、今後幾百千年の後までも、一層、我が國民の爲めに、其の御精神は光り輝いて朽ちたまはぬのであります。

て、僅に八歳ではありますが、早く兩親には死に別れて、六十以上の盲目の老婆と、五歳になる幼い妹と、自分の三人暮しで、實に可哀相な身の上ではありましたが、健氣にも獨力を以て三人の生計を助けやうといふので、芳雄は朝暗い中に納豆を賣つて歩き、それから學校に行き、歸つてくると新聞の夕刊を賣つて自活の道を立てゝゐました。が、それで學校の登校時間に一分でも遲れたといふことは無いので、一生懸命になつて勉强をする傍ら、幼い身を以て朝晩の激しい勞働をして居つたのであります。

遂に此の事が評判になつて東京府知事から賞狀を貰ひ、又、世間の多くの同情者から金品を惠まれて、四百何十圓といふ多額に及んだといふことでありますが、芳雄は決して此の大金を受けないで、そのまゝ區役所へ預つて貰ひ、矢張り納豆と新聞を賣りながら學校へ通ひ、老母と幼い妹とを劬はりつゝ、詑しい生活の中からも僅かづゝを貯へて、先頃、金十五圓を築地の本願寺へ納めて亡き兩親の菩提を弔ひ、追福の法要を營んだといふことであります。

そこで、斯かる少年があるといふのは學校としても無上の名譽であるといふので、其の表彰式の席上で、學校長は感涙にむせびながら少年芳雄の德を賞讚するといふことになつたのであります。如何に幼少の者であつても、精神的に人を感化するところの力の大きい時には、現在は勿論、遠く將來に及んで多くの人心を支配するに至るものであります。

此に人生の價値はあり、人の人たる所以の目的は存するのであるから、我々は無限の生命を作らなけれ

先頃、某所に夫婦の長壽者があつた。なんでも夫婦の年を合せると二百十年と八箇月になる。これほど芽出度ことはない。恐らく日本一でせう。夫が百八歳、妻が百二歳、結婚からでも八十年になるといふのですから、餘程稀らしい夫婦であります。けれども是れには限がある。一方の精神的壽命は、謂ゆる修養の如何に依て永久に限りがないのであります。

例へば楠正成公の如きは、僅に四十三歳で死なれたのであつて、私共よりもズット若く、肉體からいへば極めて短命でありました。しかし其の正成公が國家に盡されたる道德上の功績に至つては、五百年後の今日までも決して朽ちないのであります。

小楠公とても其の通りで、逆賊高師直の爲めに破られ、二十三歳の身を以て四條畷の露と消えられたけれども、今日、四條畷神社の神靈となつた正行公の精神は、千古に盡きないのであります。

近くは乃木將軍にしても、六十餘歳を以て先帝の御跡を趁ひ奉り、其の肉體は死なれても、精神だけは生前にも倍して、益々天下の人心に感化を與へられつゝあるのであります。此の如き大人物は特別のことゝして、我々一家の中に於ても、眞面目に人道を盡したならば、未來永久に其の精神は朽ちないのであります。況んや人の爲め世の中に盡したる無形の功績といふものは、何時まで經つても限りなく永遠に傳はるものであります。

新聞にも出たことでありますから御承知でもありませうが、本郷の眞砂町に土方芳雄といふ少年があつ

人生の要諦

壽命を增長すべし

人生の目的といふことに就て、釋迦牟尼如來が在家のものを中心として、お說きになつたものに優婆塞戒經といふのがある。そのお經の中に特に『發菩提心』卽ち人間が人間として全き一生を送るには菩提心を發して道德的精神に生きてゆかなければならぬことが說いてある。而して、それを全うするがための二つの要件が示されてゐる。それは一は增長壽命、二は增長諸財で、要するに人間は能ふかぎりこの世に永生をし、能ふ限り富貴にならなければならぬといふお諭しである。釋尊がこの二大要件をお示しなされたといふことは誠に面白い。

然し、人間の生命というても、單に肉體的壽命のみをいふのでなく、他に精神的壽命のあることを知つておかねばならぬ。徒らに肉體的にのみ偏して精神的の方を閑却されてゐたらば、それは矢張り增長壽

されたる公案の如き、之を眼中他に佛を見ざる向上の知見であるとのみ思うてはならぬ。是れぞ對境を超え古今を空じたる天上天下唯我獨尊の御佛に對する最高の大信仰である。佛樣は御佛壇にのみ在ますものと思ひ、堂塔伽藍にのみ在ますものと思うて居ては、眞に生命ある靈動的佛身を拜することは出來ぬ。吾々は誕生の聖日を迎うるに就ても、能く堅實なる大信念を養ひ、常在放光の活如來を拜し奉る樣にせねばならぬ。」

痴をも佛様に御任せする。つまり此の身も心も擧げて、佛様の大解脱と大智慧と大慈悲との中に投げ込で、氷解して了うのである。斯くする時は、唯だ嬉しさに涙こぼれて、法喜食・禪悦食が充滿して、得も言はれぬ大安心を得る。此の時、生氣潑溂たる御佛の光明が此の全身に輝き渉り、知らず〳〵、佛の大精神が、吾々の眼にも、耳にも、口にも、鼻にも、手にも、足にも、活動を起して下さる。『峯の色溪の響もみなゝがら釋迦牟尼佛の聲と姿と』といふ祖詠が體驗されるのである。

常在放光の活如來

釋尊の御誕生は實に是れ靈界の黎明である。釋尊は一化八十年、發心出家、降魔成道して大法輪を轉し、萬代不易の法寶を全世界に頒布したまふたのである。故に、吾々は此の御誕生の聖辰を迎うるに當りても、但だ三千年前の過去を憧憬するのみでは、決して法供養を盡したものとは申されぬ。宜しく釋尊の大精神を親參實究して、此の全身を佛光明の上に投ぜねばならぬ。太祖大師は『諸人卽ち是れ瞿曇の眼睛なり、瞿曇卽ち是れ諸人の全身なり』とも『ただ諸人の精進と不精進とにより、諸佛頭出頭沒せるのみなり、今日も頻りに辨道し仔細に通徹せば釋尊直に出世なり』とも仰せられた。吾々は是の如き見佛眼を開かねばならぬ。

禪門の高僧が『如何なるか佛』といふ問に對して、或は『麻三斤』と答へ、或は『汝は是れ誰ぞ』と示

まりて、是れ亦、心經を讀み、會歌を唱ひ、愛らしき手を合せ、各々笑を含んで御話しを聞て喜ぶ。その風情の清く氣高き、衲は去る二月十九日の大會に臨んで、覺えず歡喜の涙に咽んだことであつた。汐川師は、此等準備の爲め、毎夜二時間か三時間しか休息の暇がないが、嬉しうて〳〵て、少しも疲れを感ぜぬといふて居られた。

同地中山手通にて、曾てマッチ製造業を以て成功せられしといふ直木政之介翁の如きは、近年、觀世音菩薩を信仰して、毎日十句觀音經を讀誦するを日課として居る。翁は煙草が好きであるが、信仰の結果、煙草の節制を思立ち、一日卷煙草五本と定め、その五本を二つに切りて十本と爲し、是を一日の量とし、從前に比するに、日に二十錢宛節約せられる割合になる。是れも觀音樣の御蔭であるといふので、其の二十錢を觀音樣に御賽錢として上げる。一年には七十餘圓となる。翁は子福者で、當主三郎氏を始め、十一人の御子があつて皆な健在である。その十一人に多くの子供があるので、子と孫とで四五十人にもなる。それを呼び集めて、右の七十餘圓の御金を、觀音樣の御下りとして振舞を致されたりといふ。是れは、衲が、去る二月中、同家に招請せられし時の物語りで、節約の分を觀音樣に奉獻するといふに興味を感じたことである。吾々も此の筆法で信仰生活を致したいものである。

三度の御飯を戴くにも、一枚の着物を纏ふにも、常に君主と父母と社會と佛との四恩を感じ、此の全身心は佛樣に御供養するが宜い。疳癪持ちの者ならばその疳癪を佛樣に差上る。愚痴のある者ならば其の愚

であつた。生活費の乏しき爲め、自ら田畑の耕作に從事して家計を支へ、熱心に子女の教育に努められた。夫君常道氏は外出六年の久しきに亘つたが、瀧子は獨力家事を整へ、且又眞心を盡して其の姑に事へられた。姑の妹岸田氏が、寄食して居る内に重病に罹りしが、長い年月の間、少しも厭ふ心なく身を粉にして、病を看護し、且つ幼兒を愛育せられた。其の艱難苦勞は傍の見る目も哀れなりしが、瀧子は何等の不平も怨言も無く、責任を負うて之を勤め、自ら『父母の爲めとて今日も眞柴樵るつゞれの錦身に纏ひつゝ』と詠じて、寧ろ愉快に忍ばれしといふは、全く信仰力の致す所と謂はねばならぬ。

越後長岡市の禪學會員の如きは、茨木一如居士を始め多くは紳士の集合なるが、寒中、托鉢團を結び、約三十人の居士が風雪の中を托鉢誦經して市内を巡り、受くる所の金品を以て、救恤及び公益の資に充て、各員自ら其の行持を喜び、一は佛祖へ報恩の爲め、一は自己の修養の爲めにとて心から回向せらる。寒風骨に徹するの夕、氷雪を冒して鉢を托し、以て自ら三禪天の樂しみを感ぜられて居る。

神戸市春日野歡喜寺住職汐川泰仙師の發企創立に係る修養會の如きは、其の會員は何れも政治家・教育家・實業家等が大多數を占め、殊に、神戸の如き繁劇の巷に在りて、寸時をも惜む人々でありながら、萬障を排して講演の席に列なり、本年よりは毎會、同音に心經を讀誦して、佛教を聽問せられ、幹部の方方の如きは殆ど獻身的に盡力して、勞力を惜まず、出資を厭はず、最も眞面目なる信仰的修養に勵み、而も涙を流して歡喜して居られる。一昨年より開きたる修養子供會の如きは、月會通常會にても千名以上集

めにする學、卽ち修養學が甚だ不徹底で、唯だ博學多藝を事として、人の己れを知るが爲めにする學問・敎育が勢力を占めて居る樣に思はれる。

眞に民力を涵養するには、人心の根柢を道德的に訓練して、現在及び將來に於ける活動の根本力となるべく養成されねばならぬ。それには是非とも健全なる信仰心を敎養することが大事である。佛に對する信仰心が完全に養なはるれば、自然に佛の大解脫・大智慧・大慈悲の感化を蒙むるに依つて、自分自身に於ては其の境遇の如何に拘はらず、常に滿足心に充たされて、感謝の生活を送ることが出來る。之れと同時に、奉仕犧牲の精神が生ずるに依て、麗はしき道德觀念が養なはれます。

軍隊などでも此の點に注意せられて、滿洲守備隊の如きは兵士の御守札を調べられるさうである。靜岡縣藤枝町在の青島村の牧田米吉氏は篤信家にて、曾て十數年前に六度會を創立し、每月同志を集めて、佛敎講話を行うて居る。其の子が軍籍に入りて、昨年、滿洲に赴くに當り、靜岡市瑞光寺柴田普門師より觀世音菩薩の像を寫して貰ひ、衲に賛を乞はれければ、衲は五言四句の賛を題した。其の轉結が『念被觀音力、義勇報國恩』といふのであつた。御守り調べの際、之を出して係官に御目に懸けしに、大に感心せられた樣子でありしといふ。御守り調べは、其の人の宗敎心理を粗ぼ見ることが出來る、その宗敎心理に據りて、平素の信念や心懸けをも觀察することが出來ようと思ふ。

吉田松陰先生の母杉瀧子は、最も信仰に篤き人であつた。杉家に嫁して三男五女を擧げた。先生は二男

れて居ることを感ずれば、獨り安心立命を得るのみならず、公平にして私なき佛性の大慈悲心が現はれて其の心が君に對するの忠となり、親に對するの孝となり、兄弟間の友情となり、朋友間の信義となり、恭儉己れを持し、博愛衆に及ぼし、遂には世界人類をも抱擁し、天地萬物にも敬愛の念を生ずるに至る。信仰は實に慈悲の源泉、道德の基本と謂ふべきであります。

民力の涵養と信念

世界大戰の結果として、佛蘭西會議に於て國際聯盟が成立し、華盛頓會議に於て太平洋問題が解決せられ、四國協約及び軍備縮小の議が成立を告げたるは、世界平和の上に一新紀元を作られたので、最も祝すべきことではあるが、未だ以て永久平和の保障とは言はれぬ。纔かに平和の輪廓を造りたるに過ぎぬ。故に國家に於ける一切の事項は、依然として國家それ自身の努力に待たねばなりませぬ。是に於てか、民力の涵養、國力の培養といふことが一層其の必要を感ずる譯である。

然るに、今日、國家の表面に現はれつゝある各種の問題と事象とはどうであらうか、政界には綱紀問題が高唱せられ、社會にも色々の罪惡が續出して居る。民心弛緩を來し、内外の情勢の憂慮すべきもの少なからず、國家の前途を思へば、現代は實に國民の一大警戒を要すべき、大切なる時期であらうと思ふ。孔子は「古の學者は己れの爲めにす、今の學者は人の爲めにす」といはれたが、今日も己れの躬に行ふ爲

の大解脱・大智慧・大慈悲の尊きことを觀じ、虚心坦懷、深く菩提を欣求する時、了々として偉大なる佛の靈光を感得するものである。正智の現前は此の時にあるのであります。

又、吾々の情といふものは、盲目的に發動し易いもの、又、動もすれば偏頗に陥り易いものであるから、餘程注意して訓練に努めねばならぬ。情の中にて一番大切なるは愛情である。滿足も快樂も皆な愛情の產物である。愛情の中にて親子の情ほど神聖なものはない。故に、親が其の子に對する愛情を保留して之を萬事に應用し、子が其の親に對する眞情を任持して之を萬境に運用することが出來たならば、そこに佛の大恩德を我が身に發生することも出來るのである。釋尊は自ら『一切の衆生は皆な是れ吾が子なり』と仰せられ、又、吾々に諭して『佛子慈心を以て放生の業を行ぜよ、一切の男子是れ我が父、一切の女人是れ我が母、我れ生々之に依て生を受けざる無し、故に六道の衆生は皆な是れ我が父母なり』と仰せられた。斯かる觀念に住すれば其の言ふ所、行ふ所、自づから善美なる道德となつて顯はれ、男女間の愛情も神聖となり、同胞間の愛情も醇厚となるものである。

併し、人には我見もあり、欲念もあり、忿怒の情もあれば、愚痴の性もあるから、精神の奥底に確固たる土臺が無いと、雜念、順調に此の眞情を發揮することが難い。故に、佛の廣大無邊なる御慈恩に歸命して、常に感謝の念を捧げることが、精神調御の要訣である。此の全身心が佛の御慈悲に包まれ、佛の恩惠に抱か

何故であるか、是れは信仰の訓練が缺けて居る爲めではあるまいか。少くとも信仰の缺乏といふことが一原因を爲して居るに違ひない。先賢は智と愚とを四通りに分類して、智にして愚なる者、愚にして智なる者、愚にして愚なる者、智にして智なる者と言うてゐる。智にして愚なる者とは利口の馬鹿といふこと、卽ち、學問もあり、知識もありながら、品性劣等にして素行の正しからざる者、幾分人格の氣高き處あるも、此の種の人は何等かの場合には、不正手段を敢てするものである。愚にして智なる者とは馬鹿の利口といふこと、卽ち、學問もなく知識も低級であるが、心だち正直にして何人にも親切なる者である。愚にして愚なる者とは馬鹿の馬鹿といふこと、卽ち、學問も知識もない癖に惡い事ばかりたくらんで、常に不良の行爲を爲す者である。智にして智なる者とは利口の利口といふこと、卽ち、學問もあり知識もありて、而して、其の志ざし正しく其の行ひ潔白なる者である。今日、教育を施すのも、修養を勸むるのも、要するに此の利口の利口なる人を養成せんが爲めである。

然るに、世には、動もすれば利口の馬鹿に屬する人が少なからぬ。斯く申す私等の如きも、常に自ら守る所を怠たると、何時、馬鹿の御仲間に落込むかも知れぬ。油斷のならぬのは御互の心であるから、時々刻々に反省して、其の獨りを愼むことが肝要である。反省の第一義は信仰である。內に自ら深く佛の御力と御光と御救ひとに歸命し奉り、朝々佛を抱て起き、夜々佛を抱て眠る、寢ても寤ても佛に對する信仰心を護持せねばならぬ。佛の御姿が目に見えるとか見えぬとか、佛の御淨土が遠いとか近いとかいふこ

いつも天道さまが見てござるといふ心が去らぬ爲め、遂に人目を盗んで私するといふ氣にになれぬ」といはれたさうである。片山氏が、天道さまの照覽を畏れたといふは、矢張、一種の宗教的信念である。此の信念が自づから、私を制し、己れを伏し、非を戒しめ、惡を遠ざからしめた。卽ち斷德の基を開かせたのである。

楊震が『天知る、地知る、人知る、我知る』というて、自ら其の高節を守りたるも、孔子が『君子に三畏あり、天命を畏れ、大人を畏れ聖人の言を畏る』と言はれたるも、皆な此の宗教的信念の發露である。此の信念が益々發達すれば、遂に光明遍照十方世界といふ佛の大人格に接して、其の御照覽の下に、健全なる道德を斷行するの大勇が現はれて來るのである。

又、智慧にも色々の別がある。正智あり邪智あり、散慧あり狂慧あり、正智とは眞理に契當して自利々他の根源となるもの、邪智とは眞理に反して、自ら惑ひ且つ人を惑はしむるもの、散慧とは其の心が散亂して統一する力の無きもの、狂慧とは狂亂して其の智慧を濫用し、惡用するもの、吾々は專ら正智を啓發せねばならぬ。

正智を啓發するには其の根柢に、昧ますことの無い堅固なる信仰心が無ければならぬ。さもなければ、或は邪智に陷り、又ほ散慧・狂慧の仲間に入り易い。

現今は一般に知識が進步して居るが、動もすれば知識階級の人に依りて、種々の罪惡が生み出されるは

されば、吾々は常に自ら反省して、我慢の山に入らず、邪見の林に近かず、且つ五欲の泥裏に踏込まぬ樣にせねばならぬ。しかして、眞に能く佛の御精神に向つて堅實なる信仰心を發する時は、必ずや、佛の三徳の光明を我が身に感じて、自己本具の佛性が開發して、健全なる意志力、公明なる智識、醇厚なる恩情を實現することが出來る。

三徳の薫化

高島平三郎氏より聞たことであるが、氏の先輩たる醫學博士片山國嘉先生は、人格の氣高い品性の高潔なる點に於て、世の尊敬を受けて居られるさうである。或人が先生に向つて『先生は幼年時代から修養に努められたと聞て居るが、幼稚の頃に何か心に深き印象を刻みつけた事でも御記憶がありますか』と尋ねしに先生の答へに『私は六七歳位の頃、一老僕を連れて田園の間に遊びしに。美事に稻が實りて穗の垂れて居るのを見て、これを取らんとせしに、老僕が聲を懸けて、坊ちやん、、、坊ちやんそれを取つてはいけません、其の稻は他人樣の田地のでありますといふのであつた。その時私は、爺や一穗や二穗取つたつて誰れも見て居る人が無いぢやないかといひし時、老僕は、坊ちやん、、、坊ちやんそんな事を御しやるものぢやありません、あれ御覽なさい御天道さまがあんなに光つて居らつしやいますぞというた。私は此の語を聞し時、子供心にも非常に深く感ずると同時に、一穗でも取らうとした心根を耻かしく思うた。此の時の感じがいつ迄も繼續して

工合、頭のふり工合、眼の使ひ方、物の食べ方、所謂筋肉の運動が知らず〳〵似る様になる、顔ばかりでなく、立居振舞も自然と似て來るであらう。佛に對する信心も亦是の如く、佛の御力に手頼り、御光を仰ぎ、御救ひを喜ぶの結果、所謂觸光柔輭の理で、自然に佛樣に似て來る。即ち佛の三德が其の身に現はれて來るものである。

此の三德は強て吾々の精神内に注入するのではなく、吾々の心裡に具有する本然の德が其の能力を發揮するのである。即ち斷德は意志的訓練に成り、智德は智的敎練に現はれ、恩德は情的修養の結果で、古來言ふ所の智・仁・勇の三德といふは、取りも直さず佛の三德に相應する。此の三德に健全なる發達を促す者は信仰である。然れば、信仰心を養ふことは、智德發展の本にして人格向上の基である。

佛敎には三處不轉法輪といふことがある。佛の御說法の屆かぬ場所が三ヶ處ある。此の三ヶ處に住する者は信仰心を發することが出來ぬ。第一は我慢の高山、即ち我慳が強く、傲慢心盛んにして、他の敎訓も忠告も受入れぬ者には信仰心は起らぬ。第二は邪見の稠林である。邪見とは神佛を崇敬せず、因果の理を信ぜず、未來の觀念のない者、斯かる人々は自づと物質主義に偏するに依て、宗敎的信念は起り兼ねる。第三は五欲の淤泥、即ち色を貪ぼり、財に耽り、虛名に惑ひ、食欲に溺れ、怠慢に流れ、但だ自己一分の利益と享樂とのみを目的とする者である。斯かる種類の人は泥池の樣なもので、段々深入して足を拔くことが出來ぬに依て、中々信仰心を養ふ餘裕がない。

ひである。吾々は一心亂れざる正しき信仰の念を凝らして、佛の御力にすがり、佛の御光に照され、佛の御救ひに助けられる樣にせねばならぬ。此の信仰心の現はれた時は、我が身だの、我が心だの、我が欲望だのといふ物は總て消滅して、全くの無我になり切るのである。承陽大師は『いとふことなく慕ふこと無き、此の時始めて佛の心に入る、但し心をもてはかること莫れ、言葉をもて道ふこと莫れ、只だ我が身をも心をも放ち忘れて佛の家に投げ入れて、佛の方より行なはれて、之れに從がひもてゆく時、力をも入れず心をも費やさずして、生死を離れ佛となる』と仰せられた。正信心の人は是非とも此の境涯にならねばならぬ。此の場合には、最早、自力だの他力だのといふ境界はつけられぬ。感應道交、自他一如である。

世の人々の中には、禪の信仰は自力であると申されるそうぢやが、信仰の上には自力といふ樣な名稱はつけられぬ。頑是ない子供が母の溫かい德に抱かれて、安心して睡つて居る時の如きは、眞に無我の境致であつて、自力・他力などと判別せらるゝものではない。佛の御救ひに安心するのは、やがて佛の御力にすがり、佛の御光に照さるゝのである。赤子が、其の母に乳なき爲めに、乳母の手に育てられると、いつの間にか、其の子が乳母の顏に似て來るそうである。何故似て來るのであらう。乳を飲む爲めではあるまい。若し乳母の乳を呑む爲めに乳母に似るならば、牛の乳を呑む子は牛に似る筈である。是れは乳母の力にすがり、乳母のなさけを喜ぶ處から、自然に模倣性の致す所で、乳母に眞似るのである。口の動かし

や今日は向ふの岸に咲く』といふ樣に、常に方針もなく、目的もなく、一生涯、有耶無耶の間に彷徨ふことゝなる。次に、斷行とは實行の勇氣である。『陽氣發する處金石亦透る、精神一到何事か成らざらん』といふ勇氣を皷して、その當に作すべき事は、如何なる艱難を凌いでも斷々乎として之を實行したまふ。佛は此の斷德に依りて有ゆる束縛と苦悶とを離れて大彼岸の地に到達せられたので、是れ即ち佛の大解脫力であります。

第二の智德とは即ち智慧の德である。佛の智慧を般若と稱す。智とは決定の智識で、根本原則を究めて眞理を決定すること、慧とは其の智見が萬事萬物の上に應用自在たることである。一を根本智ともいひ、他を差別智ともいふ。宇宙の根元を究め、生死の實相を明らめ、因果の原則を證し、人生の歸趣を悟るが如きは根本智で、萬有諸法の相を究め、一切衆生の根機を鑑み、眞現を應用して千變萬化の作用を發するの智力が差別智である。

第三の恩德とは恩惠慈愛の德である。『佛心とは大慈悲是れなり』とあるが如く、佛の全身が慈悲の固まりである。『今此の三界は皆な是れ吾が有なり其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり』とは佛の大願心であらせられる。彌陀如來の四十八願といひ、釋尊の五百大願といひ、觀音菩薩・普賢菩薩の十大願の如きも皆な此の大慈悲心の發動である。

以上の三德の合成したのが佛の大精神であります。斷德は佛の御力、智德は佛の御光、恩德は佛の御救

神に悟入するのが禪の見性である。此の大精神は言語文字を以て之を示すことの出來るものではない。宜じく蒲團上に坐し端坐三昧に入て審細に工夫を下さねばならぬ。

佛陀の大精神

併し、第二義門に下つて修養の方面からいへば、釋尊の大精神は斷德・智德・恩德の三大德が合成したる功德體である。故に、吾々は一應その御德を領解して、從晝至夜、之れに倣ひ奉る樣にせねばならぬ。そこで、修養的に此の三德を説明して見ようと思ふ。

初めに斷德といふは佛の御勇氣である。斷には斷破と斷決と斷行との三通りの意味がある。斷破とは內外の惡魔を擊破るの力である。吾々の心中には私情・私慾等の煩惱妄念があつて本心を攪き亂す、又、外には天災地妖を始め、自然界にも人事上にも種々樣々の壓迫と脅威とがあつて、吾々の精神と境遇とを束縛する。凡そ人類は常に此の內外の魔障に苦しめられて、暫くも安心するの時期がない。佛敎では是を四苦八苦とも說て居る。佛は大神通の力を以て此等の惡魔を降伏して安穩快樂を得たまうたのである。大神通とは精神上の大威力である。釋尊は菩提樹下に在りて、無數の惡魔と鬪ひて悉く之を降伏し、而して後、無上正覺の位に上らせられたのである。次に、斷決とは善惡を判斷し、是非を決斷するの勇氣である。此の大勇氣が無いと、善を善としても之を行ふこと能はず、惡を惡としても之を止むる能はず、『浮草

吾れこそ見佛の先襯を着けんとの意氣込みで御迎へした。

ところが、蓮華色比丘尼が衆に先んじて釋尊の御側に近づき、如來の御姿を禮拜したので、その喜びは何に喩へん樣もなく、自分こそ世界一の幸福者であると思うた。然るに、釋尊は彼れに對せられて、一番先きに佛を拜したるは、汝に非ずして須菩提である。汝は第二位なるぞと仰せられた。然るに、須菩提尊者は其の場に居られなんだ。何處に居るかと尋ねしに、尊者は遙か離れたる巖窟の中に坐して、般若の理を思惟觀察して居られるのであつた。是れは餘程意味深長なる因緣である。釋尊は遠く離れて居る須菩提をば、何故に見佛の第一位と許されしか、要するに、須菩提尊者は釋尊の御精神を見得して居られたからである。蓮華色比丘尼は釋尊の御肉身を拜したるに過ぎざるを以て、見佛の第一人者とは許したまはなんだのである。此の佛の御精神は、決して時と與に變遷するものではない。所謂常在不滅である。故に金剛經には『若し色を以て我を見、音聲を以て我を求めば、此の人邪道を行うて、如來を見奉ること能はず』と仰せられてある。斯く仰せられたればとて、早や呑込みして有相の如來を否定してはならぬ。

さりながら、眞に見佛を得んと欲せば、先づ須らく釋尊の大精神を證見せねばならぬ。承陽大師は『謂ゆる諸佛とは釋迦牟尼佛なり釋迦牟尼佛是れ卽心是佛なり』と仰せられたるも、直下見佛の要訣を示されたのである。釋尊の大精神を證する時は、自づから三世諸佛の大慈悲光明にも觸れることが出來る。三世諸佛を拜する時、始めて此の心是れ佛なりといふ妙義にも通曉することが出來るであらう。釋尊の大精

第三の寶は實に我が佛教である。但だ佛教が德川氏治世三百年の間に於て、漸々に其の活力を失なひ、單に形式に拘泥し、若しくは葬祭儀禮を以て能事となし、其の說くところ時代を導くに適せず、其の行ふところ範を實生活の上に示すに足らず、僅かに佛教の一隅を死守するの觀があつたのである。尤も中には非凡なる大德も決して少なくはないが、多くは文化の發達、社會の進運に資することが甚だ不十分であつたのである。今や、佛教家も大に自覺し、世人の佛教に對する態度も變り、佛教の眞價を發揮すべき時代が到來したかと思はれて、非常に愉快を感ずると與に、切に佛教家の奮勵努力を希望するのである。

釋尊の御降誕を迎へ奉るに就ても、單に過去を追憶して其の偉德を欽慕するのみで無く、面たり直下に釋尊を相見し、所謂活きたる釋尊を拜み奉るべきである。活きたる釋尊を拜み奉るといふは、固より肉眼を以て之を見るの謂では無い。

昔、釋尊御在世の折、一夏九十日、忉利天宮に上りて、母君摩耶夫人の爲めに說法せられたことがある。此の一夏の間は、釋尊の御姿は此の世界の何處にも在まさなんだ。御弟子や信徒の景慕心は殆ど其の極に達し、彼の優塡王の如きは、戀しさの餘り、毘首羯磨に命じて等身の御肖像を刻ましめ、朝夕之れに奉仕せられた程であつた。其の後、彌々天宮を辭して御歸還といふことが知れたので、幾百千の道俗は我れ先きにと御迎へ申上げた。篤信者の習ひとして、彼等は釋尊を歡迎するに當り、一番先きに佛の御姿を拜し、一番先きに佛の御言葉を戴く者こそ、世界第一の幸福者であると思うた。そこで一同は競爭の體で、

國民教化の根本とせられたのである。故に、我が國の佛教は、國家を鎭護し、國民を教導するを以て宣教の大方針となし、皇室を中心として國民全體に普及せられた。爾來一千三百餘年、佛教が直接間接に我が國の人情風俗に資益すること實に偉大なるものであつた。然れば、我が國の佛教は、印度にも支那にも見ることの出來ぬ特徴がある。而して、其の教理は、高尙悠遠なる哲學的根據の上に、智德開發の法門を示せられたる宗教なるを以て、古今に通じて謬らず。中外に施して悖らざる世界的唯一無二の大宗教である。斯る大宗教を有するは全く我が國の誇りである。我が國の名譽である。

納は嘗て國家の三寶というて、我が國には無上の至寶が三つあることを説いたことがある。その三寶とは第一の寶は國體である。今上陛下御卽位の折の御詔勅に『義は卽ち君臣なりと雖も情は猶ほ父子の如く、以て萬邦無比の國體をなせり』と宣はせ給ひし如く、我が國の如き神聖にして尊嚴なる國體は、世界廣しと雖も他に其の比類を見ることは出來ぬ。

第二の寶は國民性である。卽ち此の國體の上に養成せられたる、皇室を中心とせる盡忠報國の精神である。我が國民の此の精神は普通の道德より一超して、既に宗教的素質を帶びて居る。卽ち偉大なる國民的信念の結晶である。日清・日露の戰役に大勝を博したるも全く此の精神力が最大原因となつて居る。然るに、近時、思想の動搖は動もすれば此の信念を薄弱ならしむるかの恐れ無き能はず、國民は各自に深く警戒して、此の精神的至寶を護持し、長養して、益々健全なる發達を遂げしめねばならぬ。

37

とせざるは無い。此の原則を確信してこそ歸依佛の功德も得られ、卽心是佛の宗旨も體驗せらるゝのである。故に釋尊の誕生祝日を迎うるに當り、此等の妙理を觀察したならば、此の誕生會に於ける甚深の意義も味はれ、吾々は實に一躍して佛界に轉生した程の樂しみを感ずるものであります。

直下に相見せよ

大聖釋尊の御降誕は、實に世界を照す光明の出現であるから、世界全人類を擧げて、永久に此の聖日を祝すべきである。殊に、大乘佛敎國たる我が日本國に於ては、宜しく國民祭として、最も神聖に、最も意義ある祝祭を執行する樣に致したきものである。近年、東京を始め、各地方には此の降誕日に於て花祭りを行なひ、年一年と盛況を呈するは非常に喜ばしき事である。尤も、古來から御誕生の祝祭として、各寺に於て花御堂を設け、中に誕生佛を安じ、甘茶、又は香湯を以て灌沐し奉り、各地とも夫々の習慣に基づきて御供養に及んで居る。中に就て我が曹洞宗に於ては、最も莊嚴なる儀式の下に御供養の佛事を營んで居るが、未だ國民的の祭儀とは認められぬ。

釋尊は印度に御生れではあるが、釋尊の聖敎は我が國に一番弘通して居る。我が國は全世界の中にて幾んど佛敎の中心となつて居る。佛敎が我が國に渡來してより一千五百年、御歷代の皇室は篤く御崇敬あらせたまひ、聖德太子御攝政の折に十七憲法を御制定になり、その第二條に於て、明らかに佛敎を以て日本

實に生々世々の恨事である。餘りに私の運命の拙きことを悲しむの餘り、覺えず落涙に及んだのであります』と申したそうであります。太子は是の如き狀況の下に御誕生遊ばされた。此の後の御事蹟は略して置きますが、御誕生當時の御樣子を拜しても、如何に圓滿神聖にして且つ平和の御生立ちであらせたまひしかゞ想像せらるゝではありませんか。

御誕生當時に於ける奇蹟を見て、之を神話的叙述とのみ思うてはなりませぬ。佛教を見るには佛教を見るの眼が無ければならぬ。苟も佛教眼を開いて之を見るならば、神話でも怪奇の說でも無い。その御事蹟の一々が、盡く宗教的大教訓であると同時に、釋尊の大精神の發露であります。釋尊が『天上天下唯我獨尊』と仰せられたは、釋尊が過去無數劫來の積功累德の結果として此の世に御誕生あらせたまうたので、全く『今此の三界は皆是れ吾が有なり其の中の衆生は悉く是れ吾が子なり』との大誓願力を現はし、全宇宙間の救世主として降生あらせられたのである。故に、天上天下唯一無等の大慈悲父にてあらせられるのであります。

されど、佛教は彼の基督教とは違ひ、人々箇々皆な釋尊たることを得べき本德を有して居るのであるから、釋尊は成道の最初に於て『一切衆生悉有佛性』と道破せられたのである。即ち『一切衆生は悉く天上天下唯我獨尊』ぞと仰せられたのである。是れが佛教の根本義で、吾々の信心も修行も皆な此の根本義に基くのである。修養の進展も、人格の向上も、永久の理想も、不動の安心も、悉く此の原則を出發點

35

足を禮して、偈を唱へて讃美せられたとある。全世界に比類なき大聖の出現、その德化は幾百千萬年の後に至るも盡くることあるべからず。然れば、御誕生の際には、天地も爲めに光り輝き、草木も芳香を添へ山川も瑞を現じ、四海萬民、悉く歡喜に充ちたことであらうと思ふ。それより群臣歡呼の中に御歸城になりて、百官の拜賀を受けさせられた。王子は何の御障りも無く、御生長あらせられ、御名も悉達太子と御命名あらせられたが、惜い哉、御母摩耶夫人は御誕生後七日に御薨去遊ばされたとある。

淨飯大王は印度の慣例に從うて、當時有名なる阿私陀仙に勅して、太子の相好を卜せしめられた。阿私陀仙は一種の靈感を具へて、卜相の如きは百發百中の妙を極めて居る。そこで、大王を始め官民共に、阿私陀仙の卜占如何んと待ち構へて居つた。阿私陀仙は沐浴齋戒、恭しく太子の相好を見て居りしが、忽ちに涙をはら〱と流して、自ら勝へざるが如き有樣であつた。さあ、一同の驚きは一方ならず、是れ必ず不祥の兆ありての爲めならんと、各々仙人に逼りて其の理由を尋ねたのである。其の時、阿私陀仙は涙を拂ひつゝ徐ろに答へて、『私の嘆きたるは、太子の不祥の相あるが爲めではありませぬ、太子は、古來曾て見ること能はざりし、圓滿なる相好を具足せられて居る。思ふに、太子は、御成長の後、必ず一切種智を成じて佛陀大覺の聖位に昇り、一切衆生を漏れなく御濟度あらせたまふこと疑ひなし、然るに、私は今年壽已に一百二十、命數を檢するに遠からずして此の世を去らねばなりませぬ、斯る最尊最貴の大聖出現の御世に在りながら、此の太子の成佛して御濟度の手を垂れたまふ時期まで、存命すること能はざるは、

中の卉木は花の眞盛りにて、和風芳香を送り、千紫萬紅、錦繡を織り出せし如き光景でありしかば、夫人は御機嫌殊に麗しく、徐ろに寶輦を出でゝ、四方の景色を御覽ぜられて居る中に、園內の大木無憂樹、華の色香鮮かに、枝葉の分布、珠を綴り玉を連ねたらんが如き美しさは何に喩へん樣もない。夫人は見とれるばかりに御眺めなされつゝ、覺えず蓮步を花の下へと移され、御頭の上まで垂れたる枝に、房々と咲き揃ひたる花の一枝を手折らんと思召し、靜かに右の御手を擧げさせられし時、忽然として王子が御降誕遊ばされた。其の時刻は恰も旭日昇天の頃であつた。

王子は不思議にも地上に御立ちになり、何人の扶持をも借らず、自ら步むこと七步、一指は天を指し、一手は地を指し、玉音朗らかに『天上天下唯我獨尊』と獅子吼あらせられた。因果經には『我れ一切天人の中に於て最尊最勝なり、無量の生死今に於て盡きたり』と仰せられたとある。此の時、天、奇瑞を降し、帝釋天王は手から寶蓋を執り、大梵天王は白拂を持して左右に侍立し、龍神は淸淨香水を灌いて王子の御身を沐浴し奉つたとある。此の外、無量無邊の奇特を現出せしことが諸經論の中に詳說してある。今も猶ほ花御堂を飾りて誕生佛を安置し、香水や甘茶を以て灌沐の儀を行ふのは此の奇瑞に倣うたものである。

此の時の母后及び百官・婇女等の驚きと喜びとは、果して何んなでありましたらう。瑞應經には、天地大に動き、天、衆の華を雨らし、百千の伎樂皷たずして自ら鳴り、諸天の形像其の本身を現じ、王子の

大聖佛陀の出現

大聖の出現

四月八日は實に我が本師釋迦牟尼如來御降誕の聖日である。釋尊は古今東西に比類なき無等々の大聖人であらせたまふ。釋尊御一代の御行蹟と、御説法遊ばされたる御法義とを拜し奉るに、正に是れ精神界の大勇者、學界の大光明、靈界の大醫王にてあらせたまふ。

御父は印度迦毘羅衛の淨飯大王、御母は正后摩耶夫人、御兩親ともに、聰明にして仁義の徳に富ませたまふた。摩耶夫人は、隣國たる天臂城の豪族善覺長者の御女である。長者に八人の女子ありしが、其の中で最も賢良の聞え高かりしといふ。姙娠を覺えられてより、一層、心を調へ行ひを正うして、聖兒の降誕を祈られたのである。

懷胎十月、長者の希望に依り、四月八日の早天に、夫人は多くの婇女・童女を從がへ、迦毘羅城を出で、藍毘尼の園へと行啓あらせられた。群臣百官亦之れに從がひ、其の行列は最も莊嚴を極めた。殊に、園

32

が宜い。總じて信念ある者は敬虔の情が深い。毎朝、神前に敬禮し、佛前に禮拜し、且つ祖先の靈前に禮を設け、神佛祖先の恩に感謝の意を表するを行事とすべきである。我國の神は　皇室の御祖先及び吾々臣民の先祖である。それから家内中相互に衆生恩を感じて、倶に共住する因緣を喜び、相共に扶助せんと心懸け、始終ニコ〳〵して親しみ和らぐ樣に心懸けなば、よしや陋屋蓬窓の下に居るとも、輝きに滿つる生活を得ることが出來るものである。是ぞ人生幸福の最大なるものであります。

常濟大師は『吾々の身心を大切にして之を放捨してはならぬ。人々が悉く道の器であるから、能々修養して道を守り德を修むれば、日々是れ好日で、一年三百六十日、一日としてめでたからぬ日とてはなきものぞ』と仰せられました。善を行ふに凶日なく、惡を作すに良辰なし、吉凶は心の善惡に依つて定まり、禍と福とは作業の良否によつて產み出される。故に吾々は常に脚下を照顧して、善心を養ひ、善事を樂むが宜い。徒らに年を擇び日を擇ぶことなどは、動もすれば迷信となる。丙午の年に生れた女を嫌ふなどといふことは、啻に謂れなき妄想であるのみならず、そんな迷信が一般の心理を支配する樣なことあらば、實に國家的の大問題である。

新潟縣宮內驛前に竹花屋と稱する大きな料理店がある。主人は星野寅次といひ、老齢八十三歳で、大正十三年に歿した。內室は八十三歳（昭和二年）で猶ほ健全に働いて居る。此の內室は丙午の生れであります。貧家に生れたさうだが、星野家に嫁してから、夫婦共稼ぎで家業を廣め、遂に堂々たる料理店を開き、而も夫婦共に信仰厚く、家は眞宗であつて、時々自分の家で法話會を開くので、いつも多數の參詣がある。私が一昨年立寄りし時などは殆ど數百人の參詣人があつた。家內中が和合し、正直を守り、親切を旨として常に慈悲を心懸けて居る。此の內室などは丙午の迷信打破の好標本だと思はれる。

御互の心の中に、堅實なる信念が植ゑ付けられて居れば、一切の惡魔も自然と退散するものである。日が惡いとか年廻りが惡いとかいふ事が氣にかゝるなら、一層信仰心を勵まして、佛心を自己心中に安する

駕籠から飛び出して和尚を拜し『どうぞ此の駕籠に乘つて私の宿所迄御出でを願ひたい』と申した時、和尚は『なに駕籠に乘れといふのか、俺はまだ駕籠に乘るやうな罪は造らぬわい』といふたとある。日本魂を有する吾々には、此れ程の見識もありたいと思ふ。又、位が高いとか、生活が優れて居るとか、學問があるとかいうて、傲然として人に接すること程醜いものはありませぬ。人の恩を受けて居りながら恩を忘るゝが如きは、自ら人間の位地を蹴飛ばして、畜生の群に飛込む樣なものです。

　そこで、お互は佛の御敎へを信じ、佛の御慈悲を悦びて、自ら和合神となりて、他の爭ひや嫉視合をも和らげ、機嫌能く働き、能く分限を諦めて不平なく不滿なく、他人の善を隨喜し、謙讓の德を守り、常に報恩謝德の觀念に住して、堪忍と正直と勉强とを土臺として、體力を强め、富力を增し、智力を進め、德力を養ひ、進んで慈悲の活動を樂みなば、其の人の居る處には必ず平和の風が通ひ、其の人の到る處には必ず快樂の門が開け、さうして、信仰の光りに浴して常に感謝と法悅とを感じ、禪定の光りを發して『一心生ぜざれば萬法咎なし』といふ境界に安住することが出來ます。

　承陽大師は信仰の喜びを『嬉しくも釋迦のみのりにあふひ草かけても外の道をふまめや』と詠ぜられ、禪定の妙用を『水鳥の行くもかへるも跡たへてされども道は忘れざりけり』と詠じたまうた。水鳥は水中を縱橫に走り廻るが、少しも足跡を留どめぬ。吾々も此の世に在りて不斷に活動しながら、露ほども妄想邪念の跡を留どめぬ樣にせねばならぬ。

と、不平ばかり起すこと、他人の善を妬むこと、空威張すること、恩を忘るゝこと等であります。不幸にして此等の群に伍せられた方は、自ら求めて暗黒に投じたので、そこには愉快もなく、幸福もなく、人間味もなく、宗教味もなく、全く此の世からなる三悪道であります。

そこで吾々は、先づ以て一家の平和を保ち、有産と無産とに拘らず、親子・夫婦・主従が和氣靄然として、相扶け相補ひ、相共に樂しむやうにせねばなりません。稼ぐに追付く貧乏なし、家内中が一致して職を勵み業に勤めますれば、必ず生活苦に打克つことが出來ます。萬一、不幸にして天災地變に逢ひ、病患死亡の厄あるとも、正直で親切で勉強家であれば、必ず天も人も佛も神も見棄てゝは置きませぬ。人各々其の分限の定まるあり、不運の境遇に在りとも、能く因縁と觀じ諦めて、正しき道に依りて、運命の開展を圖らねばなりませぬ。

妄りに人を恨み、世を恨み、社會を呪ふが如きは、却て開運の門戸を鎖づる樣なものです。『事足れば足るにまかせて事足らず足らで事足る身こそ安けれ』といふ觀念力がなければ、此の世の中には一日でも安心してゐる事は出來ませぬ。殊に、他人の出世や成功を妬む樣では、本當の活氣は起らぬものです。他人が如何に虚榮や誇示をしようが、豪奢振りを發揮しようが、そんな事は寧ろ氣の毒な者、可愛さうな者として見る程の見識が無ければなりませぬ。

乞食桃水和尚が、大津驛で小屋掛の中に居りし時、その門人が駕籠に乗りて通りながら和尚を見つけ、

柏の根木に化けて居られたが、實に不思議の妙術である。願くは私に其の術を授けられたし』僧は甚だ訝かりしが、やゝ心に感ずる所あり『よろしい、御授け致しませうが、先づ三年間程坐禪をなされ、そして柏樹子の話といふ公案を工夫せられよ、むかし、趙州禪師に、或僧が「如何なるか是れ祖師西來意」と問うた、達磨大師の御悟りを尋ねたのだ、時に趙州は「庭前の柏樹子」庭の前の柏の樹と答へた、柏の樹には妄想が無い、議論も無ければ、欲念も無い、その柏の樹になつて見るのだ』と委く敎へた。長四郎は元來、泥棒用の變幻術が得られる積りで、喜んで家に歸り、每晩、坐禪して「柏樹子柏樹子」と工夫したが、いつまで經つても柏の根木に化る術が手に入らぬ。が、然し、精神は次第に落著いて、今迄の妄想貪欲が消滅し、同時に、嗚呼今迄は惡かつた濟まない業をしたと、悔悟の淚を流すに至り、大懺悔の心を生じて賊心を飜へし、それより罪亡ぼしにと、全身を慈善事業に捧げることゝなつたといふ。

心淨らかなれば行ひ正しく、心靜かなれば德現るとは此の事であらう。然れば、信心に依りて佛の大慈悲に歸命し、禪定に依りて不動の三昧に安住す、此の二つは精神界の大光明であつて、此の二大光明に照されてこそ、前に述べたる三德も培養せられ、五大力も實現せらるゝのであります。

輝きに滿てる生活

世の中で最も憫れな事は、家内の不和合であること、怠けて生活に苦しむこと、妄りに社會を呪ふて、

大情の大人格者であらせたまふ。此の大人格者の大智力に歸し、大勇氣に手賴り、大慈悲に縋る、世に是れ程の安全地帶はない。世に是れ程の大理想境はないのであります。

次に禪定とは、坐禪して精神を落著け、呼吸を調へ、八風吹けども動ぜずといふ山の如き心力を錬り出す法門であります。元來、吾々の心には何物にも動かされぬ大なる力を有つて居ります。只それが訓錬されぬ爲めに輭弱になるのです。故に、先づ浮々した散亂し易い心を引緊めて一境に止住するのが三昧です。言ひ換れば、意識の全體に充實されたる注意作用である。此の三昧力を得て、次第に鍛錬し去る時は、如何なる處、如何なる時にも、其の心動かざること山の如しである。是れが所謂定力です。定力現成すれば、色聲香味觸法の六塵に穢されたる煩惱心は漸々消滅して、俯仰天地に恥ぢざる自性清淨心が現前します。此の自性清淨心は更に琢磨されて一大智慧光を顯現するのであります。何はさて置いても三昧力、卽ち定を磨き出すことが必要であります。

山岡鐵舟居士が能く話された事であるが、昔、駿河の國に領長の長四郎と稱する賊が居つた。此の男領が特別に長いので、人が領長と渾名したものである。或時、懷中の煖かさうな禪僧の後をつけて、其の僧の泊つた旅宿に投じ、夜半に賊を働かうと思うて其の僧の室内を窺ふと、臥具の中には僧の姿は見えず、怪しげな柏の木の根木のやうな物があつた。彼は大に驚き、てつきり此の僧の變幻術だと思ひ、俄かに其の術を覺えたいと思ひ、翌日、僧の後からついて行き、途中、人通りのなき處にて之を願うた『貴僧は昨夜、

ならば、吾々の心といふものは、物に對して變じ易く、事に當りて移り易く、始終散亂したがる性質のものであり、且つ知らず〳〵利己的に陷り易い癖があるからであります。古人も『我が心池水にこそ似たりけれ濁りすむこと定めなくして』と嘆き、明治天皇の御製にも『我れと我が心折々顧りみよ知らず〳〵も迷ふことあり』と御諭したまはりました。

されば、心のドン底に大磐石の如き土臺を作らねば安心は出來ませぬ。況して人間の力では、如何に聰明な人でも、現在一世の事しか判斷がつかぬものである。夢にも似たる世の中に、泡沫の如き身を以て、徒らに五欲六塵の奴となつて、はかなき月日を送るといふは、思へば憐れなる身といふべきである。神や佛の御目から御覽になれば、吾々の現在は實に暗路に迷うて居る樣な有樣です。此の暗路の暗を拂ふべき光明は、信仰と禪定との二つであると思ひます。

●●信仰とは佛の偉大なる御德に歸依すること、禪定とは心を靜めて不動の三昧に安住し、迷へる妄情を淨めて本心の光りを現はすことであります。佛とは解脫と慈悲との二德圓滿の御境界である。解脫といふは內心より發する煩惱の束縛と、外界より襲ひ來る境遇の束縛とより離脫して、精神的に大自在・大安心を得たまへる所の德で、此の德の中には廣大なる智慧と偉大なる勇氣とが備つて居る。つまり智力と意志力との最高圓滿に發達せられたるものである。慈悲といふのは一切の衆生を視ること吾子の如く、一人でも、衆生の中に、迷へる者、惱める者のある中は濟度の手を收めたまはないのである。斯く佛は大智・大勇・

次に誠實とは正直の德です。正直とは、內、其の道を守りて自ら欺くこと無く、外、直を以て人に接し欺くことなきを言ふのである。信心も正直の心が本です。『心だに誠の道に叶ひなば祈らずとても神や守らん』といふは、正直でありさへすれば信仰するに及ばぬといふ意味では無く、正直の心は神佛の心に一致する旨を詠じたのである。『正直の頭に神が宿るなら宿無し神がたんとあるらん』で、世の中には、中々嘘が行はれて居る。口先の嘘もあり、形の上の嘘もある。虛榮や虛飾も皆な嘘です。中でも言論・文章を以て道理なき嘘を宣傳し、社會人心を惑はすが如きは最も大なる罪惡であります。

次に精進とは正しき道を守りて其の職分に勉強することです。勉張は實に幸福の母、成功の本、快樂の源であります。勉めて怠らざれば能く貧に克つ。快樂は勉強に由つて得る所の賞典である。但し、勉強は愉快に且つ樂んで爲さねばなりませぬ。眞に能く職分を自覺し責任を重んずる人ならば、勉強せずには居られぬ筈です。以上の三德は、吾々が暫時も缺くべからざる大切なる德目であつて、前述の五力も、此の三德の運用によつて現はれ、家庭の偕樂も、社會の平和も、自家の安榮も、亦此の三德を基調として實現されるものであつて、此の三德は悉く佛の御心の現はれであります。

二種の光明

五力を增進し、三德を培養するには、二通の光明を假らねば本當の訓錬は出來まいと思ひます。なぜ

忍耐には三通りある。即ち寛忍と堅忍と信忍とである。寛忍とは寛容の度量あつて、妄りに腹を立てぬ事、古人も『其の心を大にして物を容れ、其の心を虛くして善を受け、其の心を平かにして事を論じ、其の心を潛めて理を觀じ、其の心を定めて變に應ずべし』というたが、人には必ず寛大にして餘裕あり雅懷ありて、妄りに怒らざる度量が無ければならぬ。些々たる事にも、顏色を變へて疳癪玉を破裂させる樣なことでは、自ら敵を作り恨みを結ぶ樣なものである。忿怒は暫時の狂氣にして、腹立ち紛れに思ひ懸けざる罪惡を犯すこともあります。

堅忍とは、艱難を凌ぎ勞苦を耐へて辛抱強きことです。堅忍は大なる力である。堅忍なき人は油の盡きたる燈心の如し。艱難は最善の敎師である。飢渇をも事とせず、寒暑をも物ともせざる勇氣ありてこそ成功の時は來るのである。

信忍とは信念に依りて怒りをも忍び、艱苦をも忍ぶのである。『若し賊ありて我身を斬りさいなむとも、心變せず口に惡言なく、却て其の賊に向うて慈悲心を起せよ』とは增一阿含經の佛說である。『忍耐は是れ菩提の正因なり、阿耨多羅三藐三菩提は是れ忍の果なり』とは優婆塞戒經の佛語である。我が身に缺點があり、宿業がありてこそ、他の爲めに辱しめらる、之を忍ぶは缺點を矯正する所以、又、宿業を果す所以である。且つ種々の苦痛を受くるは、寧ろ功を積み德を累ぬるの好機會であると觀念すれば、喜んで忍び、樂んで耐へることが出來る。是れ則ち信忍であります。

第五には慈悲の力です。慈悲は利他的行動の源泉であるから、つまり道德の擴張であります。己れを忘れ私を棄てゝ、家族・社會及び人類の爲めに幸福を增進し、苦惱を救濟すべく活動するのが慈悲の力であります。以上五種の力こそ、人の人たる道を全うする所以であつて、自分も幸福を得、他人にも幸福を與へ、その幸福は永久に盡くることはない。卽ち、未來永劫の大功德を成就するものです。

總じて、自利と利他とは決して相反するものではありませぬ。前の五力にしても、自分だけ體力が健全であつても、親や子が病身であつては、決して安心を得ることは出來ませぬ。自分だけが富を得ましても、社會全體が貧苦に惱んで居ては、決して安全を保つことは出來ませぬ。自分だけが智者であつても、一般が無智であつては、何等の興味をも感ぜられませぬ。自分だけが品行正しくしても、社會が不規律、無秩序であつては、決して道德を完成することは出來ませぬ。故に常に自他平等、法界利益の觀念に住して、體力の增進も、富力の發展も、智識の向上も、道德の進步も、是を家庭的・社會的・國家的・世界的に擴張せんと努むるのが慈悲の活動であります。

修養の三德

人生の苦惱壓迫に打勝つて前述の五大力を具備し、以て永遠の幸福を獲得するには、是非とも、三種の德を養はねばなりませぬ。三德とは忍耐と誠實と精進とであります。

康を保ちて、剛健なる體力を得ることであります。古人は「健康は金銀財寶に勝る、健康に比すべき富貴なし」というて居ります。

第二には富力です。即ち大に業務に勉強し、萬事に節約を守りて、生活の根柢を養ひ、進んで、業を興し産を治めて生活の向上を期するのである。個人の富は國家の富と一致すべきものであるから、國民の個人々々が富力を増進すれば、それがやがて國家の富力を伸張することになる。併し、若し國家觀念もなく義務觀念もなき者ならば、個人の富が却し國家の富を害するやうな結果ともなるから、富力の根柢には國民道徳が充實して居らねばなりませぬ。

第三には智力です。智識は文化の母です。科學でも、哲學でも、宗教でも、皆智識より生れたものであります。我が國民も、今後一層智識欲を高め、自己の職分を盡す上に、必要なる此の智識を先づ啓發せねばなりませぬ。

第四には徳力、即ち道徳の力です。道徳は人としての性格を作り出す根本的要素である。如何に富力に長じ智力に優るゝとも、道徳力が無ければ、人間としての性格を喪失することゝなります。現代人に最も貧弱なるものは徳の力であらうと思ふ。國民精神作興の御詔書にも『忠孝義勇の美を揚げ博愛共存の誼を篤うし』と仰せられたのは、徳力培養の基を御諭し下されたのである。忠孝・義勇・博愛・共存・此の八字を標的として徳性を養うたならば、富力も智力も必ずや是に由つて發達するものであります。

永遠の幸福

世の中に幸福を求めぬ者はありませんが、幸福を求むる所以を知る人は少ない様に思はれます。抑々幸福とは、一體、どんなものを指していふのでありませう。多くの人は御金があつて美しい衣服を着、甘い物を食して立派な家に住み、愉快に面白く世を送る人を幸福だと思うて居る様であるが、是れは決して眞の幸福とは言はれませぬ。是の如きは唯だ自分一個の本能を滿足せしむるだけであつて、人としての價値を認むることは出來ませぬ。縱し假りにそれが幸福であるとしても、ホンの一時の幸福であります。

金があつても永久に所有し得るといふ保證は出來ぬ。美服を纒ひ美味を食ひ壯麗なる邸宅に住むが如きは、一朝病に冒さるゝ時は、一として其の幸福を味ふことが出來ませぬ。面白く、可笑く、愉快に其の日〳〵を送るとしても、人生七十古來稀れなり、短い浮世に果敢ない榮華です。古人の語に『食色は性なり』とある。食欲と情欲とは人間の本能で、美服を好み豐屋を好むも亦人の天性です。故に、自己一分の快樂を得て之に滿足するが如きは、所謂『本能の滿足』を以て足れりとするもので、他の動物と何等選ぶ所はありませぬ。動物的なる滿足は決して幸福とは言はれませぬ。眞の幸福といふものは人の人たる道を修めて、人としての生活を全うすることであります。

人としての生活を全うするには、五の力が必要であります。その第一は體力です。即ち衞生を重んじ健

善事を行ひ、人道を全うして、運命の轉換を圖り、より好き生活に進むべく努力すべきである。

因緣は固定的のものではない。吾々の行爲に依りて時々刻々に變轉するものであるから、因緣に依りて富貴の身を受けたる者でも、怠惰放逸に流るれば貧賤の境に墮落する。貧賤の身を受けたる者でも功を積み德を累ぬれば富貴の身にもなれます。殊に、現在の人生はまだ進步の途中に在るもので、言はゞ未成品であるから、吾々は自己の生活ばかりでなく、此の國家、此の社會をも改善し進展すべく努力せねばならぬ。

人生は苦難多きものと覺悟すれば、如何なる苦惱を受くるとも、決して狼狽もせず煩悶もせぬ。加之、此の苦惱こそ却て吾々の志氣を勵まし、道業を勸め、向上の一路を開展して吳れるものである。故に古人は『艱難は汝を玉にす』とも『艱難に優れる敎育なし』ともいうて居る。三世の諸佛も、各宗の高僧碩德も、皆な艱難苦勞の中より出現せられた。聖人君子も英雄豪傑も悉く艱難の產物である。

されば吾々は、人生を苦界と觀じながらも、而も斷じて人生を悲觀せず、又、縱ひ比較的幸福なる位地に在るとも、決して樂觀して現狀に滿足せず、悲觀にも偏せず、樂觀にも偏せず、逆境に處しては益々勇を鼓して運命の開拓に努め、順境に在りては彌々心を攝め行ひを愼みて、向上の一路を辿り、悲觀と樂觀とに偏しない中道を獨步して、勇猛精進するのが、最も健全なる人生觀であります。

古歌にも『春は花咲きては散りぬ秋の月滿ちてはかけぬあな憂しの世や』とも『思ふこと一つ叶へばまた二つ三つ四つ五つむづかしの世や』とも詠じてある。是れが爲めに、或は怒り、或は恨み、或は貪り、或は悲み、一年三百六十五日、多くは煩悶苦惱の中に七顚八倒して居る樣なものである。此の苦痛を脫せんとして種々の事件を惹起し、或は鬪爭を演じたり、或は紛議を起したり、或は神經衰弱に陷つたり、中には境遇の壓迫に堪へ得ずして、精神病者となる者すらある。道德觀念の乏しき者や、宗敎信念の貧き者などは、邪道に墮ちて法律を犯し、正義に背きて社會を毒する者すらあるのである。

古來より、東洋にも、西洋にも、人生に對して悲觀する者と樂觀する者とがある。悲觀する者は貧賤窮乏の人に多く、樂觀する者は富貴榮達の人に多い。大概は自分の地位と境遇とを基點として、人生を觀察するものであるから、必ずしも正鵠を得たものとは承認し難いのである。だが前にも述べた通り、四苦八苦の娑婆であるから、此の人生を苦痛の多きものと覺悟して置くが宜いと思ふ。なぜ苦痛が多いかといふと、それは宿業、卽ち過去に惡業が多かつたからである。

此の善惡業報の說は、此所で委く說明するの餘裕が無いから略して置くが、兎に角、此の苦惱はみな宿世の因緣の致す所と覺悟すべきである。さればというて、貧富貴賤みな定まれる因緣であると諦らめて、單なる諦め主義に墮在しては、是れ自ら劃る者で、釋尊も此等の者を因緣外道だと誡められてある。故に吾々は現在の境遇や苦惱に對しては、宿緣の存する所以と諦めると同時に、益々智識を磨き、德行を修め

輝きに滿てる生活

健全なる人生觀

元來、人生は苦樂相半し禍福相倚るものである。幸福な人であるとか、不運な人であるとかいふのも、みな比較上の判斷であつて、其の實は、苦もあり樂みもあり、福もあり禍もあるのが、人生の上に現はれたる事實である。されば、如何に幸福な人にも必ず多少の苦患があり、如何なる不運な人にも亦必ず相當な樂みがあるものです。併し、一般人類の上から見ると、寧ろ苦患の方が却て多い樣に思はれます。故に佛教に於ては『四苦八苦の世界』と說いてある。四苦とは生・老・病・死の四である。八苦とは四苦の上に、更に四苦を加へたもので、その四苦とは、一に愛別離苦、是は愛する者と生別れ、又は死別れする事。二に怨憎會苦、己れの心に反する人と相會ふこと、所謂敵同士の廻り合ひの類。三に求不得苦、希望を滿足することの出來ぬ苦み。四に五陰盛苦、五陰とは此の身である。此の身が此の世に活きて行く上に起る種々の惱みである。此の四苦八苦は量の多少こそあれ、どんな人でも免ることは出來ぬ。

堂々と大行を修してゐることを、徹底信受することが出來た。自分自身が、人間として、また佛子としての大行を修して暗ます所なき境地に到達し得ただけだと仰せになつたのである。

佛法は行持である。識見でない、言句でない。禪門で、師家が學人を導く時に、『汝言ふことは言ひ得たり、禮拜して退け』といふことをいふ。言ふことはそれでいゝが、行ひが至つてゐない。行ひをお留守にしては佛法でない。愚圖々々してゐるな、そら禮拜をせぬか、師の前にあつては禮拜をする、それが佛法ではないか、禮拜をするところ、行持をなすところ、そこに佛法がある、そこに法味がある、この佛法を求めよ、この法味を愛樂せよ、と直示されるのである。

禪僧が禮拜する所に法味を飽滿するが如く、農業に從事する人は鋤鍬を執る所に法味が味はれ、工業に從事する人は鑿・鉋を動かす所に法味が味はれ、商業に從事する人は算盤をはじく所に法味が味はれるのである。各人各樣に日常の營みを行ひゆくその上に、七福も得られ、法味も味はれることを、信受し行取して、一擧一動を輕忽にしないことを肝要と致さなければならぬ。

『性に任ずれば道に合し、逍遙として惱を絶す』、甲は甲、乙は乙、その本分に安住して、精進努力、勤儉力行する所に、佛道は現成し、佛法は體得せられて、歡喜身心にあふれ、すべての苦惱は立ろに消滅して、安穩快樂、微妙不可思議の理想境が直下に建設されるのである。

『佛法は人々の脚跟下』である。法味愛樂の至誠があつて、その平生を暗まさないならば、法味は隨時隨處に味はれる。

平生を暗まさないで、心志操行を實着にする、これが佛教徒の標語であらねばならぬ。我が禪門に於て、識見の高邁なるよりも、行持の綿密なるを貴ぶは、これがためである。

高祖大師が日本に於いて初めて、禪法を開演あらせられた時の語に、『山僧、叢林を歷ること多からず、等閑に天童先師に見えて、當下に眼横鼻直なることを認得して、人に瞞ぜられず、便ち空手にして鄕に歸る、所以に一毫の佛法無し、任運且く時を延ぶ、朝々日は東より出で、夜夜月は西に沈む、雲收まりて山骨露はれ、雨過ぎて四山低し、畢竟如何、良久しうして曰く、三年一閏に逢ひ、鷄五更に向つて啼く』とある。

高祖大師の識見が高遠でないといふのではない。高祖大師は、實に古今稀に見る所の大識見をもたせられたことはこの語にも明かであるが、その大識見以上に、大師は、大行持を重んぜさせられた方であることが、この語によつて窺はれる。

支那でも精進した。天童先師にもまみえて修行したが、別段、何一つ求め得て來たのでもない。素手で還つて來たのだ。が然し、日は毎朝東から出る。月は夜夜西に沈む、三年に一度閏があり、鷄は曉の空に向つて啼く、天地法界、森々羅列の萬象は、いづれもその本面目を失はず、足もとを暗まさないで、

涅槃經には『一切衆生、同じく佛性あつて、本來解脱す、良に心に執著を生ずるによつて、妄りに自ら轉倒して、諸の纏縛を受く』とある。

執著し屈托する所に、間違ひが起る。太祖大師の慈訓に『念起これ病、繼がざるこれ藥』わづかに思量に渉れば、白雲萬里』とある。色々と氣をまはし心をひねる所に間違ひが生ずる。前後截斷、スパリ〳〵事を決し物を裁ばいて、屈托なく、明鏡のよく物を映して染著せず、佳人來らば佳人を映し、醜夫來らば醜夫を映すが如くであるならば、間違ひは起らない。間違ひが起らないのみでない、そこには微妙不可思議の法味が味はれ、歡喜が湧く。

信受奉行作禮而去

我等は佛法を求めてゐる。法味に飽滿せんことを冀うてゐる。これは實に奇特のことゝいふべきであるが、これを求むるに、遠きに求めてはならぬ。

『道は邇きにあり、却つてこれを遠きに求む、事は易きにあり、却つてこれを難きに求む』と古人も誡めてゐる。

『春百花有り秋月有り、夏涼風有り冬雪有り、若し閑事の心頭に掛かる無くんば、便ち是れ人間の好時節』くだらぬことに心をまはし、氣に病むために事々物々の上に豊かに具はつてゐる法味が味はれない。

牢乎した白象に乘つてゐられる。文殊菩薩は智に於て缺くる所なき菩薩で、悧巧な獅子に乘つてゐられる。

善財童子は、世の福壽で滿足せずして、佛法を求め、佛法を聞くに滿足せずして、佛法を體得し、行取するに至つて、安心決定したのである。

善財童子のこの一條は、我等の深く味ふべき所である。但し透徹したる佛法眼を開いて見れば、七福は悉く佛法である。七福一々が佛德である。一天四海皆歸妙法、佛法佛德にあらざるものは一つもない。

心學の泰斗である中澤道二翁の話に、道二翁の家は日蓮宗の檀家であつたので『一天四海、皆歸妙法』といふ文字は、幼い時から聞いてゐたが、その意味は分らぬ。檀那寺のお小僧さんに尋ねても分らぬ。偶々通り合せた禪僧が、妙法の話をしてゐる。聞けば等持院に東嶺和尚の說法があるから行くのだといふ。道二翁もそれに從つて等持院に行き、東嶺和尚の說法を聽聞した。時まさに極寒、集つてゐる人々の中には、寒さが氣になつて、佛法を味はうともせぬものがあつた。東嶺和尚これを知つて大喝一聲、『妙法の中にあつて妙法を知らず、寒熱に屈托して、妙法の味を了得せざる無道心、出で去れ』と怒號せられた。道二翁これを聞いて、妙法の味が分つて來た。一天四海皆歸妙法の的意が分つたといふ。

釋尊は大悟の曉『奇なるかな、奇なるかな、一切衆生、如來の智慧德相を具す』と仰せ下された。我等は佛子として、佛の智慧德相を本來具有してゐるのであるが、それを知らずにゐる。

と、有福と、人望と、清廉と、愛敬と、威光と、大量とが特に肝要であるといふので、これを七福といひ、七福神に表徴して、萬物皆改まる正月に於て、特にこれをまつるの風をなし來つたものである。

七福神を勸請し、これをまつることを、舊來の陋習の如く考へ、その美風を捨てゝ顧みない人もある樣であるが、心なきことである。

福城の長者子

人が世に處する上に、七福の大事であることは、右述ぶる所の如くである。日に進み、日に新に、國運を伸張し、家運を興隆し、一身を向上せしめるに於て、一時半時も缺くべからざるは、この七福である。が然し、この七福を、單に七福として、これを愛樂してゐるに止まるならば、未だ眞に明達の大丈夫とはいはれない。

佛教の秘奧を盡したといはれる華嚴經に、善財童子の物語がある。福城といふ都市に大長者があつて五百人の子息があつた。その中の善財といふ子は、非常に宗教心が厚く、世の福壽では滿足しない。宗教界の先輩について種々と教を求め、次から次へ行脚して、五十三人といふ澤山の大善知識に法を求めた。求め求めて最後に、普賢菩薩に法を聞いて、安心決定することを得たといふ。

普賢菩薩は文殊菩薩と並べ稱せられる方である。普賢菩薩は行に於て缺くる所なき菩薩で、足どりの

の』心の魔軍を退治することが肝腎である。
毘沙門に歸依し、毘沙門の威光によつて、內外の魔軍を退治する工夫がなければ、人間として生き甲斐のある人生は送られない。

布袋は支那の禪僧で、大變に肥つた人、顏がつまつて腹が大きく、大きな布袋をかつぎて都鄙を徘徊し、小供等と面白く遊んで、嘻々として笑ひ戲れるといふ和尙であつた。

布袋の讃に『心ひろく腹をたてずに睦まじく家內和合の人を守らん』といふのがある。布袋は腹の大きい心の廣い、いつもかもニコ〳〵して機嫌のいゝ人である。

世に處するには、布袋の如き大量がなければならぬ。高祖大師の慈誨に『その心を大山にし、その心を大海にせよ』とある。明治天皇の御製にも『あさみどり澄みわたりたる大空の廣きを己が心ともがな』とある。寬容は人の美德である。度量を大きくして、布袋の如くに、いつも〳〵ニコ〳〵として、世にありたい。

天海僧正が、七福の中へ、この大量を數へ、布袋和尙によつて標幟せられたのは、誠に道理あることである。

佛は萬德を總て圓滿に成就あらせたまうてある。佛子を以て任ずる我等が、萬德の中の七福をだけ取り出して、これだけを重んずればそれでいゝといふ譯はないが、世間道に於ては、實際社會に於ては、壽命

が多い。

商賣の神として、聖德太子が、惠比須をまつらしめられたのは有り難い。商賣を行ふ人の漸く多からんとする德川の初代に、天海僧正が、淸廉の神として惠比須をまつらしめたのは卓見である。

辨財天は、優美なる容姿の神佛である。頭の寶冠には白蛇がゐる。この蛇を宇賀神といひ、辨財天女經には『宇賀神を輕んずること勿れ、西方淨土には無量壽佛といひ、娑婆世界には如意輪觀音と稱し、正しく生身は、日輪の中に居して四天下の闇を照し、吒枳尼天の形を現はして福壽を施し、大聖天と現はれて二世の障難を拂ひ、愛染明王の形を以て、愛敬を授け、佛果に至らしむ』とある。

蓋し、愛敬とは顏貌容姿の優美をのみいふのでない。慈悲柔軟の心、外に現はるゝとき、小兒をも懷け猛獸をも和ぐる愛敬となるのである。

天海僧正が、愛敬を七福の一に數へ、辨財天によつて、その德が表徵されてゐるとなされたことは、所以あることである。

毘沙門は、金の甲を被り、左手には寶塔、右手には寶珠、足には羅刹毘闍舍鬼を踏んでゐる。金の甲によつて魔軍の襲來を防ぎ、左手の寶塔には八萬四千の經文を入れ、右手の寶珠には無量の財寶をおさめ以て衆生を利益するのである。

魔にも種々あるが、心の魔が一番恐ろしい。『なさへたと思ふ下からはねかへる油斷のならぬ我はつよ

更にまた、生命長き人であらねばならぬ。人は長命でなければ、功を全うせぬ。若くて人望を得る人もあるが、常軌よりいへば、相當の年齢に達しなくては人が相手にしない。無能無德の人である樣に見えても年長者となれば、人に立てられることのあるのは當に然るべきことである。

常に幸福觀を抱き、獨立の生計をたて、壽命がある、これくらゐ結構なことはない。斯る人が、人望を得ないといふことは決してない。この福と祿と壽を全うする人、これを人望の神とし仰いで、世人にまつらしめた天海僧正の明には感服せざるを得ぬ。

惠比須は、傳說によれば、神代に於けるイザナギ・イザナミの二柱の神の第三子で、蛭兒尊と申す方である。一說には天津日高穗々手見尊であるともいひ、また、一說には事代主命神だともいふ。

聖德太子は推古天皇の九年三月、市場を開いて物品を賣買することを勸められた。而して、その市場には、惠比須をまつれと仰せられ、十月にはまた惠比須講といつて、この神の祭を行はしめられた。

惠比須は淸廉の神。正當の理由なくしては、釐毫と雖も、これを受けぬ。その心事の淸淨廉潔なることは何ものにも例へ樣がない。『その義にあらず、その道にあらざるや、これに祿するに天下を以てすとも顧みず』といふ方である。

人は欲望のために道を過る。不義にしてでも、富み且貴からんとするが人心である。『慾深き人の心と降る雪は積るにつけて道を忘るゝ』といふのが普通である。殊に營利事業を行ふ人、商賣をする人にはこれ

心一意に精進し努力すれば、どんなことでも成就される、何物をでも得ることが出來るといふのである。であるから古人は『我が槌は寶打ち出す槌でなしナマクラもの〻頭打つ槌』と、大黒天に代つて我等に誡を垂れてゐる。

天海僧正が、有福を欲するもの〻ために、大黒天を拜せしめ、他の人々の榮譽や富貴に頓著せず、專心一意、自己の本分を全うすることに精進せしめ、すべての福樂は精進より湧き出づるぞと敎へたのは、大に意義があるといはなければならぬ。

福祿壽は、壽老人に似た方である。然し杖もつかず、鹿もつれてゐない。『頭の長さ三尺、頭と體とその長さ殆ど同じく、眼秀で〻髯多し』といふ様に書いてある。

この福祿壽を、天海僧正が、人望の神となしたのは、人が世に處して常に幸福觀を抱き、應分の祿を得て、而も生命長ければ、必ず人に尊重されることを示したものである。

受け難き人身を受け、生れ難き日本の國に生れ、逢ひ難き佛法に逢うてゐる。この幸福を喜んでゐる人でなければ、人の尊重を受けることは出來ぬ。世を厭ひ呪うてゐる様なことでは、人から疎んぜられこそすれ、尊重されることなどは斷じてない。

人の尊重を受ける所以は啻にそれのみでない、自ら生計をたてる人、釋尊の所謂『清淨にして自活する』人でなければならぬ。祿のある人でなければならぬ。

をば常に程よく動かすがよき』などいふはこゝである。

大黒天は、印度の語では摩訶迦羅といふ。印度の大寺院には、庫裡に必ずおまつりしてある。一說に日本の大國主命だともいふが、大國と大黒と音が通ずる所から、さういふ說が出たのであらう。

大黒天の相好について、曾呂利新左衛門が、德川家康に話したことがある。『大黒天を世の人々が、福の神としてまつつて、利益を被る譯は、この神は大きな頭巾を被つてゐられるからである。これは上を見るなといふ表徴である。上を見ず、奢を制し、能くその分に安んぜば、幸福おのづから來るべし、これ大黒天をまつる人々の幸福を得る所以である』と。家康はこれを聞いて、『五字七字の訣』といふことがある、そこだといつて讃歎されたといふ。

五字七字の訣とは、五字は『うへなみそ』七字は『みのほどを知れ』である。古歌に『上な見そ身のほどを知れ人並に有るべきやうに時に隨へ』といふが如く、上を見ず、その分を守つて、而も怠る所がなければ、幸福は期せずとも來る。

大黒天は、手に打出の小槌を有つてゐる。冀ふものゝ心にまかせ、何をでもこの小槌から打ち出して與へる。米が欲しいものには米を、金の欲しいものには金を、何をでも打ち出す。然しこれは大黒天に祈願をこめさへすれば、それで欲しいものが直ぐ得られるといふのでない。他所事を考へず本分を守つて、專

傳へる所によると、徳川家康が、天海僧正に、國を富まし家を榮えしめる法を問はれたことがある。その時に、僧正は『仁王護國經』の『七難卽滅、七福卽生、人民安樂、帝王歡喜』の言句を引いて詳說をなし、謂ふ所の七福とは壽命・有福・人望・清廉・愛敬・威光・大量の七德であるといひ、この七德を各々それぞれに體現ましましてゐるのが、壽老人・大黑天・等の七柱の神佛であると述べられた。これが抑々七福神が世に尊崇されることになつた發端であるといふ。

　七福神の戸籍を調べて見ると、大黑天と辨財天と毘沙門との三柱は印度の神佛、壽老人と福祿壽と布袋との三體は支那の神佛、惠比須は日本の神佛である。印度・支那・日本三ヶ國の福の神を一會に勸請し、今日七福を我等の身心に體得する標幟とされて來てゐることは、ひとり天海僧正の偉大さを示すばかりでなく、日本國民の特有する最も偉大なる力を示す所以のものである。

　古今の畫家の筆になる七福神の畫像を見るに、壽老人は、一軸の卷物を結びつけた杖をもち、優しい鹿をつれた老人である。卷物には人間の壽命についてのことが書いてある。鹿は長壽をたもち、千年にして蒼鹿となり、更に百年を經て白鹿となり、更に五百年を經て玄鹿となる。人は玄鹿の肉を食せば、二千年の壽命をたもつことが出來るのだといふ。

　この壽老人を勸請し來つて、天海僧正はいふ。鹿の柔順にして恬淡、『飢ゑては藥餌を尋ね、渴しては靈泉を飮み一て滿足し、心を廣くしてこせつかぬことを見よ。人間の日常が、若し斯くの如くであるなら

朝鮮の文化、南洋の文化、乃至、歐米の文化、どれもこれも、すべて、これを取り入れて能く消化し、以て日に進み日に新に、發揚し開展しもてゆく所の偉大なる力を有つてゐる。これが我が國民の根强き力である。この力を失つてはならぬ。

正月には、緣起を貴んで寶船をかざる。七福神の話をする。夢にも見、話にも聞かうとする、この七福神にしても、これは印度・支那・日本三國の、めでたき神佛を一座しまゐらせたもの、福の神の合同船である。すべてを取り入れて消化し、これを國民進展の上に差向ける所の偉大なる我が國民の力が、七福神を一座に請じまつつたのである。

七福神の勸請

七福神とは、壽老人・大黑天・福祿壽・惠比須・辨財天・毘沙門・布袋・この七體をいふので、我等が夜も晝も忘れることの出來ない福壽の表徴たる神佛である。

七福神を御一座に請じまつることを、我等日本國民に敎へた人は弘法大師であるといひ、また、一說では天海僧正であるといふ。どちらであるにしても、共に偉大なる力の所有者で、あらゆるものを取り入れて消化し、日本帝國の進展、日本國民の向上に異常なる貢獻を致された方々であるから、このことも致されたであらうと思はれる。

化の集合地たるの觀をなしてゐることを述べさせられて、これは長を採り短を捨て、中正穩健、完全圓滿なる理想的文化を建設する上に、誠に喜ばしい次第であると仰せたまひ、更に

我が國の國是は、日に進むに在り、日に新にするに在り、而して博く中外の史に徵し、審かに得失の迹に鑒み、進むや其の序に循ひ、新にするや其の中を執る、是れ深く心を用ふべき所なり

と示し下されてある。誠に畏れ多いことながら、これは高大深遠なる御明訓である。

『日に進むにあり、日に新にするに在り』、愚圖愚圖してゐては生命が縮まる。流るゝ水は腐らぬが、停頓遲滯はすべての生命を壓縮する。

『苟に日に新なり、日に日に新にして、日に新なり』、絶えず新生面を開拓し、勇往邁進するところには、國家の隆昌があり、家庭の和樂があり、個人の榮達がある。

但し、御詔書に明示あらせたまふが如く、日に進み日に新にしもてゆくに就ては、『博く中外の史に徵し審かに得失の迹に鑒み』る事が大事である。東西古今の歷史に徵し、古聖先賢の行履に鑒み、以て利害得失のあるところを辨へ知らねばならぬ。歐米のものとさへいへば、一も二もなく貴いもの價値あるものと考へ、東洋のもの、在來のものといへば、何もかも陳腐とし舊套として顧みない傾きのあるのは深く誡むべきである。

我が帝國の國民は、すべての文化を取り入れる。印度の文化も取り入れた、支那の文化も取り入れた、

今上陛下の御詔書

我が日本帝國の國民が、どんな生活を營んでゐるか、毎日毎夜、何を考へ何を行うてゐるか、國民思想が果して健實に成育してゐるか、物質生活が果して順調に開展してゐるか如何か、國民が利害得失を異にして反目嫉視してゐる樣なことはありはせぬか、共存共榮の大目的を忘れて目前の私利私欲にのみ囚はれて居りはせぬか、この點、大に考慮を要するものがあることを、今上陛下には深く憂慮あらせたまうて、聖上として正殿に出御あらせられた最初の日に詔書を發せられて

晩近世態、漸く以て推移し、思想は動もすれば、趣舍相異るあり、經濟は時に利害同じからざるあり、此れ宜く眼を國家の大局に著け、擧國一體、共存共榮を之れ圖り、國本を不拔に培ひ、民族を無彊に蕃くし、以て維新の宏謨を顯揚せんことを懋むべし

と御諭をたまひ、更に我が帝國には全世界の學術や技藝や、思想・風俗等が潮の如くに流れ込み、東西文

佛教講話篇　第一

3

佛教講話篇 第一

目次



四恩

君主恩
父母恩
衆生恩
三寶恩

深ク大君ノ鴻恩ヲ思ヒ又皇祖皇宗ノ遺徳ヲ感シ忠誠ヲ傾ケ赤心ヲ尽シ國憲國法ヲ守リ國民ノ本務ヲ盡シ大ニシテハ國運ノ伸張ヲ図リ以テ國家ノ光輝ヲ中外ニ宣揚セムコトヲ期スヘシ

深ク父母ノ大恩ヲ思ヒ祖先ノ餘徳ヲ感シ誠ヲ以テ敬ヒ身ヲ修メ家ヲ齊ヘ智ヲ磨キ行ヒ正シク子弟ヲ教養シ産業ヲ奨励シ父母ノ心ヲ安シ祖先ヲ祭リ以テ家門ノ興隆ヲ期スヘシ

人ハ社會ノ恩恵ニ依リテ生存シ衆ニ相互扶助ニ依リテ活クル也常ニ深ク此ノ恩ヲ思ヒ正義人道ヲ行ヒ和敬博愛ヲ旨トシ世務ヲ開キ公益ヲ廣メ以テ社會ノ福祉ト人類ノ慶運トヲ増進セムコトヲ期スヘシ

佛法僧ノ三寶ハ信仰ノ標準ニシテ智德円満ノ称號ナリ其ノ體ハ大慈悲ナリ常ニ深ク此ノ慈悲ニ依リ神ヲ敬ヒ佛ヲ信シ悪ヲ断チ善ニ進ミ心ヲ浄メ道ヲ楽シ以テ慈悲報恩ノ行持ヲ完フセムコトヲ期スヘシ

大正十二年一月吉日

勅特賜大陽眞鑑禪師 總持石禪叟

新井石禪全集


曹洞宗大本山總持寺藏版之